

---

# 記憶のダイアリー

ピーーひやらっと。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

記憶のダイアリー

### 【Nコード】

N0602R

### 【作者名】

ピーーひゃらつと。

### 【あらすじ】

俺はある事故で記憶を失い、どういうマジックなのか？今は女の子として生きることになった。そして、あの事故以降、俺の心の中のアイデンティティーがぐらぐらと揺らぎ始めてしまったんだ。この先、心と体が一致しないという厄介な問題を抱えたまま、俺はいったいどうなってしまうのだろうか？

？作者よりお知らせ？この小説に登場するキャラクターのイメージイラストを

<http://2835.mitemin.net/>に順次、掲載

していきます。興味を持たれた読者様は見て下さいね。

## #1：きっかけ。

そう、あれは週末の追い込みの残業を終え、終電間際のプラットホームでの出来事だった。

プラットホームには、俺みたいに週末の仕事を終えた仕事疲れの若いサラリーマンや、

何処かで一杯引っかけてきたと思われる赤ら顔のオヤジ、なにやらテンションが高く、騒いでいるチャラチャラした風貌の若い男達、

そして目の前にはポツンとひとり、ジャージ姿でスポーツバッグを持った部活帰りと思われる女子高生らしき娘が立っていた。

女子高生がこんな夜遅くまで部活かよ？

なんてボンヤリ後ろから見てみると、ポニーテールにした頭をうつらうつらと時々上下させていた。

立ったまま居眠か？ 最近の若いヤツは器用だなあ。

なんて思っているうちに、視線を右に振ると、ゆっくりと電車がホームに近付いて来ているのが目に入った。

そして、再び前に視線を戻すと、先ほどから時々頭を上下させて居眠りしていた様子の女子高生が、とっさに目が覚めて驚いたのか？前につんのめって危うくプラットホームに転落しそうな姿勢になった。

危ない！と思った次の瞬間、彼女の真後ろにいた俺は右足を踏み出し、

渾身の力で伸ばした右腕で彼女の左肩を思い切り後ろから掴んで引き寄せたつもりだったが…。

その後、俺はいったいどうなってしまったのか？ 全く思い出せない。

俺は、薄暗い部屋のベッドの中でボンヤリと目を開けた。  
今まで夢でも見ていたのだろうか？

でも、最後の方は、まるでスローモーション映像でも見てたように鮮明な記憶として残っている。

頭の中が霧にでも包まれたように、現実と夢の区別がはっきりしないまま、

それ以上深く考えることも無く再び眠りについた。

翌朝、シャーっというカーテンを開ける音、耳元でコツコツと鳴る足音、

そしてドアを閉めた音に気付き、俺は浅い眠りから薄らと目を開けた。

目の前に飛び込んで来た真っ白な壁一面と、一瞬消毒液臭い匂いが鼻を付き、

ここが病院であること、腕に何かが巻かれていること、頭に少し鈍い痛みがあること、

そして、体に何か違和感があることを認識した。

やはり、夢を見ていたのでは無かったようだ。

俺はあの時、プラットホームから転落しそうになった女の子を助けたようにした。

助けるつもりが彼女と纏れ合ってプラットホームで転倒し、頭でも打って意識が無くなったんだろう。

そして、この病院に運びこまれたってことか？

そういえば、あの女の子は怪我も無く、無事だったのだろうか？

俺は、派遣でシステムエンジニアをやっている緒方裕也。

昨日は、仕事の納期を間に合わせる為、依頼のあったプログラムの最終修正作業の追い込みをやって、なんとか終電に間に合い、休みに入るはずだった。

「こりゃあ、まずよいなあ。もし、長期入院ってことになれば」

思わずひとり事を言ったその瞬間、

「えっ？ 俺、今、声がおかしくなった？」

声が妙に上ずっている。そういやあ、なんか体もふわふわしていて、

自分の体じゃないような気がする。

なんだか胸の辺りも何かに締め付けられ、圧迫されているような感じで、少し重い。

徐々に意識がハッキリしてくると、段々と自分の体が五体満足なものなのか？

急激に不安の嵐が俺の頭の中を駆け巡った。

俺は、恐る恐る腫れものでも触るかのように、布団の中で両手を使って胸をそっと包んでみた。

胸は、大きく腫れ上がり、包帯のような物でも巻かれているようだ。胸に大ケガでもしたのだろうか？

でも、なんだか胸は少し柔らかい。

改めて冷静に考えてみると、これって、やっぱり女の子の胸？ なわけ？

「ええっー？」

俺の体はいったいどうなっているんだっー！

思わず、布団を剥ぐようにガバッと上半身を起こしたその直後、

パツサつと長い髪の毛が肩や頬に纏わり付く事に初めて気がついた。

「何？これ？この長い髪の毛は？」

毛先を右手で掴み、そして、自分の目で改めて胸を確かめて見た。やはり、女の子の胸のような膨らみが二つあるようにしか見えない。目に飛び込んできた腕も、手も凄く華奢で、俺のものじゃない。それはハッキリと分かる。

まさか！と思い、さつと両手で下半身の男の部分に触れてみたが、そこにあるはずの感触も無い。

ここまで来ると、さすがに俺も動揺しだし、心臓がバクバクと鼓動が速くなるのを感じた。

そうだ！鏡、鏡くらいこの病室にもあるだろうっ！

ベッドから脚を下ろすと、ここが個室部屋で、目の前に洗面台があるのが見えた。

前につんのめりそうな勢いで洗面台に両手を付き、自分の顔を写すと愕然とした。

そこには、パジャマのような患者衣を着た、肩下まで髪の毛の伸びた小柄な美少女の驚いた顔が写っていたのだ。

ケガでもしたのか右肘には包帯が巻かれていた。

俺は、鏡に写った全く見覚えの無い、その美少女の頬をそつと両手で優しく包み込み、

そして、そのまま両手の人指し指と親指で頬を抓ってみた。

手に伝わるぶにゅとした感触、それと同時に頬に痛みを感じる。

こんな馬鹿げたことが実際に起こるのだろうか？信じられなかった。でも、目の前ではその信じられない事件が今、正に起こっているのだ！

狐に抓まれたとは正にこの事か。

しかし、この娘はいつたい誰なんだ？ひょっとして、昨日俺が助けようとした女の子か？

彼女を見たのは、ほんの僅かな時間で、しかも後ろ姿だった為、ハッキリと顔を見たわけではないが、

直観的にそう感じた。

それじゃあ、俺の体はいつたいていどうなってしまうんだ？

そして、いつたい俺はこれからどうすれば…。

洗面台の前に両手を付いたまま、ガクツと項垂れ、

俺はそのままの姿勢で固まったまま思考が停止した。

暫くしてこのままじゃラチがあかないと思考を再開し、ふと部屋中を見渡すと、

テレビが目に入った。

そうだ！テレビニュースで“駅で人身事故”みたいなニュース、やってないか？

テレビを付けて、あちこち、チャンネルを変えていたら、偶然にもそれらしきニュースが流れていた。

目撃談によれば、昨晚、駅のプラットホームで投身自殺を図ろうとした女性と、

その女性を止めようとした男性が纏れあつたままプラットホーム上で倒れ、

その後、直ぐに病院に運ばれたということだった。

そして、その後の両者の安否に関する情報は入っていないとのことだった。

この事件が俺の事なんだろうか？でも何？投身自殺って…傍から見れば、投身自殺にでも見えただろうか？

って、いうことは、事故の相手もこの病院に運ばれて、どこか別の

病室で入院しているってこと？

もし、そうだとしたら、今の俺の体の中にある魂はこの体の持ち主の女の子で、

俺達の体は事故のショックで入れ替わったってことになるのか？？

？そんな馬鹿なぁー！

この現実を俺は受け入れることができず、まだ夢の続きでも見ているのではないか？

そう思ったかった。

しかし、目の前ではそんな俺の思いをかき消すかのように次のニュースが流れていく。

そして、突如、アナウンサーが、

先ほどお伝えしました昨夜のN駅で起こった人身事故ですが、意識不明状態だった男性が今朝亡くなったとのことです。男性の勇気ある行動に敬意を示すと共に、ご冥福を祈ります と伝えた。

「今、何て言った？えっ！俺が死んだのか？この俺が？」

今、姿こそ違うが、俺はここに存在しているのだ。俺が死んだという事実、リアルティが全く感じられない。

この訳が分からない状態まま俺の体が死んだとして、真実を何も知らない俺の家族や友人はやはり悲しむものだろうか？

「悲しむ人？うゝん」

暫く頭の中の記憶を辿るが、俺の記憶の中に、家族とか、親しい友人とかいった顔が全く浮かんでこない。

それどころか、昨日以前の記憶すら思い出せないぞ。何故だ！

いったい、これはどういうことなんだ？俺は、本当に緒方裕也という男だったのか？

そういえば、自分の顔すら思い出せない。

俺が昨日まで男であったという自信さえも揺らぎ始め、益々頭の中が混乱してきた。

そんな事を考えていると、なんだか頭がクラクラしてきて軽い頭痛に襲われた俺は、

テレビを消して再びベッドに潜り込み、頭から布団を被った。

暫くすると、急に言いようの無い悔しさと悲しさが入り混じった複雑な感情がどつと津波のように押し寄せ、俺は、思わず掌をキュッと強く握りしめた。

どうにかして込み上げてくる感情をこらえようとしたが、その直後には頬に涙が伝っていた。

## #2：記憶喪失？

俺は、暫く布団の中でうずくまったまま泣き続けていた。

こうやって、現実逃避していても、何の問題解決にもならないのは分かってはいるが、

体が言うことを聞いてくれず、今はそうせずには居られなかった。

しかし、いつまでも泣いているわけもいかず、これから、現実と向き合い、

今から待ち受けるであろう様々な困難と闘い、それをひとつづつ、克服していかなければならない。

今、こうして生きている以上、今後の生活の事を具体的に考えねばならないのだ。

そう自分に言い聞かせ、腹をくくると、ぐるぐると考えを巡らせ始めた。

まずは、これから、俺はどうやって生きていけばいいのか？ってことだ。

俺の体が死んだということは、冷静に考えれば俺は第二の人生として、これからもこの体の女の子として振舞って生きていかなければならないってことだ。それに、昨日以前の俺自身の記憶すら思い出せない。

じゃあ、この体の娘の方はどうなんだ？

俺は、意識してこの娘の記憶を探ってみたが、この娘の脳にも過去の記憶が残っていないようなのだ。

この娘の性格、趣味趣向、家族構成や友達関係、この娘の身元に関する手掛かりは何一つ無い。

仕方が無い、ここは、“記憶喪失”っていう事で全て片づける以外に手立てはなさそうだな。

俺自身の記憶も無い以上、事実であるのは確かだ。

それと、これからは、言葉使いに気を付けないといけないな。

常に女性言葉を意識しないと、男言葉が直ぐに口から出るだろうし、もし、こんな可愛い娘が乱暴な男言葉なんかで突然喋り出したら、事故のショックで精神がどうにかなったのではないかと周りから不審に思われるだろう。

ようやく気持ちの整理が出来て、これからのことを考えられるだけの余裕も生まれてきた。

気分が少し楽になり、落ち着いてきたところで俺は体を起こした。ふと、壁に掛けられていた時計を見上げると、既に時刻は午前9時を回っていて、

今まで気にもならなかった尿意と空腹を急に感じ始めた。

「トイレって、当然女子用だよな？ 当たり前か、でも嫌だなあ。」

しかし、どんな時でも人間、生理現象には勝てない。

覚悟を決めた俺は、病室のドアをそっと開け、顔だけを出してキョロキョロと左右を見渡した。

廊下に誰も居ないことを確認し、廊下の突き当たりにトイレを見つけた瞬間、猛ダッシュした。

この行動を誰かに見られていたら、ちょっとした不審者のように見られたかも。

「はあ、はあ、ふうっー」

息を整え、安堵の溜息を吐くと、ちょっとした冷や汗をかいていた。

しかし、女子トイレに入るのも命がけだな、こんな調子じゃこの先いくら命があっても足りないや。  
まだ心臓がバクバクしているよ。

こんな所を誰かに見られていたら、めっちゃくちゃ恥ずかしいだろうな。

幸い、女子トイレには利用者が居なかった様子で、そそくさと個室に入り、

用を足して素早く手を洗い、誰かが来る前にトイレを出た。  
しかし、小で紙を使う事は、凄く妙な感覚だった。

それにしても、思っていたよりなんか手こずることも無く、すんなりと用を足すことが出来たが、  
記憶は無くても体は覚えているってことだろうか？

病室に戻ろうとするとドアの手前で俺は一瞬立ち止まった。  
部屋番号の下に“木下様”と書かれた手書きの名札が目に入ったからだ。

この娘の名字は、“木下”なのか。  
今、初めてこの娘の微々たる情報を得た。

病室に戻ると特に何もすることもなく、暫くベッドに寝転んだまま、  
窓からゆっくりと、雲が流れて行く様子をただボンヤリと見つめていた。

すると、病室のドアが突然開き、白衣を着た眼鏡の優しい風貌の30歳半ばくらいの男性医師と、  
少しポチャットとした体形の20歳半ば？と思われる若い女性看護師が入って来ようとしていた。

その医師は、ベッドで上半身を起し始めた俺を見て、俺が意識を取り戻した事にハッと驚き、

「家族に連絡を」と、女性看護師に伝え、優しい笑みを浮かべながら俺のベッドの傍まで近付いてきた。

「私は、あなたの担当医で山崎といいます。まず、あなたの氏名と年齢を教えてくださいかな？」

「あのおー実は先生、昨晩事故に遭った記憶はあるんだけど、わたしが誰なのか？事故以前の記憶が無いんです」

先ほど、ベッドの中で決めた作戦、“記憶喪失の女の子”を俺は演じきらなければならない。

「うーむ。事故以前の記憶が全く思い出せないのか。それは困ったね」

先生は腕組みしながら答えた。

「はい」

「あなたは事故で頭を軽く打った様子だから、恐らく一時的なショックによる記憶喪失なのかも知れないね」

「先生、私の記憶は直ぐに戻るのでしょうか？」

ここまで、意識せずとも自然とセリフと女言葉が口から出ていることに自分でも驚く。

「まあ、そんな急に焦ることは無いよ。これから精密検査をしてゆっくりと様子を見ようね。」

それより、お腹が空いてないかい？」

「あつ、少し」

実はかなりお腹が減っているのだが、そう答えるのが女の子としては自然だと思った。

「じゃあ、直ぐに朝食を用意させましょう。その前に言い忘れた事があったね。」

あなたの名前は木下真結花、年齢は15歳。あなたの持っていた学

生手帳から身元がわかったんだよ。

覚えておいて」

「きのした まゆか？」

「15歳か。俺は何歳だった？ 恐らく20歳半ばぐらいだったと思うのだが…」

今、正に逆浦島太郎状態なのか。性別は違うけど。

「そう、何か思い出した？ 木下さん」

「いえ」

自分ことさえ思い出せないのに、他人の体のことなんて思い出すはずもない。

「今は無理して思い出さなくてもいいよ」

「先生、私の持っていた荷物はどこ？」

とりあえず、この娘の手がかりでも探さないと。

先生は、棚らしきものを指さし、

「えっと、木下さんが持っていた荷物は、たぶん、そこに入れてあるはずだから後で確かめてみて」

「はい」

「それじゃあ、木下さん。ちょっとだけ、検診させてくれないかな？」

「上着を脱ぐんですか？」

「ほんのちよつとの間だけだから、少しだけ我慢してくれないかな？」

男なんだから、他人に上半身を見られるくらい恥ずかしくはないはずだが、

何故だか今の体を他人に見られることが、非常に恥ずかしい行為であるという意識が強く働き、

服を脱ぐことに対してちよつとした抵抗があった。

俺は、しぶしぶ上着を脱ぐと、白いブラジャーと胸元の膨らみが、眩しいくらいに俺の目に突き刺さった。

ちよっと恥ずかしくて、今、顔が赤くなっているかも？

そんな事を思っていると、先生が「背中を向けて」と言い、

「息を吸って、吐いて」と言いながら、背中に少しひんやりとした聴診器を当てられた。

そのひんやりとした感触に、俺は一瞬ゾクッと来た。

その後、脈と血圧を測られ、体温計を渡されて、「後で朝食を持ってくる黒田君に渡してね」

と言われ、先生は病室を出て行った。

程なくして、先ほど一旦病室を出ていった少しポチャとした体形の女性看護師がパンと牛乳、ゆで卵といった本当に軽い朝食を持って来た。

俺は、胸に付けた“黒田”という名札を見ながら体温計を渡すと、

「木下さん。熱は無いようね。ご家族には先ほど連絡したから、もう暫くしたら面会に来ると思うわ。」

それと、午後から検査があるから。そのつもりで」

「検査？」

「検査といっても、CTスキャンに入ってもらったり、血液検査する程度の簡単なものだけだから」

「はい。わたし、暫くは入院なんでしょうか？」

「それは、検査が終わった後、先生と家族と相談してからね」

「わかりました。ところで、あの〜」

「んっ？他に何か心配事や気になる事でもある？」

「実はその〜、私を助けてくれた人って、知っていますか？」

「どうゆうことかしら？」

「へっ？」

「私は、ここ数日、昼勤だったから、木下さんが昨晚急患で運ばれ

て来た患者さんだつて事以外は、詳しく知らされていないの」

「じゃあ、私と同じように昨晚、急患で運ばれて来た若い男性の患者さんっていますか？」

「確か、昨晚急患で運ばれて来た若い男性がいたっていう話は聞いたわ。でも、意識不明の重体のまま、今朝亡くなられたってことなの」

やはり、ニュースでの報道は本当だったのか。今、改めてその事実を目の前で突き付けられた。

「そうなんですか」

「木下さんは昨晚、事故に遭つて、その男性の患者さんに助けてもらったということかしら？」

「はい、ひと目でも会つてみたかったです」

そう言つた瞬間、無意識のうちに俺の頬にはすつーと涙が伝つていた。今の俺つて、なんでこんなに涙もろいんだろ。

「そんなに、自分を責めないで。いくら気を付けていても、世の中には避けようが無い事故は沢山あるの。」

職業柄、そうゆう人達を私も幾度となく見てきたわ。

あなたがその事故に責任を感じて、負い目を持つてしまうのは仕方の無い事かもしれないわ。

でも、人間なんて所詮、弱い生き物なのよ。

今は辛いでしょけど、残された人はそれを乗り越えていかなきゃいけないの。

間違つても自殺なんか考えちゃダメよ。

人に助けてもらった大切な命なんだから、早く元気になって、その人の分も頑張つて生きなきゃ。ねっ」

そう言つて、彼女はニツコリと笑顔を見せた。

「うっ、うん」

俺は、涙を手で拭いながら答えた。

「じゃあ、気が落ち着いたらゆっくりと食事してね。後でまたトイレを取りに来るから。」

もし、不安な事や困った事があったり、体調が悪くなったりしたら、遠慮なく枕元のコールボタンを押してね。

それと、午後まで時間を持て余すようなら、気晴らしにテレビでも見てていいから」

そう言って彼女は病室を出て行った。

### #3…どうしよう？

誰かが亡くなって悲しみ、いくら気落ちしていても、お腹はだけは減る。人間とは現金なものだ。

俺には少し少ないと思われる朝食だったが、この体の胃が小さいのか？ 空腹は十分に満たされた。

空腹も満たされたことだし、さてと、これから家族が面会に来ると言っていたな。

いったい誰が来るんだろう？ まあ、この場合、面会に来るのは母親なんだろうな？

しかし、面会に来た母親に対して、この娘はどうゆう反応をし、どうゆう顔を見せるのだろうか？

果たして、俺にそんな自然な演技が出来るのだろうか？  
そう思うと急に不安になってきた。

さっきまでは、この娘と初対面の人達だったからいいものの…

一難去つて、又一難つてわけか。

ええーい、こうなりやあ、出たとこ勝負しかないよな。

いくら考えてみても雲をつかむような話で、この娘の母親とどう接すればいいのか、なんていうマニュアルも無いし、母親の顔も全く浮かんで来ないしわけだし。

そう思っていたら、何処か遠くで、かすかに携帯電話の着信音が鳴り響いている事に気が付いた。

俺は慌てて、ベッドを抜け出し、先ほど荷物が閉まってあると言われた棚の扉を開けて、スポーツバッグを取り出してみた。

バッグの中を探してみたが、携帯電話は直ぐに見つからない。

少し焦ったが、ようやくバッグの外側のポケットに携帯電話が入っ

ているのを見つけた。

携帯電話の画面を覗くと、着信履歴に“ゆうこママ”と書かれていた。

思った通り、この娘の母親が面会に来るようだ。

電話に出なかった為、伝言メッセージが入っていた。

俺は、早速再生してみた。

『もしもし、まゆか？　今、電話に出れないの？　ママ凄く心配したのよ！

でも、まゆかが無事で本当によかった。今はホッとしているわ。

昨晚あんな事故に遭って、まゆかの意識が戻らないって病院で聞いていたの。

今朝になって、まゆかが意識を取り戻したって連絡があって、今、慌ててそっちへ向かっている最中なの。

でも、さっき、ちょっとした事故渋滞があって、少し到着が遅れそうだね。

この調子だと、たぶん…後30分ぐらいで着くと思うけど。それまで少し待ってて。じゃあ、電話切るわね』

「はぁーっ」

俺は、今までいっぱい溜めていたのか、一気に深いため息を吐き出した。

いよいよ、次の頭の痛い問題が迫って来ているって事か。

今は10時過ぎだから、遅くても11時前には来るのか。

自分が愛情込めて育てた子供に、親の記憶が無いと知ったら、親は凄く悲しむだろうなあ。

なんとなく話を合わせてみたり、知っているかのような態度を取っ

たところで、実の親なんだから、  
そんな安っぽい俺の演技なんて、簡単に見抜くだろうし、娘の心理的な異変には直ぐに気が付くだろう。

この娘の親には可愛そうだが、仕方が無い、ここも“記憶喪失”を押し通す以外に手はなさそうだ。

携帯電話をベッドの枕元に置くと、ふうーっと、もう一度深い溜息を付き、

両手で頭を抱えながらベッドに体を横にしてうずくまるように寝転んだ。

その直後、再び携帯電話が鳴りだし、俺は、ビクツとした。

慌てて上体を起こし、携帯電話の画面を睨み付けると、今度は新着メールが届いていた。

そういえば、この病院は携帯電話を使ってもいいのかな？さつきは気にせず使ってしまったが。

この病室は個室だし、他人の迷惑になるわけでもないから使ってもいいよね？

俺はひとり自分勝手に解釈し、この娘を知る手がかりになるかも知れないと思い、

恐る恐る直近のメールを開いて見た。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

XX / 24 / 10 : 11

F o m 鮎美

S u b まゆまゆ もう大丈夫なの？

今朝早くまゆまゆのお母さんから連絡があったの。

まゆまゆが駅で事故にあつて、未だに意識が無いって聞いたとき、

胸が張り裂けそうで、居ても立ってもいられなかったわ。

ついさつき、まゆまゆがようやく意識を取り戻したって聞いて、  
やっと気持ちが落ち着いたの。

何より本当に無事でよかったわ。

本当なら、今からでもすっ飛んでお見舞いに行きたいところなんだ  
けど、

午後から精密検査があるって聞いたから、

智絵達と明日お見舞いに行くね！

そうだ、快気祝いにまゆまゆの愛しの？友田君？も誘っちゃおかな  
い。

だ・か・ら、しおらしく、可愛らしくするのよ！

じゃないと、天に変わってお仕置よ わかったわね。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

XX / 24 / 0 : 23

F o m 里子

S u b お疲れ！

今日はお疲れ。ってもう今日じゃないか。

もうすぐ練習試合があるからって

最近ちょつと練習キツくない？

先輩達の目、妙に気合入ってギラギラしているし。

まゆかはいいいねえー。

めっちゃドリブルが上手いし、

1年生なのに、もうレギュラー扱いみたいだし。

今度マンツーマンで教えてくれない？

おっと、そういえば今度、

代表の強化試合があるんだけどさあ。

チケット取れそうだから、いつものメンバーで

見に行かない？ 返事待ってるから。

それじゃあ、おやすみなさい。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

げっ！ この娘の友達が明日お見舞いくんの？

まだ心の準備とか全然出来てないし、この娘の事、もっと色々知りたいこともあるのにーっ！

しかも、意味ありげな、友田君って、これってもしかしてこの娘の彼氏？？？

あーっ、そんなの、いったいどう対応すればいいんだよー。

益々頭痛くなってきた。

しかし、冷静に考えると今日は土曜日で、明日は日曜日だもんな。

学校が休みなんだから、友達がお見舞いに来ても何もおかしくはないんだ。

しかし、この娘、何の部活してんの？ ドリブルってことは、バスケ？

まさかサッカー？ んなわけないよね？

でも、こんな細っこい小さな体で、よくそんな激しいスポーツなんかしてるよなあ。

俺は改めてこの体の手足をマジマジと眺めてみた。

そっぴや、さつき携帯探していたスポーツバッグの中に運動靴を入れていたような巾着袋があったな。

こいつは困った話だぞ。俺って、スポーツ経験なんてあったんだ

ろうか？

もし仮に、あったとしても、学生時代の体育でふざけた球遊び程度のもんだろっな。

しかも、この娘がレギュラー扱いだった？ こいつはもうお手上かも。

当分は事故に遭った事を理由に部活を避けられるかもしれないが、いつまでも誤魔化すことは出来ない。

そもそも、記憶も無いことだし、大恥をかく前に、退部届を出すのが得策だな。

うん、それがいい。

俺は腕組みしながらひとりで納得し、やることも無いので再びベッドに寝っころがって暫くの間、暇潰しに携帯電話をイジッていた。

すると、突如、病室のドアが開き、

「まゆか！」

俺は、ビクツとして反射的に上体を起こした。

余りにも心の準備が何も出来て無かった俺は、一瞬ぽかーんと、呆気にとられた間抜けな顔をしていたに違いない。

「おねえちゃん！」

えっ！ この娘に妹が居たの？ そんなの聞いて無いよ。

ってか、兄弟や姉妹がいるなんて、まるで想定していなかったんですけど…

母親が小走りに目の前に迫って来たと思ったら、急に俺の首に抱きついた。

香水とシャンプーが入り混じったじつたような甘い匂いと髪の毛が俺の鼻をくすぐり、

一瞬ポーっとしてたら、妹も“おねえちゃん！”と再び俺を呼び、俺の左腕に纏わり付いた。

「真結花、本当に無事でよかったわ、本当に。先ほど先生から聞いたわよ。」

真結花に事故以前の記憶が無いつて本当なの？」

「あつ、うつ、うん」

俺は申し訳無さそうに頷き、項垂れるしかなかった。

母親は、抱いていた首を放して俺の両肩に両手を置き、

真正面から目線を合わせて俺の顔を真剣な表情で見つめていた。

それに答えるように、俺も改めて、母親の顔をマジマジと見つめ返した。

この娘の母親はこの娘の年齢からすると、恐らく30歳半ばと思うけど、

スタイルも良く、色白で綺麗な黒髪で、

見た目も若くて、この娘の面影がある美人だった。

「ママの顔も覚えてないの？」

「ねえ、おねえちゃん、麻弥<sup>まみ</sup>の顔は？」

まだ中学生だと思われる、ツインテールに結ばれた黒髪の可愛らしい顔が、

俺の顔を下から覗きこんだ。

「ごっつ、ごめんなさい。今は、今は何も思い出せないの」

そう言った直後、意識したわけでも無いのに俺の瞳は急に潤み出し、またしても涙が頬を伝っていた。

まったく、今日、俺はいつたい何度泣いているんだろう。

「いいの、いいのよ、真結花、今は思い出せなくても。

これからゆつくりと記憶を取り戻せばいいんだから。取り戻す時間はこれからもあるわ。」

もし、真結花が何も思い出せなくても、ママは、真結花のママなんだから、何も心配しなくていいのよ」

「そうよ、おねえちゃん。麻弥だっておねえちゃんの妹なんだから、困った事があつたら力になるし、

何でも言つてね」

そう言つて、妹は右手を曲げて力こぶを作る真似を見せた。

この妹の名前は“まみ”っていうのか。

母親が“木下ゆうこ”で、妹が“木下まみ”ね。

「お母さん、まみちゃん、ありがとう」

涙は止まるところか、益々溢れ出しそうな勢いだつた。

「あらあら、そんなに泣いてちゃあ、その可愛い顔が台無しねえ」

そう言つて、母親はバックからハンカチを取り出して俺の涙を拭ってくれた。

「結んでいた髪、といたのね。綺麗な髪がボサボサね」

「えっ？　そういえばいつの間に？」

俺は昨日見たこの娘の後ろ姿を思い出し、思わず右手で後ろ髪を撫でてみた。

「梳いてあげる」

そう言つて母親は、またもやバックから取り出したコンパクトな櫛で髪を梳いてくれた。

お母さんのバッグは、なんでも出てくるみたいだな。

「お母さん、まみちゃん、午後までの少しの時間だけ、ひとりにし

てもらえませんか？

ちよつと、朝から色々とおったせいで、今も頭の中が混乱していて、気持ちを少し落ち着かせたいの」

「そう、わかったわ。もうお昼前だし、ママは麻弥とランチと洒落込みましようかね」

「麻弥もそれに賛成！　ちよつとお腹減ってきたとこだし、もう少しガマンしてたら

お腹がぐうーって鳴って、恥ずかしいとこだったよぉー」

そう言いながら、妹は両手の人指し指でお腹を指した。

俺は、そのおどけた妹の仕草にくすつと一瞬笑ってしまった。

「こおらつ、今、一瞬笑ったわねえー」

妹は、ぷうっーと頬をふくらませ、右手で拳を作り、殴るような真似を見せた。

面白い表情をしていた妹にまたぷつと笑ってしまった。

「ねえ、おねえちゃん」

「んっ？　なに？　まみちゃん」

「さつきから少し気になっていたんだけどさぁー。その麻弥ちゃんっていう呼び方。

慣れてないから、なんだかくすぐりたいのよねえー。麻弥でいいよ」

「そうよ、真結花。ママのこともお母さんじゃなくて、ママでいいわよ」

「わかったわ。今からそう呼ぶわ、ママ、まみ」

「そう、それでいいのよ。真結花はいつもそう呼んでたから」

「麻弥もそう呼んでくれた方が、おねえちゃんらしいと思うよ」

「ママ達、もうそろそろ行くわね。午後までひとりで大丈夫ね？」

「うん」

「13時にはここに帰ってくるから、それまで無理せずに大人し

くしているのよ」

「はい」

「じゃあーねえー。おねえーちゃん」  
「うん」

妹は右手を軽くひらひらと振りながら、母親と病室を出て行った。

「ふうーっ」

彼女達が部屋を出た後、俺は、ようやく安堵の溜息を付いた。

ああーもおーホント疲れた、精神的にも肉体的にも疲れたよ。

初対面の人に対して、常に気を張り詰めた、こうゆう緊張状態ってのは心身共によろしくない。

とりあえず、この場合はグダグダだったが、なんとか無難に凌ぎ切ることができたのは幸いだった。

やっぱり、女の泣ってというのは強力な武器だと思う。

俺は意識して泣いたわけでもないのに…

でもその涙のおかげで助かったんだから、今は感謝しなきゃ。

いや、でもこんな事ぐらいでいちいちホッとなんかしてられないよ。

頭の痛い問題はこれから山ほど出てくるだろうし、

この程度のことですんなり調子じゃあ、先が思いやられるな。

何よりも大きな問題は、明日だよ、明日。

この娘の友達がお見舞いにくるんだよねあー。

今から考えるだけでも、ああー、憂鬱だ。

今日は疲れたし、もうその事については考えないようにしよう。  
なるようになるさ。

そう思わないと今の状況じゃあ、やってられないよ。

今までに経験したことの無い大役（自分じゃ無い他人に成りきる）を終えて一気に気が抜けた俺は、ぐったりとベットに伏せた。

この日は、午後にお母さんと妹が病院に戻って来た後、俺は精密検査を受けた。

右肘には打撲による外傷はあったが、脳内には特に異常が無い事が分かり、ホッとした。

担当医の山崎先生に「もう一日様子を見て、月曜日に退院してはどうか？」と言われたが、

俺のわがままで「体に異常がないのなら、今、直ぐにでも退院したいんですけど」と言ったら、

山崎先生は「じゃあ、今から退院するのは難しいから、明日の午前中に退院させよう」と言って、

何とか明日には退院できることになった。

俺は、どうしても、明日、お見舞いに来るこの娘の友達に会いたくなかった。

今の精神状態のままで、この娘の友達に会う勇気が無いし、余りにも精神的な負担が大き過ぎる。

遅かれ早かれ、ここを退院して学校に行くようになったら、嫌でも会わなくてはならないが、

今はとにかく精神的に疲れているので、一日でも先延ばしにしたい。

俺は、お母さんに頼んで、明日、お見舞いに来る予定のこの娘の一番の友達と思われる

“鮎美”っていう娘に、明日退院することになったからお見舞いを断って欲しいと伝えた。

本当は、俺自身がメールで返信して断れば済むことだが、

今日一日、色々あったから、本当に疲れていて、その気力さえ湧か

ない。

お母さんは「明日午前中に迎えに来るわね」と言っ、妹と一緒に夕方には自宅に帰って行った。

俺は、夕食に出された病院食を半分ぐらい残して、疲れ切った心身を少しでも休める為に早めに就寝した。

そっい、この娘に父親は居るのだろうか？

精神的な余裕がなくて聞きそびれてしまったが、もし他界や離婚していたら聞くのも気が引けるし、

向こうから話を振ってくるまでは、父親の事には触れないことにしよう。

そっ思いながら、俺はいつの間にか眠りについた。

#### #4：これからのこと。

翌朝の日曜日、目覚めると俺の体は元に戻った様子は無く…  
といっても、元の体は、もうこの世にいないのだ！

改めてこれが夢の続きでは無く、現実だということを思い知らされたのであった。

今、この瞬間も、夢の続きだったら、どんなに晴れやかな気分だったろうか。

今はそんな虚しい事を考えても仕方がない、これからのことをもっとボジティブに考えなくては！

今日は、午後10時頃にお母さんに迎えに来てもらうことになっていた。

俺は朝食を簡単に済ませ、患者衣から着替えようと思ったが、着替える服が無いことに気付く。

ふと、スポーツバッグの中に一昨日着ていた紺色のジャージがあることを思い出し、

それに着替えることにした。

ジャージを広げてみると、恐らく転倒した際に付いたと思われる汚れが多少はあったが、

気にせず、手ではたいてそのまま着ることにした。

やることも無いので、暫くテレビの情報番組を見ながらぼけーっとしていたら、

携帯電話が鳴りだしたので、枕元から慌てて手に取ると、メールを受信していた。

昨日メールを送って来た”鮎美”という娘からだった。

- - -  
- - -  
- - -

XX / 25 / 09 : 08

F o m 鮎美

S u b 今日、まゆまゆのお家に行っている？

昨日、まゆまゆのお母さんから今日の午前中に退院って聞いたけど、  
本当にもう大丈夫なの？

もし、迷惑じゃないのなら、お見舞い代わりに今日の午後、

まゆまゆのお家に行ってもいいかな？

多人数で押し掛けるのも悪いし、

代表選手で私だけで行こうと思っているの。

まゆまゆが一時的な記憶喪失って話は聞いているから、  
変に意識して、身構えなくてもいいのよ。

だから安心して。

学校でもこれから色々困ると思うし、サポートはしっかりとするか  
らね。

だって、まゆまゆとは幼馴染だし、  
まゆまゆが例え私の事を覚えていなくても、これからも親友だよ！  
これは私の中で変わらない事だから。  
じゃあ、返事ちょうだいね。

- - -  
- - -  
- - -

“ 鮎美 ” っていうこの娘の友達、優しいね。ホント、優しいよ。  
この娘とは幼馴染なのか。

この娘の事、本当に大切に思ってくれてるんだ。この娘は、良い友  
達を持って幸せだよなあ。

俺にもこんな親友、居たのかな？

そう思うと急に悲しくなり、目頭が熱くなつてきそうだったので、慌てて頭を左右に振った。

また泣きそうになったよ。どんだけ涙腺が弱いのか？今の俺って…  
というか、この娘の涙腺が弱いのかな？

さてと、返信しないかね。

ふと、今気がついたことだけど、この携帯、意識せずに普通にガン  
ガン使ってる。

俺が使っていた機種と違うかもしれないのにさ。

これって、自転車の運転とかと同じで、長年体を使って染み付いた  
ものは、

体が覚えているってことなのか？

つまり、この娘の体が覚えているってこと？

まあ、それはこの際、取りあえずおいといてつと。

退院の時間も迫って来ていることだし、早く返信しよう。

- - -  
- - -  
- - -

XX / 25 / 09 : 21

Fom真結花

Sub Re : 今日、まゆまゆのお家に行つていい？

鮎美ちゃんには色々と心配掛けているようで、ごめんなさい。

わたしも、これからの学校生活の事のこと考えると凄く不安だし、

今日、鮎美ちゃんに家に来てもらって、

今後の事で、色々と相談に乗ってもらいたいの。

15時頃に家に来てくれないかな？

たぶん、その頃なら一息ついて、落ち着いていると思うから。

それから、突然変な事言っただけ…

鮎美ちゃんの写メ、送ってくれないかな？（＾＾ゞ

実は、わたし、鮎美ちゃんの顔、思い出せないの。  
気分を悪くしたら、本当にごめんなさい。

それと、いきなり会うより、顔を知っていた方が少し安心出来るから。

変な事ばっか言つてごめんね。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「あつ！返事キタキタ！」

なになに…ふうん、分かっていた事だけど、いざとなるとやっぱシヨックよねえ。

一昨日までは何も変わらなかった親友が、ある日突然、私を覚えていないなんて。

でも、真結花の方がもっとシヨックが大きいだろうし、今は精神的にもかなり不安定なんじゃないのかなあ。

私が少しでも不安な顔を見せないように、いつもと変わらないように接しないと、

真結花の方も、余計に不安がるんじゃないのかなあ。

写メかあ？ 景気づけにちよつと面白い顔したヤツ、おくっちゃお、かな？

でも元の顔がわかんなくなるし、普通にカワイコぶった顔でも送る？

あつ！ 鮎美ちゃんからの写メ、送られてきた。

どんな顔してるんだろ？ うつ、めっちゃカワイイ…

写メには、茶髪でショートカットの似合う、ちよつと大人っぽい雰囲気のが可愛らしいコが写っていた。

真結花の記憶を探ってみたが、やはり彼女には見覚えが無かった。

俺は、『写メありがとう！退院したら連絡するね』  
といった簡単なメールだけ彼女に返しておいた。

うん。しかし、俺って、いったい誰なわけ？

真結花にも記憶が無い、俺にも記憶が無いって、記憶がホントに迷子だよ。

ああ、困ったもんだ。思わず左手で額を押さえつけてみたが、何も思い出さない。

自己認識や人間関係に関する記憶だけが完全にリセットされたってことなのか？

まあ、いくら考えたって、問題が解決する訳じゃないのは分かっているけどさ。

今は、このままの流れにまかせるしかないのはわかるが、自分ではどうにもならないことにイラっとくる。

自分が自分で無いようで、もどかしいというか…

でも、逆にポジティブに考えれば、時間が経てば何かのきっかけで、

記憶を取り戻すことが出来るかもしれないし、

もし、仮に記憶が戻らなくても、それはそれで、新たな人生のスタートを切るわけで…

もしかしたら、女の子として生きる喜びや幸せを感じたりすることができたり、

女の子としての夢や希望、明るい未来像も見えてくるかもしれない。

俺の今の状況からして、冷静に考えれば、女の子としての人生を受け入れるしかないだろう。

今日からは、女の子として、普通に生活が送れるように、一日でも早く馴染めるよう努力しよう。

今の俺には、それ以外に選択肢が無いのだから。

10時過ぎになると、昨日と同じく、お母さんと妹が迎えに来てくれた。

「ねえ、おねえちゃん。なんでまたジャージなんか着ているわけ？」

「だって、これしか着替えるものなかったし……」

「着替えは持って来たわよ」

そう言っ、お母さんがトートバッグから服を取り出した。

左胸にリボンの飾りのアクセントがあるピンク系のプリント長袖口  
ンTと

赤系チェック柄のプリーツスカート……

ううっ。こんな可愛らしい少女趣味な服を、この俺が着なきゃいけないのか？

さっきまで、女の子として前向きに考えようと決心したはずなのに……  
その考えは、脆くも一瞬にして崩れ去った。

「それ、着るの？」

「イヤなの？」

俺があからさまに嫌な顔を見せてしまったようで、  
お母さんが少し眉をひそめたように見えた。

「そうゆうワケじゃないけど、スカートはちょっと……」

「おねえちゃん、スカート好んで着てたのにねえ」

ああ、そうだろうねえ。あなたのような可愛らしい普通の女の子ならね。

「これしか持って来てないから、今は家まで我慢して、ねっ？」

お母さんが聞きわけの悪い子供を諭すかのように言った。

「うん。わかった」

俺はしぶしぶ了承し、着替えるしかなかった。でも、スカートにはやはり抵抗があった。

今は同姓とはいえ、他人の目の前で見られて着替えるのは、スゴく恥ずかしいので、

彼女達に背中を向けながらモソモソと着替えた。

着てみてやはりというか、足元がすうすうしていて、とても落ち着かない。

女の子は、よくまあ、こんな物着ているなと思う。

今の季節はまだいいけど、特に冬場なんて寒くてたまらないんじゃないの？

まあ、今は仕方ない、家までの辛抱、辛抱。

その後、担当医の山崎先生から「退院後、何かあったらいつでも病院に来て下さい」

と言われ、ようやく退院することができた。

俺にとって、この一日半は、気を休める暇も無く、非常にストレスの溜まる病院生活だった。

“記憶喪失の女の子”を演じ続けなければならないというプレッシャーと、

ボロが出ないように常に緊張の糸を張り詰めた状態、おまけに初対面の肉親との対面。

もう心身共に限界だよ。早く家に帰って落ち着きたい、とにかく、ふかふかのベッドで体を休めたい、今はただ、それだけを強く思っていた。

「どうしたの？ さあ、乗って」

さっきまで、考え事をして、ボケっと突っ立っていた俺に、お母さんは車に乗るように促す。

車に乗ろうとすると、俺は、そのホワイト色のスタイリッシュなデザインの

ハッチバックタイプの車を見て、何処か見覚えのある車だなあーと思いつつ、記憶を巡らせていた。

これって、確かハイブリットのマニュアル車じゃなかったのかな？

「ねえ、ママ。この車って、もしかしてハイブリットのマニュアル車？」

「そうよ。何か思い出した？」

「うん、何だか引つかかるの」

「そう。真結花はこの車がお気に入りだったわ」

「そうよ、おねえちゃん。ママがシフトチェンジしながら運転している姿がカッコイイって。」

免許取ったらこの車に乗りたいって言ってたよ」

「そうなの？」

「真結花、少し、何か思い出したのかも知れないわね」

「おねえちゃん、そう焦らなくてもいいよ。普通に生活していけば、これからも色々とか何か思い出すかもしれないわ」

「そうね」

そう言って、俺は少しニコつとした作り笑顔を二人に見せ、二人は前席、俺は後部座席に乗った。

二人のどちらかと隣合わせっていうのは、まだ少し緊張するし、自宅までの車中で、いったい二人とどんな会話をすればいいのか困

つていたからだ。

今日は日曜日の午前中ということもあり、車はそれほど流れて無い様子で、車はスイスイと走り、大した時間も要せず自宅に着いたようだった。

「着いたわよ」

お母さんが後部座席を振り返って言ったようだ。

「うつ、うつ」

俺は眠い目をこすりながら目を覚ました。始終緊張しっぱなしで、よほど疲れていたのか？　どうやら、いつの間にか居眠りをしていたようだ…

「おねえちゃん、寝てたの？」

「そうみたい」

「疲れているのね。お風呂、直ぐ入れるからに入りなさいね」

「お風呂？」

「もう二日も入ってないでしょ？」

「うつ、うつ」

この体でお風呂入んなきゃいけないんだ？

うーん、少し抵抗はあるけど、お風呂に入って心身共に疲れを癒したいし。

車を降りて、お母さんが駐車スペースに車を入れている間に、俺はこれから生活する家を見上げた。

車2台分の駐車スペースと、小さな庭のある、ごく普通の一般的な一戸建てで、

大きくも無く、かといって小さくも無く。

でも、何処となく懐かしいような気もするけど…

## #5: 記憶のPiece (前書き)

退院後、お母さんと妹と、新たな生活をスタートさせることになった真結花。

真結花を待ち受ける悲劇とは…

## # 5 : 記憶の P i e c e

少し大げさかもしれないが、これから、この家で、俺の女の子としての人生が始まる。

そう思うと少し緊張したが、今まで持っていた記憶がリセットされた以上、

今更ジタバタしても仕方がないのだ。

ここは、開き直り、どっしりと構えるしかない。

でも、その前にちよつと待った。疲れたからお風呂にも入りたいし、お腹も減ったよ。

「ただいまーっ」

そう言ってお母さんが玄関の扉を開けると、

「わんっ！、わんっ！」

「うっ！」

茶色毛のミニチュアダックスフントがしっぽを振って、俺の脚にいきなりじゃれついて来た。

余りにもいきなりの出来事で、何の心の準備もしていなかった俺は、一瞬、心臓が止まりそうなくらいビクリした。

非常に可愛らしい姿をしていたが、俺を驚かすには十分な破壊力を持っていた。

「ふふっ、 y u k i ったら、おねえちゃんが帰って来てうれしいのね」

このコ、“ y u k i ” っていう名前なんだ。

俺は、しゃがんで “ y u k i ” の頭を撫でてやると、「くーん」

といった鳴き声を出して目を細め、  
嬉しそうな表情をした。

「このコって、女の子？ それとも 男の子？」

「女の子よ。今日はお留守番してくれてたの。お利口さんねえ」  
そう言つて、お母さんもyukiの体を撫でた。

「休みの日は、殆どおねえちゃんが、yukiを散歩に連れて行つてたの」

ああ、それで、yukiがいきなり俺にじゃれついて来たって、わけ？ 散歩に連れてけよって。

お留守番つてことは、やつぱ、この家にお父さんは居ないの？

「そうなんだ？」

「ねえ、おねえちゃん、後でyukiを連れて一緒に散歩に行こうよ」

「麻弥、真結花は今日退院したばかりで疲れているんだから、来週にしたらどう？」

「そうだね。麻弥、おねえちゃんが家に帰って来たから、ついうれしくなっちゃって」

正直、ホッとした。この体にまだ慣れていないし、まだこんな格好で近所をうろつきたくは無い。

俺はリビングに入ると、どっと疲れが出たのか？ ソファーに大字になつてもたれた。

yukiも俺の足元まで付いて来て腹這いになり、頭だけこつちを向けて俺の様子を窺っている。

その仕草がなんとも可愛らしい。

やっぱ動物って、見てるだけでも癒される。

「あのさあー、おねえちゃん。いくら疲れてるからって、そのカツコ、だらしないよ!」

「えっ?」

「脚っ! 広げ過ぎだから!」

妹に脚を指でさされ、思いつきり注意されてしまった。

「ごっ、ごめん」

俺は、慌てて大きく開いていた脚を閉じた。

「真結花、今からお風呂入れるわね。それと、二人共、お昼はおそばでいいかしら?」

「麻弥はそれでいいよ、おねえちゃんは?」

「うん、わたしもそれでいいよ」

「そう」

「ねえ、ママ」

「んっ? どうしたの? 真結花」

「この服、着替えてもいいかな?」

「これからお風呂に入るんだから、何も今着替えなくてもいいんじゃないの?」

「それもそうね」

お母さんの言うことは、ごもつとな、ご意見でございます。わたくしめには、反論の余地はございません。

「真結花は疲れている様子だし、お湯が入るまで、そこで休んでいなさいね」

「うん。あっ! そうだ! お昼から鮎美ちゃんがお見舞いに来るっ

て」

「そうなの？ もっと早く言ってくれてたらスーパーにでも寄ったのに…」

「ごめんなさい、ママ」

「まあいいわ。今晚は真結花の退院祝いしなきゃいけないって、思ってたから、後でスーパーに買い出しに行くわ」

「そうだね。麻弥も退院祝いに賛成！ 麻弥もママの買い出しに付いて行くうー」

妹は、ビシッ！と右手を上げながら言った。

「退院祝い？」

「そう、景気づけよ。パパもここに居たらいいのに…」

退院祝いねえー、まっ、いつか。病院食より美味しい物が食べれそうだし。んっ？ パパって？

「ねえ、ママ。パパって、今何処にいるの？」

「今、海外に居るの。向こうの事情もあって、当分帰ってこれないみたいなのよ」

お母さんは少し悲しそうな顔をした。

「そう」

俺、嫌な事を聞いてしまったのかも。

「でも、真結花が無事だって事はちゃんと伝えてあるから、パパも安心していたわ」

「おねえちゃんは、昔っからパパっ子だったのよ」

「そうなの？」

「うん。それはもう、甘えん坊さんみたいに」

俺は何故だかわからないが、少し気恥ずかしくなった。

「真結花、お風呂、もう入れるわよ」

お母さんがそう言っ、リビングに居る俺を風呂場まで連れて来てくれた。

「着替え、ここに置いてあるから、それと脱いだ服はそこかごに入れてね」

「うん」

着替えは、白の上下の下着、チュニックスシャツとスエットパンツが用意されていた。  
スカートよりこっちのほうが動き易くていいや。

「あっ！」

「どうしたの？ママ」

「ちよつと、待ってて」

そう言っ戻って来たお母さんは、俺の右袖を捲り上げ、右肘に巻かれた包帯の上からラップフィルムを巻いてくれた。

「これでよし！つと。右肘、湯船に浸けないよう注意するのよ」

「うん」

「じゃあ、ゆっくり浸かってね。お風呂上がったら、みんなで昼食にしましう」

「うん、わかつたわ」

さてと、お湯にゆっくり浸かって、気分をリフレッシュしますかあ！。

この体、まだ違和感あるし、恥ずかしいから、余り自分でマジマジと見ないようしよっと。

ささっと、服を脱ごうとしたが、先ほど右肘に巻かれたラップフィルムで右肘が曲げにくかった。

かけ湯をしてから、右腕だけ湯船に浸からないようにゆっくりと体を沈めた。

「ふうーっ」

あーっ、暖かいお湯で全身が包まれているとスゴく落ち着く。ホント、癒されるって感じ。

「しまった！ 髪、ゴムで留めなきゃいけなかった？」

長い髪の毛先が湯船に広がっていた。

「まっ、いっかー。どうせ髪洗うし」

浴槽、意外と広いんだな。というより、この体が小さいのか？

背中を浴槽の壁に付けた状態で思いつき脚を伸ばしてみたが、爪先が浴槽の反対の壁に当たりそうもない。

俺は、浴槽から出て、ナイロンタオルにソープを付けて体を洗い始めた。

タオルで体を擦ると、思ったより肌が敏感で妙な感覚を覚え、特に乳首にタオルが当たると、少しくすぐったいような、ヘンな感じがした。

肌が敏感で弱そうだから、こりゃ余り強く擦っちゃダメだな。女の子の部分も、そっと腫れものでも触るかの如く、恐る恐るやりわりと洗った。

そのうち、全身を洗っていると、なんだか体中が火照っているような、妙な感覚が俺の体を包み込んだ。

えっ？ これって、お湯で体が温まって、ただ血行がよくなっただけだよな？

このヘンな悶々とした気分は、きつ、気のせいだよな？  
まさか？ これって、体が疼いているとか？ 体がその… アレをして気持ち良くなりたいとか？

うああー、いったい何考えてんだ！ 俺って、ヘンタイかっての！  
ったく、こんな幼い体に一瞬たりとも欲情するなんて。  
今は、そんな事考えている場合じゃないだろうにっ！

一瞬にして、この娘のエッチな事をしている妄想が、俺の頭の中を支配したのだ。  
俺は、頭を左右に振って、頭の中を支配していたエッチな妄想を必死に？き消した。

「さっ、変な事考えてないで、さっさと髪、洗わなきゃ」

髪が長いので、シャンプーとリンスにはかなり時間が掛ってしまった。  
った。

今度は、束ねた髪を右手で掴んでから湯船に浸かり、体を温めてからお風呂から出た。

髪は何度もタオルで拭いたが、長いから中々水分が取れない。  
このままだと湯冷めしそうなので、素早く着替え、洗面台のドライヤーで髪を乾かし始めた。  
そっういや、意識せずとも着替えは手慣れたもんだった。

しかし、なかなか乾かないねえー、この髪。この調子じゃあ、毎

日、髪の手入れが大変そう。  
暫く、長い髪と格闘しながら、ふと思った。

「髪、短く切っちゃおっかな？ でも、いきなり髪切ると皆に変に  
思われるかな？」

「ねえ、ママ。この髪、短くしてもいいかな？」  
俺は、毛先をいじりながらキッチンで昼食の支度をしていたお母さ  
んに聞いた。

「えっ？ いきなりどうしたの？ 真結花」  
お母さんは少し驚いた顔を見せた。

「うん、ちょっと髪、長くてうっとうしいかなあーって、短く切っ  
ちやいたいなあーって、思っちゃたりして」

「ええーっ！ おねえちゃんのその綺麗な髪、短くしちゃダメっ！  
絶対ダメエー」。

その髪、短くなんかしたら、麻弥は絶対許さないんだからっ！」  
リビングでyukiと戯れていた妹が、ふくれっ面で猛抗議して来  
た。

「うっ！」  
妹の思わぬ大クレームに後ずさりして、たじろいでしまった。

「真結花、髪がうっとうしいのなら、後でいつものように結んであ  
げるわ」

「そうよ。おねえちゃんが髪短くしたら、益々男の子っぽくなっち

やうんだからあー」

男の子っぱくなる??? この娘、見た目は十分女の子、しかも美少女の部類だけど…

はっ！ もしかして、この娘の中身が男ってバレたのか？ ちょっと冷や汗が出そうになった。

「わたしって、そんなに男の子っぽいの？」

「だってえー、おねえちゃんってば、女の子のくせに、乙女チックな事よりサッカーに夢中なんだもん」

「ええっ…」

この娘って、サッカーなんかしてたのか！ まさか？ とは思っていたが、

こんなに細くて、やわで、小さな体でさあ。

「パパの影響ね」

「どうゆうこと？ ママ」

「パパは男の子が欲しくて、小さい頃から真結花とよくサッカーボールで遊んでいたのよ」

「そうなの？」

「そうよ。あの事故の日も、サッカーの練習帰りだったの」

「それって、学校の部活帰りだったの？」

「学校には女子サッカー部なんてないから、真結花は地元のサッカークラブに入っていたのよ」

「へーっ、そうなんだ？」

「おねえちゃん、最近サッカーに夢中で、麻弥と全然遊んでくれないんだもん」

妹は、ちよとムスっとした顔をした。

「ごめん、ごめん」

俺の事じゃないけど、とりあえず、謝っておいた。

「それじゃあ、ちょっと早いけどお昼にしましょう」  
リビングの時計を見上げると12時前だった。

お母さんの作ってくれたおそばは美味しかった。  
少し薄味だったけど、出汁がよく効いていた。  
でも、懐かしいような、どこことなく覚えているような味だった。

「おそば、どうだった？」

お母さんが少し不安げな顔で俺の顔を覗き込んだ。

「うん、美味しかったよ。少し懐かしいような味だったし」

「そう、よかった」

お母さんは、少しうれしそうな顔をした。

「麻弥も美味しかったよ」

「ありがとう」

「ねえ、おねえちゃん。お部屋に行く？」

「うん」

妹は、俺の左手首を掴んで二階にある真結花の部屋の前まで連れて行ってくれた。

「ここがおねえちゃんの部屋、こっちが麻弥の部屋、あっちがママ達の寝室だから」

妹がそう言った後、妹と一緒に自分の部屋に入った。  
女の子の部屋にしては、ぬいぐるみ一つ無い、サッパリとした、整

理された部屋に少し驚いた。  
何やらサッカー選手らしきポスターは、壁に沢山貼られているようにだけど…

「全然女の子っぽくないでしょ？この部屋」

「うん、むしろ男の子っぽい部屋っていうか…」

「何か思い出した？」

「えっと…違和感はないかな？」

「そう」

「暫く、この部屋でひとりにしてくれない？」

「うん、わかったわ、何かあったら呼んでね。麻弥は隣の部屋に居るから」

「うん」

妹が部屋を出た後、俺は床にペタッと女の子座りして部屋の中を見渡した。

壁には国内外のサッカー選手のポスターが所狭しとベタベタ貼られていて、啞然とした。

ふつー女の子の場合、こーゆうポスターって、好きなアイドルや歌手なんかを貼ったりしない？

そのポスターの中に混じって、少し古そうな感じの日本人サッカー選手の写真もあった。

俺は気になって、すくっと立ち上がり、その写真を近くで見た。

「誰だろ？どこか懐かしいような気もするけど」  
後で妹にでも聞いてみよう。

そうだ、アルバムとか無いかな？ 何か思い出すかも知れないし。本棚を探してみた。

サッカー関連の書籍やサッカーの漫画が多いようだ。小説も結構あり、読書も好きみたいだ。  
ホント、サッカーが好きなんだなあ。自分の体の事なのに何かへんだ。

「あつ！あつた、あつた。たぶん、これだね？」  
俺はアルバムを手に取り、早速パラっと捲ってみた。

「んっ？」

小さい頃の写真を見ると、殆ど男の子みたいな活発な格好をした写真ばかりで、  
一見すると可愛い男の子のように見えた。  
小学生高学年ぐらいから、スカートをはいた可愛い女の子が写っていた。

そして、先ほど気になった普段着のサッカー選手と家族皆が並んでいる写真もあった。

えっ！もしかして、お父さんって元プロサッカー選手なわけ？

「さっき、お母さんがお父さんの影響って言ってたのはこのこと？」

更にページを捲ると、男の子に混じった小学生のサッカークラブの集合写真、

同じく中学生ぐらいと思われるサッカークラブの集合写真もあった。  
この娘、ずっとサッカーしてたんだ。どうりで上手いと言われるはずだよ。

俺は、入院中に受信したメールの事を思い出し、ハツとした。  
そつえば、“里子”っていう娘のメールに返信するの、すっかり

忘れていた。

この娘も同じサッカークラブの仲間なんだろうな？

俺は慌てて、ドアをバン！と勢いよく開き、ドタバタと階段を降りて行った。

「おねえちゃん、どうしたのー？」

何事か？と思った妹が部屋から顔を出して来たようだ。

「ちょっと、忘れものっ」

「ねえ、ママ、わたしのスポーツバッグはどこ？」

リビングに居たお母さんに聞いた。

「そういえば、さっき、汚れたジャージと一緒に洗面所に持ってたまだわ」

俺は、慌てて洗面所に行き、スポーツバッグを持って、またドタバタと階段を上り始めた。

「階段、走っちゃダメよー」

下からお母さんの声が聞こえた、その瞬間だった。

ドッタン！

「イッタあゝっ。イテテ…」

バンッ！と目の前のドアが開き、

「おねえちゃん大丈夫？」

妹が何事か？という驚きの顔で俺を見つめる。

どうやら、最後の階段でつまずいて、頭から二階の廊下にダイブしたらしい。

右肩と左脚の脛の辺りを交互にさすりながらうつづくまっついていると…

「だから言っただじゃないの！　また入院したいわけ？」

少し怒ったような顔でお母さんが二階に上がって来た。

「うっ、ごめんなさい…」

「脚、見せて。うああ、もうおー、青あざができているじゃないの！」

お母さんは左脚のパンツの裾を上げてそう言った。

「うっ、くうっ…」

俺は痛みで少し涙目になっていた。

「そのまま、じっとして待ってるのよ」

「もうおー！　ったく、おねえちゃんはお人騒がせなんだらあーっ！」

うっ…　面目無い。今日の俺、妹に散々怒られちゃった。

何でこんなに情けない気持ちになるのだろうか。ホント、泣きたいよ。

そう思っていると、お母さんが小さなアイスパックとタオルを持って上がってきた。

「これで脚を冷やすからじっとしていなさい」

お母さんは、解凍して少し柔らかくなったアイスパックをタオルの中に入れて、

俺の、左脚の青あざができた部分に巻いてくれた。

「今のおねえちゃん、右肘には包帯巻いてるし、おまけに左脚にもタオルなんか巻いちゃって、

見た目はもう立派なけが人みたいよね」

「そうよ。せつかく今日退院したばかりなんだから、少しは体に気を使って、大人しくしていなさい」

「はい」

俺は、シュンっとなつて頂垂れた。

「でも、おねえちゃん。顔を打たなくてホントよかったわね。女の子が顔に青あざなんてつくつたら、恥ずかしくて当分学校へは行けないわ」

そうか！ 近々学校に行かなくちゃいけないんだ？ それを考える  
と、ちよつと気が重くなる。

「ママも大事にならずに済んで、ホツとしたわ」

「ほんと、そーだよ。麻弥が目を離すところなんだから。以後、十分気を付けるように！ わかったわね！

おねえーちゃん。つたく、ドジっ子なんだから」

もう、今日の俺って、朝から何度、妹にダメ出し食らってんだか…  
これじゃあ、ホント、どっちが姉だか分かんないや。

## #5：記憶のPiece（後書き）

新しい生活に戸惑い、妹には全く頭の上がない真結花。

真結花の前途多難な女の子としての生活は、今日、始まったばかりなのです。

次回につづく。

#6：記憶喪失の美少女 まゆか（前書き）

真結花の幼馴染である鮎美。

鮎美は、真結花のお見舞いをしたいということで、  
真結花の家を訪れることになったのですが…

## # 6：記憶喪失の美少女 まゆか

ピンポン

「はあーい。どちらさまあ〜？」

『鮎美です』

ガチャ。

「真結花のお見舞いに来てくれたのね。ありがとう」

「お母さん、これ、みんなでどうぞ」

「あら、そんな気を使ってくれなくてもいいのに」

「まゆかー、鮎美ちゃんが来てくれたわよー」

さあ、どうぞ上がって。真結花はさっき、階段で転んで部屋で大人しくしているわ」

「えっ？ 大丈夫なんですか？」

「ちよつと、脚に青あざつくっただけだから、大したことはないわ」

「その程度でよかったわ。真結花は、事故に遭ったばかりだし。」

あつ！ Yukii！ 元氣してる？ このコ、本当に人懐っこいのね」

「番犬としてはダメねえ〜」

「じゃあ、遠慮なくおじゃまさせていただきます」

「さあ、どうぞ上がって」

とん、とん、とん。

鮎美ちゃんが階段を上がって、部屋に向かって来ているようだ。うう… なんだか緊張する。

カチャ。

「あつ！ 鮎美ねえさん、こんにちは」

「こんにちは、麻弥ちゃん」

「鮎美ねえさん、おねえちゃんのお見舞いに？」

「うん。真結花、元気にしてる？」

「はい。さつき、階段で転んじやつたけど大丈夫みたいだし。ホント、おねえちゃんってドジなんだから」

「そう、相変わらず仲がよさそうね」

「あつ！」

「どうしたの？ 麻弥ちゃん？」

「えっと、おねえちゃん、ちょっと、以前と雰囲気が違うから戸惑うかも」

「そうなの？」

「うん、だから、その辺は気を付けておねえちゃんに接して欲しいの」

「アドバイス、サンキュ！ 麻弥ちゃん」

「じゃあ、おねえちゃんをヨロシク！」

「うん」

廊下で、鮎美ちゃんと妹の話声が聞こえた。

もうー、ドジって。何度も言わないで欲しいよ。

ああ、もう、ドキドキが止まんない。緊張がピークにキター！。

トントン。

「まゆかー、部屋入ってもいい？」

「いつ、いいよー」

カチャ。

ドアを開けた鮎美ちゃんが、一瞬立ち止った。

鮎美ちゃんって、写メで見るとよりカワイイし、思っていたイメージより結構背が高くてスタイルがいい。

お母さんと同じくらいで、160cmくらいはあるのかな？

この体は、150cmあるか、ないかってところなのに…

この身長のまま成長が止まったら、そのうち妹にも抜かれそう。

鮎美ちゃんは、ベッドに腰掛けていた俺を見るなり、だっと駆け寄って、

いきなり俺の体を包み込むように、両手でギュッと強く抱きついた。

「よかったー。本当に無事で」

うあああ、鮎美ちゃんの柔らかい胸が思いつきり、当たっているよー。

恥ずかしくって、顔が熱くなるのを感じた。

「鮎美ちゃん？　ちょ、ちょっと痛いよ」

「あつ！　ごめん、ごめん。つい、うれしくって。力が入り過ぎちゃった。」

ホントにもう大丈夫なの？」

そう言って、抱きついていていた体を離し、やっと解放してくれた。

「うん、もう大丈夫だけど、これ」

俺は、さっき、転んだ時に左脚に巻いてもらったタオルを指でさした。

「もうおー、ドジね。運動神経はいいくせに」

「えっ？　そうなの？」

サッカーをやってるくらいだから、運動神経はいいに決まっている

だろうが、あえてそう答えた。

「真結花、本当に何も覚えていないのよね？」

「うん」

「私の顔も？」

「うん。ごめんなさい」

「あやまることは無いわ。仕方ないじゃない」

「でも、なんだか、もの凄く申し訳なくって」

「そんなに自分を責めなくてもいいのよ。私は大丈夫だから」

「ありがとう。家族はこんなわたしでも受け入れてくれたけど、鮎美ちゃんはどうかのかなって。

会うまで嫌われたらどうしようとか、ずっと思ってた、さっきまでめっちゃ緊張していたし、凄く不安だったの」

「私が真結花を嫌うわけじゃないじゃない。そんなこと心配していたの？」

「うん」

真結花、さっき、麻弥ちゃんが言っていた通りだわ。やっぱり、いつもと雰囲気が何か違う。

なんていうのかな？　今まではサバサバしてて、悩み事も無さそうな、元気いばいな少年のようなキャラだったのに……女の子なのにサッカーなんてやってるし、元気で活発なコってイメージだったよ。

でも、今の真結花って、瞳が何か妙にうるってるし、私との目線も微妙に避けてるし、

頬も少し赤いし、おどおどしてて、恥ずしがっているし、人見知りばいっていうのかな？

まあ、何か、こう、真結花の全身から“守ってあげたあーいっ！”っていうような？

そんなオーラが出てて、妙に女の子っぽいよ。

ああ、そんな真結花を見ると、もお、可愛くて、思わず、また両手でギュっとしたくなるほど抱きしめたくなくなっちゃいそう。

そう、何だか愛くるしい妹みたいな感じ？ 私はひとりっ子だから、妹は居ないけどさ。

あっ！ もしかして、これが、妹萌えっていう感情なの？

真結花に対してこんな感情、今まで持ったこと無いのに… 今日の私、なんだかおかしいのかな？

ああ、どうしよう？ そう思ったら、急にドキドキしてきたよ。私って、さっきから、もう吸いこまれそうなくらい、真結花をじっと見ちゃってるよ。

何か喋らないと、真結花にヘンに思われちゃう。

ううっ、さっきから、何か彼女にもの凄く見られているよ。

俺、何かおかしな事でもしたのかな？ 益々目線を合わせられないじゃないか。

可愛い女の子に、そうやって、じっーと見つめられていると、凄く恥ずかしいよ。

もう、何処かへ隠れてしまいたいって、感じ。

でも、何か言わないとこのままじゃあ、凄く気まずいよ。

「ねえ、鮎美ちゃん？ さっきからずっと黙ってて、いったい、どうしたの？」

「ふえっ？ ちょ、ちよっと考え事」

ふえーっ、あぶない、あぶない。

もう少してガマンできずにまた抱きついてしまいそうだったよおー。

「あのさあー。さっきから、なんだか様子がヘンだよ？」

「そっ、そんなことないって」

うつ、明らかに声が上ずって、緊張してるのがバレちゃいそう。

「やっぱり、ヘン！」

ああーんっ、もうダメっ！ 真結花、そんな可愛い顔して上目使いで私を睨まないでよお。

「うつっ、ああーごめんなさい。白状するわ」

「どうゆうこと？」

「うん、実は、私の知っている真結花のイメージと、今の真結花のイメージに凄くギャップがあるから、ちよっと戸惑っていたの」

「どう違うの？」

「うーん、前の真結花はちよっと活発な少年っぽいイメージだったんだけど、

今の真結花って、凄くしおらしくて、女の子ぽいっていうかぁー、新たな一面を見せられたというかぁ」

「そうなの？」

「うん」

俺が女の子っぽいって？ また顔が少し熱くなるのを感じた。

「じゃあ、私の方が変なんだね？」

「うつうん、変じゃないわ。良い感じよ」

「どうして？」

「以前から、真結花はもう少し女の子らしくした方がいいんじゃないのかな？って思ってたから」

「わたし、このままで大丈夫かな？」

「そおーねえー、一昨日までの真結花を知ってた人は、私と同じで、最初は戸惑うかもね」

「うつっ、なんか嫌だなぁー」

「でも最初のうちだけよ。まだ入学して間も無いし、今の真結花に

慣れてしまえば、

問題ないと思うわよ」

「そうかな？ でも、やっぱり不安」

「心配症ねえー。私がいるから大丈夫よ。ドンとまかせなさい。学校の皆には言っておくから」

彼女は軽く胸を叩く仕草をしながら言った。

「うん、ありがとう」

「いえ、いえ、どういたしまして」

「ところで、鮎美ちゃん？ これから学校生活を送る上で、わたしの人間関係を事前に知っておきたいんだけど？」

「まあ、今の真結花なら、そう言うだろうと思って、これを用意してきたの」

彼女は、ポケットから折りたたんでいた紙を取り出し、目の前で広げて見せた。

「なに？ それっ？」

「じゃじゃーん。題して“まゆか相関図”」

その“まゆか相関図”とやらには、“記憶喪失の美少女 まゆか”と大きく書かれたタイトルがあり、

真結花の顔写真を中心にして、回りを取り囲むようにクラスメイトの顔写真が配置され、

そして、真結花とクラスメイトの写真が各々の矢印で結ばれ、その矢印には仲良し、

普通、苦手、ライバル関係？等といった事が書いてあった。

ねえ、鮎美ちゃん？ 何のご冗談のおつもりでしょうか？

その“記憶喪失の美少女 まゆか”っての。俺を連ドラとかの“悲

劇のヒロイン”にしたいわけ？

じゃあ、監督はいつたい誰？ “運命の神様”？

これって、真面目にリアルなんですけど…

「それって、新作テレビドラマのレビュー記事とかに書いてある『人間関係相関図』を真似たの？

鮎美ちゃんって、面白い事考えるのね。そんなの、どうやって作ったの？」

そう言って、鮎美ちゃんのネタ振りに返してみた。

「そう！ よくぞ、聞いてくれたわ。テレビ番組雑誌見たら、これだ！って思いついてさあー。

早速パソコンで作ってみたの。こんなの簡単に作れるわよ。

これ、あげるから、登場人物覚えておいてね」

そう言って彼女が“まゆか相関図”なるものを手渡してくれた。

ねえ、ねえ、ところで、鮎美ちゃん？ その登場人物って、

メインキャラとかサブキャラとか、当然のことながら、設定されますよね？

「こんなに沢山登場人物がいると、顔と名前が全て一致するまで時間が掛りそう」

俺は、鮎美ちゃんの冗談に付き合って、真面目にそう答えた。

「まあ、登場人物は全員覚えなくても、最低、まゆかの直ぐ近くに配置している数人のクラスメイトの顔と名前ぐらいはインプットしておいてね」

「この人達が、わたしと一番仲がいいの？」

俺は、“まゆか相関図”に指をさして聞いた。

「そうよ。智絵と杏菜、友田君は特に仲がよかったわ」

友田君って、やっぱ、この娘の彼氏なのだろうか？

いや、今はあえて聞かないでおこう。聞けば、身を滅ぼしかねない。聞かない方が世のため、人のためってね。

「そう、わかったわ」

「さっ、真結花の元気な顔も見れたことだし、用事も済んだことだし、そろそろ帰ろっかな？」

「えっ！ もう帰っちゃうの？」

「んっ？ だって、真結花は今日退院したばかりだし、余り長居するのも悪くなって」

「そんなことないよ」

「明日も学校帰りに様子を見に来るわよ。学校はまだ当分休むんでしょ？」

「そのことなんだけど… まだ、どうするのか決めていないの」

「そう」

「でも、もう少し居てくれないかな？」

「そお？ 真結花がそこまで言うんだったら、もう少し居るよ？」

「ありがとう。実は、これからママも麻弥も出かける予定だから、家に独りで居るのは少し心細くて、寂しくって」

「あら？ 真結花はいつからそんなに寂しがり屋さんになったのかしら」

「だって、わたし、以前の記憶がないから、独りぼちになるとこの先の事、色々考え込んでしまって、不安なの」

しまった！ 私とした事が、うかつだった。今の真結花って、以前と違って、凄く繊細なのよ。

「私、気が付かなくて、ホントにゴメン！ 親友失格よね」

彼女はさっきまでとは打って変わって、本当に濟まなさそうな顔で両手を合わせて謝った。

「ううん。そんなことないよ。鮎美ちゃんは十分優しいもん」

「ありがとう。真結花にそう言ってもらうと、私も救われるわ」

「じゃあ、この登場人物達について、もう少し、特徴とかキャラとか教えてくれないかな？」

その方が、印象に残るから」

「おっけー」

彼女は冗談交じりに、クラスメイトの特徴とかキャラクターを、一人づつ、

丁寧に面白おかしく紹介してくれた。

トントン。

「ママだけど、おじゃましてもいいかしら？」

「ママ？ 何の用事？」

「お飲み物持ってきたの」

「うん、入っていいよ」

カチャ。

「鮎美ちゃん。真結花の様子が以前と違って、少し戸惑っているかもしれないけど、

これからも変わらずお友達でいてあげてね」

そう言っ、お母さんはおぼんに乗せたジュースとクッキーをテーブルの上に置いてくれた。

「はい、こちらこそ。私にとって、真結花は親友ですもの」

「じゃあ、鮎美ちゃん、ゆっくりして行ってね」

「はい」

「真結花、これから麻弥と出かけるから、お留守番よろしくね」

「うん」

「あつ！ そうだね。つい、言い忘れるところだったわ。

今晚、鮎美ちゃんも一緒に夕食でもどうかしら？」

「えっ？ いいんですか？」

「いいのよ、遠慮しなくても。今晚、真結花の退院祝いをやろうと思っていたところなの。」

人数多い方が楽しいでしょ？」

「じゃあ、お言葉に甘えさせていただこつかな。でも直ぐ帰るつもりだったから、

親に連絡しておかないと。あつ！ 携帯持つてくるの忘れた」

「ママが誘ったんだから、ママからご両親に連絡しておくわ」

「ありがとう」

「真結花、ママ、もう行くわね」

「うん。気を付けてね。いつてらっしゃい」

「じゃあ、鮎美ちゃん。留守中、真結花をお願いね」

「はい。任せておいて」

「まみー、今から出かけるわよー」

「はぁーい」

お母さんと妹は、夕食の買い出しに出かけた。

夕食は、いったいどんなメニューなんだろうか？

まっ、それは後のお楽しみってことで。

#6：記憶喪失の美少女 まゆか（後書き）

ようやく鮎美と初対面した真結花。

彼女は、真結花の心境の変化に戸惑いつつも、

今の真結花を暖かく受け入れてくれたようでした。

次回につづく。

## #7:とまどい。(前書き)

家族と鮎美は、今の真結花を暖かく受け入れてくれたものの、今の真結花にとって、次なる障害は学校生活だった…

## #7:とまどい。

楽しみにしてた退院祝いの夕食メニュー、それは、すき焼きだった。

入院してから慣れない生活、緊張状態が続いた俺にとって、皆でお鍋を囲んでワイワイ言いながら食事をしてると、ほんわかった気分になった。

ほんの少しだけ、お母さんと妹、鮎美ちゃんとの距離が縮まったような気がしたんだ。

うん、やっぱ、家族団らんっていうのは、暖かくていいな。そう、こうゆうのは、一人じゃ味わえない気分だし。

入院中、病院食を一人で食べてたら、ただ、ひたすら空腹を満たすだけの、食事という名の作業を淡々と行っていただけののような気がしていたし、なんか淒く侘しい気分だった。

夕食後のデザートは、鮎美ちゃんがお見舞いで持ってきてくれたケーキだった。

お母さんに紅茶を入れてもらい、皆でケーキ食べながら談笑していた。

すると、

「真結花？ 明日から学校だけど、体は大丈夫そうだし、どうするの？」

突然、お母さんが切り出した。

今まで楽しかった気分が、瞬間に一気に吹き飛び、ずっしりとした、重たい気分が俺に押し掛かった。

「うーん、どうしよっかなあー。実はその事、入院中からずっと考えてたんだけど、未だに不安だし、まだ迷っているの」

「かといって、いつまでもダラダラと休んでいたら、勉強も遅れるし、益々学校に行き辛くなるわよ。ママの希望としては、明日からでも学校へ行つて欲しいところだけど、真結花がどうしても学校へ行く気分になれないのなら、無理せずに、二、三日ぐらい休んでもいいのよ。でも、本音を言つと、余り休んで欲しくないのが正直なところなの。休みが長引くと、真結花が登校拒否になつて、うつや引きこもりになつたりしないかと、凄く心配してるの」

「そつだよ、おねえちゃん。どうせ早かれ遅かれ学校に行かなくちゃいけないんだから、休んで先延ばしにしたつて一緒だよ。夏休みの宿題と同じでさあ、後で絶対やらなきゃいけないのに最後までほつといて、今だけラクしようとしてる事と同じじゃない？ どうせ、後でスゴくしんどくなるんだから、休まずに学校へ行つた方が、精神的にも随分楽だと思つんだけど。だからさあ、今、覚悟を決めて明日から学校へ行つた方がいいんじゃないの？ ねえ？ おねえちゃん」

「そつ！ 同感だね。私もお母さんと、麻弥ちゃんの言つように、学校を休んだとしても、ネガティブな事ばかり考えて、精神的に閉じこもっちゃうかもしれないし、休みが長引くと、ほんと、後から大変な事になっちゃうと思う。学校、休んだところで、良い事なんて何も無いんじゃない？ ここは、皆の気持ちをくんで、明日から学校に行こうよ！ ねっ、真結花」

しかし、非の打ちどころがない、見事なまでの三位一体の連携プレー。

正に、窮地に追い込まれたヒロインって感じ？  
どう考えても、この包囲網を突破するのは容易じゃないね。  
ちえっ、少しぐらい休んだっていいじゃないか。

学校行くにしたって、心の準備つてものもあるだろうに、人の気も知らないでさあ、もう、ケチ！

ひとり、心の中でスネてみたところで、虚しく、結局、俺には反論出来るだけの正当な理由が見つからないわけで、すごすごと、白旗を上げるしかないのであった。

「わっ、わかったわよ！ 明日から行けばいいんでしょ？ 学校に！」

半分、やけっぱちに言った。

「あつ！ なあーんか、イヤイヤなオーラ、出てるわよ。ま・ゆ・か・さん？」

鮎美ちゃんが、俺の顔を覗き込むように悪戯っぽく言った。

さすがに、あんな言い方したのはマズかった。

「そつ、そんなことないよ、もう決心したから」

すかさず、フォローを入れた。

「ホントにいゝ？」

「ホントよ！」

「まっ、いつか。本人がそう言っただけなら。ところでさあ」

「なに？ 鮎美ちゃん」

「あのさあー、やっぱり、友田君の事も何も覚えてないわけ？」

「へっ？ とつ、友田君がどうかしたの？」

“友田君”という言葉に過剰反応し、明らかに動揺しているような声で答えてしまった。

「ああ、かわいそうな友田君。成仏してくれたまへ。合掌」

そう言って、鮎美ちゃんは冗談ばく両手を合わせた。

すると、すかさずお母さんが反応し、

「鮎美ちゃん？ いつの間に真結花に彼氏が出来たの？ ママは初耳だけど」

「ああー、それえー、麻弥も詳しく聞きたあーい。彼氏って、イケメンなの？」

ああ、妹までも… 興味深々、ってな顔して。

「うーん。どうしよつかなくっ」

鮎美ちゃんは、焦らすように言った。

「もうお、やめてよー。人をからかうのは。全然覚えていないんだから、そっとしておいてよあー」

ここで、家族に彼氏がいるように思われるのは絶対嫌だ。心がそう叫んでいる。俺は全力で回避する。

「でも、ホントかなあー。ア・ヤ・シ・イ」

またしても、悪戯っぽく、鮎美ちゃんが俺の顔を覗き込む。

「ねえ、鮎美ねえさん。今のおねえちゃんイジるの、もうそれぐらいで勘弁してあげて。面白いけど」

「良い妹を持ったわねえー、真結花。羨ましいな！ 私、一人っ子だし」

「鮎美ねえさん？ 麻弥も鮎美ねえさんの妹みたいなもんだよ。ずっと昔から知っているし、

もう一人のおねえちゃんだっと思ってっているもん。だから、これからも麻弥のこと、妹だと思っていいいよ！」

「そうよ、鮎美ちゃん。鮎美ちゃんは、ママにとっては、もう従姉妹みたいなものよ。

これからも気兼ね無く、家に遊びに来てもらっていいから」  
「ありがと。お母さん、麻弥ちゃん」

それから暫くの間、お母さん、妹、鮎美ちゃんだけが知っているような、昔の内輪話が続いた。

俺は、ただひたすら聞き役に徹し、場の空気に合わせて相槌を打つだけで、

記憶の無い俺にとっては知らない事ばかり。当然のことながら、三人の会話の中には全然入っていけなかった。

そして、この場に、ただひとりだけ、ぽつんと取り残された気分で、皆と同じ空間に居ることに苦痛を感じ始めていた。

そして、たまらず、

「ねえ、ママ、ちょっと疲れたから、席、外してもいい？」

そう言っただけは、この場から逃げ出したかった。

「ごめんなさいね。真結花。ママ達、全然気付かなくて。つい、ママ達だけでお喋りに夢中になっちゃって」

「麻弥もゴメン。おねえちゃんだけ、仲間外れにしちゃった感じ」

「ごめん。私に嫉妬してたのよね？ 真結花。さっきまで、母さんと麻弥ちゃんを私が独占しちゃってたから」

「えっ？ そんなことないもん！」

俺は、彼女達からぶいっと顔を背けた。

「だから、ゴメンって。今は、凄く不安で寂しいのよね？ 真結花は」

そう言っただけ、テーブルの隣に座っていた鮎美ちゃんは、そっぽを向いた俺の頭を優しく撫でた。

そう、鮎美ちゃんの言うように、なぜだか家族を取られたような気分になり、

鮎美ちゃんに嫉妬していたし、今は、誰かに頼らないとむちゃくちゃ不安な気分になられる。

しかも、“寂しいよー！”って、この心が訴えかけてくる。

おまけに、無意識のうちに皆の気を引こうと思って、ヘンに強がって拗ねちゃってたし。

なんでだろう。これは、本当の俺の気持ちなのだろうか？ 不思議だ。

でも、この娘の事、こんなにも大切に思っているんだから、もう少し、彼女達に心を許すべきかなあ。

今まで、どこか他人行儀に皆との距離を置いて、心の壁を作っていたのは確かだし。

「ごめん。ヘンに拗ねたりして。本音を言うと、今も凄く不安で仕方がないの。」

記憶を失ったわたしが、以前と変わらないように、皆とギクシャクせずに生活出来るのになって」

「だからあ、私がいるから大丈夫だって、安心して。学校の事ならね、任せてって、言ったじゃないの。」

真結花が学校生活で不安に感じる事、嫌な事、困った事、どんな事でも全力でバックアップするつもりよ。だって、真結花と私は親友でしょ！ 真結花に以前の記憶が無くても、私は真結花を見捨てたりしないわよ！」

「真結花、そうやって、いつまでも記憶の戻らない、過去の事ばかりに囚われてちゃダメよ。ネガティブな事ばかり考えて、後ろばかり向いてちゃ。人は、いずれ変わって行くものよ。そのタイミングが今で、今から変わり始めてもいいじゃない。だから…今は例え迷っていても、とにかく前を向いて進むの。そうすれば、自然と何かが見えてくることもあるかもしれないわ。ママはそう思うの」

「麻弥も、ママも、鮎美ねえさんも、みーんな、みーんな、おねえちゃんの味方だよ。」

だから、安心して。記憶なんて、これから新しいの、いっぱい、いっぱい作って行けばいいの。

これからの時間はたっぷりあるんだから。ねっ、おねえちゃん」

彼女達の暖かい言葉が心に触れ、感情が込み上げて来たと思ったら、

俺の瞳は瞬く間に潤み出し、頬に涙が伝っていた。

はぁー。ホント、マジで涙腺が弱くなっちゃたのかな？ 俺って。もう、泣いてばっかだよ。

「もぉー、真結花。いきなり泣かないでよー。こっちまで貰い泣きしそっよ」

鮎美ちゃんの瞳が少し、潤んでいたように見えた。

「ごめん、ごめん。皆の言葉がうれしくって、つい、思わずじーんと来ちゃった」

「おねえちゃん、うれし泣き？」

「うん」

「だったら、今は感情に任せて思い切り、泣いちゃいなさい。スッキリするから」

ママはそう言って、何処から取り出したのか？ ハイっ、とハンカチを渡してくれた。

暫くの沈黙の後、鮎美ちゃんが切り出した。

「真結花、もう、気が晴れた？」

「うん」

「じゃあ、私はそろそろ帰ろっかな？」

「えっ？ まだ外は少し明るいよ？」

「そうよ、もう少しゆっくりしていてもいいのよ」

ママも引き留めに掛る。

「麻弥も、もう少し鮎美ねえさんと一緒に居たいなあー」

麻弥も鮎美ちゃんが大好きなようだ。

「んーっ。明日は学校だし、余り遅くなるのもねえ。私はいいんだけど、親が心配するから。私って、一人っ子だからさあー、余り帰りが遅くなると、何か親が異常に心配するのよねえー。ちよつと心配症過ぎるのよ」

「鮎美ちゃん、無理に引きとめて、ごめんなさいね。結城さん宅って、門限が早いのかしら？」

「えっと、絶対何時までに帰りなさいっていうような、きつちりとした門限が決まっているわけじゃないんだけど、最近、この地域の近くでも色々と事件があつて物騒でしょ？ だから、過敏になつているのかも？」

「確かに、それもそうね。じゃあ、ママが車で家まで送っていくわ」  
「えっ！ 歩いてたつたの10分ぐらいの距離なのに、そんなの悪いし」

「鮎美ちゃん、遠慮なくママに送ってもらつて。わたしも心配だし」  
「そう、そう、麻弥からもお願い。おねえちゃんみたいに、何かあつてからじゃあ遅いんだからあー」

「それって、どうゆうこと？ 麻弥」

「こうゆうことー！」

麻弥は、急に俺の顔の前にビシッと指をさして答えた。えっ！ それってどうゆう意味なわけ???

俺は、麻弥の言ってる真意が良く分からず、一瞬ボケーっとしてしまった。

はっ！もっ、もしかして、こやつ、やっぱ俺の中身が男だつてこと、薄々気付いていたわけ？

女のカンって鋭いからなあ。麻弥の思わぬツツコミに、また冷や汗が出そうになった。

「ぶっ、あっははっ」

何がおかしいのか？ 鮎美ちゃんが二人に向かって突然笑った。

「ホント、相変わらず仲がいいわねえ」。あんた達。見てて、微笑ましくなるわ。

ねえ？ 真結花。麻弥ちゃんを私にちょうだい！」

鮎美ちゃんのその言葉に一瞬、面を食らった。

「へっ？」

「冗談よ。やっぱ、仲がいい姉妹って、いいなって、そう思っただけ。

それじゃあ、もう帰るわね。明日、朝迎えにくるから。じゃあ、おやすみなさーい」

「うん、また明日ね。おやすみ、鮎美ちゃん」

「鮎美ねえさん、またいつでも遊びに来てね。バイバイ」

鮎美ちゃん向かって、大げさに両手を振る麻弥。

「二人共、お留守番、頼んだわよ」

「りようかい、ママ！」

今度は、ママに向かってピシッと敬礼のマネをする麻弥。ホント、この子って面白いコ。

鮎美ちゃんが、麻弥が欲しいって言うのもわかるような気がする。

「ママも気を付けてね」

俺がそう言った後、鮎美ちゃんは、ママに連れられて自宅に帰って行った。

「さつ、鮎美ちゃん。家に着いたわよ」

「こんなに近所なのに車で送ってもらっちゃって、すみません」

「いいのよ。ほんと、最近物騒だし。もし、鮎美ちゃんに何かあったら、ご両親に申し訳ないわ。」

「ところで、鮎美ちゃん？」

「はい？」

「今日、真結花と接してみた感じ、率直にどう？」

「えっと、やっぱり、以前と雰囲気が随分違うつていうのは感じたんだけど……今の真結花もいいんじゃないのかなって。以前より少し大人しくなって、女の子らしくなったみたいだし。私は、そういう新たな面も真結花として受け入れることが出来たから」

「そう、それを聞いて、少し安心したわ。今の真結花って、以前の記憶が無いから仕方が無いことなんでしょうけど、病院で面会してから、私達家族に対して、どこか余所余所しいっていう感じが凄くしていたの。私達家族と一緒に居ると、なにか居心地が悪いような落ち着かないような感じかな？ でも、今日、鮎美ちゃんに会ってから、少しは打ち解けられたんじゃないかしら」

「ありがとうございます。お母さんにそう言ってもらうと、うれしいです。お見舞いに行った甲斐がありましたし」

「ただ、真結花のこと、まだ安心は出来ないの。これからも注意深く様子を見ないといけないと思うの」

「どうゆうことです？」

「うん。上手くは言えないんだけど、今の真結花って、以前と違って、もの凄く心が傷つき易くて、繊細な感じがするの。記憶が無いことに対して、自分を責めてる様子だし、悩み事もなにか内に秘めて、自分で背負い込んでしまうような。そう、ナイーブな男の子の

ような感じかな？　だから、余計に心配なの。考え過ぎなのかもしれないけど、表面上は何も無いように努めて明るく振舞っていても、心の中では、ネガティブな事ばかり考えたり、深刻な悩みを抱えて、自殺なんて考えてたりする可能性もあるわけ。最近、そうゆう子、多いみたいでしょ？　真結花に限って、そうゆう事は無いと思っていたんだけど、“うちの子に限って”、ていうのは、どの親も思うことよね？　だから、冷静に、客観的に真結花を見なきゃいけないって、今はそう思っているの」

「あつ！　その感じ、確かに。私も何かスゴク気になって、心に引っかかっていたの」

「そう。鮎美ちゃんにはこれから迷惑を掛けるかもしれないけど、学校でも真結花のこと、宜しくお願いするわね」

「はい」

#7:とまどい。(後書き)

この日の夕食後、真結花は家族と、鮎美とも、少しは打ち解けた様子でした。

真結花を暖かく見守る彼女達の存在は、今後、真結花をどう変えていくのでしょうか？

次回につづく。

## #8…ぶつておとこの「じゃないの？」

あれっ？　ここは、どこ？

昨日、アルバムの中で見た、少年のような格好の幼いまゆかと若いお父さんが、  
笑いながら、そして楽しそうに、何処かの公園でサッカーボールを蹴って遊んでいた。

「ねえー、パパ。わたし、どうしておとこのコじゃないの？」  
まゆかは、サッカーボールをつま先でもてあそびながら聞いた。

「うん。それは難しい質問だなあ。まゆかは、なぜそんな事を聞くんだい？」

『どうして男の子じゃないの？』か、どうしてかなあ？　さあ困ったなあー」

お父さんは右手を後頭部に当てて、本当に困ったような顔をした。

「わたし、おとこのコだったらよかったのになあー」

そう言って、まゆかは、ちよつとふくれた顔をしていた。

「なぜだい？まゆか」

「だって、わたし、おおきくなったらパパみたいになりたいの」

「そっかあー、まゆかもサッカー選手になりたいのかあー」

「うん」

「男の子じゃなくても…　その…女の子でもなれるさ」

「なれるの？」

先ほどとはまるで表情が違い、まゆかは、目をキラキラと輝かせている。

「そうだよ、人一倍頑張らなきゃいけないよ。でも、まゆかならきつと頑張れるし、なれるさ。」

だって、お父さんの子供だからね！」

「ほんと？」

「ほんとさ」

「じゃあ、ゆびきりげんまんして！」

「いいよ」

「ゆびきりげんまん、うそついたらはりせんぼんのおきます。ゆびきった！」

その直後、次第に視界が霧に包まれるかのように見えなくなっていくた。

これは夢？ それとも真結花の古い記憶なのだろうか？  
俺は、朦朧とした意識の中にいた。

ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ...

俺は、無意識のうちに、手探りで枕元の目覚しを切っていた。  
そして、再び眠りについてしまったようだった。

バタンツ！

「おねえちゃん、朝よー。もう起きて！」  
耳元で麻弥の声がした。

「うつ、うつん、もうちよつとだけ」  
朝が弱いのか？目覚めがひじょーに悪い。

「ダメっ！　今直ぐ起きないとお布団、剥いじゃうから！」  
バサッ。

容赦なく、勢いよく布団が剥がされてしまった。

「ったく、おねえちゃんはお寝坊さんなんだから！　ホント、麻弥が起こさないと毎日遅刻だよ？」

俺は眠い目を擦りながら、ようやく寝ぼけ眼で上半身を起こした。

「おねえちゃん、早く顔を洗って、目を覚まして来たら？」  
とにかく、さつさと準備しないと、今日から学校でしょ！　急がないと遅刻するよー！」

「うつ、うつん」

俺は姉なのに…　これじゃあ、まるで俺の方がダメダメな妹みたいじゃん。

はあー、朝からいきなり妹にギャンギャン言われる姉って…  
傍から見ると、これって、ホント、情けない図に見えるんだろうなあ。

洗面台で顔を洗って鏡を見ると、寝る前に髪的位置を全然気にしていなかったせいかな？

髪の毛がバサバサで、ご丁寧に寝ぐせまで付いていた。

正直、朝からひじょーにかったるい気分ではあったが、このままだと、余りにもみつともない。

仕方なく、しぶしぶブラッシングを始めた。

しかし、なかなか寝ぐせがなおらず、そのうちイライラし始めた。

まったく、この長い髪、うっとうしいったらありやしない。ホント、バツサリ切りた気分。

でも、髪切りたと言って言ったら、ものすごい剣幕で麻弥が怒ってたから、

それはムリだよなあ。さすがに。

確かに、この長くて綺麗な黒髪切るのは、もったいないって思うけど、

シャンプーにしろ、髪乾かすにしろ、とにかくケアが大変なんだよなあー。

今度は、こうやって、寝ぐせと格闘しているわけだし。ああ、もうーイラっとくる。

なんで、この寝ぐせ、なおらないわけ？

ああ、もうー、どうにかしてくれよー、時間が無いんだからさあ。

そう思っていたら、突然、麻弥が洗面所に現れ、

「もあー、おねえーちゃん！　いつまでもグズグズと、いつたいた、なにしてんのっ！」

「髪の毛の寝ぐせが取れないのっ！　もあー、麻弥は朝からギャンギヤ

ン、ウルサイっ！」

今日も朝から麻弥に主導権を握られていた俺は、ひじょーにキゲンが悪く、  
しかも、この寝ぐせでかなりイラっときてたため、逆ギレしてしまった。

「ったく、おねえちゃんは朝から世話が焼けるんだから、もうお。その櫛、貸してちょうだい！」

やけっぱちになってた俺は、麻弥に言われるがまま、無愛想に櫛を手渡した。

「そのまま、頭動かさないで、じっとしててよ、おねえちゃん」

麻弥は、洗面台に置いてあつた霧吹きで寝ぐせ部分を少し濡らし、ドライヤーを当てながら、  
櫛で髪を押さえて、寝ぐせを綺麗に伸ばしていった。

「これでよしっ！っと。どお？ おねえちゃん」

さっきまで、悪戦苦闘していた寝ぐせが、まるで、ウソのように綺麗になくなっていた。

スゴい、軽く感動していた。麻弥って、やっぱり、女の子だよな。

「うん、キレイになった。ありがとう。さっきはゴメンね、麻弥」

さっきは、つい、キレたりして、ホントごめん、麻弥。

麻弥はこんなにも優しいのに、俺って、自分の事しか考えてなくて、全然優しくくない。

麻弥の姉として、失格だよな。

「そんなの気にしなくていいの。朝の口喧嘩なんて、いつものことだからさあ。特に、おねえちゃんは今が苦手で、目覚めが悪い日なんて、すこぶるキゲンが悪いし。それより、おねえちゃんみたいに髪が長いと、寝ぐせが付きやすいから、寝るときは枕より上で髪をまとめておいた方がいいわよ」

ふうーん、そうなんだ。髪が長いと、色々と気を使わなくちゃいけないんだ？

朝はキゲンが悪いつて？ どうりでね。朝から、かつたるいつて思ってたし。

低血圧なのかな？

「そうなの？ 今晚からそうするわ」

「じゃあ、早く朝食を食べて、制服に着替えなきゃ！」

「うん」

俺は、ママの作ってくれた朝食を皆で食べた後、歯磨きを済ませ、クローゼットに掛けてあった紺色のブレザー、グレーのベストとグレーのチェック柄プリーツスカートの制服を取り出した。

「またスカートかあ」

ちよつと憂鬱な気分になる。スカートを腰に当ててみた。膝が隠れるぐらいの長さはあった。

「まっ、これぐらいの長さならまだましかな？」

ピンポン

「はぁーい」

『おはようございまーす。鮎美です。真結花を迎えに来ました』

ガチャ。

「鮎美ちゃん、ありがとうね。今日は、わざわざ家まで迎えに来てもらったりして。いつもはどこかで待ち合わせしてるんでしょ？」

「はい。でも、今日は特別なんで。あつ、Yuki！ おっはよっ！ 今日も元気？」

「まゆかー、鮎美ちゃんが迎えに来てくれたわよー」  
下からママの声が聞こえた。

「へっ？ もうそんな時間？」

俺は部屋の時計に目をやった。まだじゆうぶん時間あるじゃん。俺は部屋のドアを開け、下に向かって叫んだ。

「ちよっと待っててー。今から着替えるからー」

「もうおー、仕方ない子ねえ。今日は朝からグズグズしているんだから。ごめんなさいね、鮎美ちゃん。上がってリビングで待っててちょうだい」

「はい。じゃあ、おじゃましまーす」

こんなに鮎美ちゃんが早く来るとは思ってた。俺は慌てて着替え始めた。

三面鏡の前で、少し腰を屈めて服装をチェックしてみた。

「おかしな所、ないよね？」

俺は、毛先を触りながら鏡を見てると、

「あっ！ 髪、どうしよう？」

って、今頃気が付いた。

髪長いし、またバサバサになるのは嫌だし、結んだ方がいいよな。でもどうしよう？　ちゃんとした結び方、よく覚えていないみたいだし。

えーい。時間も無いし、このまま行っちゃえ！

どうせ誰も見ないし、他人の髪なんて気にしないよ。そう思っていたら、

トントン。

「おねえちゃん。ねえ、まだー？　鮎美ねえさんが待ってるよ！」

カチャ。

「うん、今、行こうとしてたところ」

「ねえ、おねえちゃん。その髪、そのままで行くつもりなの？」

麻弥が部屋に入ってきて来て、そう言った。

「うっ、うん。もう時間も無いし」

「別にそのままでも構わないけど、うっとうしくないの？　いつも結んでたし」

「うっとうしいかも」

「じゃあ、結んであげる」

「でも、時間がないよ」

「直ぐに終わるって。そこに座って」

そう言って、麻弥は、三面鏡の引き出しに沢山入っていた飾りのついた髪ゴムの一つを取り出し、

手早く俺の髪を後ろに束ね、髪ゴムで留めてくれた。

鏡の中の姿は、髪をアップにした為、ずいぶん印象が違って見えた。女の子って、髪型変えただけでも、何か違った自分に見えるんだ！へえー。なんか新鮮な感じ。

でも、こうやって、改めてこの娘の顔をマジマジ見つめると、やっぱり、美少女だよなぁー。

このヘアスタイルもカワイイ！

「これでよしと。じゃあ、途中まで一緒にいこつ！」

「うん」

そう言って、通学カバンを手にし、麻弥と俺は鮎美ちゃんの待つリビングに降りた。

「おはよう。鮎美ちゃん」

「おはよう。鮎美ねえさん」

「おはよう。真結花、麻弥ちゃん。じゃあ、二人共、一緒にガッコ、行きますか！」

「はい、鮎美ねえさん」

「うん。鮎美ちゃん、今日からガッコでもヨロシク！」

「わんつ！ わんつ！」

「あはつ、Yuki！ あんたもガッコ、行きたいの？」

「ふふつ、Yukiだったら、絶妙なタイミングのツッコミ！」

「うん。麻弥と同感。さつ、Yukiにかまってないで、行きましょ！」

「ちよつと、待った！」

「へっ？ どうしたの？ 鮎美ちゃん？」

「真結花、このスカートの丈、長くない？」

鮎美ちゃんが、俺のスカートの裾辺りを軽く指先でつまみながらそう言った。

「そつえば、そうだね。麻弥も気付かなかったよ」

「えっ？別に普通だけど」

でも、鮎美ちゃんのスカートをよく見ると、膝上になっていて、丈が短かった。

鮎美ちゃんわたしより、背も高くてスタイルがいいし、脚が長いから？

「なーんだ。スカート、腰で折ってないわけ？おねえちゃん」

そう言われて、麻弥のスカートにも目をやると、中学生の制服なのに、

スカートが膝上丈になってる。

「短くしないとダメなの？」

「そのままだと、ダサいわねえ。直してあげるよ。真結花」

「えっ？そんなのいいよ。別に」

すぐさま、身の危険を感じた俺は、通学カバンを両手でスカートの前に突き出して盾にし、

思わず後ずさって、鮎美ちゃんから離れた。

その鮎美ちゃんが、こっちに向かって一瞬ウィンクして来た。

いったい何???? 嫌な予感が頭を横切った。

「麻弥ちゃん！」

「はい！」

一瞬のアイコンタクトでの、見事な連携プレーだった。

麻弥は、俺が防御に使っていた通学カバンをあっという間に取り上げると、素早く背後に回り、

俺の両腕を掴んで背中を押さえた。

その隙に、今度は鮎美ちゃんが、あっという間に素早い動作で俺のスカート丈を短くしてしまった。

「これでよしっ！っと。うん、カワイクなった。じゃあ、行きますか！」

俺は余りの一瞬の出来事に啞然としてしまい、文句を言う暇すらなかった。

「おねえちゃん？ なにボットしてんの？ はやくうゝ。ガッコ、いこー！」

「うつ、うん」

「真結花、麻弥、ちよと待つてー。忘れ物よー」

慌てて両手に包みを持ったママが玄關まで来て、今まさに、ドアを開けて家を出ようとしていた俺と麻弥を引きとめた。

「もぉー、おねえちゃんのせいで、今日は朝からバタバタしてたから、危うくお弁当忘れるとこだったよぉ」

「ごめーん」

「はい、お弁当。明日からは忘れないでね」

そう言つて、ママが二人にお弁当を渡してくれた。

「あんた達、力関係がまるで逆よねえゝ。はたから見えて、面白いわ」

自覚はしているが、鮎美ちゃんにもそう思われてしまった。

これは、何とかして姉としての威厳を挽回せねば。

このままじゃあ、いつまで経つても、麻弥に頭が上がらないままだし。

でも、女歴では麻弥に全く敵わないからなあゝ。ホント、先が思いやられるよ。

「鮎美ちゃん、学校でも真結花を頼むわね」

「はい。じゃあ、行つてきまーす」

「行つてきまーす、ママ」

「行ってくるね」

「はいっ、みんな、行っでらっしゃい！」

「わんっ！ わんっ！」

こうして、前途多難な、女の子としての、俺の学校生活の一日目が始まるのであった。

## #8:どうしておとこの「じゃないの?」(後書き)

女の子として、初めて学校へ行くことになった真結花。  
家では相変わらず、ダメ姉っぷりを発揮していましたが、  
果たして、この調子で、学校でも上手くやっていけるのでしょうか?

次回につづく。

#9：イザっ！学校へ。（前篇）（前書き）

今日から学校へ行くことになった真結花。

さて、クラスメイト達は、今の真結花を快く受け入れてくれるのでしょうか？

## #9：イザっ！学校へ。（前篇）

通学途中で方向の違う麻弥と別れ、学校の最寄りの駅を降りて、今は鮎美ちゃんと二人つきりだ。

ああ、緊張した。今は、ホッと一息って感じ。

今までは、病院関係者、家族、鮎美ちゃんという極限られた人しか接することがなかったわけで、

電車という不特定多数の人達の前で、俺がこの姿をさらすことは、今回が初めてのことだし、

俺が、女の子として気を抜いたところ、誰が、いつ、見てるかもしれないし、

常に、女の子らしく行動しなきゃって、意識が頭にあって、スゴク緊張してた。

でも、自分ではちゃんと、女の子らしく、気を付けて振舞ってたはずなのに、気のせいなのか？

それとも、自意識過剰なのか？ 電車の中では、スッゴく、周りからジロジロ見られてたような、

そんな視線を感じられずにはいらなかったんだけど。

「ねえ？ 鮎美ちゃん？ わたし、電車の中でなんかスッゴく、周リからジロジロ見られていたような気がしたんだけど、服装とか、どこかおかしい所でもあった？」

「んっ？ そんなの、いつものことよ。だって、美少女な女子高生が二人、並んで座っているんだから、健全な男性諸君が見ないわけないでしょ？ でも、そういうば、今日はいつもより痛い程視線を感じたわねえ。真結花の可愛さがグレードアップしたからかな？」

ああ、そういうことでございますか。

にしても、美少女って、堂々と自分で言っちゃいますか？ 鮎美ち

やん？

まあ、鮎美ちゃんはチャームキングでスッゴクカワイイし、否定する気は毛頭ありませんけど。

ハッキリ言ってタイプかも。あつ、でも、あくまで男の子視点でね。しっかし、この娘の可愛さがグレードアップって、どうゆうこと？  
外見的には、何も変わってないはずだけど…

「そうゆうこと？」

「ふうーん、あの真結花がねえ。真結花もようやく異性の視線を気にするお年頃になったんだあ。だからあ、男性諸君をたぶらかす純情フェロモンみたいなもの、真結花から出てるわけねえ」

「べつ、別にそうゆうわけじゃないけど。ところで、なによ、その純情フェロモンってさあ」

「あつ、もしかして、電車の中で好みのタイプが居たとか？」

俺の質問はムシですかあー。鮎美ちゃん？

「ないない、そうゆうのはないから」

「あつ、そう。それは残念。真結花にも愛しの人が居たのよねえ」

「えっ？」

「まっ、それは、気にしなくてもいいから。もう少ししたら、学校が見えてくるわ」

そっぴや、駅を降りてから、学校に向かう生徒が徐々に増えてるよ。

「うう、緊張する」

「大丈夫よ、事前に根回しはしておいたから」

「根回して？」

「真結花の事、クラスメイトの皆には伝えてあるってことよ」

「ホント、鮎美ちゃんが同じクラスでよかった」  
「まっ、これからも色々フォローはするって！」  
鮎美ちゃんは軽く俺の肩を叩いて言った。

ようやく正門が見えてきた。

正門には“城鳴学園高等学校”の名前があった。

“じょうめいがくえんこうとうがっこう”？やはり覚えはなかった。  
でも、どこことなく、初めて来る気はしないような？

いよいよ、教室に突入だ。緊張が一気に高まる。

俺は、鮎美ちゃんの後ろにコソコソと隠れ、  
できるだけ目立たないように、少し屈んだ姿勢で教室に入った。

「おはよう！」

「おはようございまゝす」

やっぱり、見つかるよね。ふつーに。

「おはよっ！木下さん」

「おはようございまゝす」

今更ながら、コソコソしてた自分が恥ずかしい。

「よっ、おはようさん」

「おはようございまゝす」

ん？ な〜んだ？ みんな、全然普通の反応じゃん。緊張して損  
した。

「まゆまゆー！ おはよーっ！」

その声が背後で聞こえた瞬間、ぎゅっと後ろから誰かが抱き付き、背中に女の子の胸の感触がした。

「へ？ おっ、おはよ？？？」

俺は少し戸惑いながら、振り返った。

一見、まだ高校生には見えない童顔で、ショートボブ頭の可愛らしい感じの、

俺と背がさほど変わらない、ちよとぽちゃとした女の子が、俺の背後から抱きついていた。

はっ？ この子は確かゆずきあんな柚木杏菜ちゃん？

「ちよっと、杏菜！ そうやって真結花にいきなり抱きつかないの！」

鮎美ちゃんが、俺に抱きついていた杏菜ちゃんを引き剥がしてくれた。

「だってえー、まゆまゆのこと、スツゴク心配してたんだもん」

「真結花が困ったって顔、してるでしょ！」

「やっぱあー、杏菜のことも覚えてないの？ まゆまゆ」

「うん。ゴメンね、杏菜ちゃん」

「ふえーん、杏菜、シヨック！」

「杏菜！」

「イタタタっ、あゆあゆーう、何すんのあ？」

鮎美ちゃんが、いきなり杏菜ちゃんのふっくらとした、柔らかなほっぺを抓った。

「あんたの、この軽ーいお口が悪いからでしょ。もうちよっと、気を使いなさいよ！」

「あゆあゆ、ゴメン、ゴメンってば！」

「ったくもおー、朝から騒がせてゴメンね。真結花」

俺は目の前で展開する光景を、ただ、ぽかーんと眺めていた。

「こつゆつの、もう慣れたてきたから、気にしないで」

ママと、鮎美ちゃんにもいきなり抱きつかれちゃったし、同性に抱きつかれることにはもう慣れちゃったかな。

いや、でも、心の中では異性なのかな？

でも、よく考えたら、麻弥にはまだ抱きつかれてないよ。

ってか、妹に抱きつかれたい願望があるわけ？ 俺って。それってヤバくない？

キケンな香りがぷんぷんする世界なんですけど…

「ほらっ、杏菜。真結花にも謝んなよ」

「ゴメン、まゆまゆ、今度から気を付けるね」

「うん。気にしてないから」

「ありがとー。これからもお友達よね？」

「うん、もちろん」

俺は、鮎美ちゃんがそこって指をさした席に着いた。

視線を前に移すと、一番前の席に座っていた、艶やかなセミロングの黒髪の女の子の後ろ姿に、一瞬目を奪われた。

凄く綺麗な髪してるなあーって思っていたら、その子が振り返って俺を見ると立ち上がり、

こつちに近付いて来た。

あっ！ もしかして、この子が水瀬智絵ちゃん？ 写真より美人！

「まゆかちゃん、おはよう。もう大丈夫なのね？」

「おはよう。体の方はもう大丈夫だよ」

全身から漂うオーラというか、雰囲気さえらい上品な子だね。どこぞのお嬢様？

「学校生活で何か困ったことがあったら、私にいつでも言ってね。

私、まゆかちゃんの力になりたいの。学級委員だから、クラスの中で何か問題が出たら、先生にも相談するわ」

「ありがとう。智絵ちゃん」

「クラスの子の顔と名前、ちゃんと覚えてきたのね？」

「うん。その方が、以前と同じようにコミュニケーションがスムーズになるでしょ？」

「ふふっ、そうね。いいことよ」

彼女が一瞬見せた笑顔は、同性の立場である俺からしても非常に眩しく、思わずドキっとした。

男の子なら、この笑顔でイチコロって感じ？

「よっ！木下っ、おはよう。もう大丈夫なのか？」

そう言っつて、男の子の誰かが、俺の背後から肩をちょこんっと軽く叩いてきた。

「へっ？ おっ、おはようございまあゝす？」

俺は一瞬驚き、後ろを振り向きながら挨拶を返した。

そこには、大柄で、ガタイのいい、スポーツ刈り頭の、いかにも三枚目的イメージのある、

“僕は、スポーツマンでーすっ”って自己主張する感じの男の子が立っていた。

ああ、この子が友田優ともだゆういちくん？　鮎美ちゃんが思わせぶりな事、言ってたけど。

設定上、この娘の彼氏なのかな？　でも、直観的に違うと思うんだけど…

ただの、仲の良い男友達なのかなあ。

ふつー、ホントに好きな人だったらさあー、こう、見た瞬間にぴーんっ！と来ない？

「へっ？　なんか妙に調子狂う反応だなあー、いったい、どうしたつてえの？　木下？」

「ちよつと、ちよつとおー」

そう言いながら俺の斜め後ろの席にいた鮎美ちゃんが突然立ち上がり、素早く友田くんの腕をガシッと掴んだまま、慌てた様子で教室を出て行った。

「おいっ、結城、急になんだよ？」

「あんた、知らないわけ？　真結花が記憶喪失だったこと。ちよつとは、気を使つてよ。ったくガサツなんだら」

「へっ？　記憶喪失？」

「もうおー、連絡来てないわけ？　PTAや友達同士のネットワークではばクラス全員にメールや電話で連絡行ってるはずだけど？」

「あつ、そういうば、昨日、喜多村から何かメール来てたような気が…」

どうせ、大した用事のメールじゃないだろうと思って、後で読もうとして忘れてた」

「あんたのことだから、どうせ、そんなことだろうと思ったわ」

「ごめん、ごめん、事故に遭ったのは聞いてたけど、いつもの調子で挨拶しちゃった」

「ところで、当然のことながら、真結花はあんたの事、何も覚えていないらしいわよ」

「えっ？マジで」

「うん。そのマジです」

「なんで？」

「なんで？つて、だいたい、私の事さえ覚えてないのに、あんたなんて覚えていないはずがないでしょうが！」

「ひっ、酷い言いようだね」

「そりゃあ、私は真結花とは幼馴染だもん。一カ月そこそこの付き合いのあんたとは年季が違っわよ！」

なあ、朝から俺にヤツ当たりかよ。結城。

そりゃあ、親友に自分の記憶が無いっていうのは、かわいそうだし、同情もする。

悲しい気持ちもわかるけどさあ。

俺だって、今知って、スゴくショックで、悲しいんだから。

「じゃあ、俺は、これからどうゆう風に木下と接すればいいんだ？」

「そうねえー。今までの事は一切無かったっていうことで全て水に流して、一から新しいお友達として始めてみたらどう？」

「そんなあー。今までいい感じだったのにー。今まで築き上げたものは全てチャラってこと？」

「いい感じって、あんた、もう彼氏候補な気分なわけ？ビビって、まだ告つてもないくせに！」

「うっ、それを言われると痛い」

しかし、今日の結城つて、キゲンがすこぶる悪い。

つてか、なんかこう、木下のことで、すげえーピリピリしてるし。

記憶喪失以外にも、何かあったのか？ 木下に？ スゴく気になるんだけど。

「だいたい、真結花はあんたの事、異性としては見てなかったわ。サッカー通のただのお友達程度ぐらいにしか思ってたわよ！あんたもサッカーやってるし、サッカーで話が合うからねえ」

「そつ、そうだったの？」

「そうよ、何？ 今頃気づいたわけ？」

うつわあーっ、すつげえーよ、今日の結城って、ホント、半端ない。容赦ないって感じ。

なあ結城、いつたい、どうしちゃったっていうわけ？ 今日は、虫の居所が悪そうだな。

「でっ、でもー。木下って、他の男の子と違って、明らかに俺だけにはいつも、天使のようなキラキラな笑顔向けてくれていたよ？」

「バツカねえー。真結花はサッカーが大好きだら、サッカーの話で目をキラキラさせていたのよ」

「てつきり、俺に気があるものばかりだと…」

「んなわけないじゃん」

えっ、そうなのか？ そんなあー。それって、かなりショック！

「本人に聞いたの？」

でも、食い下がってみる。

「んなもん、聞かなくても分かるって！」

「なんでさあー」

まだだっ！ まだ、終わったわけじゃない！

「だって、真結花って、サッカーが恋人で、まだ恋愛の“れ”の字

も知らないおこちゃまだもの」

「そうなのか？」

「そうよ。私の知る限り」

「がくっ」

なーんだ、そうなのかぁー。嫌われてるわけじゃないんだし、じゃあ、まだこれからチャンスはあるじゃん。

「ちゅん。ご愁傷さま、友田くん」

ふっふーんだ！ 人の恋路を勝手に終わらせるなっていうの！ 結城！

まだ、終わってないぞ！ 終わってたまるか！ 復活っ！

#9：イザっ！学校へ。（前篇）（後書き）

鮎美ちゃんが思わせぶりに言ってた友田くん。

どうやら、彼は真結花の彼氏ではなく、ただの男友達だったようですね。

さて、彼の復活劇はあるのでしょうか？

次回につづく。

#10：イザっ！学校へ。（後篇）（前書き）

密かに、真結花に想いを寄せていた友田くん。  
彼の目の前に立ち塞がるものとは…

## #10：イザっ！学校へ。（後篇）

キン／＼コン／＼カン／＼コーン

ガラッ。

「は／＼い。座った、座った！」

手を叩きながら、20代後半ぐらいの男性の担任教師、吉澤先生が入って来た。

体育教師でいかにも体育会系の熱血教師って感じ。

「起立、礼、着席」

凜とした綺麗な声が教室に響く。

号令を掛けたのは、先ほど話けてくれた智絵ちゃんだ。

「さてと、ホームルームだが、連絡事項をまず一つ。

テレビニュース等で既に知っているとと思うが、最近、この地域の周りで通り魔事件があった。

この地域ではそういった事件は起こってはいないが、

放課後、特に学校に用事の無い者は直ぐに帰宅するように。

それと、部活で遅くなる者は、街灯の少ない道や人通りの少ない道を避けて帰宅するように」

「二つ目、明日は健康診断があるから、体操服や眼鏡を忘れないように」

なに？ 明日が健康診断なの？ そんなの聞いてないよ。ってか、

記憶にないのか。

「三つ目、来月後半には中間審査があるぞ！ 日頃からちゃんと勉強しておけよ」

えっ！と思った瞬間、みんなの声からも一斉に”ええっー！”と不満げな声が上がった。

「最後に、既に知っていると思うが、木下のことだが、事故に遭って記憶の一部を失ったということだ。そういったハンを今抱えているが、今までと変わらず接してやって欲しい。このことで、虐めるようなヤツがいたら、この俺が許さん。見つけたら、罰として放課後にグラウンドを何十周もさせてやるからな！覚悟しておけよ」

先生、何もそこまで言わなくても… さすが熱血先生？

「先生！」

「んっ？ どうした？ 水瀬」

智絵ちゃん？ 何んだろっ？

「学級委員として、クラスを代表して言わせて頂きます。このクラスに他人を虐めるような、そんな人は居ないと私は信じていますし、そういった人がこのクラスから出ないことを心から祈りたいです」

さすが、智絵ちゃん。学級委員って感じ。

「おお、そうだな。水瀬の言う通りだ！ 俺もお前達を信じているからな！ ホームルームは以上だ！」

ああ、なんだか、クラスのみんなの注目を浴びてしまったって感じ。

学校では、出来るだけ目立たないようにしようって、思ってたのにい。

これじゃあ、まるで逆効果じゃん。

あつ！ なーんか、ジロジロ見てるよ、みんな、俺のこと。

もうおー、この調子じゃあ、学校でも益々気が抜けないよあ。

ただでさえ、女の子らしくしなきゃって、テンぱってるのにい。

授業の合間の休み時間、トイレから教室に戻ろうとしたら、

「ねえ、なにムシしてるわけ？」

廊下ですれ違いざま、知らない女の子に絡まれちゃった。それも、ちよつと不良っぽい子に。

このままムシして素通りしたら、タダでは済みそうにない雰囲気だ。もしかして、タカリ？ ああ、初日そうそうツイてないね、俺って。

朝から電車やクラスで注目を浴びるわ、不良には絡まれるわ、まあ、超サイアク！

神様のイジワルうゝ。

「えっ？ ごめんなさい。わたし、あなたに何か気にさわる事でもした？」

この容姿、自分で言うのもなんだが、いかにも、か弱そうな女の子だもんな？

不良に絡まれても仕方ないけどさあ。

神様あゝ。もし、居るなら、ここはどうか、何事も無く、穏便にお願い！

「なあーに白々しい事、言ってるわけ？ あなたの、私への仕打ち、覚えてないわけ？」

えっ？ タカリじゃないの？ もしかして、知り合い？

「ごめんなさい。わたし、事故に遭って、以前の記憶が無くて、あなたのこと、思い出せないの」

「ああーそう。そんなバレバレな大ウソまで言って、私を避けるわけだ？」

うわっ、マズかった？ ホンキで怒らせちゃった？

「ホントなんです。信じてください！」

「もういい！ あなたがそのつもりなら、こっちにも考えがあるから！」

そう言ってふいっと、彼女は顔を背けて立ち去っていった。

うっ、わああー、どうしよう？ めっちゃ怒ってたよ、さっきの子。

事故以前に、あの子に何か悪いことでもしたんだろうか？

しかし、いったい、誰なんだろう？

他のクラスの子だよね？ 鮎美ちゃんの作ってくれた“まゆか相関図”の写真には居なかった子だし。

そうだ、次の休み時間にでも、鮎美ちゃんに聞いてみよう。

「ねえ、鮎美ちゃん？」

「なに？ 真結花」

「あのさあー、さっきの休み時間に廊下で知らない女の子から声を掛けられたんだけど、わたしがその子のこと覚えてないって言ったら、その子を怒らせちゃったみたいなの。どうしよう？」

「その子の名前、聞かなかったの？ 真結花」

「ごめん。その子、かなり怒ってたから、怖くて聞けなかったの」

「その子、どうゆう感じの子？」

「えっと、明るい茶髪のロングヘアーで、スラッとしてて、背は鮎美ちゃんより少し低かったかな？ ちよっと、不良っぽい感じの、気の強そうな女の子だったよ」

「うーん、それだけじゃあ、ぴーんと来ないわねえ。真結花の中学ときのクラスメイトかなあ？ ごめん、私、中学んとき、真結花とは結局、一度も同じクラスになれなかったのよねえ。今は同じクラスで嬉しんだけど。だから、私にはわからないなあ。でも、顔はハッキリと覚えてるんでしょ？」

「うん」

「じゃあさあ、家に帰ってから中学生のアルバム探してみたらいいじゃん」

「そうだね。ありがとう、鮎美ちゃん」

「真結花、その子の名前がわかったらさあ、私にも教えてよ」

「どうするの？」

「一緒にその子に謝りに行こうよ。ちゃんと事情を説明したら、わかってくれるはずよ」

「うん、ありがとう」

鮎美ちゃんって、やっぱり優しいよなあ。なんか、お姉さんみたいで、頼りになるし。

益々好きになっちゃいそう。もちろん、女友達としてね。

キン〜コン〜カン〜コーン

朝から色々であったわけだけど、午前中の授業はとりあえず、無事に終了した。

1時間目の授業は、いきなり数学だった。

数学というと、一瞬、不安を感じてしまったけど、授業内容には何とか付いていけたようだ。

その後の授業も心配していた程でもなく、俺の思考回路については、何も問題が無さそうだった。

「ふう〜」

俺は、軽く溜息を吐きながら、組んだ手を上に高く上げ、思いっきり背筋を伸ばした。

ここまでの授業では、何とか付いていけたので、ホッとしていた。正直なところ、今までこの娘が学校で勉強して、蓄積されていた知識も、

この脳の記憶から、すっぱりと消えていたらどうしよう！って、不安に思っていたからだ。

「さてと、空腹を満たしに行きますか？ 真結花」

鮎美ちゃんが、後ろから俺の左肩に手を置いて言ってきた。

「えっ？ 鮎美ちゃんはお弁当じゃないの？」

「うん、うちのところは両親共働きでさあー、忙しくてお弁当作ってくれる暇もないみたい。両親共働きでもお弁当作ってくれる子もいるのにさ。私は、いつも学食の日替わりランチだから」

「そう」

そういえば、ママは専業主婦なのだろうか？

容姿もキレイだし、身なりもオシャレだし、とても専業主婦っていうイメージじゃないよ？

「昼食に行こうよ。まゆかちゃん」

お弁当の包みを手に持った智絵ちゃんも声を掛けてきた。

「まゆまゆうー。お昼、いこっ！」

杏菜ちゃんもやってきた。こっちは手ぶらみたいだ。

今頃気付いたんだけど、その“まゆまゆ”ってあだ名？ この子が付けたんだ。

しっかし、みんな個性のある友達だよなあ。

一見すると、このグループには何の共通点も無さそうだけど…

もしかして、唯一の共通点は、この俺ってことなのか？

そんなに人望が厚かったのかなあ？ 以前の真結花は？

でも、それって困るよなあー。

俺って、リーダー的なタイプじゃないし、

どちらかというと、皆に付いて行って、流されやすいタイプ？

やっぱ、鮎美ちゃんでしょ？ このメンバーの中でリーダー的存在って。

「なあ、友田」

「んっ？ 何だ？ 喜多村」

「木下さんって、なんか雰囲気変わったと思わないか？」

「うん、そうだな」

「今までと違って、妙にしおらしいというか、物腰がスッゴク女の

子しているというか、ちょっと気になって」

「あつ！ ダメだからな！」

「何が？」

「木下に惚れるなってこと！」

「何で？」

「何でって、俺が木下に惚れているからに決まってんじゃん！」

「じゃあ、恋敵出現ライバルってことか？」

「なっ、なにっ！」

「おっ、ちよつとからかってみただけなのに、こりゃ、どうやらマジのようだねえ」

「あつたりまえよ！ マジもマジ、大マジよ！」

「でも、片思い中なんだろ？」

「おう、それがどうしたってえの？」

「じゃあ、イコールコンディションってことだな」

「なぬ？ どういう意味だ、喜多村よ」

「僕にも少なからず、チャンスがあるってことさ」

「こりゃあ、まいったなあ」

うつつ、正直、コイツには敵わない。

背も結構高いし、爽やかなイケメンだし、

一年でまだ入部したばかりのサッカー部では存在感十分で、もうレギュラー候補だし。

おまけに、コイツ、頭も良いみたいだし。

なあ、たっ、頼むから他の子にしてくれない？ 喜多村。

お前、ほっとしても女の子にモテるだろ？

「いや、僕だけじゃあないと思うけどなあ。今日の木下さんを見て、胸キュンしたヤツは多いみたいだし。事故にあつたせいかな？ 少し影があるような、儂いような、こう何か男心をくすぐるような、この子を守ってあげたい！ そうゆう雰囲気の木下さんの全身から

出ているからさあ」

「やつぱ、お前も、そうゆうの、感じていたのか？ こりゃホントにまいったなあ」

「そうさ、恋敵はこれかも増えるかもな」

「早いとこ、こつちから先制攻撃しないと、ヤバいつてことか？」

「いや、今はまだ、暫く様子を見てさあ、動かない方がいいかもな」  
「なんでだ！」

「うーん、ちよっと、守りが堅そうだからね」

「それって、結城鮎美のことか？」

「そうそう。そういや、友田って、“先制攻撃”なんて言っておいてさあー、それ以前にカウンター攻撃食らったんじゃないの？ 彼女にさあ。今朝、友田が木下さんに声掛けて、彼女に教室から引っ張り出されたところ、見てたぞお」

「うつ、くつ、見てたの？ お察しの通りで」

「やつぱりねえ。まず、彼女の堅あーいディフェンスを何とかして突破しないと、アタックのチャンスさえ伺えないし、まして、先制ゴールなんて、ほど遠いかもね」

「恋の矢は、サッカーのゴールのようにには決まりませんってことか？」

「そうゆうことだね」

「ああ、この切ない気持ち。いったい、どうしたらいいんだよー」

「まあ、まあ、そう嘆きなさんなつて。こつゆうのは、焦っちゃあいけない」

「ちえつ、お前はいいよなあ。モテるからさあ」

「そんなことないって」

#10：イザっ！学校へ。（後篇）（後書き）

知らないうちに、クラスメイトの男の子達に好意を持たれた様子の真結花。

何も知らない真結花の運命はいかに…

次回につづく。

## #10・5：届かないキモチ。

ああ、真結花様あー。もぉー、何で私をそうムシするわけ？

今日こそはと思つて、つい、ああ言つちやたけどさあー、あんな事があつたから、まだ許してもらえないのかなあ。

でも、そうゆう冷たい真結花様も好きっ。私ってMなのかなあ？冷たくされても、まだ、好きなのよね。諦められないのよ。

そう、あれは、入学式の時だったわ。

体育館前に貼り出されたクラス分けを見ようとした時、初めて真結花様に出会つたのよね。

「うん。男の子が多くて、よく見えないなあ」

ドン！

「イツタあーい」

「ねえ、あなた、大丈夫？」

「うん、ありがとう」

そう言つて彼女は、尻もちをついた私に手を差し伸べてくれたんだっけ。

これが、真結花様との運命の出会いだったのよ。

「ちょっと、その君！ 女の子にぶつかつておいてムシすんの？」

「そりゃ悪かつたな。ワザとじゃない」

「そんなの、わかつてる。まず、謝るべきじゃないの？」

「ああ？ だから、謝ってるだろ？」

「女の子は男の子と違って、デリケートなんだから、今度から氣をつけてよ！」

「つたく、ちつちえくせして、うぜえ女」

「なによっー！ だれがちつさいって？ 失礼じゃない。謝りなさいよ！」

「ちえっ、聞こえてたのかよ。ああ、俺が悪かったよ。これでいいんだろ？ じゃあな」

「つたく、何よ！あの子。最近の男の子って、ああゆう子が多いのかなあ？」

「ありがとう。私、早坂友美茄はやさかゆみなっていうの。あなたは？」

「わたし、木下真結花。あつ、せつかくのおニユーの制服、お尻、汚れちゃったね」

そう言つて、彼女はハンカチを取り出して、やさしく拭いてくれたんだよね。

「あつ、そんなの、自分でやるのにい」

「だって、せつかくの入学式なのに、お尻、汚れたままじゃあ、笑われちゃうよ」

そう、この時よ。ずっとキューンって来たのよ！

まさに、ハートを打ち抜かれたって感じ？

彼女、一見、か弱な感じで、大人しそうに見えるんだけど、堂々としてて、やさしくて、

スツゴく芯が強そうな感じ。

その可愛らしい顔からは、とても想像できない、その男の子っぽい性格とのギャップに萌えたの！

「真結花さんは、何組なの？」

「わたしは、B組。あなたは？」

「えっと、あつ、あつた。残念、あなたと同じクラスじゃないみたい」

「そう。これも何かの縁だし、まっ、クラスが違ってても、気軽に声掛けてよ」

「うん、ありがとう。またね」

「じゃあね」

あの後、私の中で次第に彼女への想いが募っていったわ。

毎日、彼女の顔が忘れられなかったの。

そして、出会ってから数日経った放課後、思いきって手紙で呼び出したのよね。

「あなたは、確か、入学式の時の早坂さん？」

「覚えてくれてたんだ？ うれしいな」

「でっ、今日はどうしたの？ こんな所にわたしを呼び出したりして」

「うん、実は、こんな事言ってもいいのかな？ 真結花さんに」

「どうしたの？ 何か悩み事？ 言って」

「絶対、私の事、嫌わないうって約束してくれる？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、言うね」

「うん」

「実は、私… 真結花さんこと… 好きなの！」

「えっ？ なに？ それって、友達になりたいってこと？ それなら、別にかまわないよ？」

「だから、友達としてじゃなくて、恋人として付き合ってくれないかな？」

「ええーっ！ それって、どうゆう意味？」

「どういう意味って、そのままの意味よ。女の子が女の子を好きになっっちゃあ、ダメなの？」

「ごめん。わたし、そっちの気は全然ないの。早坂さんのわたしへの好意は純粹だし、素直に嬉しいけど、その想いは受けられないわ」

「どうしてもダメなの？ 真結花さん」

「ごめんなさい、早坂さん。わたし、普通のお友達としてなら……」

「そんなのダメ！ 私、耐えられないもの！」

「早坂さん、泣いてるの？」

「ごっ、ごめんなさい、私、真結花さんに迷惑掛けるつもりはないわ」

「あっ、まってー、早坂さーん」

そう、その後、学校で真結花様とすれ違っても、気まずいのか？  
ムシされて続けて、暫く立ち直れなかったわ。

でも、今日、思い切って真結花様に声掛けたら、私って、ひねくれてるから、

ああゆう結果になっちゃったのよねえ。

やっぱ、以前にあんな事言っちゃったから、まだ嫌われてる？

許してくれないよね？

でもいつか、きっと許してくれるって、私は信じてる。

報われない恋って、わかってるけど、私は密かに想っているわ。

もう贅沢は言わない。普通の友達でもいいの。

#10・5：届かないキモチ。（後書き）

えっ？ 過去に、こんな出来事があったんですね？  
それにしても彼女、これからどうするつもりなんですかね？

次回につづく。

#11：なかまたち。（前書き）

学校で、急に友達が増えた真結花。  
真結花は、彼女達と上手く付き合っていけるのでしょうか？

## #11：なかまたち。

午前中の授業を終え、鮎美ちゃん、智絵ちゃん、杏菜ちゃんと俺の4人は、学食に向かっていた。

学食に着くと、結構込んでいたが、幸い、4人分の席が端の方に見つかった。

「前から気になってたんだけど、智絵ってさあー、もしかして、毎日自分で作ってんの？ そのお弁当」

鮎美ちゃんが、日替わりランチの箸を止めて聞いた。

「うん、そうよ」

智絵ちゃんは、さも涼しげな顔して答える。

「スッゴイ、杏菜は料理全然ダメ、料理デキル子って憧れちゃう」

「真結花は、いつもお母さんの愛情弁当だもんね。羨ましいわねえ」

「杏菜ちゃんって、見かけによらず、よく食べるのね」

俺は、杏菜ちゃんの目の前に置かれている“カレーライス”と“うどん”を見ながら、その食欲に、ついそう言いたくなってしまった。

「そうそう、杏菜って、そんだけ食べて、よく太らないわね。羨ましいわねえ。いったい、どうゆう胃袋してんのよ？ あんたは」

さつきから気になるんだけど、鮎美ちゃんが、“羨ましいわねえ”を連発してるよね。

まっ、どうでもいいことだけど。

「まるで、どこかの大吃いギャルタレントさんみたいね、杏菜ちゃんって」

智絵ちゃんも、半分飽きた風な表情だ。

「ひつどーい。杏菜って、あんなにぼっちゃりしてないもん、食べ

ざかりなだけだもん」

うん、確かに、杏菜ちゃんって、ちょっとだけばちゃっとしてい  
るけど、

太っているって感じじゃなくて、それが逆に女の子の魅力を引き立  
てていて、可愛らしいっていうか。

「わかった！ 杏菜って、食べた分のエネルギー、全部その胸で吸  
収して蓄えてんでしょ！」

鮎美ちゃんが、杏菜ちゃんの大きな胸を指さしている。

「ぷっ。あははっ」

俺は、思わず笑ってしまった。

「もぉー、ヤダーっ、あゆったら、人が食べているときにそんな面  
白いこと、突然言わないでよぉー」

智絵ちゃんもツボにハマったらしく、思わず吹き出しそうになっ  
たのをこらえて抗議した。

「そうそう、あゆあゆの言う通り。ナニ？ 知らなかったワケ？

ふふんっ。実は、杏菜の胸には重大なヒミツが隠されているのダっ。  
カイセツしようお。杏菜の胸は、ラクダさんのこぶと同じくみな  
んだぞぉー。食べ物脂肪にヘンカンし、この胸に、エネルギーと  
して蓄えているのダぁー。だからあ、杏菜は太んないの！」

「あははっ」

杏菜ちゃんのサービス精神旺盛な、そのおどけた喋り方に、俺は  
また笑ってしまった。

「そういえばさぁー、明日って、健康診断よね。そこで、面白い事  
思いついたんだけど」

鮎美ちゃんが、何やら企んでいる。

「ねえ、なに？ その面白い事って？」

すかさず、智絵ちゃんが、食い付いた。

「バストサイズから体重を引いた数値の一番少ない人と、二番目に少ない人が、残りの二人にさあ、駅前のスイーツで好きな物をおごるってゲームはどう？」

「なにそれ？ その罰ゲーム、いったい、どう意味があるわけ？」

思わず俺は、聞いてしまった。

「わかったわ！ つまり、その数値で、プロポーションの善し悪しを争うってわけね！」

さすが、頭の切れる智絵ちゃん。

「それって、ズルくない？ 杏菜には不利なような気がするぞぉ」  
「そんなことはないと思うけど。バストと体重の差が大きな人が有利で、バストと体重の差が小さな人が不利っていうゲームだから、誰が有利で誰が不利なのかは、やってみないとわからないと思うわよ」

確かに、鮎美ちゃんの言う通りかも。

「まあ、明日、どうゆう結果が出るのか楽しみにしましょうよ」

智絵ちゃんって、学級委員なんてやってるし、見た目の印象からスゴく生真面目な子なのかと勝手に思ってた。こういった、おふざけにも乗ってくるし、イメージ違うんだ？

「ところでさあ、先週放送の『うちしゅん』のドラマって見た？」

杏菜ちゃんが、急に話題を変えてきた。

「ねえ、その『うちしゅん』って、なに？」

智絵ちゃんが聞く。

「えっ？ とともって、『内田駿次』っていう期待のイケメン新人俳優を知らないわけですか？」

「私、そのドラマ知ってるけど、その時間って、テニスの試合見た」

鮎美ちゃんは、いかにも興味なさげな感じで、そう答えた。

「まゆまゆは知ってる？」

杏菜ちゃんが、こっちに振ってきた。

「ごめん、そのドラマ以前に、わたしの記憶がなかったりして…」  
俺は、そう答えるしかなかった。だって、記憶が無いんだもん。

「あつ！ また、やつちった。杏菜って、ほんとダメっ子ね」

自分で自分にダメ出しする杏菜ちゃん。あんた、ホントに面白いよ。

「杏菜ちゃん、気にしなくていいよ。そのドラマの話、聞かせてよ」  
「うん、システムエンジニア役で、眼鏡をかけた華奢な印象の『うちしゅん』がさあー。駅で、めまいで倒れそうになった女性を、体を張って助けて、恋に落ちるシーンがあっただんだあー。そのシーンが、また凄くカッコ良くてさあー、後で録画したやつを、何度も再生して見ちゃった」

システムエンジニア？ 駅？ 女性を助ける？

俺の頭の中で、それらのキーワードが直ぐに引っかけた。  
まさか？ そんな事があるのか？ そう思いつつ、恐る恐る聞いてみた。

「その『うちしゅん』の役名って、もしかして『おがた ゆうや』っていうの？」

「うん、そうだよ」

杏菜ちゃんが、不思議そうな顔で答えた。

「真結花、なんでそんなこと、知ってるわけ？ 記憶、少し戻った？」

鮎美ちゃんがそう言った後、智絵ちゃんも、不思議そうな顔をして、俺をの顔をマジマジと見る。

「えっ、えっと、以前にそのドラマの原作小説を読んだような気がして、それで、気になって聞いてみたの」  
「まゆかちゃん、何か思い出したのね？」

鮎美ちゃんや、智絵ちゃんは、俺が、少し記憶を取り戻したように思ったみたいだが、  
そうゆうわけじゃない。

俺が、とっさに頭に浮かんだ出まかせを、つい言ってみただけのこと。

「んっ？ どうしたの、まゆまゆ？ どっか、具合でも悪いの？」

あれっ？ 俺、いったい、どうしちゃったんだ？

急に心臓がドキドキしてきて、息苦しいよ。しかも、なんか、体も熱い。

この急激な、体調の悪さはなんだ？ キモチ悪い。吐きそう。  
うっっ、急にめまいも… あっ、目の前が真っ白、んっ…

「あっ！ ほんとだ！ まゆかちゃん、凄く顔色が悪いわよ！」

「真結花！ 大丈夫なの？ うわっ！ 物凄い熱。これはヤバそう  
だわ！ 智絵！ 保健室の如月先生、直ぐに呼んできて！」

「わかったわ！」

「杏菜！ あんたは担任の吉澤先生、直ぐに呼んできて！」

「りようかい！」

「如月先生、木下の容態はどうなんです？」

「倒れた直後は、かなりの高熱のようでしたけど、今は微熱ぐらいで落ち着いているわ」

「そうですか、大事に至らなくて、本当によかった。しかし、余りにも突然のことで、正直、驚きましたよ。今朝、木下の顔を見た時には、至って健康そうな顔色で、元気そうだったので、すっかり安心してたんです。担任として、もっと注意を払うべきでした」

「吉澤先生、まあ、そんなに自分を責めなくても。彼女は、事故に遭ったと聞きましたけど、もしかしたら、その後遺症かもしれないわ。そうだとしたら、突発的な症状が出て、それは、おかしくはないんですよ」

「どうゆうことでしょうか？」

「『心的外傷後ストレス障害』の疑いがあるかもしれません」

「何ですか？その、『しんてきがいしょうこ、ストレスしょうがい』ってのは？」

「簡単に説明すると、命に関わるような事故や、その人にとって非常にショッキングな出来事を体験した場合、それがトラウマとなつて様々なストレス障害を引き起こすんです」

「このことは、ちゃんと、木下のご両親に伝えておいた方がいいですよ。如月先生」

「そうですね、私は専門家ではないので『心的外傷後ストレス障害』と断定はできませんが、その可能性も、少なからずあるかもしれませんね」

「木下の容態が軽いようなら、私が自宅まで送って行こうかと思つていましたが、この様子じゃあ、ご両親に迎えに来てもらった方がいいですよ。如月先生からも直接、木下のご両親に容態を説明してもらった方がいいでしょうし」

「そうですね、彼女のご両親への連絡、宜しく願います、吉澤先生」

「ご両親には、今、直ぐにでも迎えに来てもらった方がいいですね？」

「そうですねー、今の様子だと、彼女は無理に起こさない方がいいでしょうし、出来るだけ長い時間、安静にさせて、暫く様子を見た方がそさそうですね」

「じゃあ、ご両親には、放課後、16時頃ぐらいに迎えに来てもらうって事で、いいですかね？ 如月先生」

「そうですね」

「じゃあ、そうゆうことで、如月先生、木下を宜しくお願いします」  
「はい、わかりました」

シャー。

「よっ！ 仲良しのお三人さん。木下の様子はどうだい？」

「しーっ！ 吉澤先生、声が大きいよ。カーテンも、そつと開けてよ。真結花は、今は静かに寝てるんだから、もっと、気を使ってください」

「まゆまゆが起きちゃうよ、せんせい」

「そうですよ。気を付けてください、先生。もし、先生に病氣の子供が居たら、もっと注意して接するでしょ？」

「おつ、すまん、すまん、相変わらず手厳しいな、水瀬は。ちよつと、結城に話があるんだが、こつちに来てくれないか？」

「はい？」

「結城、さっきの先生達の話、聞こえてただろ？ 先生から木下のご両親に連絡しようかと思ったんだが、結城は木下のご両親、知っているんだろ？ 申し訳ないが、結城の方から木下のご両親に学校に来てもらうよう、連絡してもらえないかな？ 結城なら、木下のご両親も気心が知れてるだろうし、その方が、余計な心配を掛けなくてもいいだろうと思ってさ」

「はい。いいですよ」

ブルブル…ブルブル…ブルブル…

「あらっ、誰かしら？ こんな時間に」

えっ？ 鮎美ちゃん？ もしかして！ 真結花に何かあった？

「チーフ、すみません、午後からの予約の件なんですけれど…」  
「あっ、ちよつと待ってて、今、取り込み中だから、後で聞くわ」  
「わかりました。じゃあ、また、後で伺いに来ますので」

「はいっ、もしもし？」

『鮎美ですけど、お母さんですか？』

「どうしたの？ 鮎美ちゃん？ もしかして、真結花に何かあったの？」

『ごめんなさい。真結花を頼むって言われたのに…』

「どうしたの？ はつきり言って！」

『実は、真結花がお昼休み中に高熱を出して倒れてしまったの。今は、熱も下がって、保健室で安静にしています』

「えっ？ どうして、真結花がそんなことに…」

『保健の如月先生に聞いたんですけど、事故の後遺症じゃないかって』

「私、母親としては失格よね。事故に遭ったばかりの真結花を、直ぐに学校へ行かせたりして」

『お母さん、それは、私にも責任があります。』

私も、真結花に学校に行きなさいって、無理強いさせるようなことを言ったから』

「終わった事は仕方がないわ。それより、鮎美ちゃん？ 真結花、直ぐに病院に連れていかなくてもいいの？」

『保健の如月先生からは、もう少し様子を見て、暫く安静にさせて置いた方がいいって、そう言われました』

「そう、じゃあ、今から直ぐに学校へ行くわ」

『あっ、待って下さい。先生は、16時頃に学校に来て下さいって。出来るだけ長い時間、安静にさせたいって言われてましたから』

「そう、わかったわ。じゃあ、16時頃に学校ね」

『はい』

「鮎美ちゃん、もし、私が学校に行く前に、真結花に何か容態の变化あったら、直ぐに連絡もらえるかしら」

『はい、わかりました』

「真結花をよろしく頼むわね、鮎美ちゃん」

『はい、じゃあ、電話切りますね』

「椎名さーん」

「はいっ、なんでしょうか？ チーフ」

「申し訳ないんだけど、今日は仕事を切り上げて、今から帰宅させて欲しいの。娘の体の具合が悪くて心配なの」

「えっ？ そうなんですか！ それで、チーフは慌ててお電話されていたんですね？ 早く帰ってあげて下さい。チーフの抜けた後は皆でカバーしますので。この後、既にチーフを指名予約されたお客様はどうでしょうか？」

「予約されたお客様には事情を説明して、キャンセルされるのか？ 私以外の人に任せてもいいのか？ お客様一人一人の希望を、きちんと確認してからカットしてね。お得意様ばかりだから、粗相のないようにお願いね」

「はい。それは、スタッフ全員、当然わかっていることだと思いますので。チーフが、いつも言われていることですから」

「あっ！さっき、電話する前に言ってた用件は何？」

「そのことでしたら、先ほどの話で済みました」

「そう、スタッフの皆に迷惑かけてごめんなさいね。じゃあ、後の事はよろしく頼むわね」

「はい、では、気を付けて！」

「ありがとう」

目の前がなんだか妙に明るい、何だ？ これ？

俺は、薄らと目を開けた。

西日がカーテンを、オレンジ色に染め上げていた。

ここ、どこ？　もしかして病院？　あの病院に戻った？

オレンジ色に染まるカーテンが、俺の視界を遮っていたので、ここが何処だかわからなかった。

布団をめくって上体を起こすと、制服のまま寝ていたことが分かり、直ぐに現実に取り戻された。

俺は、ベッドから脚を下ろし、カーテンを開いてみた。

すると、

「あらっ！　もう大丈夫なのね？」

目の前には、机に向かって何か書類に書き込んでいる、ショートカットの、40歳半ばぐらいの白衣を着た女性がいた。

「あのお、わたしは、どうしてここに居るのでしょうか？」

「何も覚えてないの？」

「はい」

「そう。まあ、そこに座って。実は、あなたはお昼休み中に高熱を出して倒れて、吉澤先生に抱きかかえられて保健室まで運ばれたの」「そうなんですか？　ありがとうございます。ご迷惑をおかけしました」

「私は、特に何もしてないわよ。感謝の言葉なら、あなたのお友達と吉澤先生に言ってね」

「はい」

「さっき、何も覚えていないって言ってたけれど、どこまで覚えている？」

「えっと、友達と一緒にお昼ご飯食べて、会話したら、急にめまいがして、その後のことは何も」

「そう、わかったわ」

「先生、今、何時ですか？」

「もう16時前だけど」

先生は、ちよつと高級そうに見えた腕時計を、チラツと見ながらそう答えた。

この人、まだ独身なのかな？ どころなく、寂しげな雰囲気伝わってくるって感じ。

でも、それって、余計なお世話だね。人それぞれ、生き方が違うわけだし。

俺だって、こんな状況だし、他人の事なんて、とても言えないよ。

「えっ？ わたし、そんなに寝てたんですか？」

「ええ、そうよ。もうそろそろ、ご家族が迎えにくると思うわ。その前に、はいっ、これで体温を測ってね」

体温計を手渡された。腋に挟み、暫くして、ピツという音が鳴ってから先生に返す。

「平熱のようね、もう心配はないようだわ」

「あのお、ところで鮎美ちゃん達は？」

「ああ、あなたの3人のお友達のこと？ 放課後、あなたの様子を見に、保健室に来てたけど、遅くなるから、後は私に任せて帰るなさいって言うておいたわ」

「そうですかあ」

トントン。

「ちよつどよかった。どうやら、ご家族が来たようね。はい、どうぞー」

ガラッ。

「まゆか！」

ママは、俺を見るなり、だつと駆け寄って、椅子に座っていた俺を、正面から強くギュッと抱きしめた。

「ごめんなさい、まゆか。ママが悪いの、ママが無理強いさせたから」

「ママ、わたしは、もう大丈夫だから」

そう言つと、ママは、俺を抱きしめていた腕を解いてくれた。

「本当に？」

「うん。もう大丈夫よ。ママ、心配掛けてごめんなさい。ちよつとお手洗いに行つてくるね」

「娘さんが席を外してくれてよかったわ。お母さん、実は、ちよつとお話したいことがあります」

「はい、何でしょうか？」

#11：なかまたち。（後書き）

事故後の初登校日に、いきなり学校で倒れてしまった真結花。いったい、真結花の身に、何が起こったのでしょうか？

次回につづく。

#12：俺は、何者だ？（前書き）

学校で倒れてしまった真結花。

この出来事の意味すること、そして、これからの真結花に与える影響とは…

## #12：俺は、何者だ？

学校で高熱を出して倒れた次の日、ママは俺を精神科に連れて行き、

PTSD（心的外傷後ストレス障害）と診断された俺は、薬を処方されて帰宅した。

あの事故以降、俺の心の中では一度に色んな事があり過ぎて、心が休まる暇も無く、  
知らず知らずのうちに、俺の心は破裂寸前の過度のストレスを抱え込んでいたらしい。

暫く自宅療養ということで、学校を休む事になってしまったが、いつまで休んだらいいのか？

お医者さんの判断に任せるしかないようだった。

でも、いつまでも学校を休んでいたら、授業には遅れるし、ママが言ってた

“うつ”や“引きこもり”に本当になっちゃうかも？　そうゆう不安や恐怖が、俺を襲った。

ママは、俺の為に仕事を何日か休んだり、仕事を出来る限り早く切り上げたりしてる。

ママにそういった迷惑を掛けていることもストレスに感じ、俺を苦しめる一つの要因になってた。

俺なんて、誰の役にも立ってないし、こんなにも周りに迷惑を掛けて、

俺に、生きる理由や意味が、本当にあるのだろうか？

こうやって、今は生きているけど、あの事故で、一度は死んでいるのと同じこと。

体が変わったといえ、生きていることさえ奇跡なんだから。

だったら、このまま、“俺”なんて、消えて無くなっちゃっても誰も困らない。

そう思うことさえあった。

この、自分では、どうにも出来ない、もどかしい気持ちから逃れたい。

家の中に閉じこもっていると、そんなネガティブなことばかり考えるようになってしまった。

鮎美ちゃんが言っただように、学校を休んでいると、

やっぱ、ロクでもないなって、つくづく思い知らされた。

一度、こういったネガティブな精神状態にはまり込むと、自分の力だけでは、中々抜け出せないんだ。

たぶん、“うつ”や“引きこもり”の始まりって、こういった出来事がきっかけなのかもしれない。

でも、幸いにも、俺の周りには、救いの手を差し伸べてくれる優しい人達がいて、

そういった人達の存在によって、“うつ”や“引きこもり”にならなくて済んだのかもしれない。

俺が学校を休んでいる間、授業に遅れないようにと、毎日学校帰りに鮎美ちゃんは、自分のノートのコピーを自宅まで届けてくれたり、麻弥や鮎美ちゃんは、学校での出来事を毎日話してくれたり、常に話し相手になってくれて、俺が精神的に落ち込まないように、色々と気を使ってくれていた。

又、メールの返事をすっかり忘れていた、同じサッカークラブに所属する里子ちゃんからも、俺が音信不通な事を心配して連絡があり、今の俺の状況を説明すると、励ましの電話やメールをくれた。

俺は、この人達に、本当に感謝しなければならぬ。

元氣をもらったり、色々と助けてもらってたりと、この人達からの一方通行の好意をもらってばかりで、その好意に対して、俺は、何も返してあげられなくて、もどかしくて、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

いつか、何かの形で、恩返ししないといけないよね。

普通の人なら、何所かに出かけたなりして、家族や友人達と楽しく過ごすはずのGWも、俺は自宅療養つてことで、気分転換に愛犬yukiと散歩に行く以外は、殆ど家の中でボケーと過ごすことになり、あつという間に過ぎてしまった。

あれから、何日経ったのだろうか？

夕方、気分を変えて、いつもと違うルートでyukiと散歩していると、

どこかで見覚えがあるような公園が見えてきた。

これって、もしかして、以前、夢の中に出てきた幼いまゆかとパパが、

サッカーして遊んだ公園じゃないのかな？

でも、ハッキリとは覚えていないし、違うような気もするけど…

公園に近付くと、小学生低学年と思われる数人の子供達がキャキャと叫びながらサッカーボールで楽しく遊んでいた。

なんか楽しそう。

思わず小走りで近づき、少し離れた場所からその子供達の様子を見ていると、その中に一人だけいる、髪の長い子に自然と目がいく。その女の子が一人、男の子達の中に混じって、サッカーボールを追いかけている姿を見て、

どこかで見たような光景だなあ」とぼんやり見つめていた。

すると、

「どこ蹴ってんだよ」

一人の男の子がそう言った瞬間、サッカーボールがこっちに向かって転がって来た。

「あつ！ そのおねーちゃん、ボール取ってえ」

「うん、わかったー」

俺は、そう答えると、yukiのリードを引つ張って、リードを左手に持ち替えながら、yukiを自分の左側に寄せると、ボールを取りに来た男の子に向かって、転がって来たボールを右足ですくい上げるようにポンッと、軽く蹴った。

ボールはゆるやかな弧を描き、ボールを取りに来た男の子の胸にふわっと収まるように落ちていった。

男の子は、返ってきたボールを胸でトラップし、ボールを地面に落とすと、

「ありがとー、おねーちゃん。おねーちゃんって、キックが上手いんだね！」

そう言って、男の子は皆の所へ戻っていった。

今の、俺は全く意識せずに、ただボールを軽く蹴っただけなのに……この体に、サッカーが染み付いているってことなのかな？  
そんな事を考えつつ、公園を後にし、yukiと共に帰宅した。

帰宅後、俺は、以前から心の中でもややもやしていたことが急に気になりだして、

これから、前向きに生きる為にも、この際、気持ちをスッキリと整理させておく必要があると強く感じ、思い切って、ママに切り出してみた。

「ねえ、ママ。もう随分と日が経ってしまっ、今更なんだけど、事故でわたしを助けてくれた人のご遺族に、会わなくてもよかったの？」

「えっ？ 何のこと？ 真結花」

「えっ？ だから、その、事故でわたしを助けてくれた人って、亡くなっただんじゃないの？」

「それって、どういうことかしら？」

「ママ。あの事故って、わたしが、立ったまま居眠りしてて、駅のプラットホームから転落しそうになって、若い男性に助けられたんじゃないの？」

「えっ？ いったい、何の話をしてるの？ 真結花」

「どうゆうこと？ ママ」

「どうゆうことって、真結花。それは、こっちが聞きたいことだわ。いったい、どうしちゃったの？」

「あの事故のこと、詳しく教えてくれない？ ママ」

「ん〜。これは、本当は、真結花には言いたくなかったの。事故直後、真結花の精神状態は不安定だったし、変な精神的ショックを受けないかと、凄く心配してたから。いつか、真結花の方から聞いてくるまで、言わないでおこうって、決めてたの。でも、今、こうやって、真結花の方から聞いてきたわけだから、仕方ないわね。これは、後から警察の方から聞いた話しなんだけど、あの事故は、電車から降りた真結花の背後から、急いでいた男性が体をぶつけたということらしいの。それで、真結花が勢いよく前に倒れたって。その

男性は、倒れた真結花を無視して、そのまま人混みに紛れて改札口を出ていったつてことなの。酷い話よね。ちょうど、帰宅ラッシュの時間帯で、駅も混雑してたから、事故の相手を特定するのは、難しいって言われたわ」

「えっ？ そうなの？」

「ええ、そうよ。事故のショックで、変な夢でも見てたんじゃないの？」

「うん。思い出せないなあ」

「まあ、無理して思い出さなくてもいいわよ！ 今、思い出しただけでも、ママにとって、腹の立つ出来事なの！」

ママの顔は、少し怒っていた。

「ごめんなさい、ママ。蒸し返すようなこと、言っちゃって」

「もう終わった話よ。これつきりにして、忘れましょう。真結花が、こうして無事だったことだし、ママは、それだけでも十分神様に感謝しているわ」

「うん、わかったわ、ママ。あの事故のことについては、もう言わないし、忘れることにするから」

これ以上、ママに変な心配を掛けるのも悪い。

でも、心の中のもやもやは、晴れるどころか、謎めいたまま、益々霧の奥深くに入り込んだような感じだった。

今日は、早めに就寝したわけだけど、夕方、ママに聞いたことが、どうしても気になってしまって、中々寝付けない。

俺はベッドの上で、両腕で頭を抱え、冷静に今まで得た情報を整理してみた。

まず、ママの話によれば、俺が事故に遭ったのが、帰宅ラッシュの時間帯だった？

ということは、１７時から２０時前後だったことになるのだろうか？  
じゃあ、事故の発生時刻は、俺の記憶にあった、終電間際の深夜じゃない？

それと、入院していた時に俺が見たニュースは、別の駅で起こった、自殺未遂事故だった？

あの時の俺は、凄く気が動転していたし、冷静さを欠いていた。  
だから、自分の事故の事だと思い込んでしまったのだろうか？  
今思えば、駅名までハッキリと覚えていない。

そう考えれば、次に病院で聞いた、急患で運ばれた若い男性患者の話も、

これも全く別の事故だった？ それらの偶然や勘違いが重なって、それを、あたかも自分の出来事であったように、思い込んでしまった？

いずれにしても、事故の相手はこの誰だか知らないけど、生きていたってこと。

そして、その、どこの誰だか分からないその男性が、杏菜ちゃんの言っていた、

ドラマの主人公と偶然同じ名前の “ おがた ゆうや ” で、この俺になるわけ？

うーん。この俺の本名が、ドラマの主人公と同じっていうのは、余りにも出来過ぎた話だ。

イマイチ、ぴんつとこないし、説得力に欠けるよなあ。

それに、ママの言っていた事故発生状況と、俺の記憶の中での事故発生状況が全く食い違う。

この相違点は、いったい、どう説明すればいいんだ？  
じゃあ、“俺”という存在は、いったい何？

だったら、別の角度で、こうは考えられないだろうか？

ママの言っていた事故発生状況が、事実としよう。

そして、俺の記憶の中にある、あの事故は、夢の中の出来事であって、現実に起こったものではない。

更に、俺に、そのドラマの主人公に関する記憶があって、事故のシヨックで記憶が混乱し、

自分のことを、“おがた ゆうや”であると、脳の記憶回路に上書きしてしまったとか。

そもそも、人の魂の入れ替わり現象なんて、現実的に考えられない。

それとも、ママの言っていることが、事実じゃなくて、何か嘘をついている？

何か、事故に関する重大な秘密を隠しているとか。

どこぞの名探偵のように、情報を整理し、推理したところで、

どれも、何の根拠も裏付けもない仮説なわけで、

”俺”の正体を導き出すだけの、決定的なものではなかった。

結局のところ、ほぼ間違いないと思われるのが、俺が入院していた時に見たニュースや、

急患で運ばれた若い男性患者の話は、偶然と、俺の、ただの勘違いだったこと。

そして、以前として、“俺が何者なのか？”っていう疑問だけが残ってしまった。

ホント、漫画や小説みたいな、名探偵と呼ばれる人がこの世にいたら、ぜひ依頼して、

この難題を解決してもらいたよ。

こんな疑問を心に抱いたまま、俺は、この先も悶々としなければいけないのだろうか…

これからも、心と体がバラバラのままで、“真結花”として生きなきゃいけないなんて、

正直、もう疲れたよ。

もし、本当にこの俺の魂が、この体と別人だとしたら、この体、本当の持ち主に返すから、

もうこのまま、“俺”という存在なんて、この世から消して欲しい。そう思いたいぐらい、気持ち凹んでしまった。

「はあーっ。考えるの、もうやゝめえゝ。ほんと、考え過ぎて疲れた。もう寝る！」

一晩眠れば、きつと、気分も落ち着くさ。

今、グダグダ考えたところで、答えは何も見つからない。

とにかく、明日はもう少し、前向きな気持ちになりたい。

そう思いつつ、眠りについた。

#12：俺は、何者だ？（後書き）

自分が何者なのか悩み、酷く落ち込んでしまった様子の真結花。  
このまま、真結花は、立ち直ることができるのでしょうか？

次回につづく。

### #13：ナゾの正体、見たり！（前書き）

自分が何者なのか？ そのことで、苦しんでいた様子の真結花。  
真結花は、この苦しみから逃れられるのでしょうか？

### #13：ナソの正体、見たり！

昨晚、寝る前に色々と考え過ぎて、中々寝付けなかったせいかな？  
今日は、昼過ぎまで寝込んでしまった。

一晩眠れば、気分も、考え方も、多少ポジティブに変わるのかなって思ってたけど、

現実はその甘くもなく、夕方近くになっても、昨日の事を引きずったまま、気分は重い状態だった。

どうしよう？ このままの凹んだ気持ちのままじゃあ、とても、何もやる気が出ないよ。

本当に“うつ”や“引きこもり”になっちゃうのかな？

あの事故以来、ようやく女の子として、この家の家族として、徐々に前向きな気持ちになってきたっていうのに、また、どん底に突き落とされて、振り出しに戻っちゃったって、感じだよ。

あんなこと、ママに聞くんじゃなかった。

でも、いくら気にしなようにしてても、あの事故の相手の事が、心の中でトゲのように引っかかっていて、もやもやし続けていて、とても、聞かずにはいられなかったんだ。

この休みの間も、鮎美ちゃんや、里子ちゃん、ママや麻弥が懸命になつて俺を精神的に支えてくれて、ここまで、なんとか精神の安定を保ってこれたっていうのに…

このままじゃあ、みんなの期待にも答えられず、学校に行くのも気が重い。

でも、この出口の見えない闇のトンネルから、なんとかして抜けださなきゃ、

ここまで、懸命に尽くしてくれた、みんなの好意が、全て、ムダになっちゃう。

このままの精神状態じゃあ、ホント、みんなに申し訳ない。合わせる顔がないよ。

こうやって、後ろ向きなことばかり、グダグダ考えていないで、なんとかして、前向きで、元気な気持ちを取り戻さないと。

とにかく、気分を切り替えるためにも、今は現実逃避したい、そう思ってラジオのスイッチを入れ、

流れていたJAZZに暫く耳を傾けていた。

すると、

?ここで、臨時ニュースをお伝えします。先ほど、関東圏を中心に、若い女性の背後からナイフを斬り付けてケガをさせるという連続通り魔事件の犯人が、おとり捜査中の女性警官らに逮捕されたとのことです。現在、犯人の詳しい情報については、まだ入って来ていません。詳しい情報が入り次第、お伝えいたします?

これって、まさか、俺の事故と関係あるんじゃないの?

ママは、背後からぶつかって来た男の人が、そのまま逃げるように行ってしまったと言ってた。

それから、警察から事情を聞いてたとも。

ということは、もしかして、俺の背後からぶつかったのは、この通り魔だったの?

そのこと、ママは隠してた? 俺が、精神的なショックを受けないように。

そういえば、この右肘の傷って、転倒した時の傷だって病院で聞いたけど、本当なのかな?

この傷、ナイフで斬り付けられたとか。

そう思った瞬間、背筋にゾクとする寒気が走った。

いや、でも、それはいくらなんでも考え過ぎ？

俺って、どうも思い込みが激しいみたいだから、俺のは、きっと、ただの偶然の事故だよね？

だって、帰宅ラッシュだったっていう話だし、混雑してたら、他人とぶつかることもあるよ。

そう、そうに決まってるじゃん。

俺が、通り魔に襲われたなんて、今、そう思ったただけでも恐ろしくて、そんなこと、考えたくもない。

まさか、こんなこと、ママに聞くわけにもいかないし。

ああー、もうああー、せっかく凹んだ気分を変えようと思って、AZZ聴いてたところなのに…

「もう、気分ぶち壊しっ！　ったく、超サイアク！」

俺は、ラジオのスイッチを切り、今度は、本棚から小説を適当に取って、ベッドに寝転びながら読み始めた。

「んっ？」

読み始めたその小説には、主人公の男性が交通事故に遭い、同乗していた女性と心が入れ替わるシーンがあった。

まさか？　そう思い始めた俺は、気になって、別の小説を手に取り、パラッと読んでみた。

次に目に止まった小説シーンの中には、駅のプラットフォームで主人公の少女が彼氏との別れ話を切り出して、少女が電車に乗り込もうとしていたところを彼氏がそれを阻止し、二人がもつれ合ってプラットホームで転倒するシーンがあった。

これって、正に俺の事故の記憶に近いじゃん。

益々気になりだした俺は、更に、小説を片っ端からパラッと読んでみた。

「えっ！」

俺は穴が明くほど、その小説の一点に視線を集中した。

恋愛小説の中に、“緒方裕也”なる名前の主人公が登場してたんだ！俺が、杏菜ちゃんに言った、『ドラマの原作小説を読んだことがある』っていうのは、

ウソや出まかせでもなく、確かな記憶であつたということが、今、わかつたんだ！

ここで、俺の中で、かなり信憑性の高いと思われる、ひとつの仮説が生まれた。

やはり、あの事故の記憶は、俺が今まで読んだ小説の中で、印象深かったシーンや感情移入した登場人物達の記憶が重なり合って作りに上げられた、架空の物だったのかも？

そして、あの事故がリアルな鮮明な映像として、記憶に残ってたのも、杏菜ちゃんが言ってた“うちしゅん”主演のテレビドラマを、俺が見てたんじゃないの？

事故のショックで、俺の記憶が混乱してたのは確かだろう？

事実、今、過去の記憶が無いことだし。

そして、俺の“緒方裕也”に関する記憶が、小説内容と一部一致していたことも確か。

俺の記憶の中に存在する“緒方裕也”という謎の正体が、この瞬間に、解けたような気がした。

これらの情報をまとめてみると、現実の出来事として、認識して

いたあの事故の記憶は、事故のショックによって、脳の中で様々な記憶が結びつけられて作り上げられた、夢の中での出来事だったのだろう。その出来事が、あたかも、自分の身に起こった現実の出来事のように、脳に記憶されてしまった？

そもそも、冷静に考えれば、人の入れ替わり現象なんて、科学的な根拠も無く、

何も立証されていないわけだし、漫画や小説で語られる、ファンタジーの世界の話であって、非現実的な出来事であるのは、間違いないと思う。

でも、なぜ、そんな事になってしまったのかなあ？ それは、いくら考えたところで、わかんないだろうけど、頭も軽く打ってたらしいし、事故のショックが、余程大きかったってことなのかなあ？ まさか、本当に通り魔に襲われたとか… イヤイヤ、それは、もう考えるのよそう。

仮に、もし、そうだとしても、記憶にないんだから、今更、事故のイヤな出来事、思い出さなくてもいいじゃん。

もし、そんな事、知ってしまったら、今の精神状態じゃあ、絶対、耐えられなくなっちゃう。

まあ、それは、もう終わったことだし、これから前向きな気持ちになるためにも、この際、ママが言ってたように、もう忘れちゃった方がいいのかも。

でも、未だにわかんないのは、なぜ、体は女性なのに、心の中では“俺”という身元の分らない男性として認識し続けているのだろう？

この点については、今、どう考えてもサッパリ。

ただ、“緒方裕也”というのは、小説やドラマに登場する架空の人物であって、その男性と魂が入れ替わったわけじゃない。

この事実だけは、今、ハッキリとしたわけだけど…

そう思うと、今まで心の中でもやややし続けていたものが、少しだけ晴れて、なんとなくホッとした気分に使まれた。

そして、ママは俺の本当のママで、麻弥は俺の本当の妹、鮎美ちゃん達は俺の本当の友達だったということが、何よりも俺に安心感を与えてくれた。

そう思っていたら、気分が随分と楽になり、凄く安心したのか、自然と涙が溢れてきた。

トントン。

「おねえちゃん、夕ご飯の時間よ」

「うん。先に行つてて…」

おねえちゃんの声、沈んで、凄く暗いよ。どうしたのかな？  
やつぱ、昨日、なんかあった？　なんか、凄く落ち込んでた様子だったし、

今朝も寝てたから、声掛けられなかつたんだ。

もしかして、まさかっ！

おねえちゃんに限って、そんな変なこと、考えてないよね？

力チャ。

「おねえちゃん？どうしたの？」

麻弥がドアを開けて、俺の顔の様子を窺っていた。

俺は、とつさに顔を背けて涙を袖で拭った。

「ねえ、おねえちゃん、今、泣いていたの？」

「えっ？ 泣いてなんかいないよ？」

「ウソ！」

「何で？」

「だって、目が赤いもん」

やっぱり、誤魔化せなかった。

「へへっ、実は、さっきまで小説読んで、つい、主人公に感情移入しちゃって。それで、泣いちゃった。麻弥に泣いてるところ見られちゃって、ちょっと恥ずかしかったの」

俺は思い切り、作り笑顔でそう答えた。

麻弥にも、変な心配を掛けたくはない。

しかし、こんな下手な演技で、麻弥を騙せたのだろうか？

「ねえ、おねえちゃん、ここ最近、ずっと何か悩んでない？」

「えっ！」

さすがにカンの鋭い我が妹！

こんな下手な俺の演技が通用しないってのは、わかってたけどさあ。

「だって、おねえちゃん、ここ最近、何か悩み事でもあるのか、考え事しているようにボーっとしていること、多かったもん。特に、昨日は凄く落ち込んでた様子だったし。麻弥は、いつもおねえちゃんの味方よ！ 悩み事あるんだったら、ひとりで悩んでないで、麻弥に何でも言つてよ！ 麻弥だって、おねえちゃんの力になりたいの！」

しまった。俺って、知らず知らず毎日、そんなにボーっと考え事してたんだ？

昨日、落ち込んだのは確かだけど。

麻弥って、俺の意識しないところで、毎日ちゃんと見てたんだ、俺の様子。

って、ことは、ママに心配掛けなかったための、カラ元気なフリも、バシってた？

「ありがとう、麻弥。でも、今はまだ言えないの。これは、わたし自身の問題だから。心の整理が付くまで、もう暫く待ってくれないかな？」

「うん、わかったわ。麻弥も悪いの。つい、おねえちゃんを追い詰めるようなまね、しちゃってた。いくら家族でも、言いたくないことってあるもんね。ほんとゴメンね、おねえちゃん」

「ううん。麻弥の、その優しい気持ちだけで、十分うれしいから」  
そう言った瞬間、胸にじーんと熱いものが込み上げ、また涙が溢れてきた。

麻弥って、ホント、姉思いで、優しい子。

俺には、もったいないぐらいの妹だよ。こんな情けない姉で、ホント、ごめんね、麻弥。

「もー。最近のおねえちゃんって、ホント、泣き虫よね」

「へへっ」

俺は泣きながら、懸命に笑顔を作った。

「気が落ち着いたら、ダイニングに来てよ。夕食が待っているから」  
「うん」

そう言った後、麻弥は部屋を出て行った。

どうしよう？　このまま、直ぐにダイニングに行くのは気まずいよなあ。

さっきのさっきだから、気恥かしくて、とても麻弥と顔を合わせられないよ。

それに、ママにもこんな泣いた後の顔、見せたくないし。

ちよつと横になって、気分を落ち着かせなきゃ。

「ねえ、ママ。ここ最近、おねえちゃんがずっと何か悩んでるの。特に、昨日は凄く落ち込んでたし。さっきも、部屋で独り泣いてたわ。ママも何か気付いてた？」

「ええ、もちろん。真結花のママですもの」

「やつぱ、ママも気付いてたんだ。麻弥も薄々気付いてたんだけど、なかなか切り出せなくて」

「そう。学校休むようになってからの、ここ最近の真結花、どこかこう無理して私達家族に心配かけないように、元氣な素振りを見せたり、時々、心、ここにあらず、ってゆうような顔をしてた事があって、気にはなっていたわ。でも、こちらから無理に真結花の心のドアにノックしようとする、直ぐに壊れてしまいそうな、ガラス細工のように繊細な、そんな危うさが今の真結花に漂っているの。だから、今は真結花をそつと、傍らから見守ってあげるしかないのになって、思っているわ」

「うん、わかった。さっき、おねえちゃんと話したんだけど、悩みを聞こうとしたら、

『心の整理が付くまで待つて』って言われたの」

「そう。真結花は真結花で、自分の中で、心の葛藤と戦っているの

よ。それを聞いて、ママも少しは安心したわ。だから、ママ達は真結花が心から落ち着く環境を作って、待つしかないの」

「ママ、心から落ち着く環境って？」

「そうねえー、しいて言うなら真結花が真結花のまま、自然態で居られるように、真結花の好きなように、ありのままにさせるって事かしら。真結花に無理強いさせないって事かな」

「わかったわ。麻弥もおねえちゃんに変にストレスを与えるような事や、余り気乗りしない事、嫌がる事をしなきゃいいのね」

「そうね。でも、急に今までと違う接し方をしたり、あからさまに態度を変えちゃダメよ。あくまでも、自然に振舞わなきゃいけないわよ。真結花だって、変に気を使われてるって、直ぐに気が付くわだから、とにかく、暖かく見守ってあげるような、優しい気持ちで接してあげて」

「うん。麻弥も気を付ける。鮎美ねえさんにもこの事、伝えてた方がいいのかな？」

「そうねえー、真結花の一番の友達だから、鮎美ちゃんにも伝えてた方がいいわね。真結花のことは、以前にも気になって、鮎美ちゃんに話したことがあるわ。真結花も、私達家族より、同い年の鮎美ちゃんの方が、何かと気兼ね無くて、心を許し易いかもしれないわね。麻弥、真結花にばれないように、こっそりと伝えておいてくれる？」

「うん、鮎美ねえさんと二人になるチャンスがあれば、こっそり伝えておくね。あつ、電話やメールでもいいっか」

「電話は、家じゃダメよ。真結花に、何処で聞かれているか分からないから、メールが直接会って伝えてちょうだい」

「うん、そうね。そうする」

「ねえ、ママ。麻弥、もう待てないよ。お腹、減ったー」

「そうね、遅いわね。真結花、いったい、何してるのかしら。まゆかー、夕ご飯はどうするの」

「……」

「あらっ？ 返事、無いわね。麻弥、真結花の様子、見て来てくれない？」

「うん」

トントン。

「……」

「あれっ？ おねえちゃん、やっぱ、返事ない。どうしたのかな？」  
「しまった！ まさかっ！ そんなっ！ おねえちゃんに限ってっ！」

カチャ。

「えっ！」

おねえちゃん、ベッドの上で、横になって倒れてる！

そんなあー！

なあーんだ、おねえちゃん、寝てたのね。

きつと、泣き疲れたのよ。

「ホッ」

もうおー、ビックリしたあー。ホントに。

一瞬、心臓が張り裂けそうだったよ！

でも、ホント、よかった！

おねえちゃんが変なこと、考えてなくて、安心したよ。

まったく、妹にこんな変な心配させてといて、ホント、罪よねえー、おねえちゃんったらっ。

以前のおねえちゃんなら、麻弥がこんな変な心配しなくても、よかったんだけどなあ。

ホント、麻弥がおねえちゃんに構わなくても、全然へーき、って感じだったしい。

麻弥が、おねえちゃんに甘えようとしたら、『麻弥はウザいっ！』って冷たくあしらわれてたぐらいだったのよねえ。

そう、性格は、正に男前な感じ？

そうゆう強いおねえちゃんに憧れてたし、好きだったんだけどなあ！。

でも、いいのっ。

麻弥にとっては、今の頼りない、弱々しいおねえちゃんも、おねえちゃんに変わりはないんだからっ。

ふふっ、おねえちゃん、何だか安らかな、幸せそうな、カワイイ寝顔してる。

天使の寝顔って、正に、こっゆつのをいうのかな？

なんだか、ほっぺにチュって、キスしたいぐらい、カワイイ寝顔ね。殆ど毎日起こしに来てたけど、おねえちゃんのこんなカワイイ寝顔って、

今、初めて見たような気がするよ。

ああ、もうお、なんだかスッゴく癒されるって感じ？　こうして、ずっと見ていたいな。

もうおー、ダメダメっ。

つい、うつかり、見とれちゃってたけど、

このまま寝かせておいたら、風邪引いちゃうよ。  
お布団掛けとかなきゃ。

「よつと。これでよしっ」と

なんか、こうして、おねえちゃんの面倒見ると、

麻弥がお姉さんになったような、ヘンな気分。

さっ、おねえちゃんが起きないように、音を立てずに、そつと部屋をでなきゃ。

お部屋の照明は消してつと。

「麻弥、真結花はどうしてたの？」

「おねえちゃん、泣き疲れたのか、寝てたよ。だから、お布団掛けしておいたよ」

「麻弥、ありがとう。じゃあ、そのままにしておいた方が良さそうね」

「うん」

「真結花が居ないのは少し寂しいけど、ママ達だけで夕食にしまし  
よう」

「うん。そうね」

### #13：ナゾの正体、見たり！（後書き）

自分が、いったい何者なのか？

真結花自身にも、その疑問の全てが、解けたわけではなさそうです。

ただ、それでも、少しだけ、明るい兆しは見えてきた様子。

学校復帰に向けて、少しは前向きな気持ちになれたのでしょうか？

次回につづく。

## #14…とどきますように。

「はあー。ようやく明日から学校かあー」

あれからかなりの間、ガツコ休んじやったけど、みんなは以前と同じように接してくれるのかな？

ああ、なんか、不安と期待が入り混じった複雑な気分。  
さっ、今日は、早く寝なくちゃ。

そう思い、部屋の照明を消して、ベッドに入ろうとしたとき、

「あれっ？」

枕元の携帯に、いつの間にかメールの着信があったことに気付いた。  
た。

さっき、下に降りてた時に届いたのかな？

「誰だろ？ こんな時間に。迷惑メール？」

俺は枕元の携帯電話を手に取り、その見慣れない怪しげなメールアドレスを睨み付け、  
メールを開いてみた。

「えっ？ これ、パパからのメール？」

そいえば、自分のことで手いっぱい、パパのこと、すっかり忘れてた。

家族ほっばいて、パパって、いったい、何してんだろ？

確か、パパは海外に居るって言うてたよね？ ママは。

「えっと、なにになに？」

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

真結花、元気にしているかい？

パパは、こっちで元気にやっているよ。

まだ、暫くはそっちに帰れそうにないんだ。

真結花、向こうに行ってから連絡しなくて、済まないと思ってる。

ママとは時々連絡を取り合ってるんだが、

真結花の事で、パパが口出しするのも何か気が引けてね。

真結花の事は、ママに任せてたんだ。

でも、ママが真結花の様子が最近おかしいって連絡して来たもんだから、

気になってね。

本当はメールじゃなくて、電話で直接、真結花の声が聞きたかったんだけど、

時差の関係もあるからメールで連絡したんだよ。

突然のメールで驚いたかい？

今思えば、真結花にもっと早く連絡しとけば良かったって、後悔しててね。

少しでも真結花の力になればと思うってメールしてみたんだ。

真結花の部屋の本棚に、『とどきますように。』っていうタイトルの詩集、

置いてあるだろ？

その詩集は、以前にパパが真結花に送ったものなんだ。

その詩集、読んでみてくれないか？

きつと、今の真結花に、何かのヒントを与えてくれると思うんだ。  
パパには、こんなアドバイスしか出来ないけど、

真結花の事は、パパも遠くから応援していることを忘れないで欲しい。  
い。

だから、頑張れよ！

そっちに帰れることになったら、また連絡するから、  
それまで、元気でいろよ！

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「パパ、ありがとう」

なんか、うれしいな！

パパからのメールなんて、全く予期してなかったから。

俺は枕元の照明をつけて、パパの言っていた本でも読むことにした。

どうせ、中々寝付けないだろうし、読んでるうちに眠たくなるかも。  
さっそく、その『とどきますように。』と書かれたタイトルの詩

集を手にとって、

ページを開いてみた。

はしがきには、作者の思いが、こつ書かれてあった。

私と同じこの足元では、今、この瞬間にも悩み、苦しむ人達がい

るのだと思います。

その人達の為に、私に何か出来ないのでしょうか？

もの書きに出来ることは、たかがしれていると思うのです。

でも、私には、書くことしか出来ません。

今の私に出来ることと言えば、

今、この瞬間に、この本を手にとっている“あなた”に、

この本を通じて、応援のメッセージを送ることだけなのです。

“あなた”だけでも構わないのです。

今の“あなた”に、

少しでも明日を生きる勇氣、元氣、活力を与えられれば、

そして、明るい未来への希望を持って頂ければ、心を癒すことが出来るれば、

私がこの本を書いた甲斐があつたということでしょう。

私の言葉が、少しでも今の“あなた”の心に、とどきますように。

そして、“あなた”が幸せになりますように。

つづいて、本文を読んでみた。

『ひと』

ひとは、なんのために生きてるの？

それは、ひとのために生きてるんだよ。

なぜ、ひとのために生きるの？

それは、あなたも、ひとのために生きているからさ。

わたし、ひとりなの。

あなたは、ひとりじゃない。

見えない誰かと、どこかで、繋がっているのさ。  
どうしてわかるの？

それは、あなたがこの世に生まれたからさ。

『人生』

人生に疲れた。今日も、明日も、明後日も、先が見えない。  
ただ、ただ、毎日を無駄に生きてると。  
そう思っているあなた。

そう、あなたは、今だけ不幸なのです。  
でも、それを受け入れた瞬間、

あなたは、今よりもずっと、強くなれるはずです。  
もう、これ以上の不幸のどん底はないのですから。  
これから、少しずつ、一歩ずつ、幸福へ向かって、  
上っていくだけなのです。

どうか、思い留まってください。

『未来へ』

誰にも頼らず、ここまでやってきた、頑張り屋さんのあなた。  
ここまで頑張った自分を、もっと、褒めてあげてもいいのではない  
でしょうか。

もうそろそろ、ひとりで頑張ることに、疲れてはいませんか？  
誰かに、頼ってもいいのではないですか？

頑張り屋さんのあなたでも、壊れてしまいます。

あなたの中で、今は、何合目なのでしょう？  
この先、目指すべきは、まだ遠い頂上ですか？  
時には、下山、一休みも必要なのです。

今の、あなたの素直な心の声を、聞いてあげてください。

『生きがい』

何が生きがいで、何が生きがいじゃないのでしょうか？

生きがい。それは、見つけなくてはいいものなのですか？

何も見つからなくても、生きてはいけないのですか？

見つかるまで、待つてはくれないのですか？

夢、目標、趣味、お金、宗教、恋愛、結婚、家族、

地位や名誉だけが“生きがい”なのですか？

それらの、カタチや物が無いと、生きてはいけないのですか？

ひとはそれぞれ、置かれた立場、人生のスタートが違うのです。

どうゆう“生きがい”を見つめるかは、あなた次第なのです。

『あなたは誰ですか』

あなたは誰ですか？

あなたは、あなたなのです。

無理してまで、今のあなた自身を変える必要はありません。

自分に無いものを求めるのは遠回りです。

自分にあるものを見つけるのは近道です。

あなたは、どちらを選びますか？

あなたの心の向く方を選んで下さい。

『自分を大切に』

あなたは、あなた自身を卑下したり、見捨てたりしていませんか？

あなたが、あなた自身を愛せないのなら、

いったい、あなた以外の誰が、あなたの心を救ってくれるのでしょうか？

あなたの心を救えるのは、あなた自身しかないのです。

他人には、あなたの心の中は見えません。

あなたは、あなたの悪い面ばかりを責めてはいませんか？

あなたにも、必ず良い面があるはずです。

あなたが、あなた自身で気付いていないだけなのです。

私達は、完璧ではありません。

誰もが、良い面と悪い面の両方を、心に持っているのです。

目を覚ますと、枕元の照明がついたままだった。

昨晚、詩集を読んだら、そのまま寝ちゃってみたい。  
今日は珍しく朝から目覚めも良く、気分も落ち着いてた。

「さあー、今日からガツコ！ ガンバんなきゃ！」

ベットから上体を起こし、思いっきり両手を突き上げて背筋を伸ばしているとき、

トントン。

「はあーい」

カチャ。

「なあーんだ、おねえちゃん、起きてたんだ。珍しいわねえー」

「なに？ 起きてちゃ悪いわけ？ 麻弥」

「そういうわけじゃないけど、麻弥の出番がなくなちゃって、残念！ ってね。」

おねえちゃん叩き起こすの、毎日、楽しみにしてたのにー」

「なによ、それ。麻弥ってさ？」

「さあー？ まっ、そんなこと気にしないで、せつかく早く起きたんだから、早く支度しないと。今日からガツコでしょ？」

「うん」

「じゃあ、途中まで一緒にいこ！ 支度終わったら、声掛けて！」  
「うん」

よかったあー。おねえちゃん元気そうで。少し、前の感じに戻ったみたい。

ふふっ、“パパ作戦”、大成功ねっ！

ったく、パパったら、麻弥たちほっ婆いてさあー、こっちからせつつかないと、連絡ひとつよこさないんだからあ！おねえちゃんがピンチな時ぐらい、パパにも役に立ってもらわないと困るっていうの！

こっちは、大変だったんだから！おねえちゃんの事で、ママだっで気苦労が増えてさあー！

今度家に帰って来たら、パパ、お仕置きよ！  
家族ほっ婆いたバツとして、それ相応の代償、払ってもらうんだからっ。

パパ、覚悟しときなさいよ！

独身気どりで羽を伸ばせるのは、今のうちだけなんだからね。

さてと、パパには何してもらっちゃおっかなあー。

パパが帰って来るの、楽しみよねえー。なんか、ワクワクしちゃう。

「へつくしゅん！あれっ？俺、風邪でもひいたのか？まだ先は長いからな、体調管理には気付けないと。それにしてもメール、ちゃんと真結花に届いたかな？後で、麻弥に確認しておくか」

#14…とどきますように。(後書き)

ようやく、少し元気を取り戻した様子の真結花。

このまま、順調に立ち直ってくればいいのですが…

次回につづく。

## #15：リスタート！（前書き）

久しぶりに学校に顔を見せた真結花。  
さて、クラスメイト達の反応はいかに…

## #15：リスタート！

さあ！ 今日から久しぶりに学校だあー。

何かが、心の中で吹っ切れたのか？ 珍しく、朝から気分や体調は、すこぶる快調だった。

あの事故の後、初登校した日に学校で倒れた俺は、結局、精神科医の判断で二週間近くも学校を休んでしまい、学校生活初日から、完全に出鼻を挫かれてしまった。

この休みの間に、心の中でもややもやしていた気持ちの整理が少し出来たのか？

気持ち的にも少し余裕が出てきて、ちゃんと勉強して、学校生活も楽しむぞ！ っていう

前向きな気持ちに満ち溢れていた。

「ほんと、久しぶりよねえー、こうやって、真結花と一緒に登校するの」

「そうだよねえー。わたしが休んでる間、鮎美ちゃんは、ずっとひとりで登校してたの？」

「ううん。真結花が抜けた後も、今日のようにさあー、麻弥ちゃんと、途中まで一緒だったのよねえー」

実は、麻弥ちゃんから家での真結花の様子、毎日、聞いてたのよねえー。

真結花を気遣う麻弥ちゃんの姿を見ると、もう、いじらしくって

「ふうーん、そうだったのね。麻弥ってそういうこと、全然言っていなかったよ」

そりゃ言うわけないでしょ。毎日、私に真結花のこと、相談して

たなんてさあ。

「たく、姉思いのキレイ妹よねえー。ああ、私もそんな妹が欲しいっ！」

「まつ、いいじゃん。おかげで麻弥ちゃんとも、今までよりずっと親密になったことだし、もう半分は私の妹みたいな感じ？ 妹、欲しかったのよねえー。毎朝、麻弥ちゃんと話していると、もうキレイクってさあー、マジで欲しくなっちゃった」

ほんと、『そんなに頑張らなくていいのよー』って言うって、ぎゅっと抱きしめたくなっちゃったんだから。

「ダメっ！ 麻弥はわたしの妹だもん。鮎美ちゃんにはあげないもんねえー」

だって、麻弥はほんと姉思いの優しい子で、可愛くってしょうがないもん。

「おつ、やけにムキになるじゃない。さては、『姉と妹、許されぬ禁断の愛の巻き』だったりして」

「もおー、鮎美ちゃんって、小説や漫画の読み過ぎじゃない？ そんなこと、現実にあるわけないじゃん」

「そっかなあー、世の中、広いことだし、可能性がゼロってことはないでしょ？」

「もしかして、鮎美ちゃんって、そっちの気があるとか？」

「あつたらどうするの？ 真結花は」

「ええっ？」

「私の正体、見たわねえー、赤ずきんちゃん。ふふっ、覚悟しな！ ガあー。たべちゃうぞっ！」

「きゃあー。ヤメテえー、オオカミさん。たすけてえー」

「ぷっ、あっはははっ」  
「あはははっ」

うん、真結花、元気そうね。もう、だいじょーぶみたい。

「おはよう、木下さん」  
「おはようー」  
「おっはよー！」  
「おはようー」  
「よう、おはよう」  
「おはようー」

んっ？ 二週間も学校休んでたのに…  
なんだかみんな、変わらず気さくに挨拶してくれる、不思議だ。  
そう思っていたら、

「おはよっー、まゆまゆうー」  
杏菜ちゃんが、駆け寄って、俺の正面から急にぎゅっ！ と抱きついてきた。

「おっ、おはよう」  
あいかわずというか、なんというか。  
「杏菜！ またそうやって抱きついて、真結花が困ってるじゃん」  
またしても、鮎美ちゃんが杏菜ちゃんを、俺から引き剥がしてくれた。

「だって！ まゆまゆが、二週間も学校休んでたし、学校に戻って来てくれて、スッゴくうれしいんだもん」  
「そりゃあ、わかるけどさあ、私だって真結花に抱きつきたくなくなる衝動、じつとガマンしてるってのに、あんたってえ」

「ええっ！ そうなの？」

俺は、少し驚きながら鮎美ちゃんを見た。鮎美ちゃんは、バツの悪そうな顔をしていた。

すると、その様子を見ていた智絵ちゃんが、急に会話に入ってきて、

「ええ、そうよ。そう思うのは、あゆだけじゃないと思うわよ。まゆかちゃんって、急に変わったもの。以前のまゆかちゃんならそうゆつの、想像できないのよねえ。今のまゆかちゃんって、まるで、か弱い妹みたいにあー、何か、こう、『守ってあげたい、守ってあげなきゃ！』って思っちゃうの。しかも、クラスには、男女問わず、急にまゆかちゃんファンが増えたみたいだしね」

智絵ちゃんまで？ えっ？ 何それ、“まゆかちゃんファン”って？

「なあ？ 友田」

「なんだ？ 喜多村」

「木下さん、ずいぶん休んでたけど、元気そうだな」

「そうだな」

「んっ？ どうした？ 友田。元気ないな。お前、話し掛けなくてもいいの？ 木下さんに」

「ああ、何か、以前のように、気軽に話しかけられる雰囲気じゃないんだよね。今の木下ってさあ、こう、妙に女の子の子してるオーラが出てるから、どうも、近寄りがたいというか、調子狂っちゃうっていうか。今は、話しかけるきっかけも、話題も無くてさあ」

「そっかあ。それは仕方ないな。木下さんに過去の記憶がない以上、以前と同じような雰囲気や話題で接するっていうのは、確かに難しいだろうなあー。まっ、そう気落ちせずに、気長に待つってことも

必要かもな。時間が解決するっていうことも、あるわけだし」

「ああ、残念だけど、喜多村の言うように、今は暫く様子を見て、そつと、傍らから見守ってるしかないよなあ」

キン／＼コン／＼カン／＼コーン

ガラッ。

「はい。座った、座った」

手を叩きながら、吉澤先生が入って来た。

「起立、礼、着席」

智絵ちゃんが号令を掛ける。

なんか、二週間前と全く変わらない、あの事故後の初登校日を思い出した。

「さてと、ホームルームだが、今日は特に連絡はない。来週から中間考査だから、今週、最後の追い込みをやっておけよ。それから、当然のことながら、各教科で赤点取ったら、それぞれ追試があるので覚悟しておくように。おっと、それと、先週から飯島、今日から木下が学校に出て来ているわけだけど、勉強、遅れてると思うから、回りの皆はフォローしてやってくれよ。ホームルームは以上だ」

うん、相変わらず、吉澤先生も変わってないよね。

「ねえ、鮎美ちゃん。飯島さんって、わたしが学校を休んでる間に、休んでたの？」

「ええ、そうよ。あの子、事情はよく知らないけど、病弱なのか、学校、休む事が多いみたい」

「そう」

「あの子のこと、気になるの？」

「うん、なんとなくね」

飯島莉沙子。そう、眼鏡をかけた、小柄で、大人しそうな感じの可愛らしい少女。

「じゃあ、次の休み時間にでも、声、掛けてみたら？ 私、ああいう大人しそうな子って、どうも、苦手なんだよねえー。どう、接したらいいのか、わかんなくって。智絵は、よく声掛けてるみたいだからだよ。さすが、学級委員って感じ？」

「わたし、莉沙子ちゃんに声、掛けてみるね」

やっぱり、真結花って、本質は変わってないのかなあ？

性格はズいぶん大人しくなって、変わっちゃったけど、困ってる子を見ると、ほっとけないたちなのは、変わってないようね。

真結花って、不思議と人を引き付けるようなオーラみたいなもの？ なんか、そういうものがあるっていうか、一緒に居るだけで気が落ち着くのよね。

今思えば、昔っからそういう雰囲気、持ってたんだけど、当の本人は、それに全然気付いていないみたいね。

「莉沙子ちゃんって、小説が好きなの？」

授業の合間の休み時間に一人、ぽつんと小説を読んでいる莉沙子ちゃんの事が気になって、

さつそく声を掛けてみた。

「うん。真結花さんは、小説、好き？」

「わたしの部屋にも、小説、沢山あるよ。」

「へえー、そうなんだ。私の第一印象と少し違うね」

「えっ？ そうなんだ？ どう違うの？」

「うん。真結花さんって何となく、文系じゃないような気がしてたから」

「そうなの？ 何か面白そうな小説があったら、今度貸してくれない？ 私の持っているのも貸すし」

「うん、いいよ。今度、私のお勧めの小説持ってくるね」

「ありがとう。でっ、あのさあー、お昼休みんだけど、お昼一緒に食べない？ 他にも騒がしいメンバーが3人もいるんだけど」

「えっ？ いいの？」

「うん、人数多いほうが楽しいでしょ？」

「ありがとう。真結花さん」

莉沙子ちゃんって、どことなく、なにか陰があるような子に見える  
ちゃうんだよね。

なんだか、俺と似てて、放っておけないというか。

お昼休み、いつもの？ メンバーに莉沙子ちゃんを加えた5人で  
昼食をとっていると、鮎美ちゃんが切り出した。

「あのさあー、智絵。来週からの中間考査んだけど、一緒に試験  
勉強してくれない？」

鮎美ちゃんが両手を合わせて頼み込んでいる。智絵ちゃんはかな  
り頭がいいらしい。

まっ、学級委員やってるくらいだから。

「うん、別にいいわよ」

「じゃあ、杏菜もお願いするのダあ」

「ええ、いいわよ」

「真結花もどう？ ガッコ休んでかなり勉強が遅れているみたいだしさ」

鮎美ちゃんが誘ってきた。

「それじゃあ、わたしも参加しよっかな」

休んでいる間は、鮎美ちゃんの届けてくれたノートのコピーを自分のノートに書き写して、授業に遅れないよう多少の勉強はしていた。

しかし、中間考査となると話はまた別だ。

「莉沙子ちゃんも一緒にやろうよ」

俺は莉沙子ちゃんにも声を掛けた。

「いいの？ 私も」

「もちろん、いいに決まってるじゃん、ねっ？ 智絵」

鮎美ちゃんが確認を入れる。

「ええ、どーんと来なさいよ！」

「おっ、頼もしいお言葉、さすが神様、智絵様」

「おだてても、何も出ないわよ、あゆ！」

「あゆあゆー、たまには杏菜もおだててよう！」

「それはナツシング！ あんたおだてたら、付け上がる一方じゃん！」

「そんなあー、やっぱ、りさりさもそう思っ？」

杏菜ちゃんが莉沙子ちゃんに顔を向けて、“りさりさ”っていう呼び名が、  
ようやく自分のことだと気付いたようだ。

「えっ？ ごめんなさい。私、余りみんなと喋ったことないから、よくわからなくて…」

急に、杏菜ちゃんから振られた莉沙子ちゃんが困ってる、助け舟を出してあげないと。

「杏菜ちゃん。莉沙子ちゃんは、このメンバーに入ったばかりなんだから、もうちょっと、慣れてからイジッてあげてね」

「うん、わかったあー。りさりさあー、これから杏菜をよろしくね！」

「いえ、こちらこそ、よろしくおねがいします。杏菜さん。それと、みんなありがとう。私も誘ってくれて」

「気にしなくてもいいって、ねえ？ 智絵」

「そうそう、人数多い方が楽しいし」

「よし、決まりね。じゃあ、誰の家で試験勉強やるかなんだけど、智絵ん家はどう？」

鮎美ちゃんが、まともに掛る。

「かまわないわよ。別に」

「じゃあ、今度の土曜日に開催しますか、智絵先生勉強会！」

「だからあー、おだてても、何も出ないからね」

午後の美術を担当する戸田先生。

彼女は眼鏡をかけ、デキル女的なオーラのある30歳半ば？ の女性教師だ。

結構美人なのに、未だに独身ということらしい。もったいないなあ。

担任の吉澤先生なんてどうですか？ 姉さん女房になっちゃうけど。

「莉沙子ちゃん、一緒に描こうよ」

「うん。ありがとう」

暫くの間、モデルになってくれている生徒のデッサンを黙々と描いていると、

「真結花さんって、絵が上手いのね」

「えっ！ そう？」

集中していた為、莉沙子ちゃんが後ろから俺の絵を覗いているのに気が付かなかった。

「ホント、真結花の以外な一面を見た気がするわ」

鮎美ちゃんも気になったのか？ 俺の絵を覗きにきた。

「ほほう、確かに。おぬし、やるのうお」

杏菜ちゃんも、興味本位でからかいにきた。

「確かに絵が上手いわね、まゆかちゃん。今度、絵を教えてくれな  
いかしら」

智絵ちゃんまで。

「んっ？ どーれ、どれ」

おまけに、美術の戸田先生まで俺の絵を覗いていた。

「ねえ、木下さん。美術部に入らない？」

「えっ？ わたしが、ですか？」

「そっ！ 木下さんって、帰宅部なんでしょ？ 絵の才能がありそうだし、私が見たところ、伸びると思うんだけどなあー」

「正確には、帰宅部じゃあないんですけど」

「ん？ 習い事とか、塾にでも通っているの？」

「まあ、そんなとこです」

「そっかー。もったいないなあー。じゃあ、木下さんの空いている日だけの部活でいいから、美術部に入らない？」

うつっ、そこまで言われちゃうと、断り辛いなあ。

「ねえ、まゆかちゃん。一緒にやらない？ 実は私、いちおう美術部の肩書になってるの。でも、忙しくて、殆ど幽霊部員になっちゃ

ってるのよねえー」

突然、智絵ちゃんがそう切り出した。

「えっ？ そうなの？」

「うん」

「じゃあ、真結花さんが美術部に入るんだったら、私も入ろっかな？」

莉沙子ちゃんが、そう言いだした。

「じゃあ、美術部に入るってことでいいかしら？ 木下さんと飯島さん？」

戸田先生が、まともに掛る。

「えっ？ まあ、別に問題は無いですけど……」

「私は、真結花さんが入部するんだったら、ぜひ」

「じゃあ、木下さんと飯島さんは、美術部入部ってことで決まりね。後で入部届け、渡すから」

ああ、断り辛くて、成り行きで美術部に入ってしまった。まっ、いつか。美術部は時間の空いてる日だけってことで。

## #15：リスタート！（後書き）

ようやく、吹っ切れたのか、元気を取り戻した様子の真結花。  
でも、まだ乗り越えなくてはいけない問題も、これから出てくるの  
でしょう。

次回につづく。

## #16：気持ちは女の子？（前篇）

昨日の美術の時間、押しの強い戸田先生に、半ばゴーインに美術部に入部させられたわけだけど、顔ぐらいいは出しておいた方がいいかなって思い、放課後、挨拶がてらに美術部に寄ってみることにした。まっ、戸田先生は、俺の腕を買って美術部に誘ってくれたわけだし、挨拶ぐらいいはしとかないなね。

ふっ、試験前1週間と試験期間の部活動は、原則自粛ってことらしいけど、運動部は直前の重要な試合、文化部は何か直前のイベントがある場合のみ、多少の活動が許されているらしい。

昨日の戸田先生の話によれば、今日、美術部は活動してるとのことだった。

鮎美ちゃんはテニス部所属だし、試験前で部活が休みってことで珍しく？ 勉強するからと言って早々に帰宅しちゃった。勉強するっていうのは、ホントかどうかはアヤシイけど。

杏菜ちゃんは、杏菜ちゃんで、相変わらずのゴーインにマイウェイだし、試験勉強なんて関係無いさ！ っといった感じで、漫画・小説同好会（いちおう文化部の扱いらしい）のメンバー集会に行っちゃったし、美術部の肩書（幽霊部員らしい）を持つ智絵ちゃんと、美術部に入りたいと言ってた莉沙子ちゃんは、何か用事があるらしく、そそくさと先に帰ってしまった。

「まったく、みんな、つれないよねえー。まっ、たまにはひとりも、いっか」

そんなひとりごとを呟きつつ、教室を出ようとするのと、

「げっ、ヤバっ！」

向こうから、以前、俺に絡んで来た、少し不良っぽい感じの女の子が歩いて来るのが見えた。

そうだ！ そのトイレに駆け込んで、やり過ごせばいいじゃん。そう思った俺は、彼女に気付かないフリをしつつ、トイレに逃げ込んだ。

「ふうーっ」

個室に入ると、思わず安堵の溜息が出た。

ヤバかったあー。こないだは、ワケもわからず、彼女を怒らせちゃった。今、彼女と顔を合わせるのはマズイよ。まだ怒ってたらイヤだし。ちよつと時間を見計らってからココ、出た方がいいよな。ほんと、彼女のこと、すっかり忘れてた。自分のことで手一杯だったし、他人のこと、考えてる余裕もなかったんだ。今度彼女と出くわす前には、ちゃんと彼女のこと、調べとかなきゃ。

それにしても彼女、俺のこと、何か恨んでいる様子だったよね。後々のこと考えると、この問題も早いとこ片づけちゃって、スツキりさせておいた方が、精神的にもラクになるんだけど。

ただ、今日は用事もあることだし、関わるのもめんどくさいから、このまま、やり過ごして逃げちゃえ。別に、彼女が俺に何か危害を加えたり、イジメたりして来ているわけじゃないし、今、わざわざ時間を割いてまで、この問題に、足を突っ込む必要もないよね。

「あれっ？」

さっきトイレに入ったコって、真結花様、だよな？

そういえば真結花様って、最近、全然見かけなかったんだよなー。どうしてたんだろ？ ガッコ、暫く休んだた？

まあ、そんなことはこの際、どうでもいいわつ。ふふつ、これは絶好のチャンス！ 今日こそは、真結花様とちゃんと話し合って、仲直りしなきゃ。よしっ！ 偶然を装って、トイレから真結花様が出て来たところ、背後から狙い撃ちよっ！ うん、この作戦でいこ

っ！

もういつかな？ そう思った俺は、トイレに後から入って来た他のコに、不審な行動に思われないようにトイレの水を流し、個室から出て手を洗った後、鏡の前で髪型を気にするフリをしつつ、できるだけ時間を稼いだ。そして、トイレから出た瞬間、

「真結花さん、待って！」

「えっ？」

俺は、驚きつつ、振り向くと、そこにはやり過ごしたはず！ と思ってた例の彼女が駆け寄って来ていた。わっ、出たーっ！ ってオバケじゃなんだから。大丈夫、気をしっかり持て、俺。

「この前のこと、ごめんなさい真結花さん。私、つい、キレたりしちゃって。もしよかったら、この後少しだけ、時間もらえないかなあ？ 真結花さんと、少しお話がしたいの」

「ああ、こないだのこと？ 気にしなくてもいいよ。わたしは大丈夫だから。ゴメン、ちよっと今、用事があって急いでいるから。その話はまた今度ってことで。じゃあねっ！」

そう彼女に一方的に告げると、俺は、猛ダッシュでその場を離れた。

「あっ、待ってくださいーい。真結花さん」

俺は彼女の声をムシし、そのまま走り続けた。

「はぁー、はぁー」

どうやら、彼女の追撃をかわすことができたようだ。自分でも、なぜだかよくわからないのだが、彼女がどうも苦手っていう意識が働く。

もしかしたら、彼女に対して、何かトラウマでもあるのかなぁー、俺って。

それにしても、彼女、この前とずいぶん態度が違ってたよね。ちよっと、拍子抜けしちゃった。

彼女のこと、そんなに、気にする程のことでもないのかなぁー。

「あぁん、もうぁー、せっかくのチャンスだったのにいー」

でも、いつか。真結花様、『気にしなくてもいいよ』って言うてたから、もしかして、少し許してもらえたのかな？ 真結花様との関係修復に向けて、これは少し明るい兆しよねえー。

ふふっ、今日は思わぬうれしい誤算だったけど、どのみち、あの作戦は実行するつもりだったし、次のステップへの前フリとしては、これでもいいかなっ。よしっ！ 決めたっ！ 試験明け、次の作戦実行よっ！

ガラッ。

美術部の部室を覗くと、たぶん部長なのかな？ って思われた、メガネの似合う、少し真面目そうな感じの上级生っぽい男子生徒が、椅子に座った三つ編みの可愛い感じの女子生徒をモデルに、油絵を描いている最中だった。

「こんにちは、木下真結花といいます。美術部の見学に来ました」

「ああ、戸田先生から聞いていた新入部員の人だね」

彼は絵を描く手を止めて、振り向いてそう言った。

「はい、そうです」

「あつ、僕は、二年生の沢村憲吾、モデルの子が、同じく二年生の横山千沙さん」

「はじめまして、よろしくおねがいします。沢村先輩、横山先輩」  
「よろしく。歓迎するよ」

どうぞっていう風に手を差し出して、沢村先輩は、俺に部屋の奥に入るよう指示した。

「こちらこそ、よろしく。木下さん」

横山先輩は、ポーズを崩し、わざわざ椅子から立ち上がって挨拶してくれた。

「へえー、沢村先輩って、やっぱり絵が上手なんですネ」

「今度、美術館で行われる学生や一般を対象にした展覧会用の作品なんだ」

「そうなんですか、横山先輩は、絵を描かないの？」

「絵は私も描くんだけ、今は沢村君のモデルやってるの」

「もしかして、部員って、二人だけなんですか？」

「いや、試験前だし、原則、部活は自粛だからね。僕の場合、部活休んでると作品の出品締め切りに間に合いそうになくてね。それでこうして横山さんにも協力してもらって、二人だけで細々と部活に出てるってわけさ。今は、三年生の先輩に二人、二年の僕達二人他にあと一人、一年生に二人の七人だったんだけど、今日、一年生の木下さんともう一人が入るって戸田先生に聞いてたから、全員で九人になるのかな」

「えっ？ 意外と、少ないんですね」

そう言う横山先輩は、

「そつなのよねえー。本当は三年生の先輩と、二年生にも何人が居ただけ、受験や就職に専念したいからって、退部しちゃったの

よね。うちの学校って、進学校でもないんだけどねえー。そもそも、うちの学校って、部活もそれほど活発じゃないし、文化部ならなおさらね」

「そうなんですか。それで戸田先生、勧誘が強引だったわけですね？」

「そうか、戸田先生ならそうだろうな。でも、絵は好きだから入部したんでしょ？」

「ええ、まあ。美術の時間に絵を描いてたら、楽しそうだなって思ってた」

「木下さん、だったら、さっそく私をモデルに絵を描いてみない？」

「えっ？ いいんですか、沢村先輩と横山先輩のお邪魔して」

「ええ、いいわよ。そこに紙と鉛筆、木炭はあるから」

あっ、しまった！ 時間、完全に忘れてた。

そう、時間を忘れて絵を描くことに没頭してしまってた。

気が付くと、もう随分と日が落ちて、窓の外も薄暗くなり始めているた。

「沢村先輩、横山先輩、余り遅くなると親が心配するので、今日はこの辺で帰ります」

「ああ、いいよ。基本的に時間は自由だから。いつ来ても、いつ帰ってもいいよ。木下さんの言うように、女の子は帰宅が遅いと親も心配するからね」

「それじゃあ、失礼します」

「またね、木下さん」

横山先輩は、椅子に座ったまま手を上げて挨拶を返してくれた。

沢村先輩と横山先輩かぁー。気さくで、いい人達だったな。それ

にしても、あの二人が真剣に見つめ合ってる姿を見ると、ちょっと恥ずかしかったな。試験前だし、いくらモデルだからって、ふっー、女の子があそこまで協力するものなのかなあ。何となくイイ雰囲気だったし、お似合いな二人って感じ？ あの子二人、もしかしてデキてる？ ちょっと、お邪魔虫だったかも。

おっと、そんなこと考えてないで、早く帰んなきゃ。ただでさえ、最近、色々とママに心配ばっか掛けているのに。帰宅が遅いと、また要らない心配掛けてしまうよ。

校庭に出ると、誰かが、グラウンドのゴールマウスに向かって、シュート練習している姿が目に入った。

あれっ？ 誰だろう？ こんな時間に。試験前なのに、運動部の部活はみんな、休みじゃないの？

あつ！ もしかして、あれは喜多村泰祐くん？  
たいすけ

へえー、部活は休みなのに、こんな遅くまで一人でシュート練習なんかしてるんだ？

見た目は爽やかなイケメンなんだけど、結構、頑張り屋さんなんだ。でも、なんでまた、制服のままで？

んっ？ どうしたんだろう？ 俺？ なんだか急に胸が息苦しいような、締め付けられるような妙な感じが… 気のせい？

「木下さーん」

あつ！ 見つかったやつだ。喜多村くん、こっちに向かってくるよ。

さっきから、何だかふわふわと妙な気分だったし、そのまま、帰ろ

うって思ってたのにい。

「木下さん、こんな遅くまでどうしたの？」

「えっと、今さっきまで部活の見学だったの」

「そういえば、木下さんって美術の時間、戸田先生に美術部に入らないかって、誘われていたよね」

「そう、いちおう、美術部に所属することになったんだけど、準美術部員って感じで、ずっとじゃないんだあー」

「へえー、そうなんだ？」

「喜多村くんは、遅くまで一人で自主練習なの？ 部活はお休みなのに、しかも制服のまままで？」

「ああ、ホントはダメなんだけど、さっきまで、図書室で勉強してさあー、息抜きにこっそりとね。」

それと、もうすぐ大会が近いし、レギュラー狙ってるから、ゴール感覚が鈍らないようにってね」

「一年生なのに、もうレギュラーってスゴいねっ！」

「いやあ、まだレギュラー候補で、レギュラーってなわけじゃないんだけどね」

「でも、一年生なのに、スゴイと思う」

「そんなことないさ、サブでも入れたらラッキー！ って思ってるから」

「ポジションってどこなの？ 喜多村くんの」

「いちおう、フォワード扱いだけど、中盤も出来るよ」

「へえーっ、今度、教えてもらおっかな？」

なっ、何に勝手に変なこと、口走っているわけ？ 俺って。

「木下さんって、確か地元のサッカークラブでサッカーやってるんだって？」

「うん、そうなんだけど、あの事故以来、全く練習には行っていない

の」

「そうなんだ？ そうだ、ちょっとボール蹴ってみる？」

「うっ、うん」

あつ、またまた、何言っただか。俺ってホント、大丈夫か？

場の雰囲気の流れに流されちゃってさあ。

しかも、妙に、ワクワクしてるしい。いったい、どうしちゃったって、いうわけ？

「じゃあ、こっちに来て」

喜多村くんは、無意識なのだろうか？ 俺の左手首を軽く掴むと、そのまま手を引いて、ゴールマウス前まで連れて来てくれた。

うわっ！ 初めて男の子なんかに手を掴まれちゃったよ。でも、

不思議と、ヤナ感じはしなかった。

どうしよう、なんかドキドキしてる。今日の俺って、やっぱりおかしいのかな？ ヤバいかも。

「そのスカートじゃあ、蹴りにくいかもしれないけど、軽くゴール向かって蹴ってみてよ」

喜多村くんはそう言つと、ペナルティーエリアにボールを置いてくれた。

俺は、右足で軽くぽんつと、ボールをすくい上げるように蹴ってみた。

ボールは綺麗な弧を描き、クロスバー（ゴールマウスの上側）に当たるか当たらないかのギリギリな感じでゴールに吸い込まれていた。これって、以前公園でボール蹴った感覚と同じだ…

「えっ？ 凄お い、今のループシュート」

「えっ？ 今の、凄いの？」

「うん、凄いわ、今は難しいよ。クロスバーギリギリ狙うなんて、蹴る距離を正確に掴んでないとゴールに入らないもん」

「ホントにいい？」

「ああ、ホントだよ。少しづつ、リハビリ練習しながら、サッカークラブへ復帰してみたらどうだい？」

「うーん、今はまだちょっとねえー。まだ、サッカークラブへの復帰の気持ち全然準備出来てないというか、ちゃんと出来るのかなって、わたしの中では不安で……」

「そうなんだ？ まあ、あんな事故があったことだし、暫く休んでたしね。でも、もったいないなー、もし僕で良かったらサッカーのリハビリ練習に協力するよ、土日でよければ？」

「えっ？ いいの？ せつかくの土日なのに、なんだか悪いし」

「こらあーっ！ また何を言ってるんだ、俺って…… ホントに、どうかしてるよ。」

心が、勝手に、そう言えって暴走してるよ。

「いいって、いいって、ちょうど土日の練習相手が欲しかったんだ」「喜多村くんって、土日も練習してるの？ スゴイ努力家だね」

「いやあ、そんな事ないよ。土日の練習って言っても、部活のようなハードな練習しているわけじゃなくて、基礎的な体力作りのためのランニングとか、筋力トレーニングとか、公園で軽くボール蹴ったりとか、暇な時や空いている時間見つけて細々とやってるだけさ、中学生の頃から続けているから、もう日常生活のひとつみたいなのかな」

「へえー、スゴイんだ？ 喜多村くんって」

「そんなことないって、俺より努力しているヤツはいくらでもいるよ」

「友田くんも、そうなの？」

「ああ。あいつも結構努力家かな？ でも、基礎的な練習は余り好きじゃないみたいけどさ」

「ふうーん。見かけによらず、頑張ってたんだ？」

「友田のこと、気になるの？ 木下さんは」

「えっ？ 何て言ったらいいのかな？ えっと、事故前までは、友田君と普通に仲がよかったよって、鮎美ちゃんから聞いてたの。でも、わたしに以前の記憶が無かったり、事故後も二週間も学校休んだりして、最近は友田君とも何だか話す機会も無いし、疎遠みたいだからさあ、何かムシしてるみたいで悪いかなって、思っちゃって」

「まあ、友田もその辺は少し気にしているみたいだけど、木下さんに気を使って、遠慮しているんだと思うよ。木下さんも、色々大変だったんだろう？ 木下さんがそのことで余り気にすることはないさ。」

木下さんが、サッカーに復帰したら、自然とサッカーの話題で、元のように仲好くなれるんじゃないかな？」

「喜多村くん、色々と気に掛けてくれて、ありがとう」

「いやあ、そんなことないさ。ところで、さっきのリハビリ練習のことなんだけど、今度の土曜日はどう？」

「えっと、今度の土曜日はちよつと別の予定が入っていて」

「そう、じゃあ、日曜日だったらいい？」

「でも、試験前だし、試験が終わった次の週ならいいよ」

しまった、ボクって、ちよつと焦り過ぎ。

「ああ、それも、そうだよな。来週、試験があるのに、そんな事してる場合じゃないよね？ じゃあ、来週の試験が終わったら、練習する日時連絡するから、メルアドと電話番号を交換しようよ。その前にちよつと待ってて、ボールだけ返してくるから」

「うん」

やったあー！ 木下さんのメルアドと電話番号ゲット！ しかも、

一緒に練習する約束まで取り付けた。友田よ、悪いけど、僕が先に一歩リードだからな！ この偶然訪れた、絶好のチャンスを見逃さない手はない。

あっちゃー、やつちやった。

ちよっと、軽はずみな行動だった？ 女の子が好きでもない男の子に、そう簡単に、メルアドと電話番号なんか教えちゃってもいいのかなあー。

えっ？ もしかして、俺って喜多村くんのが好きなの？ まっさかあー。そんなこと、あるわけない。単なる男友達だよ。そう、だからメルアドと電話番号ぐらい、教えてもいいじゃん。何も取って食われるってわけじゃないんだし。

結局、喜多村くんとメルアドと電話番号を交換し、最近物騒だし、女の子を一人で帰すわけにはいかないということで、降りる駅が違うっていうのに、わざわざ自宅まで送ってもらうことになった。

#16：気持ちは女の子？（前篇）（後書き）

どうやら、恋心に目覚め始めた様子の真結花。  
彼女自身は、それに気付いているのでしょうか？

次回につづく。

#17：気持ちは女の子？（中篇）（前書き）

真結花と喜多村くん。

偶然の出会いが、この二人の距離を、一気に近づけたようですが…

## #17：気持ちは女の子？（中篇）

帰りの電車の中、いつもより遅い時間に乗ったためか結構込んでいて、空いてる席もなく、喜多村くと立ったまま、向かい合わせになるような格好でドア近くに追いやられていた。しかも、喜多村くんが右手をドアに付いて俺を取り囲むような形になり、喜多村くんと距離が非常に近かったため、ちよつと緊張してた。

「結構込んでるよねえー」

「そうだね。今日はいつもと違う時間だからかな？ 部活が終わった時間にもよるけど、座れる日もあるよ」

「そうなんだ？ 部活が終わった後って疲れてるのに、座席に座れないのって辛いじゃない？」

「ああ、そうだね。もう慣れたけど、練習がキツかった日はさすがに辛いけどね」

「ふうーん、結構大変そうね」

「でも、木下さんも、同じようなこと、やってたんでしょ？ サツカークラブでさあ」

「そうなんだけど、全然、覚えてないのよねえー」

「あつ、ゴメン」

「えっ？ 何で謝るの？」

「いや、木下さん、記憶が無いこと、気にしてると思って」

「へえー、喜多村くんって、結構優しいんだね。」

「大丈夫、そのことは気にしなくてもいいよ」

それに、こうやって喜多村くんを間近でマジマジ見てると、背も高いし、やっぱカッコイイよ！

「そう、ならいいんだけど」

ああ、もう、木下さん、スツゴクかわいいっ！ さっきから、

その愛らしい上目使いで、ボクを悩殺する気なの？ ホンキにしちやうよ？ それに、こんなに近いとシャンプーなのかな？ さつきから、髪からスツゴクいい香りがするだけど。

ああゝもうゝクラクラしちやいそう。もうゝたまないっ！ いっそ、このまま、お持ち帰りしたいっ！

うつ、喜多村くん、さつきからじつーとこっち、見つめてるよ。

もうおー、そんなにじつと見ないでくれるかなあ？ ただでさえ顔に近いのに、めっちゃ恥ずかしいんだけど。それにしても、どうしたんだろ俺。さつきから、ドキドキがとまんないよ。

ちよつと、このままじゃあ、喜多村くんと目線も合わせらんないし、気まずいよなあー。

なんか、喋んなきゃ。

「んっ？ どうかしたの？ 喜多村くん。さつきから、おしだまっちゃって」

「あつ、ゴメン、ちよつと考えごととしてて」

ふうーっ、あぶない、あぶない。もう少しで理性が吹っ飛ぶところだった。

「そう」

つたく、君は卑怯だよつ、木下さん。今までこんな可愛い表情や仕草、誰にも見せたことないじゃん。もしかして、ボクに気があるのかな？ 期待してもいいの？ 木下さん。

「ところでさあー、リハビリ練習のことなんだけど」

「うん」

自宅に着くまでの間、来週のリハビリ練習のことや、サッカーに  
関することで喜多村くんと色々話し合った。二週間以上も体を動か  
していないブランクがあることから、無理はせず、まず基礎的な体  
力作りから始めて体慣らしをしようということで、体を動かす前に  
まず、十分にストレッチし、軽いランニングの後、ボールを使った  
簡単なウォーミングアップ練習をしようということになった。

結局、来週の試験明けの日曜日に練習しようということで、話は  
まとまった。

もう自宅は目の前。もうそろそろ、お礼、言っとなないと。

「喜多村くん、家まで送ってくれて、ありがとう」

「いや、女の子ひとりで帰すのも物騒だしさ」

「今日は本当にありがとう。じゃあ、またね。帰り、気をつけてね  
っ！」

「うん、ありがと。じゃあねっ！」

俺が玄関前の扉を開けようとした、そのとき、

「おねえーちゃん」

あっ、麻弥だっ。

自宅の向こう側から、愛犬“yuki”を散歩させて帰って来た、  
麻弥の姿が見えた。

帰ろうとしていた喜多村くんは、麻弥の声に振り向き、一瞬、立ち  
止まった。

あっちゃー。なんでこうも、絶妙なまでにタイミング、悪いワケ？  
ああー、もうおー、変なところで、麻弥に見つかっちゃったよ。麻  
弥のことだし、俺が男の子と一緒に帰ったとなりゃー、ゼツタイ、

からかうに決まってる。そう、それは間違いナイっ！

ぬぬっ、おねえちゃんに、オ・ト・コ？ これは、大事件だわっ！  
もしかして、友田って人？

あの奥手なおねえちゃんが、男の子と一緒に帰宅だなんて… 雨でも降るんじゃない？ この目で相手、しかと確かめなきゃ！

麻弥、yukiと共に小走りで、喜多村くんめがけて急速接近中。麻弥に見つかった以上、今更ジタバタしても仕方ない。ここは、開き直って、至ってふつーな態度とるのがベスト。

俺にチラッと視線を送ってきた麻弥の目が、一瞬、ニヤッとイタズラっぽく笑った。

うつ、やつぱ、こやつ、何か企んでる。

「あつ、こんばんは」

「今晚は、妹さんですか？」

「はい。麻弥です、よろしく」

「こちらそ、よろしく」

「ねえ、おねえちゃん。もしかして、この人が友田くんっていう彼氏？」

やつぱ、麻弥のツツコミ、キターっ！

「麻弥、なつ、何言ってるのよ、いきなり。ただのお友達、喜多村くんっていうの」

木下さん、ボクのこと、ただのお友達だってさ。その言い方、冷たいよなあ。オーケー、燃えてきたぞおー。それ以上のカンケイに、なってみせるさ！

「そうなの？ おねえちゃん。あつ、ごめんなさい、人違いなんか

して。喜多村さん、改めて初めまして。おねえちゃんが色々お世話になっているようで、学校で何か迷惑かけてませんか？」

「こちらこそ、初めまして、麻弥ちゃん。そんな、迷惑だなんて」

うん、こうして二人を間近で見比べると、麻弥ちゃんもお姉さんに負けず劣らず、カワイイっ！ 妹もいいよなあー。うちは男所帯だし、こんなカワイイ妹いたら、毎日、家も明るくて楽しいだろうなあー。でもやっぱりボクは、お姉さんの方がいいっ！

「そうよ、麻弥。まるで学校までダメ姉みたいな言い方、やめてよね」

しまった、自ら墓穴を掘ってしまった。

「だってえー、おねえちゃん、お家じゃあ、まるでダメっ子だもん。麻弥の目の届かない学校でも大丈夫なのかなって、気になるじゃない」

「うあーっ、まあー恥ずかしいじゃないの麻弥、友達の前で、そういう事言わないのっ！」

「ふふっ、随分としつかりした妹さんだね。まるで、妹を心配するお姉ちゃんみたいだなあー」

うわあー、まだ交友関係の浅い、喜多村くんにまで言われてしまったよ。シヨック！

「喜多村さん、おねえちゃんをお家まで送ってくれて、ありがとう」

「いえ、どういたしまして。じゃあ、僕はそろそろ帰るね」

「うん、気を付けて帰ってね」

「喜多村さん、これからもおねえちゃんを、ヨロシクねっ！」

「うん。じゃあね、また！」

今日はボク、ほんとツイTER。神様に感謝しなきゃ。

「だだいまあゝ。ママあゝ」

「ただいま」

「おかえりなさい。あらっ？ 二人共、一緒だったの？ 真結花は今日遅かったのね、何してたの？」

「うん、ちよっと部活の見学で遅くなっちゃった」

「部活って何？ おねえちゃん、学校で何か部活に入ったの？ サッカーの方はどうするつもり？」

「部活っていつても、美術部なんだけど、正規部員じゃなくて、準部員って感じ？」

「どうゆうこと？ おねえちゃん」

「うん、美術の時間に美術担当の先生から、空いている時だけいいからって、スカウトされたの」

「それって、幽霊部員なわけ？」

「そういうわけじゃないんだけど、気分転換に絵を描くのも面白そうかって、思ってた」

「じゃあ、サッカーの方はどうするの？ おねえちゃん」

「うん、とりあえず、リハビリ練習してから考えようかって」

「ママは、真結花の好きにすればいいと思うわよ。かけもち出来るのなら、出来る範囲で無理はしないでね。体だけがママは心配だから」

「うん、わかった、無理はしないようにするから」

「そう、本当に体だけは気を付けてね」

「うん。ところで、ママ？」

「なに？ 真結花」

「仕事の方はいいの？ 最近早かったり、休んだりする日が多いみたいだけど……」

「真結花は気にしなくてもいいのよ。オーナーさんとは昔馴染みだから、仕事のシフトを変えてもらったり、休みも融通効かしてもらい易いの。そのうち、時間に融通が効くフリーになることも考えて

いるの」

「へえー、そうなんだ？」

「麻弥も、おねえちゃんが暫く学校休んでた頃から、気になってた」  
「二人に変な気を使わせちゃって、ごめんなさいね」

自分の部屋に戻ろうとすると、何か用事でもあるのか？ 麻弥も一緒に部屋に入ってきた。

「ねえ、ねえ、おねえちゃんも結構やるわねえー」

麻弥が、俺の体を肘で突きながら言ってきた。

「えっ？ 何のこと」

「何って、またまた、とぼけちゃってえー。喜多村さんと友田さんと、二股じゃないの？」

「なっ、何言ってるのよ、そっ、そんなんじゃないって、二人共ただのお友達よ」

「ふふーんっ、ホントにそうなのかなあー？ そうやって意固地に否定するところが、なんかアヤシいなあ」

「もう、バカ言ってるんじゃないのっ！」

「でもさあー、喜多村くんのおねえちゃんを見る目、どう見ても恋する男の子だったわよ」

「きっ、気のせいよ」

「ホント、おねえちゃんって昔からそうゆつの、鈍感よねえー」

「もう、また何言ってるのっ！」

「でも、喜多村くんって、カッコよかったなあー、麻弥、ひと目惚れって感じ？ おねえちゃんにその気が無いなら、麻弥がアタックしちゃうかなあー」

「えっ？」

「あっ！ 今、一瞬動揺したでしょ？ やっぱ、おねえちゃん、喜多村くんのが気になるんだ？」

「まあー、麻弥は、人をからかうのもいい加減にしてよー」

「でも、気にはなるんでしょう？ 正直に言いなさいよー」

「うつ、うん」

「うああーっ、何言ってるんだー、俺って。かつ、勝手に口が…」

「ほら、やっぱり。おねえちゃんって素直じゃないんだから、もっと素直にならないと、ソンするよ」

「えっ、でも… そうゆの、苦手だし…」

「もう、じれったいわねえー、そんな事言ったら、喜多村くん、他のコに取られちゃうわよ。好きなら好きっていう感情を素直に表に出せばいいの、わかった？」

「そうゆの、自信がないし…」

俺が男の子を好きになるなんて、おかしいだろ、ふっ！。

でも、何なんだ？ 今日、喜多村くんのひたむきに練習に打ち込む姿を見てからの、この胸の息苦しさというか、締め付けられるような感じというか、妙なドキドキ感というか。これってやっぱり、その… “初恋” ってやつですかあー？ あーっ、また何言ってるんだー、俺って！ バツカじゃないの？ キモイって。

「あちゃー、おねえちゃんって、全然自分の事わかってないのね。

おねえちゃんが自分で思っているより、ずっと可愛いんだから、もっと自信を持たなきゃ」

「えっ？ そうなの？」

確かに、鏡に写った姿は美少女の部類に入るのはわかっているけど、心の中の“俺”という存在と、鏡に写った姿が何だか一致せず、未だに、自分の体なのに、まるで他人の体を借りているように、思えちゃうんだけど。

「そうよ、だから、もっと自信を持ってもいいの！」

「ねえ、麻弥、ちょっと聞いてもいい？」

「なに？ おねえちゃん、遠慮なく言つてよ」

俺が男の子を好きになるなんて、本当に頭がおかしいのか？ ヘンタイなのだろうか？

改めて冷静に考えると、このヘンな気持ちの正体はホントに“恋”なのか？ この際、ハッキリと確認したくなり、麻弥に思いきつて打ち明けることにした。

「うん、実は、今日、喜多村くんのひたむきに練習に打ち込む姿を見てから、胸の息苦しさというか、締め付けられるような感じというか、妙なドキドキ感っていうのか、なんか気持ちがずっとふわふわしてて、おかしいの」

「それって、もう立派な恋患いのサインだよ！」

やっぱりそうか、思い切つて確認しておいてよかった。確認しなければ、悶々として今晚寝られないところだったよ。俺って、男なんだとばかり思っていたが、心の奥底に隠れている本当の気持ちは、女の子なんだろうか？

「その恋患い、麻弥も経験したことがあるの？」

「うん、もちろん。むしろ、おねえちゃんが一向にそんな気持ちにならない事に心配していたの。ようやく恋に目覚めたか、よかったよかった。これは、ママに言つて、お赤飯炊いてもらわなきゃ」

「えっ？ そんな大げさなあー、ママには言わなくていいって、恥ずかしいから」

「だって、麻弥もううれしいの。おねえちゃんがふつーに女の子だって、分かったから」

やっぱり、あの事故で頭打ったから、頭がおかしくなったんだろうか？

もしかして、気持ちまで体に同化して、段々と女の子になって来てるんじゃないの？

だとしたら、これがある意味、女の子として自然な反応で、本来あるべき姿なのだろうか？

「麻弥、あのさー、実は、喜多村さんとメルアドと電話番号を交換して、試験明けの日曜日、一緒にサッカーの練習する約束したの」

「おっ、おねえちゃん、早速やるうー。やれば出来る子じゃん。麻弥も全力で応援するから、頑張つてねっ！」

「うっ、うん」

うーん。果たして、全力で応援されちゃっても、いいものだろうか？

まだ、心の整理が出来てなくて気持ちが浮ついているし、麻弥に確かめてみたものの、正直なところ、自分自身、このヘンな気持ちがホントに“恋”なのか何なのか？ よくわからない。今度、喜多村くんに会う時に、それを確かめることが出来るけど、なーんか、フクザツな気持ち…

「まゆかー、まみー、夕食の準備が出来たから降りてらっしゃい」

「はあーい、ママ」

「はあーい」

#17：気持ちは女の子？（中篇）（後書き）

真結花に、ようやく恋心が芽生えたようですが、本人は半信半疑な様子。

さて、真結花と喜多村くんの恋の行方はいかに…

次回につづく。

## #18：気持ちは女の子？（後篇）

「あのさー、木下さん。今日の放課後、図書室と一緒に試験勉強、やらないかい？」

「えっ？ いいの？ 喜多村くんの、勉強の邪魔にならない？」

「大丈夫だよ」

「ホントに、いいの？」

「ああ、かまわないさ。じゃあ、放課後、図書室でね」

「うん」

これって、もしかして、コ・ク・ハ・ク？ ええっ、まっさかあ  
！。

「お待たせ、喜多村くん」

「来てくれて、ありがと。実は、勉強しようっていうのは口実なんだ。大事な話があつてさ。ここじゃあ、ちょっと話辛いからさあ、屋上の階段まで来てくれないかなあ？」

「うん、別にいいよ」

ひと気がない所で大事な話って、やっぱり告白なのかな？ どっ、  
どうしよう？

「ここなら、誰も来ないよね？」

「うん、そうね。ところで、大事な話ってなに？ 喜多村くん」

「じゃあ、言うね。僕、木下さんのこと、好きになっちゃったんだ。この気持ち、もう抑えることができなくて」

「えっ？」

「ゴメン。急にこんなこと言って、迷惑だった？ 僕のこと、真剣

に考えてくれないかな？」

「ごっつ、ごめんなさい。今は、そうゆうの、考えられなくて。別に、喜多村くんがキライってわけじゃないんだけど、もう少し、時間をもらえない？」

「今、ここで、答えをもらえないかな？」

「今、わたし、少し頭が混乱してて、どうしたらいいのか、自分でもわからなくて。どう答えたらいいのか……」

「もうダメっ！ 僕、ガマン出来ないよ、木下さん」

喜多村くんに、ガツチリと両肩を掴まれてしまった。

「えっ！ どうしたの？ 急に……」

「ねえ、キス、してもいい？」

「そんなこと、急に言わないでよー、喜多村くん。わたし、まだ、なにも答えてないよ？ それに、まだ心の準備どころか、今、頭ん中、パニックっちゃってるのにー」

「ゴメン、自分でもこの気持ち、もう止められないんだ。目、つぶってよ、木下さん」

わっ、喜多村くんの顔、近づいてきたっ！

「もうおー、ダメだってばあー。喜多村くん、ヤメテえー！」

俺は、必死で抵抗しようとしたが……

ガバっ。

「ふうーっ、夢かつ。よかったあー」

昨日、喜多村くんとあんなことがあったから、こんなヘンな夢、見たってこと？ しっかし、あんな夢見るってことは、もしかして……俺にそうゆう願望があるわけ？

うーん。冷静に考えてみると、女の子である以上、いずれ、そうゆうシチュエーションも出てくるわけで、避けられない問題なんだよなあー。今、真剣に悩んでみたところで、答え出ないし、ホントに

そんな時にならなきゃ、どうすればいいのかなんて、わかんない。  
「ところで、今、何時？ って、まだ5時じゃん、寝よっ」

「ふぁーっ、ねむっ」

あんな夢みちやっただから、結局、あの後中々寝付けなかった。

カチャ。

「あれっ、おねえちゃん、今日は起きてたんだ？」

「うん、まあ、たまにはね」

「もしかして、寝られなかったの？」

「えっ？ なんでわかったの？ 麻弥」

「だって、少し目が赤いよ？ あっ、恋患い、しちゃったからでしょ？」

「そっ、そんなことないよ」

「ウソっ、おねえちゃんの表情、恋する乙女って感じだもん」

「えっ？ そうなの？」

「うん。後で、鏡で確かめてみたら？」

麻弥に言われたことが気になり、洗面所で顔を洗った後、マジマジと自分の顔を見つめてみた。

「うーん。特に、何も変わってないと思うんだけどなあー」

さては、麻弥、俺をからかったただけだな？ ったく、麻弥の言葉を真に受ける俺って、ホント、単純バカだよな。この調子じゃあ、そのうち、イタイ目に遭うかも。麻弥だからいいものの、ちよつとは、人を疑うってことも、覚えなきゃ。

皆で朝食をとっていると、ママが突然切り出す。

「ねえ、真結花、最近、学校で何かいい事でもあったの？ 真結花が学校を休み出した頃から、少し元気が無さそうだったし、ママ、ずっと心配してたの」

「へっ？」

「だって、なんか朝から顔がニヤけてるわよ。それに、麻弥までニヤニヤしちゃって。二人共、いったいどうしちゃったの？」

「ママ、それは、ヒ・ミ・ツ。だよねえ、おねえーちゃん？」

「うっ、うん」

「ふふっーん、そういうことね？ ママ、うれしいわ。真結花って、奥手だったから心配してたのよね」

「わっ！ もう即効でバレちゃったよ、おねえちゃん。ママってやつば、鋭いっ！」

「だって、あなた達のママですもの」

「もあー。麻弥が余計なひとこと、言うからでしょ？ そんなの、誰だってわかるわよ。もう、ママの前で恥ずかしいじゃない」

「麻弥、その子、どんな子なの？ 真結花の彼氏って？ 鮎美ちゃんが言ってた、友田くん？」

「うううん、違うよ。喜多村くんっていうの。それはもう、麻弥が一目惚れしちゃうくらい。似てるってわけじゃないけど、タイプのには内田駿次ばいかなあー。背が高くて、爽やかなイケメンで、カッコ良くて、スゴク紳士的な人だったわ」

内田駿次って、何でまたその名前が出てくるわけ？ 運命のイタズラってヤツなのか？

「そう、それは、ぜひママも一度会ってみたいわね。楽しみが出来たわ」

「もあー、ママも麻弥も、彼氏じゃないって、今は、ただの友達だからね」

「おねえちゃん、『今は』って言ったよね。じゃあ、彼氏候補には間違いないんだ？」

「えっ！ それは、その… あの… 何ていうか… えっと…」

「あっ！ おねえちゃんの顔、スッゴク赤くなってる。カワイイ…」  
「まあ、まあ、この話はそれくらいでお開きにして、早く支度しないと、学校遅れるわよ、二人共」

「はぁーい、ママ。おねえちゃんも、そうやって、いつまでも赤くなってるじゃないでさあ、早く学校へ行く支度しなきゃ」

「うっ、うん」

いつものように、途中で麻弥と別れ、鮎美ちゃんと一緒に通学していると、

「ねえ、真結花、何か良い事、あったわけ？」

「えっ？ なんで？」

「だって、いつもと雰囲気違って、顔がニヤけてるし、学校に行くのが何だか楽しそうなんだもん。それに、麻弥ちゃんまでニヤニヤしてたじゃない」

わっ！ 鮎美ちゃんにまでママと同じこと、言われちゃった。どっ、どうしよう、黙っていた方がいいのかな？

「うん、ちよつとね」

どうせバレルだろうけど、今は適当に誤魔化しておく。

「んっ？ ナニナニ、真結花。コソコソと、親友に、なに隠ししてるワケ？」

鮎美ちゃんが、“言いなさいよ！” とばかりに肘で突いてくる。

「うーん、今言うのはちよつと、恥ずかしいかなって」

「さては、はっはーん？ あの実結花がねえー、成長したわねえー。」

ようやく、お目覚めになったって、ことかしら？」

鮎美ちゃんの言わんとすることはわかる、もう即効でバレてるしい。

「やっぱ、鮎美ちゃんには、お見通しつてわけね。ほんと隠し事つて、できないなあー、わたしつて」

「でっ、その愛しの相手は、いつたい誰なわけ？」

いきなり、核心を付いてくる鮎美ちゃん。

「えっと、それは、その…」

のど元まで名前が出て来ていたが、思い留まって、言い淀んでしまった。

「どうせバレちゃうんだから、今のうちにゲロツてスッキリしようよ、ねっ？」

「ねえ、鮎美ちゃんには、彼氏がいるの？」

「うん、もちろん。中学時代のテニス部の一つ年上の先輩で、望月海晴くんっていうの。私が中二のバレンタインデーに告つてからの付き合いだから、もうかれこれ、2年は付き合っているのかな？」

「へえっー、そうなんだ？ 今は学校が違うの？」

「うん。じゃあ、はいっ！ 私の彼氏の事、言つてあげたんだから、今度は真結花の番ね？」

「えっと、彼氏なんていう関係には程遠くて、その、ただ、気になる男の子っていうか…」

「もうー、じれったいわねえー、ハッキリ言いなさいっ！」

「うん、喜多村泰介くんのことが、ちよつと、気になり出して…」

「ふうーん、喜多村泰介くんかぁー、意外や意外、真結花つて、結構見る目あるわね。あの子なら真結花を任せられると思うわ、割としっかりしているようだし。正直なところ、あの頼りなさげな友田くんと真結花がくつついたら、どうしようかな？ って思ってからでっ、もう告つたわけ？」

「えっと、わたしにも、自分の気持ちがよくわかんなくて。今は、そうゆう気持ちにはなれないんだけど…」

「もー、そうやって指くわえて、じつと待ってるだけじゃあ、他のコに取られちゃうわよ！ あの子、クラスでも女の子の間では結構人気あるんだからね！」

「えっ？ そうなの？」

「ホント、真結花って、そうゆうことに疎いというか、純情というか… これは先手必勝だわっ！」

鮎美ちゃんが、何やら考え込んでいる。

「鮎美ちゃん？ いったい、なに考えているの？」

「まあ、私に任せてって。お節介は承知の上よ。私が動かないと真結花って、奥手でほんとダメなんだから。この恋、必ず実らせてあげるわ！」

あのおー、そんなにハリきつてもらわなくてもいいんですけど…  
鮎美ちゃん。

「鮎美ちゃん？ 実は、そのおー、試験明けの日曜日に、もう会う約束はしちゃったんだけど」

「えっ！ そうなの？ 真結花してはやるじゃない、じゃあ、私の出る幕はなさそうね？」

「うん」

「私も真結花と喜多村くんのこと、陰ながら応援するから、悩んだり、困ったりしたら、いつでも相談するのよ」

「うん、ありがとう」

そう言っ、ホントによかったのだろうか？ まだ自分でも、自分の気持ちがよくわからないんだけど…

教室に入って早々、いきなり喜多村くと目が合ってしまった。

「おはよう、木下さん」

「おっ、おはよう、喜多村くん」

うつ、明らかに喜多村くんのこと、意識しちゃってる。なに？  
このドキドキ感は？ やっぱ、俺って“恋”しちゃってる、ワケ？  
うああーっ、自分で言ってる、めっちゃ恥ずかしいー。もう、恥ずかしすぎて、どこかに隠れたいって気分。

あつ、鮎美ちゃんが喜多村くんのところに…

「喜多村くん、ちょっとだけいい？」

「結城さん？　どうかしたの？」

鮎美ちゃんが喜多村くんを連れて、教室を出て行ってしまった。  
さっきは、影ながら応援するって言ってたのに…　もう、早速お節介のようだけど。

「あのさあー、喜多村くんって、真結花のこと、どう思っているの？」

「えっ？　どうって？」

「だから、真結花のこと、本気で好きなのかってこと！」

「えっ！　どうして結城さんがそのこと、知ってるの？　僕、友田以外には誰にも言ってるじゃないよ？」

「そんなの、真結花の様子を見ればわかるわよ。どうせ、まだ告げてないと思っていたわ。もう、グズグズしてんだから。真結花は喜多村くんの事が好きなのよ！　ホント、鈍いわねえー。真結花を見て、そんなこともわからないわけ？　男なら、ちゃちゃと、告っちゃいなさいよ！」

「えっ？　木下さんも、やっぱり僕のが好きなの？　もしかして両想い？　それは、僕も願ったり叶ったりだよ。実は、今度会う約束をした試験明けの日曜日にでも、告白しようって、心に決めてたから」

「そう、それならいいわ。でも、浮気や二股掛けたりして、真結花

を泣かせるようなマネしたら、私が許さないからね！」

「そんなことしないって、僕って、こう見えても一途なんだから」

「じゃあ、試験明けの日曜日、ちゃんと喜多村くんの方から告げてよ！」

「うん、わかってるって」

やったあー。結城鮎美の鉄壁な守りを、僕は突破したぞ。後は、ゴールを決めるだけだ！

この決定的なチャンスにゴールを外したら、ボクってホント、バカ。絶対にバシッと決めてやるからな！

友田、お前にはホント悪いけど、恋愛もスポーツと同じで、勝負事だからな。これは譲れない。

「鮎美ちゃん？ さっき、喜多村くんと、なに話してたの？」

「んっ？ 余計なお節介って、思ってる？ まあ、念押ししておいたから、頑張るのよ！」

「うっ、うん」

鮎美ちゃんってホント、行動力あるよ。今の彼氏にも自分から告っちゃうし、それに比べたら、わたしって、ほんとダメだよな。

えっ！、今、心の中で自分のこと、一瞬、“俺”じゃなくて、自然と“わたし”って思っちゃった？ これって、恋なんかしちゃったもんだから、やっぱ、心が女の子になってきてるんじゃないの？ “俺”って、真結花の中で消えちゃう運命なのかな？ そう思うと少し、不安ではあった。

#18：気持ちは女の子？（後篇）（後書き）

とまどいつつも、女の子として、喜多村くんを意識するようになった真結花。

彼女は、心の中の“俺”と、どう折り合いをつけていくのでしょうか？

次回につづく。

## #19：もつとレンアイを知るべしっ！

「真結花、今日は一緒に帰ろっ」

「ごめん、鮎美ちゃん。今日は、ちよつと図書館に寄ってから帰ろつかなつて、思つてて」

「そうなの？ どうしたわけ？ 図書館だなんて。いったい、何の用事？」

「うん、ちよつと、試験勉強でもしようかなつて。随分学校休んで、勉強遅れてるし」

「珍しいわねえー、どうしちゃったの？」

「えつと、家だと、どうも身に入らないっていうか、勉強する気にならないのよねえー」

「そう、じゃあ、仕方ないわね」

ふーん。真結花、なんかウソ付いてるわね。真結花つて、ホント、昔っからわかり易いコだわ。ウソつて付けないタイプだよ。あつ、今朝、喜多村くんをたきつけたのは正解？ もしかして、真結花、喜多村くんと図書館で初デート？ いつの間に？ まっ、私も二人のお邪魔虫するようなことしたくないし、しっかりと、頑張つてきなさいよっ。

鮎美ちゃんつて、やっぱ鋭いよねえー。ウソつて、気付いて疑つてたけど、見逃してくれたたって感じ？ 実は、図書館で調べ物したかつたんだよねえー。

「えつと、心理学関係のコーナーはつと、どこかな？」

受付嬢に聞いた方が早いよね。

「すみません、心理学関係の本つてどこですか？」

「はい、一番奥の列の棚から2番目の、ここです」

受付嬢はそう言って、配置図に指をさして教えてくれたので、さっそく目的の本を物色してみる。

「さてと、恋愛心理に関する本はつと」

うーん、結構沢山あるねえー。よし、これっ。『人間における恋愛システムとは』？

とりあえず、これ、読んでみるか。

『恋愛とは、人間が他人に対して抱く情緒的で、かつ親密な関係を強く願い求めようとする感情であり、その感情に基づいた一連の恋慕に満ちた態度や行動を伴うものである』というのは、“恋愛”という言葉の一般的な定義であるが、人間も動物の一種であり、優秀な種を残したいという動物本来の“種の保存本能”に“恋愛”という方法を用いているのに過ぎないとも言える。（同性同士の恋愛については、ここでは取り上げないこととする）

しかし、この地球上に多数存在する人間という同種の中から最も優秀な種を選び出し、子孫を残すことというのは、非常に困難な作業である。そこで、人間の進化過程において、種を保存するべき方法として生まれて来たのが“恋愛システム”である。このシステムは、他の動物には見られない、人間独特の種の保存システムとして、脳に加わった機能である。この“恋愛システム”に欠かせないのが、脳内麻薬の一種と呼ばれるドーパミン（快感を増幅する神経伝達物質）である。脊椎近くにある腹側被蓋野（ふくそくひがいや A - 10 エー・テンとも呼ぶ）という原始的神経核から始まって、高度な人間らしさを司る前頭葉まで達している神経路があり、これらは、快感神経系と呼ばれている。この快感神経系にスイッチを入れる働きをするのがドーパミンであり、A - 10 神経系で作られている物質である。

この快感神経系に一度スイッチが入ると、脳は快感を感じ、身体の動きも活発となり、ユーフォリア（多幸福感、ハイな感じ）を得る

ようになる。厄介なことに、このドーパミンを過剰に消費すると、幻覚や幻聴、妄想等を生じることもあり、精神分裂病によく似た症状が出てくる場合もある。このドーパミンは、覚醒剤と非常に似た構造を持ち、覚醒剤を使用した場合、ドーパミンが放出された時と同じようなユーフォリアを得ることになる。人が覚醒剤依存に陥った結果、精神分裂病によく似た症状が出るのも、ドーパミンの過剰消費と同じ原理であると言えよう。『恋は盲目』と言われるが、これは、脳内にドーパミンが放出されたことによる、“恋という麻薬”に脳が侵された結果なのである。

異性の好みを判断するのは、脳の奥深い部分にある扁桃体<sup>へんとうたい</sup>という部位であり、扁桃体が好みの異性を見分けると、ドーパミンが放出されるシステムとなっている。この扁桃体という部位は、感情の源でもあり、人間の恋愛感情や好き嫌いも、ここで判断していると言われている。

恋は、ある日突然、心に芽生えるものである。なぜ、その相手に恋をしたのか？とあなたが問われも、好きな相手が現れたから、としか答えようがないかもしれません。それは、あなたの扁桃体が判別している為です。

人間の恋愛感情や好き嫌いを決める出発点は、既に幼児期から始まっていると言われており、この時期に、親や周囲の人間から、どのような愛情を与えられるかが、その人の、その後の人間関係の形成に大きく関与してくるとの研究結果も出ている。それによれば、人間の脳は、幼児期に急激に発達し、誕生後、一年程経つと脳の体積も約倍近くまで増加する。そして、神経繊維がまるで枝のように次々と伸びていき、脳の基礎が出来上がる3〜4歳までのこの時期が、恋愛感情や人の好き嫌い等、人間の感情形成にもっとも重要な時期であるとされている。

この重要な時期において、親の愛情に恵まれない子供達はどんなになってしまうのか。例えば、母親が鬱病だった場合、赤ちゃんが笑わなくなる等、その後の子供の成長における感情表現にも、深刻な影

響を与えかねない。幼児期に受けた愛情が、その人の成長において、恋愛の行方を左右することも考えられる。言いかえれば、恋愛に対してポジティブであるか、ネガティブであるか、ということである。

さて、前記で述べてきたドーパミンの放出は、恋愛開始から長くとも1〜3年半程と見られ、それ以上は継続的に放出されないと言われている。つまり、恋愛には賞味期限が設定されている。

これは、ドーパミンが放出されている間に、男女間の生殖行為を活発化させ、種の保存を促進させる目的であると推測される。恋愛関係に陥り、付き合い始めたカップルや、結婚したカップルが、1〜3年程で別れたり、離婚たりするケースが見受けられるのも、このドーパミンの作用が大きく関与しているのではないかとの学説もある。このドーパミンの放出期間を過ぎると、恋愛初期のようなドキドキ感や新鮮さは失われてしまい、この期間を乗り越えたカップルは、恋愛感情から愛着（傍に居てもらわないと困る相手）へと変わると、ある学者は唱えている。

近年、医学は目覚ましい進歩を遂げ、今まで不治の病とされてきた病気は、次々と新しい治療法が開拓されて来た。しかし、どんな名医にかかろうが、どんな薬を飲もうが、絶対に治療ができないとされる病気がある。それは、恋患いである。『惚れた病に薬なし』という諺もあるくらい、恋患いとは本人にとっては深刻な問題であって、心身のコントロールが非常に難しく、これこそ、不治の病と言えよう。

人間が恋をすると、脳が不安に陥ると言われている。これは、恋愛感情を持つことによって、脳内のセロトニンという安心感を作り出す物質が、通常の半分程度まで減少すると見られているからである。特に女性の場合においては、男性の半分程度しか脳内セロトニンがなく、恋愛をすることによって、ただでさえ男性より少ない脳内セロトニンが、更に少なくなる為、情緒不安定な状態に陥ってしまふと為だと言われている。人間が恋愛をすると、恋愛対象の異性

を束縛したくなったり、その異性に対して嫉妬深くなったりするという現象も、この脳内セロトニンの減少が関与していると推測されている。従って、恋愛対象の異性に対して、今、何をしているのか？ 浮気していないか？ と常に気になってしまい、不安でしようがないと感じたり、食事がのどを通らなかつたり、常に一緒にいたいという強い欲求が出るのも、不安に陥れることによって、男女を結びつけようとする、人間の恋愛システムに仕組まれたプログラムであると思われる。

ここまでの話を簡単にまとめれば、人間は好みの異性を見分けると、脳からドーパミンが放出される。その結果、脳内では恋愛という麻薬に侵され、恋患いと呼ばれる不治の病が発病する。脳は、もうすぐ生殖が近いと判断を下し、恋愛対象相手と一緒にさせる為に精神的に不安な状態を作り、精神的な安定を求め、恋に落ちた男女を結び付けようとする。これが、人間の恋愛システムのメカニズムであると言えるのではないだろうか。

尚、ここまで述べてきた話は、私がこれまで調べてきた文献、学者等の研究結果や学説を元にして記述したものであり、記述内容の一部については、必ずしも明確な根拠や証拠があるわけではない、ということをつけ加えておく。

「へえー、そうなんだ？ こんなこと、ガッコじゃあ教えてくんないよ。わたしって、やっぱ、女の子的には正常？」

今、ふと、思ったんだけどさあー、“恋愛学”っていう学科があれば、みんな、喜んで勉強するんじゃないのかな？ ガッコとかで性教育とかはあるくせに、その前のプロセスで肝心な“恋愛”や“人間愛”については、ガッコじゃあ何も教えてくれないよね？ それって、なんかおかしくないか？

子供を作るうんぬんの前に、何で人間として生まれて来たとか、

何で人間として生きていくのとか？ 明確な理由とか意味、目的、  
そうゆうこと、ちゃんと、子供に教えられる大人って、この世の中  
にいるのかな？ そうゆうこと、子供にちゃんと教えられる大人  
が増えてるから、自殺って増えてるんじゃないの？

あつ、ちょっと、思考が別の方向に脱線しちゃった。

もうそろそろ、帰ろうかと思い、本を返しに机から立ち上がろう  
としたら、

「だあゝれゝだあゝ」

いきなり、背後から知らない女の子に目隠しされた。

「へっ？ わかんないよ、だれ？」

そう言うのと、彼女は目隠しの手を外し、俺の顔を覗き込むと、  
「うわあー、ほんま、めっちゃ久しぶりやん、まゆん」

ウェービーボブで、かなり明るめの茶髪の、活発そうな感じの他  
校の女子高生が、俺の隣に座ってきた。背は、俺より少し高いくら  
い。

「ごめんなさい、だれですか？」

「ええーっ、なんでえーなあ、つれへんなあー。真綾やんかあー、  
まゆ・まよコンビって言われた仲やんかあー」

「まあやちゃん？ ごめん、わたし、思い出せないの」

「そっかあー、もう小学校高学年以来やからさかい、忘れてしもた  
ん？ それとも、うちの雰囲気、かわったん？」

「あつ、もしかして、少年サッカークラブの？」

アルバムの少年サッカークラブの集合写真に、俺以外に女の子が居たことを思い出し、たぶん、そうだと思った。

「やっと、うちのこと、思い出してくれたん？」

「うん、なんとなくね」

「うち、こんなところでまゆんと再会出来るやなんて、思うてへんかったわあ」

この子って、関西人？ だよな？

「今も、サッカーしてるの？」

「うん、モチロン。うち、将来、代表目指してるんやさかい」

「へえー、スゴイね」

「なに他人事みたく言ってるねん。まゆんも代表目指すって言うてたやん、忘れちゃったん？」

「ごめん、ちよつと、覚えてなくって」

「まあやー、そろそろ、帰るぞおー」

向こうの机に座っていた、背の高い男の子から声がした。

「あつ、ごめん。うち、もうちよつと、まゆんと話したつかたんやけどなあー。うちと、携帯番号と、メルアド交換してくれへん？」

「うん、いいよ」

そう言つて携帯番号と、メルアドを交換した後、

「ねえ、あの男の子って、まあやちゃんの彼氏？」

「そうやけど。まゆんには、カレシおれへんの？」

「えつと、男友達ならいるんだけど」

「やつぱ、まゆんにカレシおれへんねや？ もったいないなあー、まゆんにお似合いのめっちゃかっこいい男の子、紹介してあげよつかあ？」

「まあやちゃん、気を使ってくれて、ありがとう。わたし、大丈夫だから」

「ふふんっ、さては、まゆん、今、好きな子でもおるん？」

「えっ？」

「だって、まゆんの顔に書いてあるんやもんっ」

「そうなの？」

「ははっ、まゆんって、昔と何も変わってないやんっ」

「まあ、からかったわね？」

「だって、なに読んでるん、その本？」

「あっ、これは…」

「まゆん、今、恋愛で悩んでるん？」

「えっと、それは、その… この本、単なる興味本位で読んでただけよ」

「ほんま、なんも変わってないんやあー、まゆんって。じゃあ、うち、もう帰るから、ほなねっ」

「うん、また」

「恋愛で悩んだら、うち、相談乗るさかい、いつでも、電話してやあ〜」

「ありがとう」

「ふうーっ」

短時間だったから、なんとか話を繋ぐことができたけど、あれ以上話してたら、ボロが出ちゃってた。記憶の無いこと、いちいち彼女に説明しなきゃいけなくて、めんどくさいとこだったよ。それにしも、関西弁？ インパクトあるコだったよね。

やっぱ、女の子って、ふつーに恋愛体質なのかなあ？ 今更、否定する気はないけどさあー、そうゆう恋愛感情に心も体も支配されてしまうのって、恐ろしいような気がする。だって、恋患いって、重度の症状になると、他に何も手がなくなっちゃうってこと、あるんでしょ？ ああー、俺って、いったいどうしたいのдар？

ホント、よくわかんない。

#19：もっとレンアイを知るべしっ！（後書き）

未だに、自身の恋愛観に悩み続けている真結花。

彼女は、その答えを見つけ出すことが出来るのでしょうか？

次回につづく。

#20：否定も肯定のうち？（前書き）

自身が抱く恋愛感情に自信が持てず、悩み続けていた真結花。

果たして、彼女は、その悩みに対する答えを、見つけ出すことができるのでしょうか？

## #20：否定も肯定のうち？

「ただいまっ」

「おかえりなさい、真結花。今日も遅かったのね、今日は何してたの？」

「えっと、今日は図書館で勉強してきたの、ママ」

「へえー、珍しいわねえー、真結花が図書館に行くなんて、中学生以来じゃない？」

「わたし、中学んときは、よく図書館利用してたの？」

「ええ、そうよ。真結花は、読書好きだったでしょ？」

「確かに、本棚に小説はいっぱい置いてあるけど……」

「部屋に置いてある小説に飽き足らず、なにやら小難しそうな文学小説、図書館から借りてきて、よく読んでたわよ。それっ、その本もなにか小難しい本のようね？」

しまった。この本、やっぱり無理してもカバンの中に入れときゃよかった。この本、ちよっと入れにくかったんだよね。ゴーインにカバンに詰めて、本を傷めると悪いしさあ。

「あっ、これ？ 勉強ついでに借りて来たの。まあ、小難しいったら、小難しい本かな？」

「なんの本？」

「えっと、その…… 人間心理に関する本」

「そうなの？ でも、なんでまた、そんな難しそうな本を？」

うっ、マズイ。この話題、これ以上、ママに突っ込まれないようにしないと……

「あっ、ちよっとね。たまたま、この本が目に入って、面白そうだなって、興味があっただけよ。それより、Yukiは？」

長居は禁物。ヘンに勘ぐられるよ。鋭いママなら、ゼツタイ、そ

う。

「今日も、麻弥と散歩に出かけてるわ」

「あつ、そう。じゃあ、わたし、部屋に戻るから」

早く、この場から退散しなきゃ。

「じゃあ、麻弥が帰って来たら、夕食にしましょ」

「はぁーい」

人間心理に関する本って？ 真結花、何か気になることでもあるのかしら？ 最近、やっと元気になってくれたと思ってたところなのに… ヘンな事、考えてなきやいいんだけど。 あつ、もしかして、真結花が恋しい？ そういえば、今朝、麻弥が真結花に彼氏ができたって言うってから、様子がヘンだったわね？ そうだね、麻弥に、真結花の様子を探ってもらおうかしら？

俺は自分の部屋に戻ると、疲れているのか？ カバンと借りて来た本を床に放り投げると、着替えもせずに、制服のままベッドに身を投げた。

「はぁーっ」

ホント、どうしちゃったんだろう？ 俺って。何だかこう、体が妙にだるくってさぁー、何もヤル気が出てこないんだけど… これって、マジで恋しい？ どうしよう？ どうしたら治るのかな？ でも、恋しいって、本にも書いてあったように、治療法がない病なんだよね？ やっぱ、いくら頭で否定しても、体はウソをつかないってことなのかなあ？

しかし、この調子じゃあ、試験勉強どころじゃないね。試験は来

週だっていうのにさ。

恋患いだかなんだか知らないけどさあ、今、こんな事にうつつを抜かしている場合じゃないだろ、俺っ。そんなことより、まずは目先の試験、そして、これからの目標だろっ？ これからの目標って…俺の、これからの目標っていったい何だろう？ まあやちゃんは、サッカーで代表を目指すっていう大きな目標を持ってんだよなあ！ほんと、凄いよなあ！。俺にもそんな大それた目標、持てるのかなあ？ 記憶を失う前なら間違い無く、まあやちゃんが言ってたように、サッカーで代表を目指すって思っただろうけど、今の俺に、果たして、そんなことが出来るのだろうか…

そういえば、明日の体育の授業、フットサルの試合をやるって言うたよね？ 暫く、体育の授業も休んでいたことだし、ここは、物は試しだ。いっちょ、やってみっか！ 自分の体がどこまで動くのか？ とにかく、やってみてから考えてもいいんじゃない？ 記憶は無くても、体は覚えているかもしれないし。やる前から諦めてちゃあ、この先もずっと諦めてばかりの人生になっちゃうかも。もし、ダメならダメで、別の道の選択を考えればいいじゃん。よしっ、決めた！ ママの許可をもらって、明日の体育の授業には出てみよう。

「ただいまあゝ、ママ」

「おかえりなさい、麻弥。ちょっと、相談があるんだけど、いい？」

「なに？ ママ」

「さっき帰って来たばかりの真結花の様子、それとなく探ってくれないかしら？」

「おねえちゃんが、どうかしたの？」

「真結花、今日は様子が少し、おかしい感じなのよねえ。今朝、麻弥が真結花に彼氏が出来たって言ってたでしょ。それから、真結

花の様子が少し、おかしかったのには気付いていたんだけど、余り気にはしてなかったのよね。さつき、帰って来た真結花と話してたら、また何か悩んでいるのかしら？ 難しそうな人間心理に関する本、図書館から借りて来ていたようなの。もしかして、恋思いでもしてるのかしらって思ってた。あの子、ママの知る限り、今までそんなこと一度もなかった様子なのよ。年頃の女の子なら、普通、恋愛とかに興味があって、憧れると思うんだけど、真結花はそういうたことには目もくれず、ひたすらサッカー筋って感じだったのよね。もしかすると、恋愛に関して、免疫が無いのかもしれないわね、真結花は」

「やつぱ、そうだよねえ。 おねえちゃん、今朝から様子がヘンだったもん」

「じゃあ、お願いね？ 麻弥」

「らじゃーっ！ ママ。その重要ミッション、この麻弥が、しかと引き受けたわ！」

「じゃあ、後でママへの報告、忘れないでね」

「イエッサー！ 麻弥は、今から10分後、おねえちゃんの部屋に突入、おねえちゃんの中に立てこもる悩みの種を撃退、その武装解除を行ったのち、心の奥底に閉じ込められた、自由を求める愛の解放と、その脱出支援を行い、無事ミッション遂行して帰還してまいります。以上」

「もう、麻弥ったら、アクション映画の見過ぎじゃない？」

「へへっ」

トントン。

さあー、ミッション開始の合図よ。

「おねえちゃん、入っていい？」

「うん、いいよ」

カチャ。

「麻弥、なんの用？」

「用事って程のことじゃないんだけど、悩み事、あるんでしょ？  
おねえーちゃん」

「はあ？ いきなり悩み事ってなによ？ 麻弥」

「もおー、おねえちゃんってほんと、素直じゃないんだから」

「なによおー、その遠まわしな言い方。わたしに言いたいことあれば、ハッキリ言えいいじゃん！」

うつ、これは、しょっぱなから、中々手強そうね。

「なにも、そんなにムキになって怒らなくてもいいじゃない。こっちは、おねえちゃんのコト、心配して聞いているっていうのに…」

「余計なお世話！ 麻弥にはカンケイないっ！」

「もう、そうやってイジケちゃってさあ。そうゆつとこ、おねえちゃんの悪い癖だと思うわ。喜多村くんに嫌われちゃうよ？」

「別に、嫌われたっていいもんっ」

うーん、おねえちゃんの機嫌、すこぶる悪そう。

「ほんと、どうしちゃったの？ おねえちゃん」

「どうもしないわよ、ちよっとイライラしてるだけよ」

はあー、なんで、こうイラつくわけ？

「やっぱ、そのイライラの原因って、喜多村くんのことでしょ？」

「なっ、なに言ってるのよ、麻弥。そんなわけないじゃん」

「だって、なに、その本は？ それが、いい証拠だわっ！」

しまった！

麻弥が、さつき、俺が床に放り投げていた『人間における恋愛システムとは』と書かれた本に指をさし、聞いてきた。

「えっと、それは、その… 単なる興味本位で借りて来ただけよ」  
うつ、自分で言ってる、ひじょーに苦しい言い訳だ。

「そんなの、ウソよね？ こんな本、借りてくるってことは、喜多村くんのこと、よっぽど気になって仕方ないんじゃない？」

ああ、そうですとも。くっ、認めざるを得ないのがクヤシイですつ。

「そつ、それがどうしたっていうのよ、麻弥」  
もう、こうなったら、開き直りだいつ！

「ほら、やっぱり気にしてるじゃない。大丈夫。おねえちゃんと喜多村くんなら、きつと上手くいくつて。麻弥が太鼓判押してあげる」

「なんで、そんなことが麻弥にわかるわけ？ そんなの、この先どうなるのかなんて、誰にもわかんないじゃん」

「たたく、俺ってホント素直じゃない。」

「それはさあ、女の第六感っていうヤツかなあ？」

「へっ？ なによそれっ、そんなの、当てになるわけ？」

「喜多村くんを見た瞬間、びびっと、来たのよねえ。そう、おねえちゃんとの運命の赤い糸が見えたのよ。将来、おねえちゃんはこの人と結ばれるんだわ、麻弥に、素敵なおにいちゃんが出来るんだわって」

麻弥が、神に祈りを捧げるようなカタチで胸の前で両手を組み、目をキラキラさせてる。もう、勝手に、麻弥の妄想の中で、俺を結婚さすなあーっ！

「はあ？ なに寝ばけたこと言ってるわけ？ 麻弥は。まだ、デートどころか、お互いの気持ちすら、ハッキリと確かめてないっていうのに」

ああー、もうじれつたいわねえー。鮎美ねえさんゴメン。麻弥、もうガマンできないっ。言っちゃうからね。

「ふふんっ、それがねえー、実は鮎美ねえさんから聞いて、口止めされてただけだよあ、鮎美ねえさんが喜多村くんの気持ちを確かめたら、喜多村くんもおねえちゃんのコト、ハッキリと好きって言ってたっさっ！」

「へっ？ あっ、あっ、そう」

頭では否定しつつも、一方で、もし、そうであつたら嬉しいかもっていう気持ちが、ずっと心の奥底でくすぶっていたのも確か。だから、あんな喜多村くんとあのヘンな夢も見ちゃったわけだし。はあーっ、なんでこんなにも、キューンって切ない気持ちになるんだろう？

「ちょっとは、気持ちのモヤモヤが、スッキリした？ おねえちゃん」

「……」  
「どうしたの？ おねえちゃん。あれっ、泣いてるの？」

「いったい、どうしたっていうのだろうか？ 自分でも全く意識していないのに、勝手に涙が頬を伝っていた。」

「それが、わたしにも全然わからないの。勝手に涙が溢れ出てきて……」

「それはねえー、きっと、おねえちゃんがずっと自分の気持ちを抑えて、ガマンしてたからだと思うの。少し安心して、気持ちがラクになったから涙が出たんじゃないのかな？」

「ほあーっ、確かに、そう言われてみれば、そうかも。麻弥ってやつぱ、鋭いっ。」

「麻弥、ちよつとヘンな事言ってもいい？」

「なに？ 遠慮なく言つて、おねえちゃん」

こんなに優しい麻弥なら、きつとわかつてくれる。そうだよ、大丈夫。ええーい、もう隠していてもしょうがない。この際、言つてしまえーつ。

「麻弥。実は、わたし、気持ちが男の子っぽい。だから、わたしが男の子に恋するなんて、頭がおかしいんじゃないのになって、ずっと悩んで」

ああ、勢いにまかせて言っちゃったよ。もう、後戻りは出来ないんだ。

「なに今更、深刻に言ってるわけ？ おねえちゃんが男の子っぽい性格だつてこと、そんなの、当然わかつてるわよ。麻弥が、そんなこともわかんない、ニブイ子つて思つたの？ おねえちゃんは「へっ？」

げつ、やっぱ、麻弥には以前からバレてたのか？

「おねえちゃんが男の子っぽい、そんなの元々じゃない。最近は少し、女の子っぽくなつてきたと思うけどさあ」

ふうーつ。どうやら、バレてないのか？ 麻弥、俺の言つた言葉の意味、何か勘違いしてる。

「そうなのなあ？ わたしつて？」

でも、麻弥に“俺”の存在、バレてなくて、ほんと、よかった。

「たぶん、その男の子っぽい性格のせいだと思うの。おねえちゃんは、女の子としてキズつくのがイヤで、恋愛なんかしちゃダメって自分の中で勝手に決めつけて、今まで自分の心にブレーキを掛けてたんじゃないのになつて」

「うーん、そうなのかなあ？ よく、わかんないけど」

と言いつつも、過去の記憶の中に、なにかトラウマがあつて、麻弥の言つたように、心にブレーキを掛けているのかもしれない。

「だてに、おねえちゃんの妹、何年もやってるわけじゃないんだからねっ、麻弥はさあ。これから、恋愛のことで困ったらさあ、いつでも相談には乗るからね。遠慮なく言ってよ、おねえちゃん」  
はあーっ、恐れ入ります、参りました。

「ありがとう、麻弥。ちよっとは、気分がラクになったかも」

「そう、それはよかったわ。もう泣きやんだことだし、落ち着いた？」

「うん、そうね」

「じゃあ、部屋着に着替えたら、夕食にしようよ、おねえちゃん」  
「うん」

やっぱ、麻弥には頭上がないや。一枚も二枚も上手って感じ？でもさあー、麻弥に慰められちゃってる俺ってさあ、もしかして、麻弥より精神年齢が低いってこと？ それって、やっぱシヨックだよなあー。イヤ、麻弥が、ふつーのコより、おませさんただけだね？ そう、そうに違いない。じゃないと、俺の存在っていったい、なんなの？ 全く姉としての威厳もヘツタくれもないじゃないか。この家族の中で、姉という存在として、機能しているのかさえ、怪しいぞ。イヤ、むしろ、家族に心配や迷惑ばかり掛けてる問題児で、厄介なお荷物なだけなのかも…

「あつ、またおねえちゃん、なにか考え事してる」

「えっ？ そう？」

「まあ、そんな悩んでる姿、喜多村くんに見せたら、不安がるよ？ 女の子は、笑顔、笑顔よっ」

あつそう。じゃあ、

「こう？」

俺は、麻弥に向かって無理やり作り笑いしてみた。

「ぷっ。なに？ そのヘン顔」

「えっ？ ヘンな顔してる？」

「うん、いかにも、作ってまーす！っていう笑顔よ。毎日、鏡の前で、自然な笑顔ができるように、練習してみたら？」

「えっ？ そんなの、練習しなきゃいけないものなの？」

「だって、おねえちゃんって不器用なんだもの。今をときめく女性アイドルだって、ファンの前で、いつでもカワイイ笑顔が出せるようにって、陰では密かに練習して、努力してると思うわよ」

「そうなの？ カワイイ笑顔って、そう簡単に、自然に出来ないものなの？」

「まあ、女の子は好きな人が出来たら、カワイイ笑顔って自然と出来るものだと思うんだけど、その人を慕う、内面から溢れ出る嬉しさっていうのが、自然に表情や笑顔、仕草に出るっていうか」

「そうなんだ？」

「でも、おねえちゃんの場合は別だからね。女の子としての自覚が、全然足りない！ 女子力不足よ！」

「やっぱ？」

「ほらっ、自覚してるじゃない。今まで、おねえちゃんが多少男の子っぽくても、それに目をつぶって、ほっぽいたママや麻弥も悪いんだけどさあ」

「ふーん、そうなんだ？」

「なに、他人事みたく言ってるの？ おねえちゃん」

「えっ？」

「これから麻弥が、女の子としてイロハ、ビシバシ、おねえちゃんに叩き込んで、鍛えてあげるわっ！」

「そんなのいいって、麻弥。今のままで、何も問題はないんだからさあ」

「なに言ってるのよ、そんなんだから、今まで、恋愛ひとつ出来なかったのよ！ 最近、おねえちゃんが少しだけ女の子っぽくなってきたとはいえ、麻弥からすれば、まだまだだよ。おねえちゃん、このまま、将来お嫁さんに行けなくてもいいわけ？」

「ちよっと、麻弥ってば、話がいきなり飛躍していない？」

「いいえ、ちつとも飛躍なんかしてないわ！ おねえちゃんにはこれくらい厳しく言つとかなないと、ほんとダメなんだから」

「もし、わたしがその女の子としてイロハ教育、拒否したらどうなるの？」

「ここまできて、今更そうきますか？ 今のおねえちゃんに、拒否権があるとも思ってる？ そういうことなら、不本意だけど、麻弥も、使いたくはない最終手段を発動させるしかないわねえ」

不気味な笑いを浮かべ、何やら企んでいる様子の麻弥。逆らうと、何かとんでもことになりそうな雰囲気だ。

「……」

「いい、わかった？ おねえーちゃん」

更に、ゴリ押ししてくる麻弥。ここは、俺が折れるしかなさそうだ。ハイハイ、根気負けしたよ、もう麻弥の勝ち。

「もう、わかったわ。じゃあ、ヨロシクお願い、麻弥センセイ」

「ヨロシイ。おねえちゃん、そうやって最初っからもつと素直になればいいのに。じゃあ、腹が減っては戦ができぬってわけじゃないけど、空腹を満たしてから特訓ね。夕食後、まずは、自然な笑顔の練習からよ」

「ハイハイ」

「なに？ その投げやりな言い方？」

「わかりました。麻弥センセイ！」

「そう、いい子ねえ。わかればいいのよ、おねえちゃん」

うああー、なんでこうなるわけ？ 話が別の方向に展開しちゃったよ。にしても、麻弥、この家族の中で、もうあんたは立派な“おねえちゃん”だよ。俺が太鼓判押してあげるから。俺、その“おねえちゃん”の看板下ろしますんで、後はヨロシク。

#20：否定も肯定のうち？（後書き）

ようやく、自身の抱く恋愛感情に、少しだけ向き合えるようになった様子の真結花。

とはいえ、彼女の苦悩は、これからまだまだ続くのかもしれないね。

次回につづく。

## #21: ヒ・ミ・ツ・ナ・カ・ン・ケ・イ?

今日、あの事故以来、学校に通い始めて、初めての体育の授業。だつてさあー、ずいぶん学校休んでたし、学校に復帰した後も、大事を取って、体育の授業は当分休みなさいってママから釘を刺されてたからね。でも、これだけ長い間体動かしてないと、ホント、体がなまっちゃうよ。

今は早く、この体を動かしたくってウズウズしてるって感じ？ フットサルの試合やるって言ってたしさ。今の自分がどれだけ体動かせるのか？ 早く試してみたいんだよね。それと、一昨日、喜多村くんに誘われて、サッカーボールをゴールに向かって蹴ったとき、スッゴク気持ちよかったことを思い出したんだ。サッカーボールがゴールに吸い込まれる瞬間、なんとも言えない快感って感じだったし。サッカー復帰に向けて、ちょうどいい肩慣らしかも。イヤ、足慣らし？

そんなことを思いながら、体育館の女子更衣室に向かった。

すると、

「真結花、今日はいよいよ体育の授業に復帰ってわけね？」

「うん、ようやくね。鮎美ちゃんってさあ、テニス部入ってるぐらいだし、やっぱ、運動神経はいい方だね」

「まあね。自分で言うのもなんだけど、普通の人よりもいいかな？」

「まゆまゆも、あゆあゆも、いいなあー、運動神経よくって。杏菜って、運動音痴なんだもん。とももだって運動神経いいし、なあーんか、杏菜だけ、蚊帳の外って感じ」

「そんなことないよ？ 杏菜さん。私も運動音痴な方だから、気にしなくてもいいよ」

莉沙子ちゃんが、優しいフォローを入れる。

「そうそう、りさちゃんの言うように、気にしなくてもいいのよ。人には得意分野と不得意分野ってものがあるんだし。あんなちゃんって、小説書いたり、漫画を描くの、得意じゃない」

続いて、智絵ちゃんまでフォロ―。

「智絵の場合は、特別よねえー。だって、勉強もスポーツも、お料理だって、ピアノだって、何でもデキちゃうもん。おまけに学級委員だし、美人だし、スタイルもいいし、性格もいいし。正に、絵に描いたお嬢様だもんねえー。その才能、少しぐらい分けてくれてもバチ、当たんないでしょ？」

「そうそう、鮎美ちゃんの言う通り。わたしも憧れちゃうなあー」  
だって、ホントにそうなんだもんなあ。

「もうあー。あゆも、まゆかちゃんも、ちょっと言い過ぎ。私にだって、苦手なものやコンプレックスぐらい、あるんだからあ。この世の中に、完璧な人なんて、いないんだよ」

「またまた、ご謙遜を。まっ、そういうところが智絵らしくって、好きなんだけどねえー」

そっ、鮎美ちゃんと同感。智絵ちゃんって、そうゆう鼻に掛けなところがいっていうか、お嬢様らしくないっていうか、庶民的で親近感あるっていうか。そうゆうところ、好きだなあー。

“女子更衣室”それは読んで字の如く、女の子しか入れないヒミツの部屋なわけで。

うーん。いよいよ、未知の世界へ突入ってわけ？　うれしいような、恥ずかしいような、妙な気分。

でも、他の女の子の着替えるところ、見えてしまっても仕方ないよね？　だって、今、女の子だもんね。

「どうしたの？　真結花、そんなところでボケーっと突っ立ってさあ。

早く体操着に着替えないと、授業に遅れちゃうよ？」  
「うっ、うん」

鮎美ちゃんに促されて部屋に入った途端、ムツと、女の子独特な香りが充満してて、圧倒された。

余り周りを気にせずに、さっさと着替えなくっちゃ。

「あれっ？ 真結花って、胸、少し大きくなった？ もしかして、成長したんじゃない？」

「そんな、ジロジロ見ないでよー、鮎美ちゃん。恥ずかしいよー」

「んっ？ 真結花、なに恥ずかしがってんのよ、女の子同士でさあ」

「んっ、どーれどれ？」

「きゃっ！」

「ふふんっ、杏菜の勝ちい」

「もうあー、杏菜ちゃん。いきなり人の胸、触ないでよー、ビツクリするじゃない」

「ったく、無意識に、“きゃっ！”なんて言っちゃたよ。もー、恥ずかしいったらありやしない。

「確かに、杏菜はその体に似合わないほど、胸、大きいよねえ」

「うん、確かに。俺も、鮎美ちゃんに一票。

「そうなのよねえ、うらやましいなっ！」

「智絵ちゃんにも、弱点があつた？」

「へへんっ、あゆあゆ、ともともにも勝った！」

女の子にとって、胸の大きさに、勝ち負けっていうもんがあるんだろうか？

「ほんと、杏菜さんの胸って、おっきい。男子の視線、気を付けてね」

「莉沙子ちゃんまで。でも、胸って、大きけりや大きい程いいっていうもんでもないと思うんだけど……大きいと、なんか肩こりしそ

うだしさあ。

「そうそう、この前の体育の授業もだけどさあー。男子と一緒に、またいやらしい視線、杏菜に集中しそうね」

「そうだよなー。莉沙子ちゃんや鮎美ちゃんの言うように、やっぱり、杏菜ちゃんの胸って目立つからさあ、運動中に胸が揺れたりすると、男子達のいやらしいーい視線の、集中砲火浴びちゃいそう。」

「杏菜、そんなの、気にしないもん！ ムシムシいー」

「そうなのよねー、ムシしておくしかないのかしら？ 学級委員という立場とはいえ、そんなのまでいちいち注意するっていうのも、男子からクレームが出ちゃいそうで、気が引けちゃうっていうか……」  
「うーん、杏菜ちゃんや、智絵ちゃんの言うように、やっぱり、ムシしとくしかないのかな？」

「杏菜さん、今度から、体育の授業のある日は、スポーツブラにしたらどうかね」

「そうそう、莉沙子もいいこと言うわねー、そうしなさいよ、杏菜」

「そうよ、あんなちゃん。それだけ胸、大きいんだし、そうした方がいいと思うわ」

「うん、確かに。俺も鮎美ちゃんや智絵ちゃんに同感。それがいいね、じゃあ、」

「同じく、賛成！」

「うん、わかった。みんながそう言うんだったら、今度から杏菜、そうするね」

「さっ、みんな、授業に遅れるわ。早くしないと」

最後は、智絵ちゃんが締めくくって、この話はおしまい。

「今日は、フットサルの試合やるわね。基礎練習も飽きて来たところだと思っしね。じゃあ、出席番号の奇数と偶数の二つに分かれて

チーム作って。10分ごとに休憩入れるから。メンバーは、自由に交代してね」

女子の女性体育教師、櫻木瑛里奈先生。大学出たてのほやほやの新米教師。通称、“さくえり”っていう名で生徒の間では呼ばれてるらしい。年齢が近いから、先生っていうより、可愛らしいお姉さんって感じかな？

その初々しさからか、特に、お姉さんに憧れる男子からの人気は高い様子。

「あと、屋内だから、試合中にシュートボールが壁に当たったりして、跳ね返ってくるかもしれないわよ。だから、交代の人は、ボールには気を付けてね。それと、向こうでも男子が試合をやってるから、邪魔にならないように見学しててね」

あつ、ここは、シュートチャンス！ えっと、ここは右に行くと見せかけて、左、  
今だ、今度こそ、ええーい！

ガッンッ！

「あっちゃー、また外れちゃった」

頭ん中のイメージじゃあ、こんなはずじゃないのになあ。

「ドンマイ、ドンマイ、まゆかちゃん。その調子でいこうよ！ ゴール外しちゃっても気にしないで」

「うん、ありがとう智絵ちゃん」

今度はポスト叩いちゃった。やっぱ、利き足じゃなかったから外れちゃった？

「木下さんにラストパス集中させるから、どんどんゴール狙っていつてよ」

「そうそう、このメンバーの中だと、木下さんが一番上手いんだしさ。向こうの結城さんのゴール、なんとか止めてよ」

「ありがとう、みんな」

うーん、これは、何とかしてみんなの期待に答えないと。それに、向こうのチームにいる鮎美ちゃん、やっぱり運動神経がいいし、ゴールだってもう2本も決めてる。意外に上手いつてゆうのには、少し驚いたね。こっちのチーム、まだ得点がゼロだよ。これは、負けてらんない。

ピピイー！

「すっごくいい、木下さん。これで3ゴール目よ！ やっと同点だね」

「そうそう、ほんと上手いわね、木下さんって」

「まゆかちゃん、ようやく調子出てきたみたいね」

「うん、やっと、体が慣れてきたみたい」

暫く体動かさなかったわりに、フットサルでこれだけ動けるなら、何も問題無くサッカーもやれるのかも。ただ、頭で思っているより体が追い付いてこないというか、やっぱり、練習サボってたせいかな、どうも体が重いんだよね。それに、反応もワンテンポ遅いつていうか。サッカーやってる子とともにマツチアップしたら、こんなレベルじゃ全然ダメかも。素人相手にやってるから、ずば抜けた身体能力のように思えちゃうだけでさあ。それと、体力的にも問題があるかも。まだ大して動いてるわけじゃないのに、もうへバツテ来たし。

「なあ、友田。木下って、こうやって見ると、やっぱりカワイイよなあー。元々カワイかったんだけどさあ、あの性格だったからなあ。今は、いい感じじゃん。結構、胸もあるみたいだし、おいしそうな脚してるしさあ」

「おいっ、筒井！ 木下のこと、そうゆうやらしい目で見んなっ！」  
「おっ、なんだよ、急にさあー、真面目ぶってんなよ。お前だって、そうゆの、好きだろ？」

「ちっ！ お前とはもう話さん！」

「なに怒ってんだよ？」

「もういいから、あっち行けよ、次、お前の番だろ」  
「へいへい」

「たたくよー、最近、どうも色気付いているような気がするよなあー、木下って。」

「ここ最近、妙に女の子らしくなってきたさあ。  
筒井のように、木下を見る目が変わるのはわかるけど。  
もしかして、今、好きなヤツでも居るのかなあ。」

ドンッ！

「イッタあーい」

ピピイー！

「あっ、木下さん、大丈夫？ ごめーん、ちょっと熱くなちゃって  
はあーっ、スッキリした。この子、前から気に入らないのよね  
えー。いいきみだわ。」

「大丈夫だから、これくらい」

「そう、ならいいんだけど」

「鶴見さんも大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ」

この子、カワイイからって、ちょっと最近、調子に乗って目立ち過ぎよ。

ホント、私を邪魔するようなマネ、しないで欲しいわ。

「まゆかちゃん、さっき、鶴見さんとぶつかちゃったみたいけど、大丈夫だった？ ケガ、どこもない？」

「うん、大丈夫。どこもケガしてないし、心配しないで、智絵ちゃん」

智絵ちゃんって、ほんと優しくて、気が回るコだよねえ。鮎美ちゃんとは、またタイプが違うんだけど。もし、この瞬間、俺が男の子だったら、惚れちゃってもいいですか？ って感じ？

「ねえ、木下さん。さっきの鶴見さんって、ワザとぶつかってきたんじゃないの？」

「いいじゃん、別に。直接フリーキックもらえたんだからさあ。河合さんが蹴りなよ、フリーキック」

「えっ？ 私なんかでいいの？」

「いいの、いいの。わたしばかり蹴ってたら、面白くないでしょ？」

「うん、じゃあ、私、やってみる」

正直、かなりヘバッテ来た。もう交代しよつ。

「ふうー。つかれたあー」

「おつかれえー、まゆまゆう。ゴールラッシュ、スゴかったよ」

「ありがと。あれっ、杏菜ちゃん、試合に出ないの？」

「しーっ、黙ってたなら、わかんないじゃん」

「まつ、その方がいいのかもね。杏菜ちゃんの胸に、男子の視線、集中砲火されそうだし」

「そうそう、さつきもさあー、休んでる男子達のいやらしいーい視線、まゆまゆを直撃してたよ」

「えっ？ そうなの？ 試合に集中してたから、そんなの、感じなかったけど」

うつへえー、それってマジ？ なんか、想像しただけで、ゾクつと寒気がしてきた。

「まゆまゆって、そうゆうの、ホント鈍感なんだから。気を付けないと、ストーカーとかに襲われちゃうぞっ！」

「えっ？ まっさかあー」

「まあー、まゆまゆって自分がカワイイってこと、もっと自覚しなきゃ。そうゆう、油断が危ないのっ。年頃の男子って、飢えた野獣なんだから」

「うん、わかったわ。杏菜ちゃんの忠告、心に留めておくから」

喜多村くんも、やっぱり男の子なんだし、例外なくそうなんだろうか？ もし、この体、あの夢のように彼に求められてきたら、俺はいったいどうしたらいいんだろ？ ってそんな心配、まだ付き合ってもないくせに、何考えてんだよ、俺ってさあ。

「ところでさあー、向こうの男子の試合見てただけとお、さつきまで出てた喜多村くんって凄かったよ。まゆまゆと同じでさあ、次々とゴール決めてたよ」

「へえーっ、見てみたかったな、喜多村くんのプレイ」

「今日は、喜多村くんがヒーローで、まゆまゆがヒロインってことね。ふふっ、お似合いよねえーお二人さん」

「えっ？ 何のこと？」

「まあー、しらばっくれちゃってさあー。杏菜にはお見通しなんだからあー」

「えっ？ それって、鮎美ちゃんから聞いたの？」

「うううん、そんなの、昨日の二人の様子を見れば、なんとなくわかるじゃん」

「って、ことは、クラスの皆も知ってるの？」

「さあーねえー、女子は他に知ってる子、いるかも。そゆうの、敏感だし。少なくとも、ともともやりさりさは知ってるよ」

「そうなの？」

「うん」

「あっちゃー」

「どうしたの？ まゆまゆ」

「あつ、ちよつと、今軽いショックが…」

「大丈夫だって、ともともや、りさりさだって、他のコには黙ってるから」

「でも、いずれ、みんなにバレちゃうよ？」

「まっ、そのときは、公認ってことで、みんな、諦めるんじゃない？」

「そんなもの？」

「うん、そんなもんだと思うよ。まゆまゆだったら、仕方ないって思っんじゃない？」

「そっかなあー」

うーん、できればこのまま、喜多村くんとのコト、ヒミツなままにしておきたい。だってさあー、麻弥からは間接的に聞いたわけだけど、喜多村くんの口から直接、気持ち聞いたわけじゃないんだからさあ。こつちだって、まだキモチが固まっているってわけじゃないし、まだ俺の心の中では、未だにグラグラと揺れ動いてる。恋に悩む乙女心ってさあ、正にこつゆう心境なんだろうか？

それと、昨日、麻弥から伝授された自然な笑顔って、ホントに喜多村くんを目の前にしたとき、ちゃんと上手く出来るのかな？ 正直、自信なんてものは何も無い。ってナニ考えてんだあー、俺って

うわぁー、もう恥ずかし過ぎる。

「まゆまゆ、大丈夫？」

「えっ？ 何が？」

「だって、顔が赤いよ？」

「へっ？ ちよつと、体を動かし過ぎちゃったのかな？」

「ふふんっ、さては、今、喜多村くんのこと、考えてたでしょ？」

「なんで？」

「だって、まゆまゆって、わかり易いんだもんっ」

「やっぱぁー、俺って、すぐに表情や仕草に出るみたいだから、もうちよつと気をつけないと。」

「ねえ、杏菜ちゃん。わたしって、そんなにわかり易いキャラなの？」

「えっと、今のまゆまゆって、以前よりも増して喜怒哀楽がハッキリしてるのかなぁ？ お天気みたいに気まぐれで、表情がくるくるって変わるの。そう、まるで幼子のような感じかなぁ？」

「それって、精神年齢が低いつてこと？」

「えっ？ まゆまゆ、気を悪くしたならゴメン。そうゆうわけじゃなくってさぁ、それだけ、まゆまゆの表情が豊かってことかな」

「やっぱ、少しぐらい、直さなきゃダメかなぁ？」

「そんな必要、全然ナイよ」

「なんで？」

「だって、それが今のまゆまゆの魅力だし、個性じゃん」

「そう。じゃあ、このまま、ムリに変えようなんて思わないで、自然なままでいいのかな？」

「うん、まゆまゆは今のままでいいの。もしかして、喜多村くんのコトで、ムリして違うキャラ目指そうなんて思ってる？ そんなことしたら、杏菜、まゆまゆのこと、キライになっちゃうもんっ」

「えっ？ そんなぁー」

「じょうーだん。だってね、女の子って好きな男の子が出来ちゃうと、友達から離れていっちゃうコッているから」

「大丈夫、わたしはそんなことしないって」

「ほんとかなあゝ、アヤシイー」

「もう、ホントだって」

「だって、まゆまゆって、今、喜多村くんにぞっこんなワケでしょ？」

「シーツ！ 他のコに聞こえちゃうじゃない、杏菜ちゃん」

「ふふっ、ホント、今のまゆまゆイジるのって楽しいいー」

「ったく、人をおもちやにしないでよぉー」

「あははっ、やっぱ、まゆまゆってイジってて面白いね」

「もう、杏菜ちゃんってほんと、イジワルうー」

ピピイー！

「その二人、イエローカードよ！ 何やらお喋りに夢中なようであんなに楽しそうだわねえー。そうゆうことは、休み時間にたっぷりしなさいね。まだ授業中なんだから、私語は慎みなさい！」

しまった、“さくえり”に警告を受けてしまったようだ。今度警告出されちゃったら、即刻退場ってこと？

「すみません、櫻木センセイ！。もぉー、杏菜ちゃんのせいで怒られちゃったじゃない」

「へへっ」

「柚木さん？」

「へっ？」

あの可愛い櫻木センセイが、何やら杏菜ちゃんを睨んでいる。

「あなた、まだ試合に出てないわね？」

「えっと、その…体の調子がいまひとつ悪くって」

「誤魔化さないのっ！」

「ハイっ！」

さくえりって見た目に寄らず、意外とコワイ？

「じゃあ、水瀬さん、あなたが柚木さんと交代して」  
「はいっ」

杏菜ちゃんは、智絵ちゃんと強制的に交代させられ、しぶしぶつて感じで試合に引きずり出されてしまった。まあ、人をおもちやにした、そのバツってヤツでしようかねえ！。

#21：ヒ・ミ・ツ・ナ・カ・ン・ケ・イ？（後書き）

ようやく、自身の恋愛感情に向き合い始めたものの、今一歩が踏み出せない真結花。

まだまだ、先が思いやられそうですね。

次回につづく

## #22：サイアクな週末（前書き）

昨日、体育の授業で張り切り過ぎてしまった真結花。  
その代償は、意外と大きかったようです…

## #22：サイアクな週末

「おねえちゃん、朝よー」

「うっ、うん。ごめん、麻弥、起こしてくれない？」

「どうしたの？ おねえちゃん」

「昨日さあー、ちよつと体育でハリきり過ぎちゃって。たぶん、筋肉痛だと思うんだけど、脚が痛くって」

「よつと。ホント、大丈夫？ おねえちゃん」

「イタタタっ、うっ、なんか下腹部も痛い」

「ねえ、おねえちゃん。もしかして、アノ日じゃない？」

「えっ？ マジで？ ったく、超サイアク！」

「サプリメントあるから、飲んだ方がいいよ。おねえちゃんって、重い方だもんね。30分ぐらいで、スーッと楽になると思うよ」

「ありがとう、麻弥」

はあーっ、月一回の、女の子にしか味わえない忌まわしいイベント。ったく、うっとおしい。

とはいえ、こればかりは避けられないわけで… こんなの、なかったらいいのにー。

ホント、男の子だったら、こんなの無くてラクちゃんのにさっ。

あつ、そういえばさあ、数日前から妙にイライラすることが多かつただけど、もしかして、コレのせい？

そう、今思い返せば、これは、サイアクな週末へのプレリユードに過ぎないのであった。

俺は、いつものように鮎美ちゃんと登校していた。

「はぁーっ」

「もしかして、アノ日？」

ピンポン。ご明答です。さすが、鮎美ちゃん。

「うっ、うん。それだけじゃなくて、筋肉痛もあって、ダブルパンチ状態って感じ？」

「まあ、昨日、急にあれだけ動いたんだから、筋肉痛にもなるわねえー」

「鮎美ちゃんは、大丈夫なの？」

「ふふんっ。真結花とは鍛え方が違うからね。普段から、テニスで汗流してるし」

「そっかぁー。わたし、全然体動かしてなかったから、そのツケね」  
「でもさぁー、サッカー、本格的に再開するんだったら、今のそのなまった筋力と体力じゃあ、全然ダメなんじゃない？」

「そうだよねえー、せめて、基礎体力ぐらい、つけないとなぁー。

昨日のフットサルだって、ちょっと動いただけで、息切れしてたし」  
「まっ、そんなに焦んなくてもいいんじゃない？ ゆっくりと、マイペースでやればさあ。無理すると、ケガしちゃって、逆に復帰が遠のくかもしれないわよ」

「そうよね。かなり休んでたんだから、休んだ分ぐらい、時間が掛つてもおかしくないよね？」

「そうそう、焦んないの」

「すみません。ちょっと、お話聞いてもらえませんか？」

「へっ？」

鮎美ちゃんと話し込んで気付かなかったのか？ どこから湧いて出て来たのか？ 30歳半ばぐらいの、スーツ姿のキャリアウーマンって感じの女性が、いきなり俺に声を掛けてきた。

「今、あなたに、不幸の相が出ているんです。あなたをお見掛けしたところ、どうしても見逃せなくって。このまま放っておくと、大変なことになりますよ?」

「はあ?」

「お手数はかけません。3分だけ、お時間もらえませんか?」

「私達、これから学校だし、急いでるんで。真結花、いこつ!」

通り過ぎようとすると、その女性が、俺の目の前に立ち塞がった。「ちよつと待ってください! あなた、幸せになりたくないんですか?」

すると、鮎美ちゃんが俺をかばうように前に出て、

「ちよつと、いきなり言いがかり付けてきて、失礼じゃないですか? じゃあ、こちらとも言わせてもらいますけど、そう言うあなたは、今、幸せなんですかつ! 朝っぱらから、こんなことしててっ! 人の幸せ心配するより、あなたの自身の幸せ、心配した方がいいんじゃないですか? こんなことしたら、それこそ、あなたが不幸です。行き遅れ女になっちゃいますよっ!」

鮎美ちゃん、すかさず大反撃!

「はっ、はあ?」

敵、完全に沈黙。戦意喪失のようです。

「さっ、真結花。あんなのムシして、いこつ!」

「うん。さっきの、いったい何なの?」

「ああ? どうせ、ワケわかんない、アヤシイ集会の勧誘でしょ? しっかし、まだーあんなこと、やってる人達、いたんだ? もう絶滅品種だと思ってたけど、あんなのに遭遇するのって、ホント、超珍しいわねえー。別の意味で幸運かも。ああー、スカッとした。朝から、ストレス解消っ!」

「ねえ、鮎美ちゃんって、ああゆうアヤシイ人達に、よく声掛けられてたの?」

「まあーねえー。ちよつと前までさあー、街歩いてるとモデルにならない? とか、本屋で立ち読みしてたら、突然、英会話やらない

？　とか、そうゆう怪しげな勧誘とかあー、ナンパとかで知らない人達に声掛けられること、いっぱいあったのよねえー。そんなのいちいち構ってたら、ウザいだけだし、キリがないよ。毅然とした態度で、スパッと断らなきゃ。あつ、真結花も気を付けなきゃダメだよ。今の真結花って、ああゆう奴らのいいカモよ。さっきだってそうだし」

「そうなのかなあー？　それにしても、なんであの女性が独身ってわかったの？」

「ああ？　左手の薬指、指輪をはめてなかったでしょ？」

「へえー、鮎美ちゃんって、そうゆの、よく見てるよね。わたし、全然、気付かなかった」

そう、鮎美ちゃんにしても、ママ、麻弥にしても、ほんと観察力が鋭いよねえー。俺ってウソ付けないのか、直ぐ表情に出やすいらしくって、思ってること、即効でバレちゃうみたいだし。

「そんなことよりさあー、朝からムダな時間取られちゃったもんだから、急ぐよっ！」

「あつ、ちよつと待ってよ、鮎美ちゃん。走ると脚痛くて、辛いんだけど」

「甘えてんじゃないのっ。それくらい、ガマンしなさいっ」  
うっ、なんか、ビミョーに鮎美ちゃんが冷たいような気が…

遅刻は免れたようだったが、教室に入って机にカバンを置いたとたん、鶴見さんに呼び止められた。

「木下さん、今日は日直でしょ？　朝一番に日誌取りに行かなくちゃダメじゃない。ハイ、これ」

「あつ、ちよつと朝からバタバタしてて、忘れてた。ごめんなさい、鶴見さん。日誌、わざわざ取りに行ってくれてたんだ。ありがとう」

「別に、お礼なんていいわ。木下さん、ちょっと最近、皆からチャホヤされて、浮かれ過ぎなんじゃない？」

「えっ？ そんな、チャホヤだなんて……」

「ちょっと、話があるの。廊下に出てくれない？」

そう言つて、鶴見さんはゴーインに俺の左手首をとり、ぐいっと引つ張つてきた。

廊下に出ると、彼女は突然、

「後からしゃしゃり出てきて、泥棒猫みたいなマネ、やめてよね」

「へっ？ 何のこと？」

「木下さん、なにトボけちゃってんの？ 喜多村くんのことに、決まってるじゃない！」

「えっ？ それって、どういう意味？」

「ったく、カワイ子ぶっちゃってさあー、どこまでシラを切るつもり？ 私、この数日の間、放課後に喜多村くんと一緒に、図書室で勉強してたの。これ、どういう意味だかわかるわよね？ そう、確か火曜日だったわ。その日の喜多村くん、何か用事があるからつて言つて、先に帰っちゃったのよね。その後、私が帰ろうとして校庭に出たら、あなたと喜多村くん、仲良さそうにサッカーなんかしてたわけ。これ、どうゆうこと？」

「どうゆうことって、言われても……ただ、喜多村くにサッカー教えてもらってただけ。それが、イケないことなの？」

「それって、私に対する宣戦布告ってことよね？ わかったわ。じやあ、あなたと私、どちらが彼のハートを射止めるのか？ 勝負しましょうよ。どっちが勝つても、恨みつこなしよ、わかったわね？」

「そんなの、あなたが勝手に決めること？ あなたに、わたしの行動を制限する権限なんてないわっ！」

あつ、俺、何ムキになつてゐるわけ？

「ムツ力つくわねー。こっちは友好的に、下手に出てたつていうのに、何よっ！ その上から目線な言い方！」

バチンっ！

左頬に衝撃が走った。一瞬、何が起こったのかと思うと同時に、左頬がヒリヒリと痛む。

「おっ、なんだ？」

「女同士でケンカか？」

通りすがりの男子生徒達から、そんな声が聞こえてきた。

「ふんっ、いいきみよっ！ これは、あなたが私のプライドを傷付けた、バツだからね！ 少しは反省しなさいよ！」  
「……」

余りにも、突然の出来事だったため、何も言い返せなかった。

「なに？ 『ごめんなさい』の、一言も言えないわけ？ あなたは？」

「ここは、例え俺に非がなくとも、素直に謝っておく方が得策だ。事を丸く収めるために……」

「ごっ、ごめんなさい。わたし、つい、言い過ぎちゃった。わたしが悪かったの」

前例があるだけに、ここは、相手の怒りを鎮めるためにも、今はグツとガマンの子。

「そう、わかればいいのよ、わかれば。いい？ このことは、なかったことにしてよね？ お互いのためにもさ」

「うん、わかったわ」

そう言つと、彼女はそそくさと、教室に戻って行った。

「はぁー」

この場合は、何とか収まったけど、問題は、これから彼女とどう接すればいいのかってことだよなあー。ほとぼり冷めるまで、当分、彼女を避けた方がよさそう。

しかし、あの平手打ち、スツゴク気合入ってたというか、モロに利いたんだけど。まだ、左頬がヒリヒリしてるよ。今日は、俺にとって厄日なのかな？ 今朝、アヤシイ女性に言われたことって、もしかして、マジなわけ？

にしても、鶴見さんって、結構美人だからかな？ スツゴク気が強くて、プライドが高そうなのだよなあー。ちよつと、生真面目過ぎるのか、近寄りがたい雰囲気持ってるけど、成績優秀らしいし、面度見もよくて、クラスの皆も、一目置いているって話だけ。

そういえば、彼女が笑っているところって、余り見かけたような気がしない。表情が豊かで、柔和な雰囲気を持つ智絵ちゃんとは、正に対照的な美人だよ。そうそう、今思い出した。鶴見さんは、智絵ちゃんをライバル視してるって、鮎美ちゃんから貰った“まゆか相関図”に書いてあったよ。

まあ、それはいいとして、また地雷踏んじやったのかなあー、俺って。はあー、厄介事がまた一つ増えちゃった。今朝から生理痛と筋肉痛のダブルパンチ状態っていうのもあるけど、それに増して、登校早々、この精神的ダメージはキツイ。週末だっていうのに、今日一日、気分がブルーになりそう。

左頬を手で押さえながら、自分の席に着くと、左斜め後ろに座る鮎美ちゃんが、

「どうしたの？ 真結花、左頬、手で押さえちゃって」

うつ、鮎美ちゃんに気付かれた？

「ちよつと、急に歯がシクシクしちゃって」

「ウソっ。真結花、その手、除けてくれないかしら？」

「大丈夫だから、気にしないで」

「気にしないで、って言われても気になるわよ。さっき、一緒に教室出て行った、鶴見さんと何かあったわけ？」

もう、しょうがないなあー。鮎美ちゃんってホント、お節介さんなんだからさあ。

「わたしが、悪いの。日直の仕事、忘れてサボっちゃったもんだから」

「それで、鶴見さんにぶたれたってわけ？」

「うん、まあ。だから、もうこの件はいいから」

「あつ、そう」

真結花、なにか隠しているわね。まっ、言いたくないっていうのなら、ムリには聞かないけど。

鮎美ちゃん、やっぱ俺の言ったウソ、疑ってたけど、これ以上、火種を大きくしたくないからね。

お昼休み、いつもなら、お馴染のメンバーと学食で昼食をとりながら、ワイワイやってるはずなのだが…今日は違った。食欲も湧かず、気分も優れない。お昼休みの間、保健室のベッドで横になってた。

はあー、マジでブルー、ブルー、めっちゃブルー！

なんで、今日、こんな目に遭わなくちゃいけないんだろ？俺。何か、悪いことでもした？

それにしても神様って、なんでこんなにも、イジワルなんだよっ！

「なにかさあー、まゆかちゃんがここに居ないと、お昼休み、少し寂しいわね」

「やっぱ智絵もそう思う？ 真結花って昔っから居るだけで、心が落ち着く不思議なコなんだよねえー」

「ところでさあー、さつきから気になってたんだけど、あゆって、いつからお弁当になったの？」

「ああ、コレ？ 真結花のお弁当なの。真結花、食欲が無いらしくって、私に食べてって。智絵みたいに、自分でお弁当なんて作るわけないじゃん。真結花ママのお手製よ」

「そうよねえー、おかしいなって思ったの」

「まゆまゆ、ほんと大丈夫かなあ？」

「そうそう、真結花さん、今朝からなんか元気なかったような…」

「莉沙子も気付いてた？ 真結花、今日はアノ日らしくって、筋肉痛もあって、気分が悪いつて言うからさ、お昼休みは、保健室で休んできなよって言うておいたんだけど… でもねえー、どうも、それだけじゃなくって、鶴見さんと、なんかあったらしいのねえー。誰か、何か知ってる？」

「あっ！」

「なにか、知ってるの？ あんなちゃん」

「たぶん、喜多村くんのことかも。鶴見さんも、喜多村くんに気があるんじゃないかなあ？ 昨日の放課後、漫画の資料探しに、図書室で本を物色してたんだよねえー。そしたら、喜多村くんが図書室で勉強してたところに、鶴見さんがやって来てさあー、なんか、二人で仲良く一緒に勉強してたよ」

「アイツ、ここんところ、図書室で真面目に試験勉強してるって話は耳にしてたけど、女の子とイチャついてたってわけ？ 結構優柔不断なヤツよねえー。私に、真結花を泣かせるようなマネ、しないって約束しておいてさあー」

「喜多村くん、鮎美さんにそんな約束してたんですか？」

「そうよ。莉沙子は大人しいからさ、ああゆうヤツ好きになったら、

振り回されるかもしれないわよ。気を付けないとさ」

「そうなんですか？ 私って」

「そうそう、りさりさは、男を甘やかして、ダメにするタイプだぞっ」

「えっ！ 私が、ですか？」

「あゆ、喜多村くんって、そうゆう優柔不断な子じゃないと思うんだけど…… あの子、誰にでも優しいみたいだし、女の子からしたら、気があるのかもって、勘違いされるじゃないのかしら？」

「智絵はそう思うんだ？ まっ、いずれにしても、困った問題よねえー、どうすればいいんだろっ。そっか、喜多村くんに、鶴見さんをムシするように、頼めばいいだけじゃん」

「あゆ、誰かが誰かを好きになったとしても、それは自由なわけだし、そこに横槍を入れるっていうのは、とてもいいこととは思えないわね。もし、自分の恋が、関係のない他人に妨害されたりしたら、イヤな感じしない？ 私だってまゆかちゃんと喜多村くんの事は、上手くいって欲しいって思っているわ。でも、変に首を突っ込まない方がいいと思うんだけど。話が拗れるだけでは済まない事になるかもしれないし、ここは、暫く、そっと様子見しようよ。喜多村くんなら、私達が口出ししなくても、ちゃんとやるんじゃない？」

「智絵がそこまで言うのなら、私も口出ししないで、とりあえず、様子、見とこっか？」

「真結花さん、私達が何もしないで放っておいても、本当に大丈夫なのかな？」

「りさりさ、私達が心配してもしようがないよ。今は、喜多村くんを信用するしかないんだからさあ」

はあー、やっと午後の授業終わった。さっ、今日は体の調子も悪いし、精神的ダメージもあるし、さっさと帰った方がいいね。

「真結花、今日は寄り道しないで、真っすぐ帰ろっ」

「うん。今日は体調も悪いし、そのつもりだったから、鮎美ちゃん」

帰り支度をしてたら、鶴見さんが近付いて来た。

「もー、今日はカンベンしてよー。今日、まだこれ以上に何か悪い事、あるわけ？」

「木下さん、帰宅しようとしてたところ、悪いんだけど、話したいことがあるの。ちょっとだけ、付き合ってくれないかしら？」

「へっ？」

「なんだろう？ やっぱ、今朝の事、まだ何か続きがあるんだろうね。それ以外に、鶴見さんと話す事ってないじゃん。」

「鶴見さん、その話、来週じゃダメなの？ 真結花、今日は疲れているようだし」

「おっ、鮎美ちゃんが助け舟を出してくれた？」

「ほんの少しの時間だけ、木下さんを貸してくれない？ 結城さん。来週は試験だし、話できる時間もなさそうなのよね。ねえ、いいでしょ？ 木下さん」

「今更逃げてたって仕方ない。ケリつけなきゃいけない問題だし。よし、覚悟決めた。」

「うん、わたしはいいよ。ごめん、鮎美ちゃん、先に帰ってて」

「そう、わかったわ。真結花がそう言うんだったら、私は別にいいけど……」

「真結花、頑張んなっ！ 今、私に出来ることって、心の中で応援することしかないんだけどさ。それにしてもアイツ、私との約束破ったわけだし、お灸をすえとかなきゃいけないわねえー。」

「木下さん、ここじゃなんだから、校舎の裏庭まで来てくれる？」

「うん、いいけど」

そう言った後、校舎の裏庭に着くと、彼女は、

「そこに座って、話しましょうよ」

「うん」

そう言って、二人でベンチに腰掛けると、彼女は突然、

「木下さん、今朝のこと、謝るわ。私、少し、冷静さを失っていたのよね」

「えっ？」

「実はさあー、私、もうフラれちゃったのよね。お昼休み、勇気だして、喜多村くん呼び出したの。思いきって、彼に私の想いをぶつけてみたわ。そしたら彼に、他に好きな子がいるって言われちゃった。その相手、誰なのかわかる？ わかるわよねえー。当然、彼の口から聞いたわよ、そう、もちろん、あなたのことよ。今朝の勝負、私の負けだわ」

「ごめんなさい、鶴見さん」

「なぜ、あなたが、私に謝る必要があるの？ 私は、敗者なのよ。あなたなんかに同情されて、謝って欲しくなんてないわ！ それこそ、私に対する侮辱よ！」

しまった、また怒らせちゃった。

「あなたを傷つけてしまつて、ごめんなさい…… えっ？ もしかして、泣いてるの？」

「な、なに言ってるのよ。さっき、風が強かったから、目にゴミが入って痛かっただけよ。喜多村くんって、罪よねえー。誰にだって優しいんだから。私みたいに『気があるのかしら』って勘違いする被害者、これ以上出さないように、ちゃんと彼のこと、綱付けて捕まえておきなさいよ！」

「……」

「なによ、押し黙っちゃってさあ。これ、私の命令よ！ わかったわねっ！ 返事は？」

「はい」

「ヨロシイ。じゃあ、この話しは、これでオシマイ。あなた達、とてもお似合いだわ。でも、あなた達が別れたら、私、いつでも喜多

村くん、奪っちゃうつもりだから。そこんとこ、忘れないでよね！」

「鶴見さん、ありがとう」

「さっきも言っただけど、あなたに、お礼なんて言われる筋合いなんてないんだから。勝者が敗者に、『負けてくれてありがとう』なんて、侮辱もいいところだわ。私、あなた達が別れる事、願ってるんだからね！」

「はあ」

「じゃあ、私、もう帰るわ！」

そう言つと、彼女は立ち上がり、足早に去っていった。

まったく、世話の焼ける二人だわねえー、グズグズしてんだからお互い好きなら、さっさと付き合えばいいじゃない。結果的にそうなったとはいえ、なんで私が、わざわざ二人の愛のキューピット役、しなきゃいけないわけ？ はあー、私って、ホントお人好しもいいとこだわつ。バツカみたい。

あーあ。私、失恋しちゃった。この私が、“失恋”だって？ 違うわっ！ 彼に、私を見る目がなかっただけよ。そう、そう思わないと、やってられないわっ。

「ただいまー。って、誰もいないのかあ、今日は早かったし。あつ、いた、Yukiだけど… Yukiは悩みがなさそうで、いいわよねえー。はあー、もうっつかれたあー。ホント、今日一日、サイアクだった」

とりあえず鶴見さんの件、片付いたようだけど、家に着いたとたん、どつと疲が出てきたよ。早くお風呂に入って、気分リフレッシュしたい。そういえば、いつの間にかお風呂好きになっちゃってる

よ、俺って。最近、妙に長風呂するようになってっちゃったし。これって、益々、女道一直線！って感じになってるんじゃないの？

それに、喜多村くんのこと、どうやら自分でも好きなんだろうっていうのは日増しにわかってきたんだけど、いざ喜多村くんを目の前にすると、どう態度で示せばいいのやら… ホント、このままホンキで好きになっちゃってもいいのかなぁー。禁断の世界に飛び込むみたいで、自分の心がどうなちゃうのかって思うと、いまひとつ、踏み込めないんだよね。でも、喜多村くんのカンケイ、このままはつきりとさせず、曖昧なまま、何も進展しないのもイヤっていう矛盾した思いも一方ではあるわけで…

あっ！ ったく、今の俺って、マジで恋に悩む乙女になっちゃってるじゃん！ 今、そんなこと、余裕ぶっこいて考えてる場合じゃないだろう。結局、この一週間、試験勉強なんてもの、何もしてないじゃないか！ 明日の智絵ちゃんとの勉強会で、なんとか授業の遅れを取りも戻さないと、こりゃマジで赤点かも。

## #22：サイアクな週末（後書き）

真結花にとって、とんだ災難日のようでしたね。

色々と気苦労が絶えないようですが、報われる日は来るのでしょうか？

次回につづく

### #23：前進あるのみ！

「ふうーっ。やっぱ、お風呂ってサイコー。今日はホント、心身共にクタクタだったし」

「まゆかー、ママ、お風呂入るわよ」

「えっ？　ちよつとまってよ。直ぐに出るから」

そう言うのと、脱衣所では、もうママが服を脱ぎ始めていた。

カチャ。

「真結花と一緒に風呂なんて、ずいぶん久しぶりよね？」

ママ、いったいどうゆう風の吹きまわし？　にしても、同性とはいえ、やっぱ目のやり場に困るんだけど…

「どうしたの？　ママ」

ママはかけ湯をしながら、

「たまにはいいじゃない。裸同士の付き合いも、いいものよ？　湯船、入ってもいいかしら？」

「狭いよ？」

「いいの」

チャプッ。

「それにしても真結花、暫く見ないうちに、体つき、ずいぶん女らしくなってきたわね」

「えっ、そう？」

うーん。ママとはいえ、これだけ近いと、やっぱ恥ずかしいよ。それにしてもママ、何か気になることでもあるのかな？　一緒にお風呂に入るなんて。

「真結花、今、恋患いしてるでしょ？」

「えっ！ 何よ、いきなり」

「女の子はね、恋をすると女性ホルモンの分泌が活発になって、髪肌艶や体つきがキレイになるのよ」

「そうなの？」

「それにね、ここ数日の真結花って、様子がおかしいもの」

「やっぱ、気付いてたの？ ママ」

「気付かないわけじゃないでしょ？ 毎日食事中に溜息なんかついちゃって。最近、食欲もなさそうだったし、心配してたの」

「そうだよねえー、ママが気付かないわけないないか。」

「ママ。以前男の子っぱかったわたしが、突然、男の子を好きになるのっておかしいのかな？」

「なに言ってるの？ 自然なことよ。むしろ、真結花は遅過ぎたくないんだから。自信がないのね？ 今の真結花には」

「はい、その通り。自信なんてもの、全然無いですつ。」

「うーん、こんなわたしが、人を好きになっちゃってもいいのかな？ 他人の迷惑にならないのかなって、思っちゃって」

「どうして？ 人に好意を持たれて、イヤな気分になる人は、そうめったにいないわよ？ ストーカーに付きまとわれるっていうのなら、また別の話だけど」

「だって、今日ね、わたしが気になってる男の子にさあ、以前からその男の子を好きになってた女の子がいたの。わたしの存在が、その女の子の恋の邪魔をして、傷つけちゃったみたいなの」

「それは、仕方がないことなの。お勉強やスポーツと同じで、恋も競争なのよ。勝者と敗者がいて、当然なの。真結花は、今まで恋をさぼってたわけなんだから、他の人に比べたら恋の偏差値も低いわけ。真結花も敗者になるかもしれないのよ？ これから恋愛経験を重ねて、恋の偏差値を上げないといけないわね。恋も人生の受験勉強だと思えばいいの。受験に失敗したら、つまり、失恋ってことだけど、次の恋を目指してまた受験勉強しなきゃいけないってわけね。合格したからといっても、安心はできないの。退学、つまり、

破局になるかもしれないわ」

「恋も人生の受験勉強かぁ。なんか、恋愛受験に合格しても、後が大変そう」

「そう、大変なのよ、恋っていうのも。恋をするにも気力と体力が必要なのよ」

「ママもそうだった？」

「そうよ。相手まかせ、受け身でいるうちは、なかなか自分の思い通りの恋はできないものよ。つまり、恋愛の主導権が常に相手側にある状態のことね。自分から好きになって、自分から積極的に行動して、自分の恋ができるように、頑張らなくっちゃ。ねっ」

「ママ、のぼせちゃいそうだから、もう出るね」

「ごめんなさい、真結花。ママ、気が付かなくて、つい話込んだわね」

お風呂から出て、洗面台の鏡を見ながらドライヤーで髪を乾かしていると、髪の手通りが妙にいい。

「うーん。そういえば、なんか、髪の手やがよくなったような気がする」

これって、さっきママが言ってたように、恋してるから？ ということとは、益々女性化してるってこと？ 恋も人生の受験勉強ねえー、そう言われると、確かに大変かも… 学業やスポーツ並みに、恋も気力と体力がいるってこと？ だとしたら、学業とスポーツと恋愛、この三つ全てをバリバリこなしている人ってさあ、凄すぎるんじゃないの？ どんだけエネルギーあんのって思っちゃうんだけど…

部屋に戻ると、携帯に着信履歴があった。

「誰だろ？ 鮎美ちゃんかぁー。ナニナニ？ 後で電話が欲しいって？」

プルルル… プルルル… プツッ。

「もしもしー、鮎美ちゃん？」

『真結花？ ところでさあ、鶴見さんの件、どうだった？』

「鶴見さんの件って、なんのこと？」

『ったく、しらばっくれちゃってさぁー。なにつて、真結花と鶴見さんで、喜多村くんの争奪戦を繰り広げているって話のことよ』

「えっ、なんで鮎美ちゃんが、そのこと知ってるの？」

『ふふっ、私を甘く見てもらっちゃあ、困るわねえー、ま・ゆ・か・さん。今朝、喜多村くん争奪戦で、鶴見さんから先制パンチ、食らったんでしょ？』

「はぁーっ。やっぱ、鮎美ちゃんには隠し事、できないみたいね、わたしってさあ。鶴見さん、結局は身を引いて諦めてくれたみたい」  
『そつかぁー、それは良かったわね。でもさぁー、真結花も、災難よねえー。気を付けないと、またどこかで地雷踏むわよ』

そう、地雷踏んでばっかだよ。

「気を付けるっていつても、何をどうやって気を付けばいいわけ？」  
『それは、真結花が喜多村くんに対して、曖昧な態度取ってるからいけないのよ。そのうち、浮気されるわよ？』

「だって、まだ付き合っているわけでもないし、お互いのキモチも確かめてないもん」

『だからといってさあ、朝の挨拶以外、学校で喜多村くと話もしないのっていうのも、どうなの？』

「だって、恥ずかしいじゃない。学校じゃあ、皆が見てるわけだし…」

『じゃあさあ、家で電話とかメールぐらい、やりとりしたらどう？  
なんの為に携帯番号とメルアド交換したわけ？』

「えっ、だって、きつかけがないし……」

『まあ、そういう消極的なところ、今の真結花のダメなところね  
もつと積極的にならなきゃ。特に最近の男の子って、女の子が積極  
的にならないと、恋も実りにくいのよ』

鮎美ちゃんも、ママと同じようなこと言ってる。

「そんなこと言われたって……わたしには、どうしていいのかわ  
かんなくって」

『はあーっ。真結花もようやく恋に目覚めたと思ってたけど、恋愛  
免疫のなさは重症ってことのようなね。しょうがない、試験明けの日  
曜日まではお預けにするしかないわね』

「試験明けの日曜日って？」

『はあ？ 真結花、喜多村さんと会う約束したんでしょ？ なにボ  
ケけちゃってんのよ』

「ああ、そうよね。ちよっと、最近、色々あり過ぎて、心の余裕が  
なくなっちゃってた」

『真結花って以前の記憶が無くなってからさあ、色々と考えこんだ  
り、悩んだりしたりすることが多くなったと思うけど、ひとりで抱  
え込んでないで、私や家族に吐き出さなきゃダメ。じゃないと、ま  
たストレス抱えこんで、倒れちゃったらどうするのよ』

「ありがとう、鮎美ちゃん」

『いい、わかった？ これから、恋愛で悩んだり、今日の鶴見さん  
の事みたいにトラブったら、遠慮せずに私に相談するのよ』

「うん、わかったわ」

『それから、喜多村くんには、文句の一言ぐらい言つとかないとい  
けないわね。私がお灸をすえといてあげるわ』

「えっ、そんなことしなくてもいいよ」

『だって、真結花を泣かせるようなマネ、してるわけだし』

「かわいそうだよ、喜多村くんには責任はないの。鶴見さんだって、

喜多村くんのこと、真剣に好きだったらから、わたしに真正面からぶつかってきたわけだし、潔かったと思うの。わたしが逆の立場だったら、そんな勇気のある行動なんて出来ないもの」

『真結花って、ホント優しいわね。その優しさ、恋愛には不利になることがあるのよ。恋愛は自分が遠慮してちゃダメなの。遠慮してたら、恋のチャンスは目の前から逃げちゃうのよ。どんどん遠のいていっちゃうんだから。だから、目の前に訪れた恋のチャンスを逃したらダメなの。後で、告白しとけばよかったって、後悔することになるし、心の中でずっと引っかかったままになるの。そんなの、イヤでしょ？ 結果がダメだとしても、吐き出しちゃった方がスッキリするわ。次の恋へ進もうっていう踏ん切りがつくの』

「それって、鮎美ちゃんの経験談？」

『そうよ。経験者が言うんだから、間違いないわ。それと、喜多村くんの件、真結花が許しても私の気が収まらないの』

「やつば、喜多村くんに文句言うわけ？ やめとかない？」

『ごめん、今回ばかりは真結花のオネガイは聞けないわ、口出しさせてもらうから』

「そう、でもやんわりとね」

『まあ、真結花ってホントお人好しなんだから。その優しさが仇になるわよ。喜多村くんだってそう』

「うーん、でも他人を傷つけたり、迷惑を掛けることって、わたし、すっごくイヤなの」

って口に出したものの、他人を傷つけたり、迷惑を掛けてはつか

「まあ、真結花の性格なら、わかるような気がするわ。あつ、それと、明日の智絵ん家での勉強会なんだけど、真結花に連絡しとかなきゃって。午前中って話だったんだけど、皆の都合が合わなくなつて、午後からになったから。明日、迎えに行くわね」

「うん」

『じゃあ、そろそろ電話、切るわね。おやすみ、真結花』

「おやすみなさい、鮎美ちゃん」

「はぁーっ」

「やっぱ、恋愛って大変なんだ？　好きな人を巡っての闘いなんだ？」

ブルブル…　ブルブル…

「あれっ、誰だろ？　結城さん？」

ピッ。

『もしもし、喜多村くん？』

「ああ、結城さん？　どうしたの？　こんな時間に。僕に何か用事？」

『あのさぁー、真結花のことで、一応、忠告だけはしとこうと思ってさぁ』

「木下さんが、どうかしたの？」

『その分じゃあ、全然、気付いてないようね？』

「えっ、いつたい、なんのこと？」

『つたく、あいかわらずニブイ子ね！』

「木下さんに、何かあったの？」

『そう、何かあったから、わざわざこんな時間に電話してるんじゃない？』

「もしかして、鶴見さんのこと？」

『もぉー、心当たりあるんじゃない、ハッキリしなさいよ！　ちゃんと、鶴見さんとは縁切ったんでしょ？』

「そんな、縁を切るとかの仲じゃなかったし」

『じゃあさぁ、なんでここ数日、放課後に図書室で鶴見さんなんか

と一緒に勉強してたわけ?」

「ああ、それは、鶴見さんの方から一緒に勉強しようって誘ってたから」

『はあ? 喜多村くんって、女の子から誘われたら誰とでも一緒に勉強をするわけ?』

「そうゆう訳じゃないよ。鶴見さんって成績優秀だから、一緒に試験勉強した方がはかどると思ってさあ」

『でもさあ、鶴見さんは、そうゆう風には思ってたのよ』

「ああ、わかってるって。今日のお昼休み、鶴見さんから告白されちゃったからね。でも、ちゃんと断ったよ」

『そうゆう問題じゃないの。真結花のこと、大切に思っているのなら、そうゆう軽はずみな行動、やめてくれない? 真結花、酷く傷ついて、電話したら泣いてたのよ!』

「えっ! そうなの? ゴメン、結城さん」

『謝る相手、間違えてない? それと、謝るのは、ちゃんとお互いのキモチ、確かめてからしてからにしてよ。まだ告白もしてないのさ、いきなり謝るのっておかしいじゃない』

「うん、わかったよ」

『別に、私も喜多村くんが一方的に悪いって責めてるわけじゃなくてさあ、喜多村くんにも真結花を傷つけた責任の一端はあるって言いたい! ほんとはさあ、もっと怒ってやりたかったとかなんだけど、真結花が喜多村くんをイジメないでって、いじらしいこと言ってもんだからさあ、このへんでカンベンしてあげるわ。真結花の優しさ感謝しなさいよ!』

「えっ? 木下さんって、そんなにも僕のこと、想ってくれてるの?」

『そつ、だから、もっと大切にしておいてよ』

「うん、そうする」

『じゃあさあ、もう電話切るよ』

「結城さん、今日はありがとう、わざわざ電話してくれて」

『真結花のこと、頼むわよ。あの子、精神的に脆い部分があるんだからさあ、これからも気を付けてよね』

「うん、わかってるって。じゃあ、おやすみなさい、結城さん」

『おやすみー、喜多村くん』

トントン。

「おねえちゃん、ちよつといい？」

「いいよ、なに？ 麻弥」

力チャ。

「今のおねえちゃんに、ちょうどいいお薬があるの」

そう言いながら、後ろ手に何かを隠している様子の麻弥。

「なによ？ なに隠してるわけ？」

「ハイ。これ、読んでみて。友達から面白いつて聞いて、買ったんだあ。人に勧められたマンガってさあ、当たり前がよくあるんだけど、コレは、麻弥的には面白かったよ」

「『わたしの恋の通信簿』？ なに？ このマンガ」

「ふふんっ、このマンガはね、恋愛免疫の無い女子中学校に通うヒロインが、ある日突然、恋に目覚め、初めての恋に戸惑いながらも成長して行くっていう、正に、今のおねえちゃんにぴったりのマンガよ」

「あのさあー、麻弥。現実って、マンガのように、そう簡単じゃないのよ」

「もうおー、初めっから身も蓋もない事言っわねえー、おねえちゃんってさあ。夢も無いじゃない」

「そんなマンガのようにさあ、現実の物事が、簡単に進めば苦労し

ないわよ」

「おねえちゃんって、ひねくれてるわねえー。ココロ、乾いてるわよ。もっと、ココロに潤いを与えなきゃ」

「やっぱ、わたしのココロって乾いてる？」

「うん。ここんところのおねえちゃんって、余裕が無いっていうのか？ イライラしてたじゃない。だから、気分転換にこのマンガ、どうかなって思って」

「そう、ありがとう、麻弥。色々気を使ってくれて」

「麻弥も、おねえちゃんの恋、応援してるんだから。麻弥だってさあー、喜多村くんのような素敵なお兄ちゃん、早く欲しいのよねえー」

「もあー、麻弥ったら」

「へへっ。じゃあ、読んだら、感想聞かせてね」

「うん、ありがとう」

そう言つと、麻弥は部屋を出て行った。

そう、麻弥も色々と気を使ってくれてるんだよね。ほんと、優しいコだよ。その善意をムゲにしようとした俺って、ほんと、ココロに余裕がないんだなあーって思う。ママだって、鮎美ちゃんだって、俺のこと、心配して気を回してくれてるっていうのに、それに甘えてばかりで… もっと感謝しなきゃ。それに、いつも他人に頼ってばかりだし、周りに心配掛けないように、もうちょっと、自立もしなきゃいけないし。

以前の真結花ってさあ、皆の話を聞いていると、今のようにならなくなってくつて、もっとシッカリしてたみたいだし、今って、昔の真結花にも負けてるんだよね？ それって、なんかクヤシイ。頭ん中では、もっと頑張んなきゃって思ってたんだけど、いざ行動に移すとなると、急に委縮しちゃうっていうか、自分の勇気の無さに幻滅するっていうか、自分でも自分の事、イヤになっちゃうことばかりなんだよね。

やっぱ、まだまだ自分のアイデンティティーがしっかりしていないっていうか、揺らぎ続けてるし、自分という人間の自信の無さが、根底にあるんだろうけど。

まっ、今グダグダ考えても仕方ないや。これから先のことはまだわかんないし、人生、なるようになるってね。今は、立ち止ってないで、少しでも前進しないとさ。頭ん中であれこれ考えばかりいても、何も解決しないし、行動しないと物事って進んで行かないわけだしね。

### #23：前進あるのみ！（後書き）

恋愛することは凄く大変なこと、そう捉えた様子の真結花。

この調子だと、まだ当分、恋愛受験に合格しそつになさそうですね。

次回につづく。

## #24：智絵先生勉強会

土曜日の午後、約束していた勉強会に行くため、鮎美ちゃんと一緒に智絵ちゃんの家に向かった。

とにかく、昨日はサイアクな一日だった。今日は天気もいいことだし、気を取り直した俺は、智絵ちゃんから手渡されていた地図を頼りに、自宅を探してただけど…

「この病院の辺りで、間違っていないよね？」

鮎美ちゃんが、確認を入れる。

「うん、この地図だと、この『かすみそう病院』っていうのが目印になってるから、たぶん、この辺に間違いないと思うけど…」

そう思っていると、病院の駐車場があると思われた、病院の裏手の方向に杏菜ちゃんと莉沙子ちゃんの姿が見え、消えていった。

「あつ、杏菜と莉沙子だ。もしかして、病院の裏側の方に家があるんじゃないの？」

鮎美ちゃんがそう言ったので、付いて行ってみると、病院の駐車場の奥の方に、屋根付きの車庫に外車が二台止まっている立派な家があった。

玄関前には、なにやら監視カメラらしきものも設置されてるみたいだ。

「智絵ん家って、病院だったのね。智絵は、どこぞのお嬢様ってことは聞いてただけだよ」

「えっ？ 智絵ちゃんって、やっぱり、お嬢様なの？ どうりで。」

でも、なんでまた、お嬢様学校でもないような、進学校でもないような、わたしたちと同じ普通の高校に通っているの？」

「うん、本人の希望みたいよ。なんか、中学校の時は、親が決めたお嬢様女子中学校に通っていたらしくて、色々と堅苦しくって、学校生活が息苦しかったって、言ってたから」

「へえー、そうなんだ？」

鮎美ちゃんが、インターフォンのボタンを押した。

『はい、どちら様でしょうか？』

恐らく、お母さんが出たようだ。

「あのー、智絵さんのクラスメイトの結城と木下と申します。本日、智絵さんと一緒に勉強する約束をしまして、訪問させていただきました」

えっ？ いったい、どうしちゃったってゆうの？ 鮎美ちゃん？  
頭、どつかで打った？ そんなに改まっちゃってさあ。声や喋り  
方がまるでよそゆきモードで、いつもと違ってヘンだよ？

『はい、智絵から聞いていますよ。どうぞ』

玄関に入ると、直ぐに床の大理石が目飛び込んできた。いかにも高級そうな感じ。智絵ちゃんのお母さんに案内され、智絵ちゃんの部屋に向かう。

しかし、智絵ちゃんのお母さんって、智絵ちゃんに雰囲気似てて、背も高くてやっぱ美人。一瞬、昔はモデルさんでもやってたん  
じゃないの？ って思ってしまった。

トントン。

「はぁーい」

カチャ。

「智絵、お友達、お連れしたわよ」  
「入ってもらって」

智絵ちゃんの部屋をぐるりと見渡すと、我が家のリビングぐらいの広さがあり、おまけにピアノなんか置いてあった。視線を前に戻すと、テーブルを囲むソファーに智絵ちゃんと、既に先に着いていた杏菜ちゃんと莉沙子ちゃんが座って、くつろいでいた。

「後でお飲みもの、お持ちするわね」

そう言って、智絵ちゃんのお母さんは部屋を出た。

「家、ちよつとわかりにくかった？」

智絵ちゃんが聞いてきた。

「うん、そうねえー、真結花と一緒に迷ってたんだけど、杏菜と莉沙子がこの家に入って行くのを見かけたから、わかったんだけどね」  
「そうなの。杏菜ちゃんと、莉沙子ちゃんを見かけなかったら、まだ迷ってたかも」

「杏菜も少し迷ったよ。ねっ、りさりさ」

「うん、病院の駐車場の奥の方に家があったから、本当にこの家でいいのになって」

「そう、じゃあ、皆そろったことだし、さっそく試験勉強、始めよっか」

そう言って、智絵ちゃん自身が授業で取った、試験範囲の各科目のノートのコピーを皆に配った。

このノートのコピー、いったいどうするんだろう？

試験勉強についてても、智絵ちゃんのノートのコピーを見ながら、智絵ちゃんが要点を説明して行くだけの簡単なもので、重要な箇所にマーカーで色を付けたり、メモる程度だった。でも、それがスゴク分かりやすくて、正直驚いた。

トントン。

「はぁーい」

力チャ。

「智絵、お飲みもの、持ってきたの。じゃあ、皆さん、ごゆっくりね」

そう言っつて、ジュースと何か上品な包みに入ったお菓子をテーブルに置いて、智絵ちゃんのお母さんは部屋を出ていった。

「じゃあ、この辺で休憩しよつか」

智絵ちゃんが、勉強会前半戦終了の合図を入れてくれた。

「ねえ、智絵ちゃん、ちよつと聞いてもいい？」

俺は先ほど、非常に分かりやすかった智絵ちゃんのノートの内容について、聞いてみたかった。

「んっ？ なに？ まゆかちゃん」

「あのさぁー、みんな、同じように授業中にノート取ってるはずなんだけど、なんで、智絵ちゃんのノートってこんなに分かりやすいのかなあ」

「あつ！ それ、私も聞こうとしてたところ」

鮎美ちゃんも同じこと、思ってたんだ？

「杏菜も、目から鱗が落ちた気分なのダあ」

「そうそう、私もそう思ってたの。智絵さんって、先生になれるんじゃないかしら」

莉沙子ちゃんまで？

「さすが、智絵先生、何か秘策でもあるのよね？ 教えなさいよ」  
鮎美ちゃんが、切り込む。

「うん、まあねえー」

かるーく、受け流す智絵ちゃん。

「ともともだけ、ずるうーい。杏菜もその奥義、教えて！」

杏菜ちゃんも、駄々をこねだした。

「私もその奥義、知りたいな」

莉沙子ちゃんも、それに乗った。

じゃあ、俺も、

「わたしも、その奥義っていうの、詳しく知りたあーい。ねえ、教えてくれないかな？ 智絵ちゃん」

「まあーわかった、わかったって。その、みんなの言うように、奥義なんて大それたものじゃないわよ。あのね、ノートの右側と左側を有効に活用するの」

「どうやって？ 智絵ちゃん」

思わず、俺は食いついてしまった。

「まあまあ、そう焦らないで、まゆかちゃん」

「うん、わかった」

「ノートの左側には、普通に先生が黒板に書いてあるのを写して、先生が黒板に書かずに、何気なく言った重要なことも書き残すの。

そして、重要な事柄には、色や記号を付けてマーキングするの。例えば、重要な点にはマーカーで色を付けたり、アンダーライン入れたり、線で囲んだり、疑問点には『？』マークつけたりね。ノートの右側には、ノートの左側に書いた疑問点を自分で後から調べたり、分かりにくかったところには補足を入れたりして復習するの。実は、この復習が重要な。これを常日頃からやっていけば、試験前になつてから慌てて頭に詰め込まなくてもよくなるわよ」

「へえー。ノート取るのに、そんなコツがあったんだ？ 知らなかったわ。さすが、智絵先生！」

うん、確かに、鮎美ちゃんの言う通り。

「スツゴ〜イ、そんなワザがあったんだ。杏菜もビックリしちゃった」

うん、俺も驚いた。

「憧れちゃうなあ、智絵さんって。ホント頭いいから羨ましいな！」

ホント、ホント、莉沙子ちゃんに同感。智絵ちゃんって、容姿端麗、頭も良くて、優しくて、俺も懂れちゃう。

「ねえ、その奥義って、智絵ちゃんが編み出したの？」

俺は、気になって聞いてみた。

「ううん、おにいちゃんから教えてもらったの」

「えっ？ 智絵って、おにいちゃんがいたの？」

鮎美ちゃんも知らなかったんだあ。まあ、まだ一カ月半そこその付き合いだものね。

そつかあー、もう来週で5月も終わっちゃうんだよね。あの事故から、もう一カ月近くになろうとしてる。長かったような、短かったような…

「うん、三つ年上で、今、大学生なの。高校生の時に、大学受験の為の秘策、色々研究してたみたい」

「もしかして、医大生なんですか？ 智絵さんのお兄さんって」

莉沙子ちゃんが、つつこむ。

「うん、そうよ。卒業したら、この隣の『かすみそう病院』の後を継ぐ修行をするんだって」

どうりで。智絵ちゃんは、頭がいいわけだ。

「スッゴイ。ねえ、ともとも、お兄様の写真見せて！」

「あっ！ 私智絵のおにいちゃんの顔が見たあーい。真結花も莉沙子も、見たいでしょ？ ねっ？」

杏菜ちゃんに続き、鮎美ちゃんまで興味深々って感じ。

「私も、ぜひ、見てみたいなあ」

莉沙子ちゃんまでも。

「うん、わたしも見てみたいけど」

そんなの、俺も見たいに決まってるじゃん。

「もうー、しよがないなあー」

智絵ちゃんは、しぶしぶっていう感じで、本棚からアルバムを取

り出した。

「ともともおー、はやくうー、見せてー!」

ちよつと、食い付き過ぎだよ。杏菜ちゃん!

智絵ちゃんがテーブルの上で、アルバムのあるページを広げてくれた。

「えつと、これが、おにいちゃんよ」

「うわつ、スッゴクイ、かっこいい!」

杏菜ちゃん、目がキラキラしてる。もう、一目惚れって感じ?

「そうね、確かに、どこことなく智絵に雰囲気似てて、美形よね。もし、智絵が男だったらこんな感じなのかなあ?」

「うん、凄くモテそうね。智絵さんのお兄さんって」

「うん、わたしも、鮎美ちゃんと莉沙子ちゃんの言う通りだと思うよ。智絵ちゃんのおにいちゃんって、やっぱ、そうとうモテるんだよ。」「」

「そうねえー、バレンタインデーには女の子からチョコいっぱい貰ってたようだわ。おかげで、私がおにいちゃんにあげた義理チョコの価値なんて、ホント、全然無かったわけだしね」

「ねえ、智絵? こっちの智絵の肩に手を回して微笑んでる、イケメンさんは誰なの?」

「あつ、その人? おにいちゃんの昔馴染みの親友で、同じ大学の人よ。私も親しいの」

「もしかして、ともとの彼氏?」

「えつ? ちつ、違うわよ」

「あつ、赤くなっちゃってカワイイ、智絵って。でも、好きなんですよ?」

鮎美ちゃんが、つつこんだ。

「うん、いい人よ。でも、私の事なんて意識してないんじゃないのかな?」

「そうかなあー? ねえ、ともともおー、思いきって告っちゃえば

「？」

うん、そうそう、杏菜ちゃんの言うように、告っちゃえばいいのに。自分のこと棚に上げて、人のこと、そんなエラそうに言えないけど…

「今はまだ、そんな気持ちにはなれないの。今の関係を壊したくないし。それより、ズルイ。私にだけ好きな人の事、話させておいて、そうゆうあんなちゃんは、どうなの？」

「じゃあ、ともともお。杏菜も好きな人のことを言うよ！ 杏菜をともともお兄様の、お嫁さんにもらつて！」

「あんだ、いきなり何言ってるわけ？ ムリ、絶対ムリだつて！ ずうずしいのにも程があるわよ、杏菜！」

しっかし、杏菜ちゃんに対して、いつも厳しいツツコミするよねえ！ 鮎美ちゃんつて。まあ、そんだけ、みんなから愛されて、イジリやすいキャラなんだけど…

「まあ、まあ、鮎美ちゃん。お嫁さんにもらつてなんて、冗談だよね？ 杏菜ちゃん？」

「あゆあゆも、まゆまゆも、ひつどーい。杏菜、冗談じゃないもん！ ホンキだもん！」

「ごめんね、あんなちゃん。おにいちちゃんには、もういい人が居るみたいな。大学卒業したら、結婚したいと思っている人が居るつて言ってたわ」

「ふえーん。杏菜、撃沈！」

「まあ、そんな気を落とさずに、ねっ？ 杏菜さん」  
すかさず、優しいフォロー入れる莉沙子ちゃん。

「お後がよろしいようで。 ねえ、智絵、この辺で勉強会、再開しない？」

鮎美ちゃんが、最後に締めた。

「そうね、じゃあ、勉強会、再開ってことで」

勉強会の後半戦を終えた後、息抜きにみんなでトランプで遊んでいたら、杏菜ちゃんと莉沙子ちゃんは、以前より仲良くなった様子だった。

「ねえ、りさりさ？」

「なに？ 杏菜さん？」

「りさりさって、小説が好きなんでしょ？ 小説書いてみない？」

「えっ？ 突然どうしたの？ 杏菜さん？」

「うん、杏菜は漫画・小説同好会の部活に入っているんだあー。りさりさをスカウトしようと思って」

「えっと、もう真結花さんと一緒に、美術部に入る約束しちゃって

…」

「莉沙子ちゃん、小説が好きなんでしょ？ わたしに合わせてムリしなくてもいいよ。自分が好きな事をしなよ。美術部っていつても莉沙子ちゃんは、まだ顔を出してないわけだし、美術部顧問の戸田先生に気が変わったって、言うておくよ？」

「そうそう、人間、好きな事をするのが一番幸せなんだから、ムリしてまで他人に合わせることはないと思うわよ」

鮎美ちゃんもフオーする。

「そうよ、自分に自由が一番。もちろん、他人に合わせることも時と場合に応じて必要な事だけど、自分らしさを消してまで、自分の大好きな事、やりたい事を押さえ付ける必要はないの。私だって、親の決めた女子中学校に通ってたんだけど、そこでの学校生活は、色々と規則やしがらみがあって、自分を出せなくて、もううんざりしてたの。だから、もっと自分を出して、自分に正直に生きた方がいいと思うわよ。りさちゃん」

智絵ちゃんの言葉には、妙な説得力があった。

やっぱ、女子中学校で何か色々気苦労があっただらうね。智絵ちゃんって、ホント、しっかりしてる。それに比べて俺って… 今、自分自身に対して、正直に生きているんだろ？ 自分のことなのに、自分のことがわかんないなんて… ああ、この先が思いやられる。

「ありがとう、みんな気を使ってくれて。じゃあ、私、漫画・小説同好会に入ろっかな。実は、趣味で小説は書いてて、書きためたものがいくつかあるの。いつか、ネットの小説投稿サイトにでも投稿してみようかって、思っていたんだけど、勇気がなくなつて、そのままなの」

「じゃあ、りさりさが小説書いて、杏菜がさし絵描くつてのはどう？」

「あつ！ それ、いいわね。面白そう。杏菜にも良い所あるじゃん。珍しく鮎美ちゃんが、杏菜ちゃんをほめてるよ。雨でも降らなきやいいけど。」

「その小説、完成したら、わたしに読ませてくれない？」

俺は、莉沙子ちゃんに聞いてみた。

「うん、いいよ。でも、いつになるのかわからないけど」

「私にも読ませて欲しいな。気長に待ってるから」

智絵ちゃんも興味があるようだ。

「ねえ、りさりさ？ そんな悠長な事、ホンキで思っている？ この杏菜様が許すとも思ってる？ 試験が終わったら、覚悟するのだから」

なに？ なんなの？ 杏菜ちゃん？ 目がホンキ。いつもとモードが違うよおー。

これって、さっき、失恋しちゃったから？

「うああー、杏菜さん。お手柔らかにお願いしまーす」

「それから、これから杏菜のことは、『あんりん』って呼んで」  
「わかりました。あんりんさん」  
「だからあ、その『さん』っていうの、いらないから」

最近、何かと世間は物騒だし、余り帰宅が遅くなるのもまずいということで、“智絵先生勉強会”は17時にお開きとなり、解散となった。

自宅に帰って早々、俺は、智絵ちゃんに教えてもらったノートを取る“奥義”を麻弥に伝授した。姉としての威厳を取り戻す、絶好のチャンスがようやく到来したのだ。

「おねえちゃんって、すつごーい。こんなノートの取り方のコツがあったなんて全然知らなかった」

ふっふっーん。どうだ！ 見直したか！ 尊敬したか！ 我が妹よ。

「そうでしょ？ 麻弥も来年、高校受験に突入よね？ 少しは役に立った？」

そう、麻弥は俺と二つ違いで、今は中学二年生、来年は三年生で高校受験モードに入る。

「うん。おねえちゃんも、たまにはやるわねえー」

おおーっ、麻弥が珍しくほめてくれている。めっちゃうれしい。夢でも見ているのだろうか？

「そお？ それほどでもないけど？」

「ところで、おねえちゃん？」

「んっ？ なに？ 麻弥」

「ねえ、誰に教えてもらったの？」

「えっ？ その、友達だけ…」

「ふうーん。やっぱりねえー。おねえちゃんがこんなスゴ技、知ってるハズないって、思ってたしい」

うつ！ なに？ 姉をほめておいて、冷たく突き放す、そのツンデレ攻撃。

「もぉー、素直じゃないんだから、麻弥って」

「そっ、そんなことないもん！」

麻弥はふいつと顔を背けた。

もっ、もしかして反抗期なの？ 麻弥って。ママぁー、助けてよー。

「ねえ、わたし、何か悪い事でも言った？」

「もう、知らない！ おねえちゃんなんて！」

麻弥に、何か機嫌を損ねるようなことを言ってしまったのか？

なぜだか麻弥はスネて、部屋を出て行ってしまった。

ホント、全くワケがわからない、女心って。そんな事もわからないようじゃあ、俺って、女の子としては、まだまだダメだよなぁ。こんな調子で、恋なんてもの、本当に出来るのかなあ？ あっ、今そんなこと、悠長に考えてる場合じゃない。とにかく目の前の来週の試験、今はこれに集中しなきゃ。赤点取って追試なんてもの、受けたくないしさ。 “恋”の問題、とりあえず後回しってことで。試験が終わったら、心の余裕も出来るだろうし、そんなとき、ゆつくり考えればいいや。

## #24：智絵先生勉強会（後書き）

女の子として、まだまだ修行が足りない様子の真結花。  
どうやら、本人にその自覚はあるようですが…

次回につづく

## #25：新たな協力者

「ふあーっ、よく寝た。今、何時？ げっ！ もう11時前じゃん、しまった！ ガッコ大遅刻！ って、よく考えたら今日は日曜日じゃない。ホッ」

あれっ？ 今日は麻弥が起こしに来なかったんだ？

トントン。

「麻弥、居るの？」

「……」

カチャ。

「あれ？ 麻弥、居ないの？」

リビングに降りてみたけど、誰も居ない様子で、愛犬Yukiだけが俺に近付いて来た。

「ねえ、Yuki、ママは？ って聞いても、Yukiにわかるわけ、ないよねえ」

どうやら、ママも居ない様子だった。

ふと、ダイニングテーブルを見ると、ラップに包まれたサンドイッチのお皿と、メモらしきものがあった。

「昼食、用意してくれてたんだ。っていうか、これって、もしかして朝食？ ちょっと寝過ぎたみたいだしさあ。それにしても、朝食にしては量が多いような？」

メモを取り上げてみると、

「なになに、いつ起きるかわかんないから、サンドイッチは多めに作っておいたって？ それから、ママはお仕事で17時頃まで帰って来ない？ でっ、麻弥は友達と遊びに出かけたのか。ふんふん、それで、留守中、Yukiの世話を俺にお願い、ってか。はいはい、わかりました」

しかし、久しぶりに家でひとりになってみると、すっごく寂しいような気がする。Yukiは居るんだけどさあ。ガッコ休んでたときも、家にひとりっていうのはあったけど、丸一日誰も居ないっていうのは初めてかなあ？

さて、今日は、どうしよつか？ 試験勉強は、昨日、智絵ちゃん家でやったばかりだし、勉強する気にはならないし、かといって、家でひとり過ごすのも、なんかめっちゃ寂しいし。そうだ！ 鮎美ちゃんに、家に遊びに来てもらおうか？

『おかけになった電話番号は、電波の届かない場所にあるか、電源が切られている為、かかりません』

「あれっ？ 圏外？ どこかに出かけてるのかなあ？ なあーんだ、当てが外れちゃったよ」

うーん。どうするかなあ。あつ！ そうだ、里子ちゃん。里子ちゃんに一度会ってみよう！ 俺が学校休んでいる間、電話やメールではやり取りしてたけど、まだ一度も顔を合わせて会ってないし。よしっ！ 決めた！

プルルル… プルルル… プツッ。

『はい、もしもしいー、まゆちゃん？』

「うん。里子ちゃん、ご無沙汰。元気してる？」

『そっちこそ、どうなの？ 学校の方。もう大丈夫なの？』

「うん、先週の月曜日から復帰したから」

『そう、でっ、今日はどうしたの？』

「うん、今日は、誰も家に居ないの。それで寂しくて、里子ちゃんに電話掛けちゃった」

『そうなんだ？ 悩み事や相談ならいつでもしてよ、私、力になるから』

「ありがとう。相談じゃなんだけど、もし、都合が良ければ、今日、会わない？」

『うん、いいよ。別に、今日は予定とか入ってないし』

「ねえ、里子ちゃんって、わたしん家って知ってるの？」

『うん、何度か遊びに行ったことあるよ。心配しなくても大丈夫だから』

「そう、じゃあ、家に来てくれるかな？ 何時頃になるの？」

『そうねえー、もうお昼前だし、14時頃でもいいかな？』

「うん、いいよ」

『そう、じゃあ、また後で』

「あつ、待つて！ わたし、急に家に来てなんて、ワガママな事言っちゃって、ごめんなさい。里子ちゃんには、今までも、迷惑ばっか掛けちゃってるようだし」

『そんなことないって、友達なんだからさあ、気にしないでいいよ、まゆちゃん。そういう気にし過ぎなところ、今のまゆちゃんの悪い所だわ。直した方がいいよ。じゃないと、またストレス溜めこんじやって、病気になっちゃうよ』

「ありがとう、里子ちゃん。じゃあ、後でね」

『うん、じゃあ電話切るね』

よかったあー、里子ちゃんの都合が良くて。里子ちゃんの当てが外れたら、今日はひとりでどう過ごそうかなって、思ってたし。

ピンポン

「はぁーい」

『里子だよ』

ガチャ。

「まゆちゃん、ほんと、ひさしぶりー」

そう言つて、里子ちゃんがいきなり俺の正面から抱きついた。直ぐに放してくれたが、女の子に抱きつかれるのって、やっぱり、まだ恥ずかしい。こうゆうの、もう、慣れちゃったかな？ って自分では思ってたけど、やっぱり、慣れない。

こうやって、実際に会つと、里子ちゃんも結構背が高く、鮎美ちゃんと同じくらいか、それより高いくらい？ スラっとした体形で、茶髪のベリーショート頭やパンツスタイルがカッコ良くて。あっ！ 男装の似合う麗人って、感じがするだけ。なんか、女の子にめっちゃモテそう。

「さあ、上がって」

「おっじゃましーす。あっ！ Yuki！ ひっさしぶり！ 元気いー？ 私も欲しいな、愛犬」

里子ちゃんがYukiの頭を撫でてる。里子ちゃんも犬、大好きなんだね。

「遠いところ、わざわざ来てもらって、ごめん」

「なに言ってるんの、ただだか、電車で30分ぐらいの距離じゃない」  
「そうなの？」

「あつ、ごめん。まゆちゃん、覚えてないんだったね。私ん家来たこと」

「わたし、里子ちゃん家、行ったことあるの？」

「うん、サッカークラブの練習帰りに、何度かね」

「そう、ところでそのサッカークラブの事なんだけど、皆はわたしの今の状態こと、知ってるの？」

「うん、私から監督やメンバー、皆には伝えておいたよ」

「そう、ありがとう。それで、皆の反応はどうなの？」

「うん、監督はさすがに残念がっていたわ。これから、まゆちゃんのレギュラー起用を考えてみたいだし、それに合わせたフォーメーションとかの新構想も考えてみたい。メンバーのみんなも、新戦力に期待してたみたいで、がっかりしてた。でも、まゆちゃんは気にしないでいいよ。ヘンなプレッシャー掛けるつもりは全然ないから。今は心身の健康状態を第一に考えて。復帰に時間が掛ってもいいじゃない」

「ありがとう、そのことなんだけど、来週の日曜日から友達と、サッカーのリハビリ練習始めようと思うの」

「そう、それは良い事ね。でも、余り無理はしないでね。ところで、その友達って誰なの？」

「えっと、喜多村くんっていうサッカー部の男の子なんだあー」

「そう言った直後、俺の顔が少し熱くなったような気がした。」

「えっ？ 喜多村くんって？もしかして、その男の子って、喜多村泰介くん？」

「えっ？ 里子ちゃん、喜多村くんのこと、知ってるの？」

「知ってるも何も、中学校の時の、クラスメイトだったもん」

「そうなんだ？ 世間って、以外と狭いものね」

「そうかあー、たいちゃんか。高校に入ってから、会ってないんだけど、あの子もサッカーやってたから、もしかしてって、思っ

聞いてみたの」

「たいちゃん？ 里子ちゃん、クラスメイトって言ったけど、何か妙に親しい感じだよね？」

「里子ちゃん、喜多村くんとは、親しかったの？」

「まあ、そうね。お互いサッカーやってたわけだし、男の子の友達の中では、一番仲は良かったかな？」

えっ？ もしかして…… 里子ちゃんって、喜多村くんの元カノってこと？ それとも、単なる男友達？ うーん、なぜだか、二人のカンケイがすごく、気になるうー ちよつと聞いてみる？ でも…… ほんとに元カノだったら、どうすればいいのかなあ？

「喜多村くんと、デートとか、したり？」

「デート？ ふふっ。あれがデートねえー、デートと言えば、デートになるのかなあ？ まあ、都合の合わなくなった友達の代わりに、代表の試合と一緒に見に行ったり、一緒にサッカーの自主練習したりってとこかな？ これがデートって言うのなら、余りに色気も何も、ないわよねえー」

やっぱ、元カノなの？

「ふうーん、そうなんだ」

「あつ、もしかして、まゆちゃんって、たいちゃんに、ほの字なわけ？」

「えっ？ ちよつと、気になっただけ」

「ウソつかない！ まゆちゃんって、さっきから、そわそわしてるし、まゆちゃんがたいちゃんに、気があることぐらい、私にもわかるわよ。大丈夫、私とたいちゃんって、単なる友達関係だったから、

まゆちゃんが心配することはないよ」

「えっ？ そうなの？」

「ほら、やっぱり。もっと、素直になんなきゃ。たいちゃんのこと、好きなんでしょ？」

「うっ、うん」

わあーっ、思わず言っちゃった。

「ところでさあー、まゆちゃん」

「んっ？ なに？ 里子ちゃん」

「そのリハビリ練習っていうの、私も協力させてくれない？ たいちゃんなら、私も気心が知れてるしさあ」

「わたしは別にかまわないけど、喜多村くんがどう言うかな？」

「やっぱ、お邪魔虫だった？」

「えっ、そんなことないよ。じゃあ、喜多村くんに話してみるね」

「ありがとう、まゆちゃん。その替わりっていうのもなんだけど、私が二人の愛のキューピット役、やってあげよっか？」

「里子ちゃん、ごめん。まだ、わたし、喜多村くんへのキモチの整理が出来てないの。だから、それまでは、暫く時間が欲しいの」

「そう。じゃあ、私、まゆちゃんとたいちゃんのこと、余計なお節介しないで、暖かく見守ってるから」

「ありがとう。じゃあ、後で喜多村くんに、里子ちゃんもリハビリ練習に参加するって言っておくから」

「じゃあ、そうゆうことで、まゆちゃん、お願いね」

「うん」

里子ちゃんと暫く色々と話した後、気晴らしに、二人でYukiを連れて散歩することになった。里子ちゃんは、愛犬が欲しいって言ってたので、Yukiの綱は里子ちゃんが持つてる。

「私、愛犬を連れて散歩っていうの、一度やってみたかたんだあー。ありがとう、まゆちゃん」

「里子ちゃん家って、犬は飼えないの？」

「うん、うちの母親が犬猫が大の苦手で、全然ダメみたいなの。動物アレルギーっていうのもあるみだし」

「そう、それは仕方がないよね。でも、また里子ちゃんがわたしん家に遊びに来たら、Yukiを散歩に連れて行こうよ」

「ありがとう。まゆちゃんの、その優しい気持ちだけで十分だよ」

「そんなあー。別に、わたし、ちっとも優しくなんかないよ。ワガママだし、皆に迷惑ばっか掛けているし」

「もうあー、だから、電話でも言ったけどさあー、そういう所、良くないよ、今のまゆちゃんって。自分を卑下し過ぎだぞあー、そんな調子だからストレスで倒れちゃうんだよ。もっと自分に自信を持つて、自分を大切にして、素直な気持ちにならなきゃ、ねっ！」

「うん、ありがとう。今度から気を付けるね」

里子ちゃんの言うことは、自分でもわかってるつもりなんだけどさあ、俺の中で、心と体が一致しないっていう問題は、依然として解決してないわけで、それが自信の無さに繋がっているのは確かなことなんだよなあー。

でも、こんな事、家族や友達、誰にも相談できない。そんな事、言っただ後の皆の反応が怖いし、今まで少しずつ築いてきた家族関係も友人関係も、全てが一気に壊れてしまうんじゃないかって、考えただけでも恐ろしい。

「まゆちゃん？ どうしたの？ 何か考え事？ さつきから俯いちゃって」

「あつ、ごめんなさい、そう、ちょっと考え事してたの」

「またあー、ネガティブな事でも考えてたんじゃないの？」

うわぁー、やっぱ見透かされてる。ホント、女の子って、カンが鋭いよなぁー。

「ゴメン。これからのことが不安で仕方なくて」

「そうよね。今のまゆちゃんって、何もかも再スタート切らなきゃいけないものね、これから、ひとつずつ積み上げていって、それを自信に繋げて行くしかないと思うよ。凄く大変な事だと思うけど、頑張つて。私も協力するし、応援もするから」

「ぐすつ… ひつく… あっ、ありがとう」

「えっ！ 泣いてるの？ まゆちゃん」

「ごっ、ごめん。わたしって、ホント、最近泣き虫になっちゃって、涙止められなくて。自分でも情けないって思うの」

「そんなの、気にしなくてもいいよ。女の子は泣きたい時に泣けばいいの、それが一種のストレス発散にもなってるんだから」

「ぐすつ… そうなの？」

「うん、だからそう気にしないの、わかった？」

「うん、ありがとう。里子ちゃん」

里子ちゃんは、夕方には帰って行った。

今日、里子ちゃんに会って、直接、話が出来たのは良かったのかもしれない。また一人、俺を助けてくれる心力強い協力者が増えたのだから。

でも、いいのかな？ こんなに皆に甘えちゃっても。ホント、何か恩返しでもないといけないよね。

ブルブル… ブルブル… ブルブル…

ああー、心臓のドキドキが止まんない。どうしよう？

プツッ。

『はい、もしもし、木下さん？』

「喜多村くん？ ごめんね、急に電話なんかして」

『どうしたの？ 木下さんが僕の携帯に電話くれるなんて、初めてだよ？ 嬉しいな』

「えっと、来週の日曜日、リハビリ練習のことなんだけど…」

『もしかして、都合が悪くなったとか？』

「ううん、そうじゃなくって、その…」

『どうしたの？ 何だか言いにくそうだね、何かあったの？』

「喜多村くんって、岡部里子ちゃんっていう子、知ってる？」

『ああ、さとちゃんね。中学んときの友達だけど、それが、どうしたの？』

さとちゃん？ って妙に親しいんだね。里子ちゃんも、喜多村くんのこと、たいちゃんって呼んでた。この二人、やっぱ、付き合ってたのかなあ？

「その… その里子ちゃんって子なんだけど、実は、わたしと同じサッカークラブに所属してる友達で、今度のリハビリ練習に里子ちゃんも協力したいって、言ってきたんだけど、いいかな？」

『そうなんだ？ えっと、木下さんがいいのなら、僕は、別に構わないけど…』

「そう、じゃあ、里子ちゃんも練習に参加してもいいの？」

『うっ、うん、いいよ。用事はそれだけ？』

「うん、それだけ」

『あつ、そうそう。昨日のサッカー女子代表の試合って見た？』

「えっ、ごめん、見てない」

見てないっていうより、試合があることすら、全然知らなかった

んだけど。

『そう、見てれば今後、サッカー復帰に向けて、いい刺激材料になるかなって思ってたさあ』

「日本の女子代表って、強いのか？」

『ああ、最近、力付けてきたし、男子より強いよ。僕って、女子サッカーに余り興味を持ってなかったし、甘く見てただけで、昨日の試合見てたら、テクニクがある選手もいたし、試合、見て面白かったよ』

「へえー、そうなんだ？」

『録画したやつ、ダビングしてあげよつか？』

「えっ、いいの？」

『じゃあ、来週、ダビングしたやつ、学校で渡すよ』

「ありがとう、喜多村くん」

『サッカーの、いいイメージトレーニングになると思うんだ』

「色々、気を使ってもらっちゃって、ごめんね」

『そんなことないよ。長電話も悪いし、そろそろ、電話切るね。じ

ゃあ、おやすみ、木下さん』

「おやすみなさい、喜多村くん」

「はあーっ」

なんだろ？ この脱力感。結構緊張してたけど、何とか喋れたって感じ。と言っても、喜多村ちゃんと里子ちゃんのカンケイのこと、詳しくは聞けなかったんだよね。

ああー、益々気になってきた。なんで？ 里子ちゃんは、ただの友達って言ってたじゃん、気にすることないじゃん、なのに…これって、もしかして嫉妬っていうやつ？ マジで？ つまり、嫉妬する程、喜多村くんのが気になってるってことなんだ？ ああー、こりゃ、重症だあ。

## #25：新たな協力者（後書き）

無意識に、里子ちゃんに嫉妬していた様子の真結花。  
改めて、喜多村くんへの想いを気付かされたようですね。

次回につづく。

## #26：甘あゝい放課後

キン／＼コン／＼カン／＼コーン

「ふうー、つかれたあゝ。やっと終わったよ、中間考査」

智絵ちゃんの勉強会が無かったら、正直、ヤバかったかも。自分では結構答えられたと思うんだけどなあ。さあ、後は、鬼が出るか蛇が出るかってとこだね。

「ねえ、真結花。試験も終わったことだし、駅前のスイーツでも食べにいかない？ 疲れた時は、甘い物が体にいいって言っしさあ」  
鮎美ちゃんが、席を立ち、俺の後ろから声を掛けてきた。

「そうだね。もうお昼前だし、ちょうど小腹減ってたところだし。他のみんなは？」

「うん、一応声掛けてみたけど、何かみんな用事あるみたい。智絵は何かピアノレッスンがあるって言ってたし」

「智絵ちゃんって、音大にでも進むのかな？」

「確か、小学校の先生か、音楽の先生になりたいって、言ってたよ。うな気がするけど」

「へえー、もう進路、決めてるんだ。わたしなんて、今が精一杯で、まだそんな先のこと、全然考えてないよ。鮎美ちゃんはもう決めるの？ 進路」

「うーん、高校卒業したら、美容師専門学校にでも行こうかなって、おぼろげながら考えてるんだけど。真結花のママ見てたらさあ、カツコイなって憧れちゃってさあ。私って、親みたいにああ、普通の会社勤めって、なんだか合わないのかなってね」

「へえー、鮎美ちゃんも、将来の事、ちゃんと考えてるんだ。何だ

かわたしだけ、おいてけぼりって感じ」

「真結花、そう落ち込みなさんなって、まだ1年生じゃん。進路なんて、これからゆっくり考えたらいいんだからさあ」

横に立っていた鮎美ちゃんが、俺の左肩を摩りながら、慰めるように言ってくれた。

みんな、将来のビジョンがすっかりしてるよなあー。俺だけ、なーか、ふわふわしてて、将来進むべき道がまるで見えてないし、この先もどんより曇ってるって感じ。

しかも、恋心みたいなの？ 自分でもよくわからないものなんかに振り回されて、そんなものなんかにうつつを抜かしてて… ホント、焦っちゃうよなあー。

みんな、どんどん前に進んでるっていうのに、俺だけ足踏みしたまま、止まってるって感じでさあ。このまま、流されるままでいいんだろうか？

「ねえ、真結花。ボーっとしちゃってさあ、また考え事？ 最近多いよ？ 何か悩み事あるんだったら遠慮なく言ってよ。いつでも相談乗るし」

「うん、ありがと。まだ進路決めてないからさあ、ちょっと、気が焦っちゃって」

「真結花、そうやって考えてばかりでさあ、立ち止まっていても仕方が無いよ。真結花のママが言ってたようにさあ、迷ってても、とにかく前に踏み出さないと、物事って先に進まないんだからさあ、ねっ？」

「うん、今、グダグダ考えても意味ないよね？」

「そうそう。じゃあ、気分変えて、あまーいもの、食べに行きますか？」

「うん、いこつー！」

鮎美ちゃんは、甘いものに目が無いようで、目的のスイーツのお店に辿り着くまで、スイーツについて、熱く語ってくれた。お店に着いたまではよかったのだけど…

「げっ！ お店ん中、うちの生徒や他校の生徒でいっぱいじゃん、おまけに席待ちで数人並んでるし。このお店って、店舗が狭いから、座席ってそんなに多くないんだよね」

「試験明けだし、同じこと考えてる人がいっぱいいるってことだよね」

「しょうがないなあー、お持ち帰りにしよつか？」

「うん、いいよ、別に」

ショーウィンドーに並ぶカラフルなスイーツたちを見てると、なぜだか心がワクワクして来た。俺って、スイーツなんかに興味あったのかなあ？ やっぱ、気持ちちが女の子になつて来てる？ 女の子って、こつゆう甘いもの、好きだもんなあ。

ここは、自分の欲求に素直になった方がいいんだよね？ グダグダ考え込めると、またストレス溜めこむだけだしさあ。

さて、どれにしよつかなあゝ。うゝん、これだけ色々あると迷っちゃうよなあゝ。あつ、このケーキ、見覚えがある。鮎美ちゃんが退院祝いに買ってきてくれたケーキ！

さんざん迷ったあげく、鮮やかな赤い苺が美味しそうに見えたので、苺のティラミスを手チョイスした。鮎美ちゃんは、フルーツケーキにしたようだ。

「鮎美ちゃん？ もしかして、退院祝いに買ってきてくれたケーキ

って、このお店で買ったの？」

「ここじゃないけど、同じ系列店だけど。それが、どうかしたの？」  
「だって、同じケーキ見つけたから」

俺は、それって、いうふうに指をさした。

「ああ、あのメロンシフォンケーキね、人気あるみたいで残っているのは珍しいんだけどね。そうだ、買ったスイーツ、私ん家で食べない？」

「いいの？ 鮎美ちゃん家におじゃましても」

「遠慮しなくてもいいって、親は仕事だし、誰も家に居ないしさあ」  
「そう、じゃあ遠慮なく」

「おじゃまします」

「ただいまあー。って、言ったところで誰もいないんだけどさあ」

家に入ると、鮎美ちゃんと俺は、ダイニングテーブルに向かい合  
わせに座った。俺って、この家にも何度か遊びに来ているんだよな  
あ。部屋を見渡してみたが、全然、思い出せない。

「んっ？ どうしたの？ 真結花。落ち着かない感じで？」

「鮎美ちゃん？ わたしって、この家に何度も遊びに来ていたのよ  
ね？」

「うん、そうよ。何か思い出したの？」

「ごめん。何か思い出すかなって、部屋を見渡してみたんだけど、  
やっぱり、無理だったみたい」

「そう。そんなの、気にしなくてもいいからさあ。それより飲み物、  
何飲む？」

「何があるの？」

鮎美ちゃんが冷蔵庫を開き、

「えっと、ウーロン茶にスポーツドリンク、ミルクと、オレンジジュース。暖かいものがいいいなら、コーヒー、ココア、紅茶があるけど」

「じゃあ、オレンジジュースで」

鮎美ちゃんから飲み物を受け取り、苺のティラミスをとくち、口に入れると、口の中に広がる甘さと同時に、ふと、気になった事があつたので聞いてみた。

「鮎美ちゃんって、家ではいつもひとりで過ごしているの？」

「うん、そうね。普段はテニス部で部活やってるから、そんなにひとりの時間は長くないと思うけど」

「でも、寂しくないの？」

「小学校高学年くらいからこの調子だから、家の中でひとりで過ごす事は、もう慣れちゃったかな。まあ、仮に親が家に居たとしても、何だかんだとやかく、煩く言われてウザいだけだし」

「鮎美ちゃんの両親って、厳しいの？」

「私、一人っ子だし、年頃の女の子だから、親は色々と気になるんじゃない？ 口出ししたくって、仕方無いんだと思うわ。真結花ん家が羨ましいなあ。お母さんは優しいし、姉思いの妹が居るしさあ」  
「そんなことないと思うけど。だって、ママや麻弥にも怒られるよ、わたし」

「それは、真結花を愛してるが故の叱咤でしょ？ うちのは、半分嫌みや親の偏見だもん。部活を始めたきっかけだって、親に家の中で口出しさせないための口実だったしね。それに、学校終わって、直ぐに家に帰って、暇もてあそぶのもなんだし、部活は時間潰しって感じ。だから、そんなに真剣にやってないよ。体動かしてストレス発散するには、丁度いい趣味って思ってる。だいたい、うちの学校って、至って普通じゃん。進学校でもないし、運動部に特段力が入っているわけでもないしさあ」

「ふうーん、そうなんだ。鮎美ちゃんって、ひとりで過ごす事、慣

れてるのね。わたしと全然違うんだ？　わたしなんてあの事故以来、家にひとりでいると、無性に寂しい気分に襲われちゃうの。こないだの日曜日だってそう。鮎美ちゃんに遊びに来てもらおうと思って電話掛けたんだけど、繋がらなかったよ？　どっか、出かけてたの？」

「うん、まあね」

「もしかして、彼氏と遊びに行ってた？」

「まあ、随分とご無沙汰してたからね」

「そっ、そう」

鮎美ちゃん？　そのご無沙汰って、やっぱりアレのこと？

一瞬、鮎美ちゃんのエッチな姿を妄想しまい、思わず赤面してしまった。

「んっ？　どうしたの？　あっ、なんーか勘違いしてるでしょ？

真結花。顔、赤くしちゃってさあ。まあ、エッチなんだから」

「えっ？　ちっ、ちがうよ」

やっぱり、鮎美ちゃんに見透かされてしまい、動揺してしまった。

「ふうーん。あの純情で、うぶな真結花がねえ。最近、ようやく恋に目覚めたかと思ったら、そうゆう事にも興味が出て来たってわけね？」

「えっ？　そんなことないよ」

「そんなのウソ！　正直に言いなさい。みんなやってることなんだから、恥ずかしがらなくてもいいの」

「鮎美ちゃんは、もう経験済みなの？」

「うん。だから、真結花がそうゆう方面で困ったら、いつでも相談に乗るから、ねっ？」

この体で、男の子とあれこれするって？　そう思った瞬間、背筋

にゾクつと寒気がした。うつわあーっ！ 無い無い、そんなの、ぜつーたい、無い。死んでも無いから。

ふうー。どうやら、気持ちが女の子になって来ているっていうのは、思いすごしのようだ。うん、そうに違いない。俺は正常。俺は正常。俺は正常。これだけ暗示かけときや大丈夫！

「あのー、鮎美ちゃん？ そうゆうのは、当分無いと思うんだけど？」

「なに言ってるんのよー。喜多村くんと、あるかもしれないじゃない？」

「えっ？ そんなの無い無い。だって、それ以前の話だよ？」

「じゃあ、その時が来て困らないように、練習してみる？ 真結花」  
「えっ？ いったい何の事、言ってるの？ 鮎美ちゃん？」

もっ、もしかして、鮎美ちゃんって、そっちの気があるわけ？  
ええっー。

でも、彼氏いるじゃん。ってことは、両刀使いつてこと？ えっ？  
マジで？

「何って？ 真結花。当然、キスの練習よ！」

えっ？ やっぱり？ そうなの？ 鮎美ちゃんって？ でも、困ったようなうれしいような、フクザツな気持ちなんだけどさあ。

ああー、自分でもどうしたらいいのか？ よくわかんない。やっぱり、女の子同士なんだし、それはダメでしょ？ いくらなんでもふつーに考えたら。

「ごめん、鮎美ちゃん。そうゆの、ムリだから」

「ホント、うぶよねえ、真結花って」

「そっ、そんなことないもん」

「じゃあ、やってみる？ キス」

「女の子同士なのに、鮎美ちゃんは、抵抗ないの？」

「私は大丈夫だからさあ、心配しないで。私を信用してよ、ねっ？」

そう言つて、鮎美ちゃんは、テーブルに座つていた俺の腕を取つて、無理やり立たせると、俺の両肩に両手をがっちり置き、動けない状態にした。

「鮎美ちゃん？ ヤメテ。お願いだから」

鮎美ちゃんは俺の言葉を無視し、ゆっくりと俺の目の前に、顔を近づけて来る。

うああー、鮎美ちゃんの、そのトロンとした目でキスを迫る表情、色っぽくて、もう、めっちゃカワイイ。そんなカワイイ顔で見つめられたら、俺、もう、どうにかなちゃいそう。もう、ダメかも。このまま、どうなってもいいや。

「目、瞑つて、真結花」

鮎美ちゃんが甘い声で、優しくささやく。

その言葉にトロけそうになった俺は、鮎美ちゃんに言われるがまま、目を瞑つた。

うわあー、心臓が破裂しそうなほどドキドキする。これって、もしかして？ ファーストキス？ でも、鮎美ちゃんになら、捧げてもいいかも。

覚悟を決めた、その直後、  
おでこにかかるーく、ちょっん、っと柔らかいものが当たる感触がした。

へっ？　もしかして、おでこにキスしたの？　鮎美ちゃん？

ゆつくりと、目を開けると、さっきまでの色っぱかった表情は何処へやら、今度は悪戯っぽい表情を見せる鮎美ちゃん。

「あはっ、ホンキでキスするとも思った？　真結花」

ホント、最近の真結花って、超可愛い過ぎ。一瞬、マジでヤバかったよお。

ったく、鮎美ちゃんって、冗談がキツイ。

そう、“まんまと引っ掛ってくれて、ありがとう！”　って言わんばかりの表情だ。

「もうおー、ひっどーい。ほんと、イジワルなんだから！　鮎美ちゃんって」

俺は、思いつきり、ふくれっ面で文句を言った。

「ごめん、ごめん。ちょっと、やり過ぎちゃった？　でも、その気になってドキドキしてたでしょ？」

実は、私もヤバいくらい、ドキドキしてたのよねえ。だって、真結花にこんなことするの、今回が初めてだし。

「もう、知らない！　鮎美ちゃんなんて！」

俺は、ワザと怒ったフリして、ぷいっと、鮎美ちゃんから顔を背けた。ふんっ！　これは、イジワルのお返し。

「まあ、まあ、今度、好きなスイーツ、おごってあげるから。キゲン、直してよ、ねっ？」

鮎美ちゃんは、許しを乞うように、顔の前で両手を合わせて謝る。

「この仕打ちは、高く付くからね？　鮎美ちゃん？」

「真結花さまあゝ、そこは、予算内で、おねえがゝい」

今度は甘えた声で、両手を合わせながら、ラブリーな表情で鮎美ちゃんが懇願してきた。

正に、女の子の武器をフル動員したその攻撃に、思わず、“鮎美ちゃんカワイイ！” って、不覚にも思ってしまった。

やられっぱなしなもの、しゃくだし、もう少し、懲らしめてやろうと思つてたのにい… ホント、ずる賢いというか、調子がいいんだから、鮎美ちゃんって。

「もうお、わかったわよ。これくらいでカンベンしてあげる」

「サンキュー、真結花。さすがは心の友！」

まったく鮎美ちゃんって、イタズラっ子なんだからさ。でも、そうゆうところが、またカワイイんだけど。べつ、別に、恋愛対象として女の子が好きとかそういうことじゃなくて、あくまでお友達としてだから。そう、そうに決まってるじゃん。

でも、俺って、ホントよくわからない。恋愛対象として、男の子が好きなのか？ 女の子が好きなのか？ どっちも、中途半端というか。

もしかして、俺って、両刀使いなわけ？ そつ、そんなことないよね？

？

#26：甘あゝい放課後（後書き）

鮎美ちゃんの、思わぬイタズラ？ に困惑した様子の真結花。  
本当にイタズラなのでしょうか？ それとも…

次回につづく。

## #27：こころのカギ。

それにしてもさあ、鮎美ちゃんのイタズラには正直、マイツタよ。あんなことして、面白がつてるんだから。危うく、ファーストキスを奪われそうになっちゃったし。

でも、自分でも、鮎美ちゃんならいいって、思ってたし、まんざらでもないような気が…。ああ、ダメダメ、そんな事考えてちゃ。アブノーマルな世界に行っちゃいそうで、怖いよ。

やっぱ、女の子なんだし、男の子を好きになってもいいんだよね？ うーん、でも、やっぱり、よくわかんないよ。今の自分の気持ち、フラフラしてて。

今、あれこれ考えたって、何の答えも出ないし、このまま、心の欲求のまま、自然な気持ちに任せた方がいいのかな？

そうやって、考え事をしながら歩いていたら、いつの間にか、自宅に着いていた。家のドアのカギを開けようとしたら、キーが空回りした。

あれ？　なんで家のカギ、掛ってないの？　おつかしいなあー、こんな時間に誰か、家に居るのかなあ。ママ？　それとも麻弥？　でも、不用心だなあー、いつも、家に居てもカギ掛けてるはずなのに。はっ！　もしかしたら！　嫌な予感がした。

ガチャ。

俺は、注意深く、ドアをゆっくりと少しだけ開け、ドアの隙間から玄関を覗いて見た。玄関には、男性用と思われる、かなりくたびれた様子の、大きな小汚いスニーカーが無造作に脱ぎ捨てられてあった。

えっ？　もしかして、空き巣？　ドロボーに入られてる？　ホント、ここ最近って物騒だし、空き巣の話も良く聞く。困ったよ。こんな小さくてか弱い体じゃ、体の大きな男性に対して、たちうちできないよ。

更に、玄関を見渡して見ると、傘立てが目に入った。そうだ、あの傘を武器にすればいいじゃん。意を決し、玄関のドアをゆっくり開け、ドアを閉じた瞬間、“ガチャ”と音がしてしまった。

しまった！　そう思った瞬間、愛犬Yukiが玄関に小走りで現れ、

「わんっ！　わんっ！」

「しっ！　やっぱり、ドロボーが居るのね、Yuki。あなたは無事でよかったわ」

そう言った後、玄関に通学カバンを置いて、フックに掛けてあった、Yukiの散歩用のリードを取った。ドロボー退治の前に、Yukiをどうかしないと。

俺は、Yukiを抱き、一旦、外に出ると、Yukiに散歩用のリードを付けて、庭の物干し竿のポールにYukiを繋いだ。

「ごめんね、Yuki。ちょっとの間だけ、ここで、辛抱しててね」

そう言って再び、玄関に戻ると、傘立てに、立ててあった、パパ用と思われた大きな傘を手にした。そして、ドアのカギは締めないことにした。ドロボーを傘で攻撃し、外に追い出す作戦だからだ。

俺は、傘を手にしたまま、廊下をそれこそ、ドロボーのように、抜き足差し足忍び足で、音を立てないように細心の注意を払い、リビングの入り口の手前で立ち止まった。壁に背中を付けて、リビン

グを覗いて見る。

さっき、庭からこっそり、リビングを覗いて見たけど、誰も居なかったんだよね。あれっ？ やっぱり誰も居ない？ そう思った瞬間、バスルームの方からシャワーの音と男性の鼻歌のような声が聞こえた。

なにっ？ 人ん家にドロボーに入って、シャワーまで浴びてんの？ どうゆう神経してるわけ？ このドロボーさんは。

バスルームにターゲットを絞り、ドロボーが着替えて、脱衣所から出てくる所を狙い撃ちすることに決めた。さすがに、裸のままではこっちも目のやり場に困る。

俺は、傘を両手に握ったまま、脱衣所の、扉の横の壁に張り付いた。その瞬間、

カチャ。

「ふうー。いい湯だった。生き返った気分だ」

ドロボーがバスルームを出て、ごそごそと着替えている音がする。もうすぐ出てくるはずだ。ああ、心臓がバクバクする。手に汗までかいてるよ。

カチャ。

今だ！

「ええーい」

バチンッ！

「イテツ、うわっ！　びっくりした！」

「へっ？　もしかして、パパ？」

「真結花、帰ってたのか？」

「パパ、それはこっちのセリフよ！」

「しかし、なんだ？　いきなりそんな物騒な物振り回して来て」

「ごめんなさい。てつきり、ドロボーかと思って。パパ、大丈夫？」

「ああ、ちよつとイタかったけど、大したことないよ、腕に当たっただけだから。それより、ドロボーってなんだい？」

「ホントにごめんなさい。帰って来たら、ドアにカギが掛ってなかったし、玄関に小汚い男性のスニーカーが無造作に脱ぎ捨ててあったもんだから、てつきり、空き巣にでも入られたのかと思っちゃって。最近、物騒だし」

「そうか、ママには今日帰るって、メールで連絡しておいたんだけどな」

「わたし、何も聞いてないよ。ママから」

「そっかぁー。もしかしたら、時差の関係かな？　それとも、ママは忙しくてメールを読んでないのかもしれないな。まっ、それはいいとして、今日は学校早いな？　真結花」

「うん、今日は試験最終日で、午前中までだったから」

「そうか。ところで、もうお昼にしないか？　真結花」

「わたし、今日は、ママに昼食用意しなくてもいいって言っちゃった。だから、お昼っていつでも、カップ麺とかレトルト食品ぐらいしかないよ？」

「さつき、宅配ピザが届いたから、一緒に食べよう。一人じゃあちよつと、量が多いかもしれないって思ってたところだから」

「うん」

二人でダイニングテーブルの椅子に座ると、

「わんっ！ わんっ！」

庭に通じるガラス戸から、Yukiが吠えている姿が見えた。

「あっ！ いっけな〜い。すっかり、Yukiのこと、忘れてた」

「真結花、なんでYukiが庭に居るんだい？」

「ドロボー退治するのに、Yukiが居ると邪魔になると思って」

「パパがドロボーさんか、ははっ」

「だから、ごめんなさいって、言ってるじゃない。パパ」

「ああ、ちよっと、おかしくて、つい。さっき、真結花が小汚いスニーカーって言ってたのを思い出してさあ。そういえばさあ、よく考えてみたら、向こうに行ってから、ずっと同じスニーカーを履いてたからな。それより、真結花。Yukiが物欲しそうに、ずっとこっち見てるぞ。かわいそうだから、早く家の中に入れてあげたらどうだい？」

「うん」

Yukiを家の中に入れた後、二人でピザを食べてたら、パパが聞いてきた。

「真結花、学校の方は上手くやってるのか？」

「うん、まあ、なんとか」

真結花、事故に遭った後、記憶喪失になって、精神状態も不安定だっって言ってたよな？ 憂子は。

そんな感じはしないけどなあ。元気そうだし、真結花と暫く会っていないからそう感じるのか？

「サッカーの方はどうだい？」

「今は、まだお休みしてるの。でも、日曜日からは、お友達と一緒にリハビリ練習始める予定なの」

「そうか、実は、パパも真結花の今後の事が心配で、家に帰る前に、真結花のサッカークラブには顔を出したんだ。監督とは、現役時代

にチームメイトとして戦った旧知の仲なんだ。彼には復帰に時間が掛っても、真結花を頼むと言っておいた。彼もそれは承知で、ケガをしたとでも思ってたって待っている、快く言ってくれたよ。だから、今は、そう焦らなくてもいいぞ、真結花。ゆっくりと、やればいい。健康が一番なんだから、無理をしてはいけないよ」

「うん。ところで、パパは、今まで何処に行ってたの？」

「ああ、家族には悪いと思ってる。欧州にサッカーのコーチライセンスを取りに行ってたんだ。現役を引退したからには、別の就職先を見つけないといけないからね。そこで、帰って来て早々で悪いんだが、次の就職先が九州なんだ。一時期所属してたクラブが2部に落ちてしまって、そこから監督として誘われているんだ。それで、日曜日には向こうに着いていないといけないんだ。だから、家族と過ごせるのも土曜日の夕方までってこと。また、暫くは会えなくなる」

「えっ？ 帰って来たばかりなのに、もう行っちゃうの？ パパ。なんか寂しいなあ」

パパの顔、こうやって、改めてマジマジ見てると、どこかで見たことあるなあゝって思ってたら、パパの若い頃の写真、顔が似てるとてわけじゃあないけど、どことなく喜多村くんの雰囲気似てるとっか！ だから、喜多村くんのことが気になったんだ！

でも、なぜだろう？ パパとは初対面のはずなのに、ママや麻弥と初対面した時のように緊張してないよ。極自然に話せてる。昔からパパのこと、大好きだった記憶があるから？ パパっ子だって、麻弥が言ってたもん。それって、ファザコンなのかなあ？

「んっ？ どうしたんだい？ 真結花。そんなにじつと見て。パパの顔に、何か付いてるのかい？」

「うううん。パパが学校の友達にどことなく似てると思って、つい」「そうかあ、どんな子なのか見てみたいなあ」

「残念ね。実は、今度の日曜日にその子と練習することになったんだあー。パパは、日曜日にはもう家に居ないでしょ？」

「そっかあー、それは残念だなあ。ところで、真結花は今度の土曜日、予定は空いているかい？」

「うん、空いてるよ」

「そうか、じゃあ、麻弥も連れて、久しぶりに遊びに行くか！」

「うん、いいよ。何処に行く？」

「そうだなあー。真結花は日曜日にリハビリ練習の予定があるんだろ？ 遠出すると疲れるだろうし、駅の近くの大型ショッピングモールにあった、アミューズメント施設が新装開店してたな、久しぶりにそこに行くか！」

「うん」

「じゃあ、休みだけど、朝、ちゃんと起きれるかい？ 真結花」

「うん、多分。余り自信はないけど、自分で起きれなかったら、麻弥に起こしてもらおうから」

「そうか、寝起きの悪い日は、いつも麻弥に起こしてもらってたもんな、真結花は」

真結花、本当に記憶喪失なのか？ 憂子は、事故に遭った直後は、余所余所しくて、別人のようだったと言っていた。今日、真結花と会話してみても、いつものように自然だったし、少し会わないうちに、大人しくなって、女の子らしくなったようには感じたが…

特段、変わった様子は見受けられなかったけどなあ。俺が鈍いだけか？ あの事故から、もう一カ月近くも経つのか… 真結花は、何か記憶を少し取り戻したのか？ それとも、心境に変化でもあったのか？ いずれにしても、憂子に聞いてみないと、その辺のことはハッキリしないな。でも、真結花、なんだか元気そうだし、心配する程でもなかったような気もするけど。

イヤイヤ、そうゆう油断が子供の純粋な心を傷付ける結果になるんだ。あの日のように… 俺は、親としては失格だよな。憂子は、

真結花の事で大変だったっていうのに、俺は自分のことで手いっぱい、憂子や真結花に何もしてあげられなかった。せめて、土曜日までは、家族に尽くそう。また、暫く会えなくなるんだから。

「ただいまあー」

「おかえり、麻弥」

「あれっ、パパ、帰ってたの？ 麻弥、何も聞いてないよ」

「ああ、ごめん、ママには連絡しといたんだけど、どうも、伝わってなかったようであー」

「まっ、いつか。ところで、お土産は？」

「あつ、ごめん。バタバタしてて、すっかり忘れてた」

「ええーっ、ひどーい。なにそれ？ 今まで、家族ほっぽいて、この仕打ち。それはないんじゃない？」

「この埋め合わせは必ずするからさ、キゲン、直してくれよ、なあ麻弥」

「ったく、しょうがないわねえー、パパっていつもこうなんだから。パパからサッカー取り上げたら、何も残らないじゃない？」

「相変わらず、手厳しいよなあ、麻弥は。段々と、ママに似てきたな」

「そお？ ところで、パパ。その埋め合わせっていうの、久しぶりに家族全員そろったわけだし、小旅行っていうのはどう？」

「ごめん、パパが家に居られるのも、この土曜日の夕方までなんだよ。次の就職先が決まっててね、今度は九州に行かなきゃいけないんだ」

「もあー、帰って来たと思ったら、こうなんだもんなあー。パパって、いつだってそう。また単身赴任になるのね。なんかさあー、パパって、転勤の多いサラリーマンと変わんないじゃないのって思っちゃう。まっ、職業柄、仕方ないと思うけどさあ、もうちょっと、

家族に気を使ってくれても、いいんじゃない？」

「いつも、家族には悪いなんて思ってる。その埋め合わせっていうのもなんだけど、麻弥、今度の土曜日、予定空いてるかい？ 真結花も連れて、遊びに行こうと思ってるんだけどさ」

「うん、大丈夫だよ。ところでさあパパ、おねえちゃんと話したんでしょ？ おねえちゃんの様子、どうだった？」

「うーん、少し大人しくなって、女の子らしくなったよう気がしたけど、以前とさほど、変わったような感じはしなかったけどなあ」

「ふうーん。いくらにぶいパパでも、少しはわかるんだ？ でもさあ、おねえちゃんがなんで急に女の子らしくなったのか？ パパにわかる？」

「やっぱ、あの事故がきっかけなのか？ 麻弥。記憶を失ったせいで、真結花の性格が変わったのか？」

「ブブーっ、不正解。やっぱ、パパってニブっ。確かに、記憶を失ったこと、それも多少影響があったかもしれないけど、おねえちゃんに好きな人ができたの」

「えっ！ そうなのか？ あの真結花が… 子供だとばかり思ってたが、そうか、もうそうゆう年頃か…」

「パパ、その相手、気になる？」

「そりゃ、気にならないわけ、ないだろう？ その相手、もしかして、真結花と一緒にリハビリ練習するって言ってた、友達なのか？」

「そうよ。でも安心して、パパ。おねえちゃんのカレシ、サッカーも上手いみたいだしさあ、パパに似てて、ニブイ人みたいだし」

「そっかあー。それにしても、パパってそんなにニブイのか？」

「うん、モチロン。パパ、その自覚がないようじゃあ、もう重症よ！」

「お休みなさい、パパ」

「ああ、お休み、真結花」

今日は、突然だったけど、パパに会えてなんか嬉しかった。夕食は、家族4人そろって和気あいあいとした、和やかな雰囲気でした。楽しかったし。そうそう、やっぱりママが一番喜んでたかな。久しぶりにパパに会えたわけだし。もう、パパとママってラブラブって感じでさあ、見てて、こっちが恥ずかしかったぐらいだったし。もしかして、今晚、二人で激しく燃えあがっちゃたりして。うああー、何エツチな妄想してんだろ、俺って。鮎美ちゃんに、あんなイタズラされてから、ちつとおかしいぞっ。

でもさあ、この暖かな、家族4人で暮らす束の間の幸せも、今週の土曜日で終わっちゃうと思うと、なぜだか無性にもの悲しく感じてしまう。

パパともっと一緒に居たい、サッカーも教えて欲しい、なぜだかそんな欲求が心からふつふつと沸いて出てくるみたいなんだ。これって、もしかして、過去の記憶が呼び出されているのかなあ。

そんなことを思いつつ、久しぶりに安らかな気持ちに包まれていた俺は、いつの間にか眠りについていた。

#27：こころの力ギ。（後書き）

突然、父親と初対面することになった真結花。  
父親の前では、不思議と自然に振る舞えた様子ですが…

次回につづく。

## #28：ユメのつぼみ、ヒラクトキ。（前篇）

「真結花、今日、ちょっと話したいことがあるんだけどさあ、一緒に帰らない？」

「えっ、どうしたの？ 鮎美ちゃん。試験も終わったことだし、今日から部活じゃないの？」

「うん、今日はいいの。ちょっとね、真結花に相談に乗って欲しいことがあるの」

あれっ？　なんか、鮎美ちゃんの顔が少し赤いぞお？　いつたい、どうしたんだろう？

鮎美ちゃんの話って、いったいなんだろう？　今日の鮎美ちゃん、いつもの調子じゃないし、なんだか雰囲気が違う。目の前に公園が見えてくると、鮎美ちゃんが、

「ねえ、そのベンチに座らない？」

鮎美ちゃんは、公園のベンチを指さした。

ベンチに腰を下ろすと、鮎美ちゃんが話を切り出した。

「あのさあー、さっき、相談に乗って欲しいって言っただじゃん？」

「うん。その相談したい事って、なに？」

「うん、実は、こんな事言ってもいいのかなあ？　真結花に」

「どうしたの？　鮎美ちゃん。何か悩み事でもあるの？　遠慮なく言ってよ」

「真結花。絶対、私の事、嫌わないうって約束してくれる？」

鮎美ちゃん、明らかにいつもと雰囲気が違う。表情がめっちゃ真剣。よほど、深刻な悩みなのかなあ。

「わたし達、親友でしょ。鮎美ちゃんを嫌うわけじゃない。約束もなにもないよ。だから、言ってよ」

「わかったわ。じゃあ、言うわね」

「うん」

「今まで黙ってて、ごめんね。実は、私、真結花のこと、前からずっと好きだったの！」

「えっ？　なに、いまさら改まって言ってるの？　わたしも鮎美ちゃんの事、好きだよ？」

「だから、友達としての好きじゃなくて、恋愛対象として真結花のことが好きなの。だから、恋人として付き合ってくれないかな？」

「ええーっ！　どうしちゃったの？　鮎美ちゃん？　彼氏がいるじゃない」

「実は、彼氏とはもう別れたの。だって、真結花への想いを貫きたいから……」

「そんなあー、ごめん、鮎美ちゃん。わたし、喜多村くんの事が好きなの。だから、鮎美ちゃんのわたしを想う気持ちは素直に嬉しいけど、その想いは受けられないの」

「どうしてもダメなの？　真結花」

「ごめんなさい、鮎美ちゃん」

「じゃあ、私達、絶交ね！」

「そんなあー、これからもお友達でいてよ。鮎美ちゃん」

「ダメっ！　私、そんなの、耐えられないもの！」

「鮎美ちゃん、泣いてるの？」

「ごっ、ごめんなさい、私、真結花に迷惑掛けるつもりはなかったの。でも、どうしても真結花への想いを抑えられなくて。この想い、真結花なら受け止めてくれるかもしれないって、淡い期待があったの。でも、真結花には、喜多村くんがいるのよね。私、フラれちゃった」

そう言つと、鮎美ちゃんが、急に立ち上がった。

「本当にごめんね、鮎美ちゃん。わたし達、これからもお友達よね？」

「さよなら、真結花。今まで、本当にありがとう」

「あつ、まってー、鮎美ちゃん！」

うああー、俺は、鮎美ちゃんを深く傷付けてしまった。  
これから、いつたい、どうすればいいんだよー。もう、鮎美ちゃんとは友達でいれないの？ うえーん、悲しいよー。心がジンジン痛いよー。もう、胸が張り裂けちゃいそうだよー。

バサッ。

「ふうー。また夢かあ。よかったー、ホッ」

しかし、なんちゅう恐ろしい夢を見たんだよ、俺って。少し寝汗、かいちやった。ああ、今思いだしても、ゾクつく。でもさあ、妙に映像が鮮明で、リアルだったんだけど…

もしかして、これに似たような出来事を過去に体験してたとか？  
相手が鮎美ちゃんじゃなくて、他の子だったのかな？ 何かのきっかけで、記憶が蘇って夢に出できたとか？

たぶん、昨日、鮎美ちゃんにイタズラでキスなんか迫られたもんだから、その出来事と過去の記憶が、夢の中でくつついたのかも？  
もし、本当に過去の記憶だとしたらさあ、相手はいつたい誰なんだろう？ 気になるよなあ。

まっ、いつか。どうせ夢だし、真剣に考えたところで、どうにもならないことだし、気にするほどでもないや。さっ、顔でも洗って気分かえよつと。

洗面所で顔を洗って、タオルで顔を拭いていると、麻弥が現れ、  
「あれっ？ おねえちゃん、今日はひとりで起きたんだ？ エライわねえー」

さすがに、寝起きの悪い俺でも起きるって、あんな悪夢見たら。にしても、麻弥、その、まるで幼子のような扱い、ヤメい！

「たまには、わたしも自分で起きるわよ。いつも、麻弥のお世話にはならないわ」

「ふふん、どうかしら？ 今朝は、悪い夢でも見たんでしょ？」

「えっ？ 何でそのこと、知ってるわけ？」

「だってさあ、今朝、おねえちゃんの『鮎美ちゃん！』って叫ぶ寝言、聞こえたよ？」

「あっ、そう。そっ、それは、朝からお騒がせしちゃったわね」

くっ、寝言、言ってたの？ 俺って。それを麻弥に聞かれてたなんて、もうー、超サイアク！ 顔から火が出るほど、めっちゃ恥ずかしい！

「どうしたの？ おねえちゃん？ 顔、赤くしちゃってさあ」

「麻弥に寝言聞かれて、恥ずかしかっただけ。もう、その話はいいからさあ。さっ、朝ごはん、朝ごはん」

「ふうーん、でも、なんかアヤシいなあ」

「もういいじゃない。麻弥も他人に寝言なんて聞かれたら、恥ずかしいでしょ？」

「わかったわ。もう詮索しないから。ところでさあー、おねえちゃんにお願いがあるんだけどなあ」

「なに？ そのお願いって、麻弥」

「今月お小遣い、ピンチなんだあー。少し、貸してくれないかなあ？ ねえ、おねえちゃん、おねがうい」

あの麻弥が、両手を合わせて俺に頼んでる。雨でも降るんじゃないの？ こんな事、今まであった？ イヤ、俺の知る限り、こんな

事は今回が初めてだ。

ふふーんっ。ここは、姉として、懐の深いところを見せ付ける絶好のチャンス！ここで、麻弥に、貸しを作って置くっていうのもいいね。いつもヤラレっぱなしだし、麻弥の弱みを握っておくっていうのも悪くないね。

「無駄遣いでもしたの？」

「こないだの日曜日にさあ、友達とちよつと遠出しちゃったもんだから、出費が増えちゃったんだよね」

「そう。カワイイ妹の頼みだし、少しぐらいなら貸してあげていいわよ。ただし、来月、ちゃんと返すこと。いくら、姉妹といっても人に借りたものは、きちんと返す。それが、礼儀ってものよ」

「ホント？ちゃんと返すから。ありがとうー。おねえーさまあー、だあーい好きっ！」

そう言うと同時に、麻弥が抱きついて来た。

わっ！ ついに、麻弥にも抱きつかれちゃったよ。麻弥も、やっぱり、女の子独特の甘あーい香りがするんだ？ ああ、こつやつて、麻弥の香りや体の暖かさが伝わってくると、なんだかスツゴく癒されるって感じ。ずつと、こうしていたい。こんなこと、感じるの、今回が初めてだよ。

ついに、禁断の扉が開かれちゃった？ って、んなわけないか？ 単なる、姉妹のスキンシップだって。あつ、もしかして、これが母性本能ってやつなのも。

「ちよつと、麻弥、いきなり抱きつかないの。びっくりするじゃない」

「へへっ、うれしくって、つい」

まったく麻弥って、ほんとゲンキンな子だよなあー。こつゆう時だ

け、妹モード全開で、可愛らしくデレデレ甘えてくるんだからさあ。普段は、少し突き放すような感じなのにい。

正に、これがツンデレってヤツ？ でもさあ、やっぱ、麻弥って、カワイイ。

ふふつ、おねえちゃんって、麻弥の思ってた通りの反応だったわ。以前のおねえちゃんだったら、お小遣い貸して欲しいなんて言ったら、絶対、

『麻弥。わたしにそうやって甘えないの！ 計画的に、お小遣い使わない麻弥が悪いんでしょ。自業自得よ！』

なあーんて言われて、冷たくあしらわれるところだったよ。そうゆう男の子っぽいおねえちゃんも好きだったけど、今の、女の子の子してるおねえちゃんも好きっ。

だってさあ、おねえちゃんに抱きついてても、『もう、麻弥はウザい！』とか言って冷たくされなかったし、麻弥にスッゴク優しくなつたもん。

麻弥としては、こっちのおねえちゃんの方がいいのかも。この際、もっと思いつきり、おねえちゃんに甘えちゃおっかなあ。なあーんて思っちゃたりして。

俺は、いつものように鮎美ちゃんと登校したわけだけど、今朝、あんな夢なんか見ちゃったもんだから、どうも鮎美ちゃんと目を合わせるのが気恥かしい。

「ねえ、どうしたの？ 真結花。さつきから目線合わせてくれないし、なんかモジモジしちゃって、おかしいわよ？」

「えっ？ そう？ そんなことないよ」

ヤバっ、やっぱり俺って、表情や態度に出やすいんだよね。喜怒

哀楽がわかり易いつていうか、単純っていうか、

直ぐに周りに心情を感じかれちゃう。

鮎美ちゃんだけじゃなくて、ママもそうだし、麻弥、里子ちゃん  
だってそう。まあ、女性ってカンが鋭いつていうのもあるけど。

「ウソっ。あつ！ 昨日のこと、まだ気にしてるわけ？」

「うん、まあ、そうかな？」

ホントは、そうじゃなんだけどね。

「なあーんだ、そんなの、全然気にしないでいいから。ただのおふざけよ。私にそっちの気は全然ないからさあ、そう避けなくてもいいじゃん」

とはいいつつも、昨日の真結花って、余りにもカワイかったから、こっちも、ちょっとドキっとしちやっただけだよさあ。

「うん」

学校に着くと、手紙らしきものが、俺の下駄箱の中に入っていた。

「あれっ？ 何これ？」

「んっ？ どうしたの？ 真結花」

“ 真結花様へ ” と書かれた、その手紙を鮎美ちゃんに見せた。

「もしかして、ラブレターじゃないの？ それって。真結花もやるわねえー、ちょっと見せて」

んっ？ これって、どう見ても女の子の字よねえ。ふうーん、どうしたものかな？ 真結花って、事故以前は男の子っぽい感じだったし、女の子にも受けがよさそうだったしねえ。単なるファンレターなら問題ないけど、イタズラや、そっち系の子の恋文だと厄介よね。

さて、どうやって対処しようかなあ。ムシしとく？

「どうしたの？ 鮎美ちゃん？ 考え込んでるじゃんって」

「うん、ちよつと引つかかってね。イタズラかもしれないし、この手紙、私に預けてくれない？」

「別にかまわないよ。そんなのもらっても、困るもん、わたし」

「そうよねえ。真結花には愛しの喜多村くんが居るもんねえ」

「そんなこと、こんな所で言わないでよ。誰かに聞かれたら、恥ずかしいじゃない！」

「いいじゃん、ホントのことでしょ？」

「えっと、それは、その…」

「もう、真結花って、純情よね。ホント、カワイイんだから」

鮎美ちゃんにそんなこと言われて、俺は顔が少し熱くなってしまった。

#28：ユメのつぼみ、ヒラクトキ。 (前篇) (後書き)

鮎美ちゃんのイタズラがきっかけで、記憶がフラッシュバックした様子の真結花。

この出来事の意味するものとは…

次回につづく。

## #29：ユメのつぼみ、ヒラクトキ。（後篇）

授業の合間の休み時間、私は登校時に真結花から預かった、送り主が女の子だと思われた手紙をカバンから取り出し、さっそく読んでみた。

- - -  
- - -  
- - -

真結花様へ

もうだいぶん経っちゃって今更なんだけど、

あなたと廊下ですれ違った際、あなたにムシされて、

つい怒ってしまったこと、改めてごめんなさい。

本当は私に振り向いて欲しくて、あんな行動を取ってしまったの。

あなたが事故に遭って、記憶を無くしたって話、本当だったのね。

あの時、私はあなたの置かれた状況、何も知らなかったの。本当にごめんなさい。

それから、あなたは暫く学校を休んでいたようね。

先週、あなたを学校で偶然見かけたの。そして、あなたにあの時のこと、謝ったわ。

でも、あなたにもう一度、ちゃんと謝りたくてこの手紙を入れておいたの。

入学直後、私があなたに言ったこと、もう覚えてないよね？

もう一度だけ、私にチャンスをくれないかな？

あなたが気を悪くしたこと、謝りたいの。

そして、仲直りしたい。友達として。

このまま、あなたに嫌われたままなんて、私、耐えられなくて。今日の放課後、校舎の裏庭で待つてるから。

絶対に来て。一生のお願い。

早坂友美茄より

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

思ってた通り、やっぱり女の子からの手紙だわ。この手紙の子つて、たぶん、真結花がこの子の事を知らないって言つて、怒らせた子よね。どうやら、イタズラやそつち系の子の恋文ではなさそうだけど。さすがにムシするわけにはいかないよねえ。この文面からするとさあ。

はやさか ゆみな？ 知らない子ねえ。この手紙からすると、真結花つて、入学した時にこの子と知り合いになつてみたいね。その時に、この子と喧嘩でもしたのかなあ？

真結花つて、以前は男の子っぽい性格だったから、多少、男の子と口論になることはあったけど、女の子にはスツゴく優しくかったのに。まあ、そんな性格だったから、女の子受けもよかったようだけど。

でも、何か、引つかかるのよねえ。以前の真結花なら、他人に頼る事が嫌いで、行動力もあつて、放つておいても心配がなかったんだけどさあ。今の真結花つて、放つておけないというか、頼りない妹みたいな感じだし、精神的にも脆くて、何かと心配なのよねえ。

さて、どうしようかなあ。一緒に行つてみる？ やっぱ、ここは、突き放して、真結花ひとりに任せてみようかなあ？ まっ、そろそろ、真結花も、独り立ちさせないとね。以前の記憶がないからといって、いつまでも、私ばかりに頼つてちゃあ、誰かに頼つてばかりの、甘えん坊さんみたいな性格になつちやいそうだし。これから、ひとりで何でも対処できるようにさせなきゃ。

さてと、放課後にでも、ネタ振りしますかね。

「ねえねえ、あゆあゆ、なに読んでるの？」

「うわっ、びっくりした。なにっつて杏菜、コレよ」

「えっ？　もしかして、ラブレター？」

「そう。私って、こう見えて、意外とモテるのよねえ」

「自分で言っちゃう？　でも、いいなあーラブレターなんか貰って」

「杏菜って、好きな子、いないわけ？」

「うーん、このクラスの男子って、喜多村くんを除けば、友田くんみたいにぱつとしない子が多いし」

「そうよねえー、友田くんを始め、このクラスの男子って頼りなさそうだしねえー。だいたい、智絵が学級委員やってること自体、このクラスの男子の頼りなさを象徴してるわけだしね」

「おい、その二人、なに人の悪口聞こえるように言ってるワケ？　嫌味か？」

「あつ、聞こえてたの？　友田くん。ごめーん」

「聞こえるも何も、ワザと聞こえるように言ってるだろ？　結城」

「あはっ、バレてた？」

「ったくよー」

「友田くん。さっきの話、わたしにも聞こえてただけど、鮎美ちゃんの話、聞いたこと、気にしないで」

「ああ、木下に言われなくてもわかってるって。いつものことだしもしかして、木下って俺のこと、気にしてくれてるわけ？　脈あり？」

「そうそう、真結花、なにマジで気にしてるわけ？」

「最近のまゆまゆってさあ、ちょっと生真面目過ぎないかなあ？　もうちょっと、気を抜いた方がいいと思うよ」

「そうかなあ？」

うーん。やっぱ、ここ最近、色々あったもんだから、他人に対して、妙に気を使い過ぎなのかなあ。自分の周りで厄介な出来事が起こるのを恐れてるっていうか、トラブルは避けて通りたいっていうか……

でも、そんなの気にしてたら、キリがないよね？ 明日がどうなるのか？ わかんないとの一緒でさあ、この先で起こることを予測できるわけじゃないわけだし、未来を恐れて不安なキモチになったとしても、今できることを、今、一生懸命やるしかないわけだし。

あつ、俺、何に人生について、真面目に考えちゃってるわけ？  
もうちょつと、楽天的にならなきゃ。

「真結花、帰ろうとしたところ悪いんだけど、ちょっといい？」

「なに？ 鮎美ちゃん」

「この手紙、返すわ。送り主、どうやら、真結花が学校休む前に会った、例の怒らせた子みたいよ。向こうから真結花にちゃんと謝りたいってさ。今日の放課後、校舎の裏庭で待ってるって。行つてあげたら？」

「えっ？ 鮎美ちゃんは、付いて来てくれないの？」

「ごめん、今日は、部活の当番なんだあー。だから、早く部室に行かなくちゃいけないの。だからさあ、真結花だけで行つてくれない？ 元々私は部外者だし、妙に首を突っ込むのもどうかと思うし」

「そう、用事があるなら仕方ないよね。実は先週、その子と偶然廊下で出会ってさあー、向こうから謝ってきたの。だから、もうその話は終わったのかと思ってたんだけど…… さつき、その子が怒ってた事、ふと思ひ出しちゃった。なんか、少し不安なだけだよさあ」  
「大丈夫よ。ちゃんと謝りたいって言うてんだから、何も取って食うわけじゃないんだし」

「そうね。じゃあ、わたし、行ってみる」

「もし、何か問題があったら、後でメールでも入れといて」

「うん、もしもの時には、相談するから」

今のは、ウソ。実は、真結花と手紙の主の様子を、隠れてこっそり観察するために言った口実なのよねえ！。そうとは知らずに、真結花は簡単に信じちゃったみたいだけど。

さてと、そろそろ、いつかな？

どれどれ、んっ？ いたいた。

あの子が、早坂友美茄？ 以前に真結花が言ってたように、ちょっと不良っぽい雰囲気はあるけど、それほどでもないわねえ。あの子の髪の色がそう思わせるのよ。あれだけ、金髪に近いような派手な色だとね。

あれ？ もしかして、あゆ？

木の陰にしゃがんだりして、いったい、何してるのかしら？

「ねえ、あゆ。こんなところで、何してるわけ？」

「うわっ、びっくりした。智絵、急に後ろから声掛けないでよ。帰宅したんじゃないの？」

「吉澤先生に用事頼まれて、体育教官室に寄っていたのよ」

「そう」

「それより、何してるの？」

「しっ！。あそこ、あのふたりの様子、見てたわけ」

「あっ、まゆかちゃん。もう一人の子は誰？」

「私も知らない子なの」

「もしかして、告白？」

「えっ？ まさか、そんな事はないと思うけど…」

「そうかなあ？ あの子の顔、恋する乙女って顔してない？」

「うーん、そう言われてみれば、そうかも」

「来てくれたのね、真結花さん。本当にありがとう」

「早坂さん、手紙、読ませてもらったわ。わたし、以前に早坂さんに対して、何か傷つけるようなこと言ったのかなあ。事故以前の事、何も覚えてなくて凄く申し訳ないんだけど、改めてここで謝りたいの。本当にごめんなさい」

俺は、頭を下げた。謝った。

「私こそ、ごめんなさい。真結花さん、本当に何も覚えてないの？」

「うん、本当に、何も」

「入学直後、ここで、二人で話したことも覚えていない？」

「ごめんなさい。本当に何も覚えてないの。今のわたしには、早坂さんに謝ることしかできないの」

真結花様、私がここで告ったこと、本当に覚えていないんだ？

ラッキー！ って感じ？

これって、振り出しに戻ったわけよね？ 前回は、やっぱ、いきなり過ぎたものね。今度は、慎重にいかなきゃ。

「私こそ、ごめんなさい。私から謝るところか、真結花さんに先に謝れちゃった。もし、真結花さんが私を許してくれるなら、もう一度お友達として、一からやり直してくれないかな？」

「許すも何も、わたし、早坂さんのこと何も覚えていないの。だから」

ら、わたしが、もし、早坂さんを傷付けてしまったのなら、わたしの過去の過ちは、全て水に流して許してもらえるかな？」

「本当に、いいの？ 真結花さん」

「うん。わたしなんかでよければ、早坂さんのお友達になってもいいよ」

「ヤッタあー。向こうから“お友達になって欲しい”だって。ふふっ、これは、嬉しい誤算よね。」

「ぜひ、お友達になつて」

「うん。じゃあ、これからよろしくね、早坂さん」

「こちらこそ、よろしく、真結花さん。仲直りの証に、握手してくれない？」

「いいよ。別に」

「じゃあ、よろしくね！」

「うん」

カンゲキ！ 真結花様と、また握手ができたわ！ 前回は、無意識だったから、今回のはうれしいなっ！

「ところで、真結花さんって、美術部に入っているのよね？」

「まあ、準美術部員だけだね」

「実は、私も以前から美術部に入ろうかなって、思ってたの」

「そう。だったら、戸田先生に申し出たらいいと思うわ。実はわたし、美術部には、まだ一度しか顔出してないの。これからも、気の向いた時しか行かない予定だから、早坂さんとは時々しか会えないと思うわ」

「そうなの？ でもいいの。今日は、わざわざ時間を割いてくれて、ありがとう」

「わたしも早坂さんのこと、ずっと心に引っかかったままだったの。」

おかげですつきりしたわ。ありがとう」

「じゃあ、またね。さよなら、真結花さん」

「うん、さよなら、早坂さん」

よしっ！ これで、第一段階はおっけー、かな？ うれしい誤算もあつたし、ここまで進んだだけでも、私としては、上出来、上出来よ！ これから、徐々に、真結花様との距離を縮めていくの！でも、焦りは禁物よ。前回のことは反省しなきゃね。同じ過ちを繰り返さないためにも。

「あの二人、何か握手なんかして、仲直りしたみたいね。さっき、智絵が言つてたこと、思い過ぎじゃない？」

「そうねえー、でも、何か気になるのよねえー」

「まっ、私も完全に白とはまだ思つてないけど、智絵がそう言うなら、暫く二人の関係、様子見とく？」

「そうね。じゃあ、そろそろ退散しましょ、あゆ。学校の中で、まゆかちゃんに見つかからないうちに」

「じゃあ、そうしますか。この後、どっか寄つてく？ 智絵」

「ごめん、あゆ。今日もピアノレッスンがあるの」

「ちえっ、つれないわねー、智絵って。今日は部活、さぼっちゃったから、ヒマなのよね」

「ごめんね、あゆ。また今度つてことで」

「その今度つて、いつよ？」

「さあー？」

「もぉー。じゃあ、今日はひとり、寂しく帰るわよ。今更、のこのこと、部活に顔出すわけにもいかないしさあ」

「ごめんねー」

「ふうーっ」

よかった。早坂さんと仲直りできて。早坂さんってさあ、最初に声掛けられた時は、不良っぽい子だなんていうイメージが強かったし、あの時は、もの凄く怒ってたっていうのもあって、会うまでは正直、少し不安だったけど、話してみたら意外といい子だったね。

やっぱ、人は、見た目だけで判断しちゃいけないよね。話してみないと、その人がどんな人なんて、わかんないわけだし。

さあ、これで、俺に振りかかった厄介事って、もう当分ないよね？ 神様だって、そんなにイジワルじゃないでしょ？ まあ、俺の心と体が違うっていう問題は、以前として残ってんだけどさ。もう、この事は、心の思うまま、自然に任せるべきかなあ？ だって、悩んだって、解決できる問題じゃないわけだしさあ。

#29：ユメのつぼみ、ヒラクトキ。（後篇）（後書き）

早坂友美茄と和解し、厄介事はもう無くなったと安心した様子の真結花。

このまま、真結花に何もなければいいのですが…

次回につづく。

#30：わたしって、愛されて… いるんですよね？

「おねえちゃん、あつさだよー」

「うーん、麻弥、もうちよつと…」

「だあーめ！ おふとん、剥いじゃうよ？」

「ちよつと、頭痛がするし、熱っぽいの」

「ホントにいい？ 仮病じゃないの？」

「うん、ホント。今日、ガツコ、休もうかなあ」

「おねえちゃん、ちよつと待っててね」

麻弥はそう言つと、暫くして体温計を持って来て、

「じゃあ、コレ」

「うん」

ピーー、ピーー、ピーー！

という電子音と共に、腋に挟んでた体温計を麻弥に渡す。

「あちゃあ、ホントだ、38度もあるよ。風邪でも引いたのかなあ。今日はガツコ、休まなきゃね」

「麻弥、ごめん、鮎美ちゃんにガツコ休むって連絡しといてくれる？」

「うん。じゃあ、ママにも仕事、休んでもらおつか？」

「えっ？ いいよ、だってパパが家にいるじゃん」

「パパ、早朝から出かけたよ。なんでも、今日一日、お世話になった知人に挨拶周りして来るって。こっちに居られるのも、明日までだしさあ」

「そうなの？」

「うん。だから、家に病人のおねえちゃん一人、ほっぽくわけにもいかないしさあ」

「大丈夫だよ、これくらい」

俺はそう言つと、気だるい体に渾身の力を入れ、無理やり上体を起こし、ベッドから脚を下ろすと、よろけながらもなんとか立ち上

がった。立てよ、立ってくれよ！　って心でつぶやきながら…

「ほら。ねっ！」

そう言った瞬間、目の前が真っ白になり、立ち眩みしたのを悟る。次の瞬間には、両手を床についてしゃがみ込んでいた。

「おねえちゃん、ヘンに強がらないの！　全然大丈夫じゃないじゃない。倒れて、床に頭でも打ったらどうするのよ！　麻弥の言うこと、素直に聞くの！　そういう意固地なところ、おねえちゃんの悪いところよ！」

「ごめん、麻弥。またママに迷惑掛けちゃうって思うと…」

「迷惑掛けてもいいの。家族なんだし、親が病人の子供の面倒見るのは、当たり前のことじゃない！」

「そっ、そうだよ。遠慮しなくても、いいんだよね？」

「なに他人行儀みたいなこと言ってるの？　今日のおねえちゃん、何だかヘンだよ？」

「そっかなあ？」

「とにかく、おねえちゃんは今日は一日、安静にしてシツカリと体力を回復させること。じゃないと、明日のパパとの約束も、明後日の喜多村くんと約束も、ぜえーんぶ、キャンセルになっちゃうよ？　それでも、いいの？　おねえちゃんは？」

「いいわけない、いいわけないに決まってるじゃん。そんなの、あんまりだよー、ひどすぎるよー」

俺は床に這いつくばったまま、ほとんど、半泣き状態だった。なんでこんな時に限って、体が言うこと聞いてくれないんだろうか？　自分の体を恨むしかなかった。

「だったら、ほらっ、大人しくベッドで寝てなきゃ。治るものも、治らなくなっちゃうよ」

「うん」

麻弥に両腋を抱えてもらいながら立ち上がり、ベッドに再び潜り込むと、言いようの無い悔しさと悲しさからこらえきれず、涙がこぼれてしまった。

「おねえちゃんの悲しいキモチはわかるけど、泣いても仕方ないよ。たぶん、風邪じゃなくて、おねえちゃんの持病じゃないかな？ 喉とか鼻とか、大丈夫なんですよ？」

「うん、そうだね。そうみたい……」

この発熱と頭痛症状、暫く収まってたはずなのに…… また、再発したのだろうか……

「じゃあ、おねえちゃん。後はママにバトンタッチしておくから、大人しく寝てるのよ。わかった？」

「うん。麻弥、ありがとう」

「そう、素直になればいいの。おねえちゃんは、もつと家族を頼ったり、甘えたりしてもいいんだよ？ 姉だからもつとしっかりしなきゃとか、みんなに迷惑掛けちゃうとか思っ、ガマンしなくてもいいんだから、ねっ！」

「うん」

なんだかさあ、まして麻弥に慰められてしまったよ。しかも俺の思ってたこと、ズバズバ言っちゃってくれるしさあ。ああ、俺ってどうしようもなく情けない。情けなくて仕方がない。

でもさあ、結局人間って、直接的にしる、間接的にしる、誰かのお世話になってるわけだし、必ず誰かと関わり合って生きてる。誰にも迷惑掛けないで生きて行くな、それこそ、無人島で独りで生きてくとか以外、考えられないわけだし。人間、独りでは、そんなに強く生きられないもんなあ。死ぬまで孤独感をこまかすために他人と関わったり、夢中になれるもの見つけて、一生懸命生きていくって……

あつ、また何真剣に考えてんだろつ、俺って。最近、人生の意味について色々考えちゃってる。そんなこと考えることさえ、意味がないことかもしれないのに…… ちよつと、最近、疲れてちゃってるのかなあ。また、無意識のうちに、ストレス溜めこんじゃって、それで熱が出たとか。

そうだよ、きつと体が受け止められるストレスのキャパを超えてんだ。この熱や頭痛は、そのアラームなんだよ。これ以上、何事も思いつめたりしちゃいけないよっていう。もっと、肩の力を抜いて生きなきゃいけないよなあ。

トントン。

「はぁーい」

「真結花、部屋、入るよ？」

カチャ。

「あれっ？ 鮎美ちゃん、ガッコはいいの？」

「ふふんっ、まだ時間、余裕で大丈夫よ。真結花のカワイイ寝顔、写メに納めてからガッコ行こうと思ってたんだけど、起きてたんだ？」

「なに、それっ？」

カシヤ。

「とiiiiっつ、真結花のカワイイ表情、げっとおー。しかも、プリティーなパジャマ姿という、超レアなプレミア特典のオマケ付きだし。この写メ、うちのクラスの男子諸君に見せたら、絶対に萌え死にそうね。ふふっ、真結花のちよつと火照った顔がエッチい感じ？」

「ええーっ、そんなぁー。人が熱出して寝込んでるっていうのに、その写メなんか撮って、みんなの晒しものにしようなんて… やめてよぉー、鮎美ちゃん」

「あはっ、あいかわらず真に受けるわねえー、真結花ってさあ。ホ

ント、面白いわつ。そんなの、冗談に決まってるじゃん。真結花の顔、見たことだし、そろそろ、ガッコ行くね。じゃあ、ガッコ帰り、また寄るからさつ、シツカリと静養しておくように！　じゃあねえー」

「いつてらっしゃい」

はあ？　いつたい、何しに來たんだろ？　鮎美ちゃんってさあ。

にしても、鮎美ちゃんって、いつもあんな調子だし、毎日元気で楽しそうだし、いいよなあ。鮎美ちゃんに悩みなんてもの、あるんだろうか？　同じ人間なんだし、きつと、苦しい事や悲しい事もあるよね？　それを、ただ表に出さないだけでさあ。

それってスゴくない？　鮎美ちゃんって精神的に強いよなあ。俺も、そういう精神的な強さ、見習わなきゃ。

「真結花、はいっ、あーん」

ママが、特製の卵おじやをスプーンでひと口すくい、ベッドの上で上体を起こしていた俺の口元まで運んできた。

「ママ、子供じゃなんだし、自分で食べれるから」

「あらっ、真結花はいつから大人になったのかしら？　お赤飯でも炊かないといけなかったかしら？」

「えっとおー、そういうことじゃなくってさあ、すっごく恥ずかしいから、その幼児みたいな扱い、やめて欲しいの」

「そう、それは残念ねえ。こうやって病気の真結花の看病していると真結花の幼かった頃、ふと思ひ出したのよねえー、あの頃の真結花は、もつと素直で、いい子だったのに。ママ、なんか悲しいなあ」

「ハイハイ、わかったから、ママ」

そう言つと、俺は大きく口を開けた。

「どお？ お味の方は？」

「うん、すつごく美味しいよ、ママ」

「そう、それはよかったわ。じゃあ、もうひと口、あーん」

「もー、ママったら、一度付き合っただけだから、もういいでしょ？」

「そうねえー、ちょっとママも、昔を思い出したりして、はしゃぎ過ぎちゃったかしら？」

「熱いから、気を付けて食べるのよ」

「うん、言われなくてもわかってるから。それより、ママ、ありがとう」

「どうしたの？ 真結花、改まっちゃって」

「ママ、今日、わたしのためにお仕事、休んでくれたんでしょ？ だから、ありがとうって」

「なに真結花？ そんな照れ臭いような事、言っちゃって」

「日頃の感謝の気持ちを込めて、ママにありがとうって言いたかったの」

「そっ、じゃあ、おじや、残さず食べてね」

「うん」

そう言つと、ママは、本当に照れ臭かったのか？ そそくさと部屋を出て行ってしまった。部屋を出て行くママの横顔を一瞬見たとき、瞳が潤んでいたように見えたけど、気のせいだったのかなあ。

今の俺にとつて、助けてくれた人達やお世話になった人達に出来る恩返しって、“ありがとう” っていう感謝のキモチ、これをハッキリと言葉にして、素直に伝えることしか出来ないんだよね。

今頃になってそれに気付くなんて、俺って、ホント、バカ。大バカだよ。今思えば、いっつも、家族や友人に対して“ごめんなさい” って、謝ってばかり言ってたような気がする。

ほんと、言葉に発しないと本当の“キモチ” って、相手には伝わらないんだよ。自信の無さから、いっつも、ごまかしてばかりで、

逃げてばかりで、自分のキモチにウソついて、きちんと真正面から自分に向き合ってなくて、その場のキモチに押し流されてばかりいて… もついい加減、そういうのから卒業しなきゃいけない時期かもなあ。

そうじゃないと、いつまでたっても成長がないじゃないか。明日を変えるなら、今日から態度を改めないと。イヤ、今から。なーんて、エラそうなこと、頭の中で考えてもさあ、いざとなると、コレが中々実行出来ないんだよねー。はあーっ、正に自己矛盾ってヤツ？

「んっ？」

昼食を終え、一休みしていると、携帯のメール着信音が連続して鳴り響いた。いったい、なんなんだ？ そついえば、学校じゃあ今頃、お昼休みだよなあ。

携帯の着信メールを確認してみると、えっと、鮎美ちゃんに、智絵ちゃん、杏菜ちゃんに、莉沙子ちゃん。それから、喜多村くん？ なんじゃこりゃあーっ？ もしかして、メールで集団のイタズラ？ はっ！ 一瞬、イヤな予感が頭を横切った。まさかと思うけど、たぶん、そのまさかに違いない。うーん、鮎美ちゃんの奴めえー、やっぱ、人を晒しものにしたなあー。イタズラにも限度つてもんがあるでしょうがぁー。今度ばかりは許せない。それ相応の代償は払ってもらわないと、到底気が済まない。

とにかく、メールの内容、確認しなきゃ。まずは、一番気になる  
“喜多村くん”

『柚木さんに見せてもらった木下さんの写メ、めっちゃカワイかったよ。それから明後日の約束、ムリそうだったら連絡して。お大事

にね』って？ 一瞬にして、かぁーと、一気に顔が熱くなったような気がした。せっかく熱が下がり始めてたのに、また熱が上がっちゃうじゃないか。それにしても、何で杏菜ちゃんが今朝の写メ、持つてるワケ？ さては、鮎美ちゃんがばらまいた？

“ 鮎美ちゃん ” のメールを確認すると、

『ごめん、真結花。今朝の真結花の写メ、お昼休みにこっそり見たら、杏菜に見つかっちゃってさあ、杏菜に私の携帯奪われちゃって、仲間うちにとらいまわしされちゃった。お詫びにスイーツ、お見舞いの手土産に持って行くからさあ、カンベンしてよね。写メはばらまいてないから、安心して』

確かに、杏菜ちゃんのやりそうなことだと思った。でもさあ、元々は今朝、おもしろ半分に写メを撮った鮎美ちゃんが悪いんだよね。はぁーっ、見られちゃったものは仕方ない。別に、裸を見られたわけじゃないんだし、こんなことぐらいでブリブリ怒るのも大人げないちゃあ、大人げないし。まっ、いつか。

他の子のメール、内容確認しなくてもさあ、もう書いてあること、だいたい予想がつくし、見たくもないよなあ。ええーい。削除しちゃえ！

「はぁーっ、これでスッキリ、ってなわけない！」

#30:わたしって、愛されて… いるんですよね？(後書き)

真結花は、身近にいる人を大切にすること、  
みんなから愛されていること、身を持って思い知らされたようす  
ね。

次回につづく。

### #31：パパとでえと？

「あつ、おねえちゃん、またガーターだあ。ねえ、これで何度目？ おねえちゃんって、ボウリング、こんなにヘタじゃなかったよ？ どうしちゃったの？ まあ、病み上がりだし、スツゴく久しぶりっていうのもあるんだろうけどさあ、それにしてもねえ」

「投げ方のコツ、忘れちゃったんだから、仕方ないよ。どうしてもボール、曲がちゃうのよねえー。ああ、もうおー、ボウリングなんて、つまんないっ！ ボールは重いし」

「もおうーいい、ボウリングなんてもんは、もう二度と、ヤリマセソッ！ 腕も痛くなりそうだしさあ。」

「真結花、今度は、視線を真つすぐにして、ボールは途中で放り投げてしまわないように、できるだけ床の近くで離してごらん。腕を曲げないで、丁寧の前に押し出すようなイメージでさあ」

「パパ、口で言うのは簡単なんだけどさあ、やってる本人にとっちゃあ、難しいんだよおー」

ホント、口で言うほどカンタンじゃない。自分の思い通りに体を動かすのって、案外難しいんだよね。頭の中で描いているイメージ通り出来ないこのもどかしさ。体育ができないコの気持ち、なんとなく分かったような気がする。

「パパって、すっごーい。これで、ストライク、3本目だよ。麻弥なんて、まだ1本しか取れてないのに」

ああ、上手い人達で、勝手に盛り上がっていて下さい。俺は、完全に部外者ですから。

ゲームオーバー！

結果は言うまでも無く、三人の中でドン尻、散々なものだった。スコア？ そんなの、どうでもいいじゃん。順位なんて意味ないし、気にしない、気にしない。だって、お遊びだもんね。真剣になる方がどうかしてる。単なる息抜きなんだからさあ。でも、俺、全然楽しくない。

パパと一緒に過ごせるのも今日まで。明日、いや、正確には、今日の夕方には向こうにいつちゃうんだよね。また当分、会えなくなるわけだし、今日のうちに家族での楽しい思い出作り、しとかなきやって思ってたんだけど、いきなりテンション下がりまくりなわけ。

せつかく、体の方も前日の熱がウソのように下がって、全快になったことだし、パパとアミューズメントパークで遊ぶ約束、キャンセルせずに済んだっていうのに、これじゃねえ！。

「おっ、次、あれやるか、真結花、麻弥。サッカー ストラックアウトってヤツ？」

フムフム。九つあるのを、12個のボールで、どれだけ当てられるかってゲームかあ。俺って、腕より脚の球技の方が得意そうだし、これなら大丈夫かな？

「うん、いいよ、パパ。こっちの方が面白そう」

「おねえちゃん、さつきは散々だったもんねえー。麻弥はこれやるの、初めて。おねえちゃんは、当然、このゲーム得意だよな？ コツあるんだったら、教えてよ」

「どうかなあー、体育でフットサルやったけどさあ、こうやって、止まった状態でゴールに蹴る感覚ってよく覚えてないんだよねえー」

「まあ、やってみればいいさ、真結花。頭で考えているより、意外

と体は覚えているものさ。これも、遊びながらサッカー復帰のリハビリにもなるわけだし、一石二鳥ってとこだな」

「うん、そうだね」

「よし、まずはパパがお手本として、チャレンジだ！」

「パパ、マジで燃えてる。なんか、子供みたぁーい。子供相手に、大人げないよぉ」

「麻弥、さては、パパの戦意を喪失させようって魂胆だな？ さっき負けたもんだから」

「パパさぁ、カッコイイところ、ギャラリーの女性達に見せ付けたいただけなんでしょ？」

さつきから、ギャラリーらしい20代の女性達が、こっち見てるんだよね。それで張り切っちゃってるパパって、なんか単純で、可愛いところあるなって思ってたしまい、つい余計な口が：

「真結花、何を言ってるんだ？ そつ、そんなことあるわけないだろ？」

あきらかに動揺が隠せない様子のパパ。その気持ち、なぁーんとなく、わかるような：

「ねえ、パパ、おねえちゃんの言ったこと、凶星だよね？ こんなカワイイ娘達をよそに、他の女の人に目が行くなんて、サイテー」

「そうそう、麻弥の言う通り。向こうでも金髪の若い女性見てさぁ、鼻の下のばしてたんじゃないの？ パパ」

ああ、なんか、こうやってパパいじるの、なんだか楽しい。

「イヤ、元プロだった以上、やっぱカッコ悪いところ、お前達に見せられないし…」

「じゃあさぁ、パパ、罰ゲームやろうよ。おねえちゃんと、麻弥の合計得点がパパに勝ったら、パパからお小遣いを貰っちゃう。パパが勝ったら、パパが若い女性に鼻の下のばしてたこと、ママに黙っててあげるつてのは、どう？」

「麻弥、なんだ、それ？ どっちにしても、パパには不利な条件じゃないのか？」

「あつ、そおー。パパがやらないなら、麻弥、ママに即刻、言いつけちゃうもんねえー」

「わかった、わかったよ。たつく、しょうがないなあー、麻弥は」

「ふふつ、麻弥って悪い子ねえー」

「おねえちゃんもね。でもね、これはパパへのお仕置きなの！今まで、家族ほっばいてたんだから、これくらい当たり前なんだから！」

「まつ、そうかもねえー」

パパ、さすが元プロサッカー選手って感じ。途中、失敗はあるものの、次々と的を当てていく。

現役を引退したっていつても、まだまだやれるんじゃないの？

この分じゃあ、麻弥と二人で協力したとしても、パパに勝てるのかなあ。最低、俺が半分以上は的に当てないと、麻弥にはさほど期待出来ないだろうし、ちよつと厳しいかなあ？

そう思ってたなら、近くに居たギャラリーらしい20代の女性達が、こつちが余程気になるのか？なにやらこそそと話ながら、しきりにこつちをチラチラと見てくる。

パパって、元プロサッカー選手なんだけど、そんなに有名人？

んなわけないか？現役ならともかく、もう現役も引退してるわけだし、本当に有名なら、今頃、ギャラリーで溢れかえっているはずだよな？

「ねえねえ、ゆみこ。あの入って元サッカー日本代表の木下選手じゃない？」

「そうだよ、間違いないよ、アキ。やっぱ、私服だと気が付きにくいものね。後で、一緒に写メ撮ってもらおうよ」

「そうだね」

「ところでさあ、アキ。あのカワイイ女の子達って、やっぱ木下選手の子供なのかなあ？」

「どうやら、そうみたいね、ゆみこ。あのポニーテールのカワイイ子、どっかで見覚えがあると思ったら、雑誌で取り上げられてた子だわ。確か、U-17の候補選手みたいよ」

「へえー、そうなんだ？ アキってサッカー結構詳しんだ？ じゃあさあ、あの子もついでに写メ撮ってもらおうよ、将来、有名選手になるかもしれないし」

「別にサッカー、それほど詳しいって程じゃあないんだけど、たまたま、雑誌で見たのよねえー、注目の美人アスリート特集みたいな記事で。そうだ、ゆみこ。ここで待っててくれる？ ちょっとサインペンと色紙買ってくるからさあ」

「うん」

結局のところ、パパのスコアは、九つあるのうち、ひとつだけ外しただけで、八つだった。俺と麻弥が半分ずつだとしても、最低四つ以上は的に当てなきゃいけない計算だ。

麻弥が先に蹴るということで、最後の俺にはプレッシャーが掛るよなあ。なんせ、お小遣いという非常に美味しいニンジンが目の前にぶら下がってるもんだから、負けたら麻弥に何を言われるのか分かったもんじゃない。

「あっちゃー、また外れちゃった。まだ三つかあ」

「ガンバレ！ 麻弥、外しちゃってもいいよ。後はわたしがなんとかするし」

「うん、でも後ひとつぐらい当てなきゃ、おねえちゃんにいいカタチでバトンタッチできないし」

「そうガンバラなくてもいいぞ、麻弥、そもそも、パパに勝とうなんて考えなくていいからな！」

「ふんっ！ 麻弥、パパにはゼツタイ負けたくないもん！」

「麻弥、もう少し力を抜いて蹴った方がいいよ。その方が当たるか

も」

「おねえちゃん、アドバイス、サンキュ！」

ヘンに力みすぎたのか？ 結局、麻弥のスコアは三つのまま、全く伸びずにゲーム終了。ということで、俺は五つ以上の的を当てなきゃパパには勝てないわけで…

「おねえちゃん、頑張つてね。お小遣いかかってんだから！」

「麻弥、ヘンにプレッシャーかけないでよ！ 当たるものも、当たなくなつちゃうじゃない」

「ゴメンね、おねえちゃん。麻弥、つい、熱くなっちゃってさあ」

「おつ、姉妹で仲違いか？ パパには有利ってことかな？」

「そうは行きませんよぉーだっ！ おねえちゃんなら、ゼツタイに逆転してくれるはずだもんっ！」

さてと、息を吸ってー、吐いてー。

うーん、なんだか、緊張するよなあ。単なるゲームなんだけとさあ、これってPK戦の模擬が出来るゲームなんだよなあ。そう思うと、これもサッカーのいいイメージトレーニングにはなるんじゃないかと。

最初、軽い気持ちでゲームやるつもりだったんだけど、なんだか燃えてきたって感じ？

一本目、右下の的を狙ったつもりだったけど、微妙にコントロールがズレて右中段の的に命中、結果としてはオーライ。でも、この感覚のズレ、フットサルやったときもそうなんだけど修正しないと本格的にサッカー復帰するにはほど遠いレベル。

途中数本外すも、なんとか目標の五つの的をゲットした。残すは後ひとつなんだけど、ボールもひとつしか残っていない。つまり、これがラストチャンスってわけだ。

「おねえちゃん、後ひとつだよ！ 頑張って！」

「うん、わかってるって。任せておいて」

と麻弥に自信満々に言っただものの、残ってる的は難易度の高い中段と上段的。正直、厳しいかも…

最後の的、上段の2枚の的に絞り、力まずにボールを蹴ったものの、ボールの軌道は見事なまでに上にズレ、ゲームオーバー。結果としてパパと俺達のスコアは8対8のドロ―。この場合、罰ゲームはどうなるんだろ？ チャラってことになるのかな？

ちらつと、麻弥の顔を見ると、あきらかにぶーたれた不満顔を見せている。

あっちゃー、こりゃあ、どんな文句を麻弥に言われるか、たまったもんじゃない。一瞬、トイレに行くフリしてこの場から逃げちゃおかなって思ったわけで…

「麻弥、8対8のドロ―だな。ということは、罰ゲームの話はなかった。ということでもいいよね？」

「うーん、クヤシイけど、仕方ないわねえー。そのかわりいー、パパあー」

「そのかわりってなんだ？ 麻弥」

「そのかわり、ランチはデザート付きで好きな物、いっぱい頼んでもいいよね？」

「ああ、かまわないけど、食べ過ぎると、太るぞ」

「いいの。麻弥は食べても太らない体質だし。ねえ、おねえちゃんも、それでいいでしょ？」

「うん、いいよ。わたしは、麻弥の気がそれで済むなら」

ホッ、どうやら麻弥の怒りの矛先は、ランチに向けられたようで、こっちに飛び火することはなさそうだ。

そっぴや、俺も小腹が減ったような…

「じゃあ、話もまとまったことだし、ランチに行こうよパパあ」

「そうだな、麻弥。もうお昼前だし、混みそうだしな」

「賛成！ わたしも、ちょうど小腹減ってたところだし」

話もまとまり、家族そろってランチにレッツゴー！ ってことになったわけだけど、ここにママが居ないのが少し寂しいって感じ。

仕方ないよね、昨日、俺の看病のために仕事休んでくれたわけで、二日続けて仕事を休むってわけにもいかないだろうし。って思ってたなら、ギャラリーにいた女性二名が、俺達家族に突然近付いてきたあれっ？ この女性達、いつの間にか姿が見えなくなっていたと思ってたんだけど… いったい、なんだろう？

「あのおー、突然すみません、元サッカー日本代表の木下選手ですよね？」

「ああ、確かにそうでしたが、代表も随分前の話ですし、昨年現役も引退して、今はただの普通の人ですから」

パパって、元日本代表選手？ 有名なんだ？ 初耳でビックリなんだけど… そういや、青いユニフォーム着てた若い頃のパパの写真、アルバムの中で見たような気も… あれって、日本代表のユニフォームだったわけ？

「ご家族とのプライベートのお時間のところ、申し訳ないんですけど、サイン頂けないでしょうか？ それと、写メ撮らせて頂いてもいいでしょうか？」

「ああ、いいですよ。こんな引退した選手でもよければ。真結花、麻弥、ちよつとの時間だけ待ってくれないか？」

「うん、いいよ、わたしは」

「麻弥も、かまわないよ」

「よかったあー。アキ、やっぱ声掛けてよかったね」

「うん、そうだね、ゆみこ」

「じゃあ、これにサイン、二枚、貰えますか？」

パパは彼女達から色紙とペンをもらい、スラスラとサインを書き返す。

「これでいいかな？」

「ハイ。ありがとうございます。じゃあ、写メもお願いできますか？」

「ああ、じゃあ」

彼女達が交代してひとりずつ、パパと並んで記念撮影。パパの顔は少しニヤけながらも、テレてる様子。なんだか、動きがぎこちない。

「ねえ、ゆみこ、もうひとつのお願いは？」

「あのおー、もうひとつ、お願いしてもいいでしょうか？」

「はあ、なんででしょうか？」

「そこの、ポニーテールのお嬢さんとも、写メお願いできないでしょうか？」

「娘は、プロ選手でもなんでもないので、カンベンしてもらえませんか？」

「でも、確か、U-17の候補選手だと……」

えっ？ なに、それっ。そんな話、聞いてないよ。

「確かに、そうかもしれないませんが、今は違います。娘は、今、リハビリ中なんです、そつとしてもらえませんか？」

パパ、庇ってくれた？　なんだか、今、一瞬キュンってきた。これってヤバイ？

「わかりました。事情を知らなかったもので、済みません。貴重なお時間、ありがとうございました」

「いえ」

「お嬢さん、リハビリ、頑張ってくださいね！」

「頑張ってるね！　応援してるから」

「あつ、はい。ありがとうございます」

俺が、U-17の候補選手だったって？

ってことは、代表の一手前まで行ってたんだ。これも初耳だし、余りもいきなりで、驚いちゃったんだけど……まあやちゃんが言ってた、事故以前の俺が代表を目指すって話も、まんざら、夢物語じゃないってことなんだろうか？

それにしても、今の体の動きじゃあ、まったくもって雲の上のような話だよ。クラブの復帰どころか、サッカー、これから本当にやっていけるのか？ それさえ難しそうだっていうのに、代表なんてとんでもない話だ。

今の話、聞かなかったことにしよう。ヘンなブレッシャーや期待周りから掛けられてたって、そんなの、困るもんなあ。

俺だつてさあ、今の自分にできる事と、できない事の判別ぐらい、それくらいはできるよ。

「へえーっ、おねえちゃんって、サッカー通の間じゃあ、結構有名ななんだ？ 麻弥、おねえちゃんの第一号のサイン、もらっちゃおかなあー」

「麻弥、茶化さないの！ 今のわたし、有名人でも、サッカー選手でも、なんでもないんだからっ！」

「おねえちゃん、マジで怒らないでよおー」

「真結花、彼女達の言ってた事、気にすることはないさ。自分のペースでサッカーのリハビリ、やればいい。例え、復帰に一年かかってもいいじゃないか、まだまだ、時間もあるんだし、焦る必要なんてこれっぽっちもないんだし」

「うん」

パパは、気を使ってそう言ってくれたものの、もしかしたら、一年かかって、いや、それ以上かかって、サッカークラブに復帰

できないかもしれない。

だってさあ、サッカーうんぬんの前に、自分自身に自信が無いんだよねー。そんなこと、面と向かって口に出して言うわけにはいかなし、パパには悪いけど、一年経ってもサッカークラブに復帰できなかった時は、素直にごめんなさいって言うしかないよなあ。

人生に挫折っていうものは、必ず誰しも少なからずあるだろうし、以前にも考えてたことなんだけど、そんな時には別の道、選択するしかないんだよなあ。

そんな不安が一瞬、頭を横切った。

#31：パパとでえと？（後書き）

思わぬカタチで過去の自分を知った真結花。

過去と今の自分の大きなギャップに、戸惑いを隠せない様子ですが…

次回につづく。

## #32：わたしが… アイドル？

「うわっ、すごっ。ねえ、麻弥、これで三つ目だよ。そんなにぬいぐるみ取っちゃってさあ、いったいどうすんの？ 麻弥の部屋ってさあ、もう既にぬいぐるみでいっぱいじゃん」

「大丈夫、大丈夫。増えて来たら友達にあげたり、バザーに出したりしてるから」

「あっ、そっ。ところでさあ、麻弥」

「んっ、なに？ おねえちゃん」

「クレーンゲームって、何がそんなに楽しいの？」

「うーん、もちろん、景品取るのが最終目的なんだけど、自分が狙った通り取れるか取れないかっていうスリル感とドキドキ感っていうか。そうそう、フィッシングやってる人の感覚って、こんな感じなのかって。ちょっと違うかもしれないけど」

「ふうーん、そうなんだ？」

それにしても、麻弥、クレーンゲームに慣れてるのか、ホント、上手いよなあ。俺なんて全然ダメ。一つも景品取れやしない。だから、こうやって麻弥のクレーンゲームを楽しんでるところ、ばーっと見てるだけなんだけどさあ、麻弥の楽しそうにしてるニコニコ顔見てるだけで飽きないっていうか、癒されるっていうか。

ああ、こうやって姉妹で仲良く遊んでいると、何だかほのぼのしてて、いいなあーってしみじみ思っちゃうわけで…

そっぴや、気持ちが落ち込んだとき、いつも麻弥に慰めてもらったり、励まされてたり、癒されてたり、麻弥から元気貰ってたんだっけ。麻弥、いつもありがとね。

こんなこと、面と向かって口に出して言うの、照れ臭くってさあ、カンベン。麻弥、感謝してますから。

「んっ？ どうしたの？ おねえちゃん」

「えっ？ 何でもないよ？」

「だってさあー、さつきから麻弥の顔、じーっと見てるしい」

「ああ、ゲームに夢中になってる麻弥の楽しそうな顔見てるとさあ、なんだか微笑ましくって」

「それって、麻弥が幼稚ってこと？」

「そうじゃなくて、心がほっこりするって感じ？」

「なにそれ？ 昨日からおねえちゃん、何かヘン」

「そお？」

「ねえ、おねえちゃん。そういえば、パパは？」

「何か買い物する用事あるから、ここで遊んで待ってるようにって。麻弥、ゲームに夢中になってたし」

「そうなんだ？ 麻弥、全然気付かなかった」

「それより、麻弥。お持ち帰り袋、もういっぱいみたいだし、そのへんで止めたら？」

「そうだよね。ちよつと、調子が良かったもんで、ついハリきり過ぎちゃった」

「そろそろ休憩しようよ、麻弥。喉も乾いたことだし」  
「うん」

休憩コーナーでジュースを買って、麻弥と二人つきりでベンチに腰掛けると、何だか急に気恥かしいような気分に襲われた。

こうやって、改まったカタチで二人つきりになると、いったい何を話したらいいのやら。

そついや、あの事故以来、麻弥と一緒に外出して遊んだことがない。これが初めてなんだ？

家に居る時って、必ずって言うていいほど、麻弥の方から話題振って来てたんだっけ？ そのことにふと気付くと、話題の引き出しの少なさ無さに、一瞬、愕然としてしまった。こんなことじゃ、先が思いやられる。デートなんて、できるの？ って誰とだよ？ な

ーんて考えてたら、麻弥が切り出してきた。

「おねえちゃんとうちやうやって遊ぶの、ホント久しぶりだね。あつ、ごめん、覚えてないんだっけ」

「いいよ、別に、大丈夫だから」

「それと、お昼前に麻弥が言ったこと、ごめんね、おねえちゃん」  
「気にしてないから」

「ウソ！ 気にしてるから怒ったんでしょ？」

「ホントのこと言うと、自信がないんだよねえー、ちゃんと、サッカーできるのになってね」

「やっぱ、おねえちゃんらしくないなあー。こんなこと言うと、シヨックかもしれないけど、以前のおねえちゃんって麻弥の前で弱音なんて吐いたこと、殆どなかったし、例え何かに失敗したとしても、物事ポジティブに考えてたよ。失敗しない人は、何も挑戦しない人だって」

「そっかあー。そんときのわたしと、今のわたし、やっぱ全然違うのかな？ 麻弥から見ても」

「うん、そうだね。でも、今のおねえちゃん、麻弥に優しくなったし、好きだよ。でもね、もう少し、自分に自信を持った方がいいと思うの」

「自信、そうなんだよねえー。自信ってどうやってたら持てるのかなあ？」

「少しずつ、一歩ずつ、努力を積み重ねるしかないのかなあ。努力の積み重ねが、自信に繋がって行くんだと思うけど」

「そっぴゃ、里子ちゃんにも同じこと、言われてた。」

「そっかあー、やっぱ、努力の積み重ねかあー。さっきの麻弥のクレーンゲーム、正に努力の積み重ねだもんね」

「そうだよ。麻弥だってクレーンゲーム、最初は失敗が多くて悔しかったんだから。人間、失敗しないと、努力して成長しないんだから」

「そうだね」

うーん、またしても、麻弥に励まされてしまった。

それにしても、麻弥、ママに似て、ほんとシッカリしてるよなあ。我が妹ながら、関心するよ。

「ねえ、おねえちゃん」

「なに？」

「さつきからさあー、あの男の子、気にはなってたんだけど、何か人を探しているような感じ。もしかして、迷子じゃないのかなあ？」

麻弥が、小学校低学年ぐらいの男の子に指をさしながらそう言った。

「あの男の子？」

「うん」

「じゃあ、声、掛けてみる？」

「おねえちゃんがね」

「わたし？」

「そつ、おねえちゃんなんだし」

「だよねえー、じゃあ、行ってくるね」

「うん。がんばってね！」

いったい、何をがんばるってわけ？ 麻弥。意味不明。

「ねえ、ぼく。もしかして、誰か探してるの？」

男の子の警戒を避けるため、中腰になり、目線を合わせながら、できる限り優しく話しかけてみた。

「おねえちゃんは、だれ？」

やっぱ、警戒はするよね。知らない人に声掛けられるわけだし。

「おねえちゃんは、まゆかっというの。ぼくの名前、教えてくれな  
いかな？」

「ぼくは、ゆうとだよ」

「そつ、ゆうとくんは、今、誰か探してる？」

「うん、おにいちゃん」

「おにいちゃんと、はぐれちゃったの？」

「うん。ぼくがトイレに行ってる間に、おにいちゃんが居なくなっちゃたんだ」

「じゃあ、おねえちゃんと一緒に、迷子センターにいこつ」

「ヤダっ！ そんな所、行きたくない！」

「どうして？」

「だって、ぼく、もう小学三年生だよ」

背も低いし、てつきり、もう少し幼いのかと思ってた。

「じゃあさあ、あっちに女の子が座ってるベンチがあるでしょ？」

あそこでおにいちゃんが帰って来るの、一緒に待たない？」

「うん、いいよ」

ほつ。とりあえず、この子の身柄は確保。指でOKサインを麻弥に送る。

このくらいの男の子って、なんか扱いが難しそうだよなあー。麻弥が『がんばってね！』って言った意味がようやく分かったような気がした。

「じゃあ、向こうにいこつ」

そう言って左手を男の子に差し出すと、恥ずかしそうに握ってきたので、その小さな手をそっと包み込むように軽く握り返し、麻弥が待つベンチに向かって歩き出した。

男の子の手は柔らかくて暖かくて心地がよく、妙な安心感があった。

これって、もしかして、母性本能ってヤツなんだろうか？

「おねえちゃんって、いい匂いがするんだね」

「えっ？ そお？」

「うん。ママとは違ういい匂い」

男の子が、急にヘンな事を言い出したので、ビックリした。

「えっと、ゆうとくん。この子は妹のまみっていの」

「こんにちは、ゆうとくん」

「こっ、こんにちは、まみおねえちゃん」

ゆうとくん、やっぱり緊張しているのか？ 恥ずかしそうな感じ。

まっ、年上の知らない女の子達に囲まれるわけだし、緊張するのは当たり前かな。

麻弥にゆうとくんの事情を説明した後、ゆうとくんを左端に、真ん中に麻弥、右端に俺という配置でベンチに座り直した。麻弥の方が年も近いし、二人でゆうとくんをサンドイッチするカタチで座ると、ゆうとくんが更に緊張するだろうし。

「ゆうとくん、喉、乾いてない？」

「だいじょうぶだよ、まみおねえちゃん」

「そう」

「まみおねえちゃんって、クレーンゲーム、得意なんだ？」

ゆうとくんは、麻弥の足元に置いてあった、ぬいぐるみでパンパンになったお持ち帰り袋に興味を示したようだ。

「まあね。いっぱい取っちゃったもんだから、ひとつだけ、気に入ったヤツ、あげよっか？」

「いいの？ まみおねえちゃん」

「うん、いいよ」

麻弥はそう言つと、お持ち帰り袋をゆうとくんに差し出した。ゆうとくんは、まるで宝探しのようにお持ち帰り袋の中を手でまさぐり、何所かのサッカーチームのユニフォームを着た、くまさんのぬいぐるみをひとつ取り出すと、

「これ、もらってもいい？」

「うん」

「ありがとう、まみおねえちゃん」

やっぱ、ゆうとくんの隣に麻弥を座らせたのは正解だった。俺よりも、麻弥の方が話し易い雰囲気があるんだろうと思う。それに、俺には不安で緊張してる小さな男の子を和ませる術なんて、持ち合わせているはずはないだろうし、何を話したらいいのやら、さっぱりだ。

「ねえ、おねえちゃんたちって、もしかしてアイドルとかモデルなの？」

ゆうとくんが、急に突拍子ない事を言い出したため、驚いた。だけど、邪険な態度を取るわけにもいかない。

「残念だけど、おねえちゃんたちは、アイドルとかモデルじゃないの、普通の人だから。ねっ、麻弥」

「そうなんだけど、どうして、そう思ったのかなあ？ ゆうとくんは」

「だって、おねえちゃんたち、かわいいんだもん」

ゆうとくんはそう言つと、少し顔を赤らめながら、俯いてしまった。

そんなゆうとくんの姿を見ると、こっちも、こそばゆいような、恥ずかしいキモチに襲われる。

「それにしても、ゆうとくんのおにいちゃん、中々現れないね」

俺は、場の気まずい雰囲気を少し変えようと、話題を変えてみた。「そうだよねえー、ウチのパパも、麻弥たちほっばいて、いったい何にしてんだろっ」

麻弥もそれに続く。

「おねえちゃんたちも、はぐれちゃったの？」

「うううん、違うよ。パパは買い物に出掛けてて、おねえちゃんた

ちはココで待ってるの」

そう答えると、ゆうとくんはマジマジと俺の顔を見つめてきた。  
「いったい、なんなんだろう？」

「あー！」

ゆうとくんが、俺の顔に指をさし、急に大きな声を張り上げた。

「どうしたの？ ゆうとくん」

「まゆかおねえちゃんの顔、どこかで見たような気がしてたと思ったら、まゆかおねえちゃんの雑誌の切り抜き写真、おにいちゃんの部屋の壁に貼ってあったよ。やっぱ、まゆかおねえちゃんってアイドルなんだあー」

「しーっ、声大きいよ、ゆうとくん。誰かに聞かれたら、ヘンに思われちゃうじゃない。だ・か・ら、さっきも言っただでしょ？ わたしはアイドルでもなんでもないの。ただの普通の人なんだから」  
「ええーっ！ うそだあー。だったら、なんで雑誌にまゆかおねえちゃんの写真が載ってるの？」

「えっと、たぶん、その雑誌に載ってた人とわたしの顔、似てたんじゃない？ ほらっ！ 他人の空似ってあるでしょ？」

「うーん、俺によく似たタレントさんでもいるのかなあ。ゆうとくん、どうやら俺がその人だと思ひ込んでるみたいだ。」

さっきまでの俺とゆうとくんとやり取りが、余程可笑しいのか？ 麻弥は笑いをこらえきれず、クスクス笑っている。

「ウソっ！ ぼく、信じてないもん！ まゆかおねえちゃんは、ゼッタイにアイドルだもん！」

麻弥、頼むよあー、そうやって笑ってないで、助け舟だしてくれよあーって思ってたなら、通じたのか、

「流石ね、ゆうとくん。おねえちゃんのウソ、見事に暴いたようね。そうなの、何を隠そうおねえちゃんはアイドルなの」

「やっぱ、そうなんだ」

『何を言ってるの、麻弥は』　つと小声で言っていると、麻弥は『いいから任せて』　つと返してきた。

「だから、ゆうとくん。ここに居る人達に気付かれると騒ぎになっちゃうから、アイドルだってこと、ヒミツにしてくれないかな？」

「ぼくたちだけのヒミツ？」

「そう、私達だけのヒミツ。約束してくれるかな？　ゆうとくん」

「うん、わかったよ、まみおねえちゃん」

「ありがとうね、ゆうとくん」

麻弥はそう言つと、こっちに向かってウィンクし、上手くいっただでしょ？　という合図を送ってきた。

うーん、麻弥は幼い子の扱いに慣れているんだ？　将来、保母さんにでもなれるんじゃない？

それにしても、俺がアイドルだってさ。笑っちゃうよなあ。いったい何がどうなれば、そうゆう勘違いが起こるわけ？　そういや、ゆうとくんは雑誌の切り抜きがどうの言つてたけど、そんなに似てるタレントさんがいるのかなあ、気になるよなあ。

でもさあ、本当にそんなに似てるとしたら、今頃、そのタレントさん本人と勘違いされて、人だかりができてさあ、大騒ぎになってるはずだもんな。そうなっていないってことは、やっぱ、全然似てないのか、大して有名な人じゃないってことなんだろう。幼い子の言うことだし、当てにはなんないや。真に受ける方もどうかしてると思うけどさ。ゆうとくんの緊張もほぐれたようだし、まつ、いつかそれにしても、ゆうとくんのおにいちゃん、現れないよなあ、パパも何してんだか。

「ねえ、おねえちゃん」

「えっ？」

「どうしたの？　ぼーっとして。考えごと？」

「うん、まあ、これからどうしようかなってね。いつまで待てばい

いのかなって」

「じゃあさあ、おねえちゃん。ゆうとくと、ちょっと遊んでくるからさあ、何か動きがあったら携帯で呼び出してよ」

「いいけど、麻弥まで迷子にならないでよ？」

「大丈夫、携帯持ってたし」

「そうだよね」

「ゆうとくん、おにいちゃんが帰ってくるまでさあ、おにいちゃんと居た場所で、おねえちゃんとゲームしない？　もしかしたら、おにいちゃんが現れるかも」

「うん、いいよ」

ゆうとくんがそう言つと、麻弥はゆうとくんの手を取つて、ゲームコーナーの方に行つてしまった。

そつかあ、パパも携帯持ってたし、いざとなれば呼び出せばいいし、パパは気にしなくてもいいや。今頃気が付くなんてね。それよりも、ゆうとくんのおにいちゃんだよなあ。パパが戻つて来ても現れなかったら、やっぱり迷子センターに行くしかないよなあ。

#32：わたしが… アイドル？（後書き）

迷子という、ちょっとしたハプニングに遭遇した真結花達ですが、この後、いったいどうなることやら…

次回につづく。

### #33：小さな勇気

それにしてもさあ、さつきから、通りすがりの男の子や男性からチラチラ見られてるような気がして、なんだかスッゴク落ち着かない感じなんだけど…今日はパンツルックだし、ファッションも特段派手つてわけでもない。髪型だっていつものポニーテール。なのに、異性からの視線を強く感じる。今、ここにひとりで居るもんだからさあ、ちよつと、自意識過剰になつてんのかなあ。

なんかさあ、心細いつてゆうか、不安つてゆうか。ああー、早くパパか麻弥、帰つて来ないかなあ。

こうやって、女の子がひとりでベンチに座つてると、やっぱり目立つのかなあ？家出少女に見られたり、とか？それとも、このパンパンになつたお持ち帰り袋が気になる、とか？

でも、よくよく考えてみたら、これだけ大衆が集まる所に居るのつて、あの事故以来、初めてのことから、緊張してるのかなあ。

さつきまでは麻弥も居たし、そんなこと意識もしなかったんだけど、ひとりになつたとたん、周りの視線が急に気になり出したみたいだ。

「あのー、すみません。もしかして、木下センパイですか？」

「えっ？」

さつきまで下を向いて考え事してたから、人が近付く気配に全然気付かなかつた。

顔を上げると、そこには見知らぬ、麻弥と同じくらいの可愛らしい少女が立っていた。

「やっぱり、木下センパイ。ご無沙汰してます」

「いえ、こちらこそ」

誰だか知らないけど、とにかく、話を適当に合わせなきゃ。

「木下センパイ、こんな所でひとり、何してるんですか？」

「えっと、家族と遊びに来てただけど、みんな別の用事があって、

「ここで待ち合わせしてるの」

「そうなんですか。じゃあ、麻弥ちゃんも、一緒なんですか？」

「この子、麻弥のお友達？ だから俺のこと、知ってるんだ。」

「うん。そうなんだけど、当分帰って来ないと思うけど」

「残念。私も時間が無いんで、麻弥ちゃんによろしく」

「じゃあ、またね」

「ハイ。じゃあ、木下センパイ、失礼します」

彼女は軽く頭を下げ、一礼をすると、足早に去って行った。

「ほっ」

軽く溜息を吐くと、大して気も使ってないのに、なんだか疲れたような気がした。

あの子、いったい誰なんだろう？ 後で、麻弥に確認しとかなきゃ。

ほっとしてたのもつかの間、

「ねえ、君、ひとり？ 暇なら私とデートしないか？ もちろん、

お小遣いははずむよ？」

今度は見知らぬ、紳士的な雰囲気的中年男性から声を掛けられた。

人は見掛けによらないものだ。恐らく、パパと同じで30半ばぐらいだろう。一見、誠実そうに見える中年男性だが、自分の娘くらいの女の子を相手にしようなんて、ロリコンかよっ！ しかも、援交の誘いみたいだし。

こんなの、相手にするのもかつたらく、無言で頭を左右に振ると、

「あっそ、残念」

と言って拍子抜けするほど、あっさりと引き上げて行った。

ったく、いい歳こいて、いったい何考えてんだか。こんな変態口

リコンエロオヤジがいるから、援交に走る少女が後を絶たないんじゃないのか？ 気持ち悪い気分と、なんとも言えない怒りがないまぜになって、イラっときた。

ああ、もうおー。いつまでこうやって、ひとりで待たなきゃいけないんだろう？ ここを動くわけにもいかなし、またヘンな人に声を掛けられるかもしれないと思うと、憂鬱な気分になった。

案の定、その嫌な予感は見事に的中し、

「すみません、お嬢さん。読者モデル、やってみたいと思いませんか？」

今度は、20代後半から30代前半くらいの、美容師風でお洒落な感じの、そこそこイケメンな男性から声を掛けられた。

「はあ？」

「私、こうゆう者です」

名刺を差し出され、受け取ると、

「RSプロダクション？」

「ハイ。今、雑誌の読者モデル、探してるんですよ。お見掛けしたところ、ビビッと来るものがありまして、お声を掛けさせて頂いた次第で」

「えっと、そうゆうの、わたしは全然興味がないので……」

「そうですかあー、もったいないですねえー。あなたぐらい可愛いと、雑誌の読者人気、トップ取れそうなんですけどねえー。どうです？ 物は試しです。やってみる気はありませんか？ 当然、それなりの報酬は出ますよ？」

そうやって褒めちぎって、その気にさせて、最後はお金で釣ろうって？

「ごめんなさい、その気はないので。他の子、当たってもらえませんか？」

「残念ですねえー。もし、気が変わったら、気軽にその名刺の電話番号に電話して下さい。いつでもいいですから」

彼は、そう言うと、次のターゲットを見つけたのか？ 猛ダツシユで去って行った。

いったい、なんなんだ？ あの人は？

そっぴや、鮎美ちゃんに言われてたこと、ふと思い出した。俺って、ああゆう人達のカモになり易いつてゆうの。

今の俺、マジでそうなってるじゃん。なんでかなあ？ やっぱ、見た目がひ弱そうな感じで、大人しそうな雰囲気、あんなのかなあ？ 認めたくはないけど、否定できないのも確か。

今度ヘンな人が来たら、スパツと、毅然とした態度で断んなきゃ。そうだ、携帯イジってよつと。声掛けにくいだろうし。たぶん、暇そうにひとりでボーっとしてるから、スキがあるように思われちゃうんだ。

「えっ？」

シオルダーバッグから携帯を取り出すと、画面に新着メールのお知らせがあった。

「あれっ？ いつの間に？」

里子ちゃん？ えつと、なにになに？ 明日のリハビリ練習、来れないんだ？ ふーん、急遽、ケガした選手の変わりにサッカーの練習試合に出れることになったんだ？ それから、やっぱお熱い二人の邪魔はしたくないって？ ったく、里子ちゃん、何言ってるんだか。

このメールを読んだとたん、急に喜多村くんの顔が頭ん中にぽつと浮かび上がった。その直後、胸が高鳴りを始め、何とも言えない気恥かしさに包まれてしまったのだけど、そんな気分は一瞬にして消え去った。

というのは、向こうからチャラチャラした、いかにも不良っぽい感じの、二十歳前後の二人組の男の子達が、こっちに向かって近づいて来てたからだ。

まさか、こっちに絡んでこないだろうな？　と思いつつ、視線を逸らそうとしたのだけれど、一瞬、片方の男の子と目線が合ってしまった。しくじったと思い、携帯の画面に視線を落としたのだけど、時すでに遅し、彼らはこっちに向かって確実に一歩ずつ近づいて来ている。どうやら、ターゲットにされてしまったのは間違いないようだ。

ったく、ひとりになってから、ヘンな人に絡まれてばっか。ホント、ついてない。この危機をどうやって切り抜ければいいのか？　必死で頭ん中で考えるも、情けないことに何も良いアイデアは浮かんて来ない。

そうこう考えているうちに、

「よう、お嬢さん。今、ヒマだろっ？　ひとりで携帯イジってるくらいだからさあ。俺達と遊ばないか？」

「ごめんなさい。今、人を待ってるので……」

視線を床に落としたまま、やんわりと断った。すると、もう一人の男の子が、

「あのさあー、人が話し掛けてんのにさあ、下向いたままっていうのはどうよ？」

「そうそう、ちゃんと、顔上げて話そうよ」

「……」

これって、やっぱりナンパ、だよな？　頭ん中じゃあ、毅然とした態度で、ハッキリと断らなきゃって思うんだけど、俺の意思に反して口が動こうとしない。なぜだか、今まで感じたことがないような男性に対する恐怖心みたいなものが急に襲ってきたんだ。体が委縮してしまい、言うことを聞いてくれない。

彼らの背は、175cmは有に超えていると思われ、それが尚一層、恐怖心を煽っているように思えた。

「なあ、下向いたまま、ダンマリかよ」

「うひょー。チョーかわいいじゃん！」

もうひとりの男の子が、しゃがんで俺の顔を見上げるようにじっと見てる。絶対に視線を合わせないよう、必死で顔を背けていたが、痛いほど視線を感じた。

ああ、どうすればいいんだろう？ このまま、下向いたまま、黙ってるだけじゃあ、どうしようもない。かといって、ヘンなこと言っただけだと、もっとサイアクだ。

そうだ、叫んで誰かに助けを呼ぶ？ そう思ってたなら、彼らはそれを見透かしたのか？ 両側からまるで俺を取り囲むように、こっちに向いてベンチに座ってきた。彼らの長い脚が邪魔で、これじゃあ、逃げようにも逃げられない。退路も絶たれてしまい、完全に逃げ場を失ってしまった。

「なあ、そんなに怖がらなくてもいいじゃん」

「俺達、こう見えても優しいんだぜ？」

勇気を振り絞り、なんとか口を動かす。

「あのおー、申し訳ないんですけど、他の子、誘ってもらえませんか？」

あくまでも、丁寧に、かつ、彼らの機嫌を損ねないように喋ったつもりだ。

「やっと喋ってくれた。そう言われてもなあー、俺、キミに一目惚れだし。さっき、一瞬、キミと視線が合っただろ？ そんとき、運命感じちゃったんだよねえー」

「おいっ、ひとりで抜け駆けはズルイぞっ、隆史」

この状況、自らの軽はずみな行動が、招いてしまった悲劇ってことなのか？

益々ドツボにはまってるじゃないか。どうやってこの状況から抜け出せばいいんだよ？

「だってさあ、徹也。こんだけカワイイ子って、そう滅多にお目に掛れないぜ！」

「確かにそうかもなあ。素人にしとくには、ちょっと、勿体ないかも。あれっ？　またダンマリ、ですあー？」

ああ、早くパパが麻弥、帰って来ないかなあ。誰か、助けたくないのかなあ。さつきから、人は行き来してんだけど、こうやってベンチで三人並んで座っていると、俺が、特に困ってるようには見えないのかもしれない。

そうだ、彼らにバレないように、メールで助けを呼ぶ？　パパには心配かけたくないし、やっぱ麻弥？

「なあ、そうやって黙ってないで、なんか話そうよ。俺、隆史。キミ、名前は？」

「……」

「口も聞きたくないんだってさ、隆史。お前、もう嫌われちゃったみたいだな」

「さつきから人が優しく話しかけてんのにあ、そうやって携帯イジって、完全にムシかよっ！　かわいいからって、お高く止まりやがってよあー」

「おいおい、隆史。そうキレんなよ。彼女、ビビってるじゃないかよ」

よし、メール送信！　気付いてくれるかなあ、麻弥。気付いてくれないと、困るんだけど…

「よっと、この携帯、カワイイねえー。このデコ、キミがやったの

？」

俺の右に座っていた隆史と名乗る男の子に、あっさりと携帯を奪われしまった。

「あっ、携帯、返して下さい！」

「イヤだよーっ」と

ほんと、うかつだった。麻弥にメール送信できたことにホッとして、気が緩んでしまっていた。

「でたあーっ、隆史の悪いクセ！」

どうやら、俺の携帯と、自分の携帯の電話番号とメルアドを、勝手に交換しているらしい。

しまったあー、完全に油断してた。まさか携帯を奪われて、こんなことされるなんて、考えもしなかった。今更悔やんでみても、後の祭りだ。最初、ナンパなんて直ぐに断れるだろうし、大したことは無いだろう、そんな軽い気持ちでいた。その油断がこの結果だ。

「終了あー。徹也、ほらっ、パス」

俺の携帯が、左に座る徹也という男の子に向かって放り投げられた。

「ハイ、げつとーっ。えっと…ここかぁ。さてさて、キミのお名前はっと、木下真結花。ふうーん、まゆかちゃんっていうのかぁー。かわいいい名前だねえ」

奪われた携帯の、個人プロフィールを勝手に見られてしまったようだ。

これって、完全にプライバシーの侵害だよな？ と抗議したところで、常識が通じる相手でもない。

こいつら、相当手慣れてる。よりによって、最悪な相手に捕まってしまった。

「お願いします。携帯、返してもらえませんか？」

「じゃあさあ、この携帯、返す代わりに、今から俺達とデートしてくんないかあ」

「おつ、徹也、それ、いいねえー」

「だろっ？ 隆史」

悔しい気持ちでいっぱいなのに、怖くて抵抗できないこのもどかしさ。どうしようもできない自分自身に、腹立たしく、絶望的な無力感を感じた。すると、無性に悲しい気分が俺を襲い、勝手に涙が溢れてきた。

「おいおい、これくらいのお遊びでさあ、なんも、泣くこたあねえだろ？ 徹也、携帯、返してやれよ」

「しゃあねえなあ。ほらっ」

なんとか携帯は返してもらったが、涙が止まる気配はない。

「徹也、お前が、泣かせたんだからなっ」

「お前だって、同罪だろっ。ったくよおー、いつまでも、泣くなよなあ。まるで、俺達が悪者みたいじゃないか」

こいつら、悪びれてる様子も、その自覚さえもない。

しかし、この状況から一刻も早く抜け出す方法はないものだろうか？ 麻弥にメールで助けを求めたものの、見てくれているのかどうかも分からない。このまま、俺が泣きやんだとしたら、いったい彼らは、俺をどうするつもりなんだろう？

サイアクの展開も、考えなきゃいけないかもしれない。暫くの間、泣いたまま、途方に暮れていると、

「こらあーっ！ おねえちゃんを、イジメんなあーっ！」

ゆうとくんが、大声を張り上げ、向こうから猛然とダッシュして来る姿が見えた。

ゆうとくんの大声に驚いた周りの人達は、何事かと、一斉にゆうとくんに視線を浴びせ掛ける。

あんな小さな体なのに、こんなに大きな彼らに立ち向かおうなんて。なんてハートの強い子なんだと、軽く感動していた。

「はあ、はあ」

「お前、なんなんだ？ 大声出しやがって、このくそガキはよー」ベンチに座っていた彼らが、一斉に立ち上がった。こうやって真近で彼らを見ると、やっぱりデカい。

「お前、お姫様を助けにきたナイトきどりってわけか？ ははっ、ちつちえーナイトだなあー」

「お前ら、おねえちゃんを泣かせたなあー」

「ったく、くそ生意気なガキなこと」

「なあ、隆史。こんなガキ相手にするの、やめようぜ。向こうから、厄介なヤツが来てる」

「そうだな。電話番号とメルアドは頂いたことだし、面倒なことになる前に消えようぜ」

そう言つと彼らは、逃げるように立ち去った。

「まゆかおねえちゃん、大丈夫？」

「ゆうとくん、ありがとう」

そう言つた後、バッグから取り出したハンカチで涙を拭った。

「おねえーちゃん」

麻弥が警備員を連れて、こっちに向かって来ていた。そっか、彼らは警備員を見て逃げ出したってわけか。

「お嬢ちゃん、大丈夫かね？」

50過ぎらしい、警備員の制服が板に付いたような男性から、優しい声を掛けられた。

「はい、なんとか。絡まれてた男の子たち、警備員さんを見て、逃げちゃったんで」

「お嬢ちゃん、真昼間だからといって、油断したらダメだよ？ 特に、このアミューズメントパーク周辺は若者が多いから、変な輩も集まってくるんだ。それと、身の危険を感じたら、勇気を出して、周りに助けを呼ぶこと。分かったかい？」

「はい。ご迷惑を掛けて、済みませんでした」

「いや、いいんだよ、これが我々の仕事だから。お嬢ちゃんが無事で良かった」

「警備員さん。おねえちゃんを助けてくれて、ありがとうございますしました」

警備員さんに深々と頭を下げ、お礼を言う麻弥。ほんと、しっかりした妹だよ。

「じゃあ、気を付けて遊ぶんだよ」

「はい」

「麻弥、ありがとう。ほんと、助かった」

「うん、ほんと間に合ってよかったあー。スッゴく心配してたの」

「もちろん、ゆうとくんも、ありがとうね」

「うん」

ゆうとくん、少し照れながら、ニコニコと笑顔を返してくれた。

「おねえちゃん、ほんとに、ごめんねえー」

本当に申し訳なさそうに、両手を合わせて謝る麻弥。

「なんで、麻弥が謝るの？」

「だって、おねえちゃんをひとりにして、危険な目に遭わせた麻弥が悪いんだもん」

「油断してた、わたしも悪いの。だから、麻弥のせいじゃないよ」  
「うーん、やっぱりおねえちゃんの服装、もっとダブダブでボーイツシユな色の服にして、帽子被らせてた方がよかったなあ」

麻弥が、俺の頭のとっぺんから足先まで、視線を動かしながらそう言った。

「なんで？」

「だって、今日のおねえちゃんのカッコ、可愛すぎるもん。男の子が、ほっとくわけないよ」

「えっ？ そんなことないと思うけど？ 今日わたしのカッコ、フツーじゃないの？」

「だってさあ、そのシャツ、パンツにしても、体のライン、丸見えでしょ？ おねえちゃん、体が小さい割に、プロポーシヨンがいいんだもん。それに増して、そのかわいい顔にポニーテールでしょ？ 男の子が、そのギャップに萌え！ とか、クラっときてもおかしくないよ」

「はあー、そうなんですか？ 麻弥。じゃあ、俺が感じていた男性諸君の視線は、気のせいではなかったと。」

そう思った瞬間、鳥肌が立つ程、ブルッと寒気がしたため、思わず両手で体を抱きしめた。

「まゆかおねえちゃん、どうしたの？ 体の具合、悪いの？」

「うううん。心配してくれて、ありがとう。ゆうとくん」

「ねえ、おねえちゃん。結局、ゆうとくんのおにいちゃん、見つからなかったの。どうしょっか？」

「そのこと、わたしも考えてただけど、パパが帰って来てからさあ、一緒に迷子センター行くしかないのになって、思ってた。ゆうとくん、それでいいかな？ これだけ待ってても、ゆうとくんのおにいちゃん、現れないみたいだし」

「うん、わかった。これ以上、おねえちゃんたちの迷惑になりたく

ないし」

「麻弥、迷惑だなんて思ってないよ？　なんかさあー、少しの時間だけだったけど、弟が出来たみたいで、楽しかったし」

「うん、麻弥の言う通りだよ。わたしもさあ、もし、家にゆうとくんのような弟がいたらさあ、今よりも、もっと家が明るくなつて楽しいんだろ？　なつて想像してたの。それにさあ、ゆうとくんつて、ホント強い子だと思つたよ。その小さな体の勇氣に、わたしも頑張んなきゃつて励まされたの。ホント、感謝してるんだから」

「へへっ」

ゆうとくんの照れた姿が可愛らしく、思わず、強く抱きしめたい衝動に駆られたんだけど、グツとガマンしてこらえた。

これつて、やっぱさあー、母性本能がくすぐられているつてことなんだろう？　ゆうとくんの手を握つたときも同じような感じ、したんだよねえー。なんか、スツゴく不思議な感覚。

### #33：小さな勇気（後書き）

とんだ災難に巻き込まれてしまった真結花。

ゆうつくんの活躍により、その災難は去ったようですが…

次回につづく。

### #34：希望の種

「真結花、麻弥、悪いなあ。ちょっと、遅くなったな」

パパ、手土産でも沢山買い込んだのか？ 両手に沢山の紙袋をぶら下げてた。それで、こんなに遅くなったわけ？

「もうあーパパあー、ちよつとどころじゃないよ。どんだけ待ったと思ってるわけ？」

思いつきりふくれっ面をして、文句を言ってみた。

「そうだよ、パパ。おねえちゃん、危ないとこだったんだから」

「麻弥、真結花が危なかったって、どういうことだ？ それに、この子は誰だ？」

「まっ、わたしの話は置いて、この子、ゆうとくんって名前でおにいちちゃん探してるの」

「迷子ってわけか？」

「だから、パパが帰って来たら、一緒に迷子センターに行こうってねっ、ゆうとくん」

「うん。あーっ！」

ゆうとくんが、パパの顔に指をさし、突然、驚いたような声を上げた。

「どうしたの？ ゆうとくん」

「日本代表の木下選手！」

「ゆうとくんといったね、確かに以前はそうだったんだよ。でも、今は元サッカー選手だから、そう大騒ぎしないでくれるかな？」

「うん。わかった」

「へえーっ、パパって、小さい子にも人気があるんだ？ 麻弥、以外で驚いちゃった」

パパってそんなに有名なのかなあ？ なんか、いまひとつ、ピンとこないっていうか。

「ゆうとくん、パパって、そんなに有名なサッカー選手だったの？」

「えっ？ おねえちゃんが、知らないのお？ 『蒼の鉄壁』って言われてたのに」

「まあ、それも、昔の話だよ。ゆうとくん、君は、サッカーをやっているのかい？」

「うん。おにいちゃんも、サッカーやってるんだあー」

「へえー、それでパパのこと、知ってたんだあ。麻弥、サッカーには余り詳しくないから、パパにそんなあだ名があったなんて、全然知らなかったよ」

「おおーい。ゆうとおー」

その声に振り向くと、帽子を被った男の子が走って来ていた。

「おにーちゃん」

思わず、ダツと掛け出すゆうとくん。

「散々探したぞ、心配掛けやがって、このっ！ いったい、何処に居たんだよ？」

「あのおねえちゃん達と、一緒にいたんだあー」

ゆうとくんが振り向きながらそう言うと、そのお兄ちゃんもこちらを窺うように視線を送ってきた。

その瞬間、あれっ？ もしかして？ と思つてたら、

「あれっ、なんで木下がココに居るわけ？」

「やっぱ、友田くんだったんだ」

でも、兄弟にしては、似てないよね。

「ふうーん、この人が、噂の友田くんって人なんだ？」

この子は… 木下の妹？ にてしても、姉妹そろってカワイイよなあ。そして… この人が、木下のお父さん？

「ああーっ！ 木下選手！」

友田くん、ゆうとくん同様にパパを見て驚いてる。

やっぱ、パパってサッカー通の間じゃあ、結構有名人だったんだ？

「なんだ？ 真結花、知り合いだったのか？ もしかして、この子が真結花の彼氏なのか？」

「違うよぉー、パパぁ。おねえちゃんの彼氏は、もっとカッコイイんだからぁー」

なにぃーっ！ 木下に、やっぱり彼氏がいたのかぁー、ショック！  
どつりで最近、しおらしくなって、妙に女っぽくなってきてたと  
思ってたら…

「もぉー、麻弥ったら、そんな言い方したら、友田くんに失礼ですよ！」

はぁーっ、否定もしないってことは、木下にはやっぱり…

「あつ、大丈夫。俺、気にしてないから。どうも、弟がお世話になり、ありがとうございます」

友田くんはスポーツマンらしく帽子を取ると、パパに向かって深々と頭を下げてお礼を言った。

「あつ、いや、私はついさっきここに来たばかりで、何もしてないから。お礼なら、娘達に言ってくれないか？」

「ほらっ、ゆうと、お礼」

友田くんが、ゆうとくんの後頭部を軽く右手で押すと、

「まゆかおねえちゃん、まみおねえちゃん、ありがとう。楽しかったよ」

「じゃあ、ゆうとくん、気をつけて帰ってね」

「麻弥、寂しいなあ、ほんと、弟ができたみたで楽しかったよ。あつ、ゆうとくん、忘れ物」

麻弥は、ベンチに置き忘れていたぬいぐるみを、ゆうとくんに手渡した。

「ありがとう、まみおねえちゃん」

「じゃあ、木下、俺達、もう帰るから。弟が世話になって助かったよ。じゃあ、また学校で」

「うん、じゃあね」

友田くんは、軽く手を上げると、ゆうとくんの手を取って行ってしまった。

友田くん、なんだか少し、元気がなさそうな気がしたんだけど…

「よし、じゃあ、我々も、そろそろ帰るとするか？ もう十分遊んだんだろ？ 真結花、麻弥」

「あつ、帰る前に、ちつとだけいい？ パパあ」

「どうしたんだ？ 麻弥」

「ああーれっ！」

麻弥が指さす方向を見ると、その圧倒されるような派手さ加減に、おののいた様子のパパは、

「おいおい、この歳であんなところに入るのは、さすがに恥ずかしいぞ、麻弥」

「だってえー、もう当分パパと会えないじゃん。だから、記念に、ねっ！」

「頼む、カンベンしてくれないか？ 麻弥」

「ダあーメっ！」

「なあ、真結花。何とかしてくれよ」

頼りなさそうな声で、助けを求めてくるパパ。

じゃあ、そのご要望に答えまして、

「別に、いいんじゃない？ プリクラぐらい。パパがひとりに入るわけじゃないんだし。ファミリーならOKって書いてるじゃん」

パパにトドメの一撃を加えると、さすがにパパは白旗を上げたように、頭をがっくりと下げ、

「今回だけだからなっ、麻弥」

そう言って、ワガママな娘達の、ささやかな願いを聞き入れてくれたようだ。

でもさあ、パパって口でイヤイヤって言うってても、実は内心では嬉しかったりして。パパって不器用で、照れ屋さんみたいだしさあ。

「ただいまあー」

ドアを開けると、Yukiがしつぱを振って玄関でお出迎えしてくれていた。

「Yuki、お利口さんにしてた？」

Yukiの頭を撫でてやると、嬉しそうな表情で答えてくれた。やっぱ、動物って癒されるよなあ。

「ねえ、おねえちゃん、ママは？」

麻弥が、少し開けた玄関のドアから顔を出して聞いてきた。

「まだ、帰って来てないみない」

「そう。もう17時前なのになあ。もう少ししたら、パパ、向こうに行っちゃうのに……」

「わたしが悪いの……」

「えっ？　なんで？」

「だって、わたしが昨日、熱なんて出してなかったら、今頃、家族全員で楽しかったはずなのに……」

「またおねえちゃんの、ネガティブモードが出たあー。もうあー、それは仕方ないじゃない。ママも居ないんだし、最後まで、家んなが辛気臭くならないように、パパに娘達のめいっぱいの笑顔、見せて送ろうよ」

「うん、そうだね。もう当分、パパに会えないんだし」

「おおーい、真結花、麻弥。荷物運ぶの、手伝ってくれえー」

まだ駐車場に居た、パパから声がした。

「あつ、はあーい」

「はあーい、パパあー」

リビングのソファに腰を下ろすと、一気に疲れが出たようで、背もたれに、背中をべったり預けるようにもたれかかった。

「ふうーっ、疲れたあー。やっぱ、家が一番落ち着くよ」

「まっ、おねえちゃん、久しぶりだったもんね。あれだけ人が居る所に出掛けたんだし、あんなトラブルもあつたんだもん。精神的に、疲れたんじゃない？」

「そうかも」

パパが、さつき運んだ紙袋を二つ持ってくると、

「はい、真結花、麻弥」

と言つてパパから紙袋を手渡されると、

「んっ？ 何なの？」

と返した俺の薄い反応とは違い、麻弥はニコっとして、

「これって、サプライズってこと？ パパにしては、気が利いているわねえー」

「そうか？ まあ、お土産、買ってこなった埋め合わせと思ってくれれば、それでいいさ」

「開けても、いい？」

「ああ」

麻弥は、はやる気持ちを抑えるかのように、紙袋から取り出した包みを外すと、

「うああー、超かわいいっ！ 麻弥、こつゆうショルダーバッグ、欲しかったんだあー」

それは、薄いピンクのエナメルショルダーで、角にあしらわれた黒いパイピングと、スポーツメーカーのロゴがシルバーで刺繍されていて、すつごくオシャレなものだった。

「気に入ってくれて、嬉しいよ。麻弥が、そんなに喜ぶなんて、思ってもいなかったよ」

「ありがとう。パパ、大好きっ！」

麻弥にそんなことを言われ、なんだか、照れてる様子のパパ。

「真結花は、開けないのか？」

「うん、楽しみは、後で取って置くから」

たぶん、同じシヨルダーの色違いじゃないのかなあ？ なにも、ここで、わざわざ開けなくてもって。

「そっかあ」

しまったあ！ やっぱ、素直に開けとけばよかったかなあ？

パパ、大はしゃぎな反応の麻弥とは対照的な、俺の反応の薄さに、なんだかガツクリって感じだし。

ちよつと、パパ、持ち上げとかなないと、いけないかな？

「それって、パパが選んだの？ すっごく、センスがいいと思って」  
麻弥のエナメルシヨルダーに指をさしながら聞くと、

「ああ、実を言うと、そのバッグ、お店の若い女性店員相談して、選んでもらったものなんだよ」

あちゃー、余計なこと、聞いちゃった？

「ふうーん、そうなんだ？」

「じゃあ、麻弥からも、パパにプレゼント。ハイ、これっ。おねえちゃんにも、ハイ」

麻弥がバッグから取り出して、パパと俺に渡したものは、家族三人で撮ったプリクラだった。

「おっ、結構、キレイに撮れてるもんだなあ」

「パパあ。寂しくなったら、それを見て、麻弥とおねえちゃんを思い出して、泣いてねっ！」

「麻弥、パパがこんなもので泣くわけ、ないだろう？」

「とかなんとか言つて、向こうに行ったらパパ、こっそりこのプリクラ見て、泣いてたりして」

「真結花、残念ながら、それはないだろうなあ。向こうに行ったら、サッカーのことで、頭がいっぱいだろうし」

「またまたあ、やせ我慢、しなくてもいいんだよ？ パパあ。寂し

くなったら、いつでも麻弥に、電話してねっ」

「ったく、お前たち、そろいにそろって……おっと、こんなことしてる場合じゃない。そろそろ、荷物まとめないとな」

照れ隠しなのか？ パパはそう言つと、残っていた紙袋を持って二階の寝室へ行ってしまった。

トントン。

「真結花、部屋に入ってもいいかい？」

「いいよ、パパ」

何やら、また紙袋を持ってパパが部屋に入ってきた。

「もうそろそろ、家を出ようと思うんだ。その前に、真結花に渡して置きたいものがあつてね」

「えっ、もう行っちゃうの？　じゃあ駅まで、麻弥と一緒に見送りに行くよ」

「いや、いいよ、真結花。別れが辛くなって、パパ、泣いちゃうかもしれないしさ」

「えっ！　パパが泣いちゃうって？　ホントかなあー、さっきはそんなこと、言つてなかったじゃん」

「ああ、そうなんだが、歳のせいなのかなあ？　最近、どうも涙腺弱いみたいなんだな、パパは。真結花は覚えていないかもしれないけど、前回、空港で家族全員に見送られたとき、ちよつと心に込み上げるものがあつて、ウルウルきちゃつてね。涙を必死でこらえてたんだよ」

「へえー、なんだか以外」

パパは紙袋から、包装用紙に包まれた箱を取り出し、

「じゃあ、これを渡しておくよ」

と言って、何やらまたプレゼントを手渡された。

「えっ？ さっき、プレゼント貰ったばかりなのに」

「ああ、これは、真結花だけの特別なプレゼント。だから、麻弥には黙っておいてくれよ？」

「うん、別にいいけど。コレ、なに？ 開けていい？」

「ああ」

包装用紙を丁寧に取り外すと、それはスパイクシューズだった。

「気に入ってくれたかな？ ちょっと気が早いけど、サッカークラブの復帰祝いだ。真結花がサッカークラブに復帰できた時、新たな気持ちで履いてくれればと思ってね」

「……」

「どうした？ 真結花。どこか、具合でも悪いのか？」

俺は、暫く俯いたまま、顔を上げることが出来なかった。急に涙が溢れ出したからからだ。泣いた顔なんてパパには見せたくなかったし、泣いた顔でパパを見送りたくはなかった。涙を手の甲で拭い、パパを見上げた。

「ごめんなさい、パパ。このスパイクシューズ、本当に履けるようになれるのかなって思ったら、急に悲しくなっちゃって泣いちゃった。ホントは、笑顔でパパを見送らなきゃいけないのにね」

「真結花は、周りの期待のためだけに、サッカーに復帰しようと思っ  
っているのか？ そう思っているのなら、大間違いだ」

「なんか、パパ、少し怒ってる。」

「パパ……」

「じゃあ、真結花は、勉強は誰のためにしてると思っ  
ているんだ？ 親や周りの期待に答えるためだけか？ 違うだろう？ 自分への、  
将来の投資のためだろう？」

「うん」

「それなら、答えは自ずと出ているはずだ。もし、真結花がサッカーを続けたくないと言うのなら、パパはそれを止めはしない。サッカーを続けると、無理強いもしない。決めるのは、真結花、お前自身の心だ。どうする？ サッカー止めて、普通の女の子になるか？」

最後の、『普通の女の子になるか？』っていうパパの言葉に、なんか、カチンって来た！

「パパ、わたし、サッカー続ける。どうしても続けたい、このままで、終わりたいくない！」

「そうか、真結花の気持ちはわかった。じゃあ、真結花に、別れの言葉として、この言葉を贈ろう。『いつも、心に希望の種を持って、それを育て続けること』これは、パパが学生時代、恩師から言われた言葉だ」

「いつも、心に希望の種を持って、それを育て続けること？ 希望の種って？」

「じゃあ、真結花。植物の種を芽吹かせるには、何が必要だと思う？」

「えっと、土と水と養分かなあ」

「その通り。同じ様に希望の種を芽吹かせるためには、それを育てるための情熱、環境と時間、努力が必要なんだよ。将来、自分がこつなりたいっていう希望や夢、そのビジョンを持って、心の中でその情熱を暖め続けるんだ。そして、それを実行するための環境と時間を作って、それに向けて具体的にコツコツと、地道に努力し続けるってことかな」

「ふうーん」

「そうやって地道に努力していれば、やがて自信という名の根を張る。そこから野心という芽が生えてきたら、今度は夢という花を咲かせるために、自分にどんなエネルギーが必要なのか、何が足りないのか、搜すんだ。そして、更なる努力を積み重ね、それを自分の物にする。でも、それはそう簡単には見つからないだろうし、紆余

曲折、挫折することもあるだろう。苦しんだ分だけ、成功した時の達成感や喜びは、何ものにも代えがたい、素晴らしい人生の記憶として、心に刻まれるんだ。これは、パパが現役時代に得て来た経験なんだ」

「へえー、パパもプロサッカー選手になるために、随分と苦労したんだ？」

「そうさ。でも、口ではなんとも言える。どのプロの世界でも、現実是非常に厳しくてハードルも高い。誰しも、努力すれば必ずプロになれるというわけではないし、例えプロになったとしても、自分が思い描いていた夢が叶とも、成功を収めるとも限らない。最後には、持って生まれた才能やセンス、運、そして恩師、仲間、良きライバル、協力者との出会いといった人の縁、そういった、努力だけでは越えられない、高いハードルが待ち受けているからね」

「じゃあ、才能やセンスの無い普通の人が、プロの世界目指そうなんて夢、持たない方がいいんだ？」

「そうやって、はなっから無理だと決めつけてしまうのは良くないな、真結花。何事も努力しないで始めから出来ないと諦めるよりも努力した方がいいに決まっている。失敗してもその経験を生かして努力を積み重ねていけば、少なくとも一歩ずつ、夢に近付いて行くことは出来るんじゃないかな」

「やっぱ、一に努力、二に努力かぁ」

「ただ、いくら努力しても、人にはそれぞれ限界があるんだ。努力だけではどうしても越えられない壁を感じたとき、別の選択肢を考えなきゃいけない。プロがダメなら裏方でそれを支える仕事とか、アマチュアとして、趣味で楽しむとかね。パパが、現役引退した理由もそれなんだ。人生、若いうちに、自分の可能性を知るために、興味を持った事や好きな事にチャレンジするべきだとパパは思う。何事もやってみなくちゃ分からない。どうせ夢や希望なんて叶いやしないって、最初から諦めてたら、これしてもダメだろう、あれしてもダメだろう、何してもダメだろう、って思うようになって、何

も努力しない、何のリスクも冒さない、流されるだけの人間になつてしまう。ハッキリ言つて、そんな人生、面白くないぞ、真結花。

だから、真結花。とにかく、失敗を恐れず、とことんサッカーをやつてみるのだ。それから、答えを出してもいいんじゃないのか？」

「そうだね、パパ。少し勇気が出てきたよ。ありがとう！」

「パパには、こんな言葉しか掛けられないが、頑張れよ！ 真結花」

「うん。パパも、向こうで頑張つてねっ！」

「ありがとう、真結花。じゃあ、もう行くよ」

「あつ、待つて！ パパ」

「どうした？ 真結花」

「最後に、パパと握手してもいい？」

「ああ、構わないけど、どうしたんだ？」

少し、照れ臭そうな感じのパパ。

「パパの手から、少しでも勇気を貰つておこうと思つて」

「へんなこと、言うよなあ、真結花は。じゃあ」

パパがそう言つて、右手を差し出してきたので、俺は両手でパパの大きな手を挟み込むように、思いつきギョツと力を入れて握つてみた。

「おい、真結花、力、入れ過ぎだぞ。もう、いいだろ？」

「うん。じゃあ、パパ、元気でねっ！」

「ああ、真結花も元気でなっ！ 今度会える日を楽しみに待つてる」  
パパはそう言つと、部屋を出て行き、隣の部屋に居た麻弥にも別れの言葉を掛けた後、本当に行つてしまった。

ああーあ、本当にパパが居なくなつちやつたよ。なんか、心にはぽっかりと穴があいたような感じ…

でも、パパから、沢山の勇気を貰つたような気がして、正直なところ、余り気乗りしていなかった明日のリハビリ練習、ガンバルぞっ！ っていう意欲に満ち溢れていた。

#### #34：希望の種（後書き）

どうやら、父親との別れの言葉が、真結花にとって、サッカー復帰へのカンフル剤となったようです。

次回につづく。

#35：わたしだつて… かまって欲しいの

「ハイ、これ、パパから」

夕食後、俺は、テーブルの下に隠していた紙袋をママに手渡した。  
「なに？」

「それねえー、パパからのサプライズなの。麻弥も、パパにしてはやるじゃんって思ったよ」

「そう。開けても、いいかしら？」

「どうぞ、どうぞ、ご遠慮なく」

俺は、両手を差し出してそう答えると、ママは、驚いた様子で、  
「あらっ。パパにしては、センスいいわねえー、このエナメルシヨルダー」

そう、パパが麻弥と俺にプレゼントしてくれたエナメルシヨルダーの色違いで、ブラック地に、角にゴールドのパイピングがあしらわれ、同じくゴールドのスポーツメーカーロゴが刺繍されたもの。  
ちなみに、俺のはホワイト地のものだった。

「うん、麻弥は、ママに似合っていると思うよ、そのエナメルシヨルダー」

「このデザイン、ちょっと、若過ぎない？」

「大丈夫、ママは実年齢より若く見えるし」

「まあー、真結花、ママをからかわないでよ」

「なんか、ママ、少し照れてるみたい。」

「そんなことないと思うけど… だって、麻弥の中学の入学式とき、友達から、麻弥のママって、歳の離れたおねえさんみたいだねって言われて、嬉しかったもん」

「まあー、麻弥まで。あらっ、これ、なにかしら？」

ママが、紙袋から洋封筒を取り出した。

「それって、パパからのラブレターじゃないの？」

ママとパパ、お熱いみたいだし。

「パパにしては、洒落たことするわねえー。麻弥、ちょっと驚き」  
「ねえねえ、ママ。その手紙、開けて、読んでみて」

パパがママに宛てた手紙に、いったい何て書いてあるのか？  
すぐく気になって聞いてみた。

すると、ママは、人差し指を口の前にかざし、しっー！  
といったポーズを取り、

「ダメーメ。これは、大人だけのヒ・ミ・ツ」

「ママのケチっ！」

「もしかして、おねえちゃん、ママに嫉妬してるんじゃない？」

「なっ、何言ってるわけ？ 麻弥は」

「やっぱ、凶星。おねえちゃんって、パパっ子だもんねえー」

うっ、どうしてだろう？ 麻弥に、何も言い返せない。

「さっ、二人共、お喋りはそれくらいにして、早くお風呂入りなさい。真結花は、明日、早いんでしょ？」

「うん」

「じゃあ、おねえちゃん。久しぶりにさあ、一緒にお風呂に入ろうよ」

「えっ？ ごめん、それはムリ」

「なんで？」

「なんでって言われても、麻弥。ダメなものはダメっ」

いくら妹でも、それは恥ずかし過ぎる。それだけは、カンベンして欲しい。ママと一緒に入ったときも、目のやり場に困って、恥ずかしかったんだからさ。

「どうしたの？ 真結花。麻弥と一緒に入ればいいじゃない。その方が、ママも早くお風呂に入れるし、助かるわ」

ママにそう言われてしまうと、反論する理由が…

「そっだよ。じゃあ、麻弥と一緒にお風呂に入ろっ、おねえちゃん」  
理由… あった！

「えっ？ でも、今日は色々と疲れたし、お風呂ぐらい、ひとりでゆつくりしたいなって。わたし、最後でいいよ。先に麻弥とママと一緒に入ればいいじゃん」

「そう、わかったわ。じゃあ、麻弥、ママと一緒に入りましょ」  
ふうーっ。なんとか、切り抜けられた。

「うん。せつかくおねえちゃんと、一緒に入れると思ったのに…」  
「ごめんね、麻弥。また今度ってことで」

と言ったものの、麻弥、ごめん。たぶん、その今度は無いと思うから。

「麻弥、さっきの真結花、何かヘンだったわね？」

「やっぱ、ママもそう思う？ 頑なに、麻弥と一緒にお風呂入るの、拒否ってたし」

「デリケートなお年頃のようなね、真結花は。麻弥だって、いつまでこうやってママと一緒に、お風呂に入ってくれるのかなあ？」

「さあー？ でも、今は… 別にイヤじゃないよ、麻弥は」

「でも、麻弥だって、いつかは、嫌がるお年頃になっちゃうんだろ  
うなあー」

「そうだとしても、たまには一緒に入ってあげるよ、ママ」

「麻弥は優しい子ね。ところで、麻弥、今日の真結花、体調とか大丈夫だった？」

「うん、それは問題なかったんだけど、ちょっとトラブルがあったから、精神的に疲れてるのかも」

「トラブルって？」

「迷子に遭遇したのと、おねえちゃんが、知らない男の子達に絡まれちゃった」

「その男の子達に絡まれたっていうの、真結花は、大丈夫だったの？」

「うん、警備員さんに助けてもらったから。でも、おねえちゃん、その後も元気そうだったし、そのこと、全然気にしてないような感じだったんだけど、パパや麻弥に心配掛けないように、気を使ってたんだと思うの。帰りの車の中、疲れたようにぐったりしてたし」

「そう、真結花は怖い目にあつたのね？ このことがきっかけで、男性恐怖症とかに、ならなければいいんだけど…」

「それは、大丈夫じゃない？ だって、おねえちゃん、その後もパパと普通に接してたもん。本当に男性恐怖症とかになったら、パパだって拒否るはずじゃない？」

「そうだといいいんだけど… そうゆう精神的なものって、後から影響が出てくるものなのよね。真結花が事故に遭ったときもそうだったの」

「まあ、最近のママは、いつも、おねえちゃん、おねえちゃん、おねえちゃんばかり。おねえちゃんのこと、心配し過ぎ。ママの頭ん中は、おねえちゃんのこと、でいっぱい、麻弥は、ママにとつてはどうでもいいんだ？」

「そんなことないわよ。真結花も、麻弥も、ママにとって大切な子供なんだから」

「だったら、ママ、麻弥にもかまってよ！」

「ごめんなさいね、麻弥。最近、ママが真結花ばかり気にしてて、麻弥は少し寂しかったのよね」

「ごめんなさい、ママ。麻弥も言い過ぎちゃった。ちょっと、おねえちゃんに嫉妬してたの」

「そう。それに気付かないママも、悪いの。だから、麻弥は、何も気にしなくてもいいから、ねっ」

「うん」

「さあーてつと、そろそろ、お風呂にでも入ろっかな？」

プルルル… プルルル… プルルル…

だれ？ あつ、喜多村くんからだっ！

「はい、もしもし、喜多村くん？」

『木下さん？ ごめん、遅くに電話して』

「どうしたの？」

『明日のリハビリ練習のことんだけど、体の方、大丈夫なのかなって思ってたさ』

「うん、大丈夫だよ、熱はウソみたいに下がって、もう体調は万全だし」

『そう、それならいいんだ』

「用事って、それだけ？」

『うん、まあそうなんだけど、こないだダビングしてあげたDVDって、もう見た？』

「DVDって？」

『ほらっ、サッカー女子日本代表の試合を撮ったやつ』

「あつ、ごめんなさい。見るの、すっかり忘れてた。この後、見てみるね」

『あつ、いいよ、無理して今から見なくても。明日は練習だし、早く寝た方がいいからさ』

「うん」

『じゃあ、明日、木下さんの家まで迎えに行くから』

「うん、待ってる」

『じゃあ、電話、切るね。おやすみ、木下さん』

「おやすみなさい、喜多村くん」

しまったぁーっ！ 喜多村くんにダビングしてもらってたDVD見るの、すっかり忘れてた。サッカーのイメージトレーニングにい

いよつて、言われてたのに…… 今からお風呂にも入らなきゃいけないし、睡眠不足だと明日の練習に影響が出るし、やっぱ、見るのは止めておいた方がいいよね。

プルルル…… プルルル…… プルルル……

なに？ また、喜多村くん？

「もしもし、喜多村くん？」

『キタムラつて、誰だよ？』

喜多村くんじゃない？ 慌てて電話取ったもんだから。もしかして、間違い電話？

「あなたは、誰ですか？」

『誰つて、俺だよ、俺』

俺つて誰だよ？ もしかして、これつて、オレオレ詐欺？

『声、覚えてねえのかよ、つれねえーよなあ』

「間違い電話だったら、切りますけど……」

『おおーっと、待った、待った。隆史だよ、隆史。昼間、会っただろ？』

あっちゃー、着信拒否設定しとくの、すっかり忘れてたよ。あのナンパしてきた二人の片割れか。

「それで、わたしに、いったい何の用なんですか？」

少し、語気を強めて言ってみた。ここで、下手に出ると、いいように付け込まれるだけだ。

『用事つて程の事じゃあないんだけどさ、君の声が聞きたくなつてさ』

「じゃあ、もう切りますね」

更に、冷たく突き放す。

『おいおい、やけに冷てえーよなあ、俺の事、嫌いか？』

「嫌いです。人の電話番号盗むなんて、人間としてサイテー」

相手を怒らせてしまつかもしれないけど、この際、構わない。

『ハッキリ言ってくれるよなあー、でもそう言われると、余計に燃えてくるんだよなあ』

えっ？ 逆効果だった？

「自分で勝手に燃えてください。わたしには、関係ありません！」

いい加減、ウザいんだけど…

『昼間と違って、やけに強気だよな？ そうゆう強気な女、好きだぜえ』

そりゃあ、相手がここに居るわけじゃないからね。いくらでも強気で言えるし。

「わたしは、あなたのこと、大っ嫌い！」

思いつきり、大声でそう言った後、電話を切った。

はあースッキリした。おっと、電話とメール、直ぐに着信拒否設定しとかなきゃ。

カチャ。

「おねえちゃん、どうしたの？ 大声なんか出したりして」

麻弥が驚いたような表情で、ドアから顔を出してきた。

「あつ、ごめん。さっきまで、友達から借りたDVD見てて、興奮して、つい」

「そう、ならいいんだけどさ。おねえちゃん、早くお風呂入らないと、冷めちゃうよ？」

「うん、ありがとう。直ぐに入るから」

そう言つと、麻弥は、それ以上突っ込むこともなく、自分の部屋に引き揚げていった。

昼間の件で、俺の携帯のアドレス帳には、勝手に“隆史”という名が登録されていたわけだけど、なんかトラブったときの為に、残

しておこう。相手の電話番号がわかっていれば、もしものとき、被害届も出せるだろうし。

まっ、取りあえず、この件は一件落着？　といっても、油断は出来ないかも。最近、ストーカー被害も増えているようだし、まさかとは思うけど、外出したときはへんな人に後を付けられていないか、注意しないとね。用心にこしたことはないだろうし。

さてと、明日の事もあるし、さっさとお風呂に入って、寝ちやおうと。

#35:わたしだって… かまって欲しいの(後書き)

どうやら、昼間に真結花を襲った災難は、取りあえず片付いたようですね。

麻弥は、日頃のママへの不満が、一気に爆発しちゃったみたいですよ。

次回につづく。

### #36: STEP BY STEP

うわーっ、急にペース上げ過ぎだよ、喜多村くん。もう全然、付いていけない。どんどん置いてかれてる。

そう、今、俺は喜多村くんの背中を全力で追いかけて走ってる。昨夜はいつもより早く寝て、今日のリハビリ練習のために体調を万全に整え、ジャージ姿で張り切って朝からこの公園に乗り込んだものの、体の方はまだ眠ってるままなのか？ 足取りはひじょーに重く、自分の頭の中でイメージしているように、軽やかなステップで走れない。喜多村くんの指示で、走る前にちゃんと、十分過ぎるほど柔軟体操したはずなのに…

「喜多村くん、ちょっとまってえー」

喜多村くんは振り向くと、立ち止まってくれ、息を切らしながら追いつくと、

「あつ、ごめん、ごめん。つい、いつもの調子で走っちゃった。木下さんのペースに合わせなきゃいけないのにさ」

喜多村くんがそう言つと、俺はもう体力の限界を感じてたため、

「はあ、はあ、ごめん、もう限界っ。これ以上、走れない」

そう言つたとたん、急に目の前が真っ白になり、体がふらついた。  
「木下さんっ！」

目の前の視界が開けてくると、喜多村くんの胸が眼前にあり、俺の体は喜多村くんの体にすっぽりと、抱きしめられているような格好になってた。

うああーっ、どうしよう？ 恥ずかしくて喜多村くんの顔、とてもじゃないけど見れない。ただでさえ、心拍数上がってるのに、益々上がっているような気がした。

でも、こうやって喜多村くんに抱かれていると、不思議と心地い

いつていうか、安心感があるっていうか、なんだかスッゴク癒されているような感じがするんだけど…

「木下さん、大丈夫？」

そう言いながら喜多村くんは、俺の両肩を掴んで自分の体から引き離してくれた。

俺は俯いたまま、

「ありがとう。もう、大丈夫だから」

と答えたものの、

「本当に大丈夫？ 体の具合、悪くない？」

と、喜多村くんは凄く心配してる様子。

「心配しないで、急に立ち眩みしただけだから」

どうしてだろう？ さっきから恥ずかし過ぎて、とても顔を上げられない。

「でも、顔、少し赤いみたいだよ？ 本当に大丈夫？」

喜多村くんは腰をかがめ、俺の俯いたままの横顔をじーっと見てる。

だからあー、そうやって顔を近づけて見られるの、めっちゃ恥ずかしいんだって。

もうあー、そうゆうの、分かんないのかなあー。

「ちょっと、休みたい」

俯いたまま、そう答えた。

「ああ、そうだね。ベンチに座って休もう。水分補給もした方がいいだろうし」

「うん」

「木下さん、ひとりで、ベンチまで歩ける？」

「たぶん、大丈夫」

そう言って俯いたまま歩き出そうとすると、脚がよろけてしまい、

思わずつまずきそうになった。

「おっと、危ないっ！」

真横にいた喜多村くんに肩を抱かれたため、なんとかコケずに済んだんだけど、さっきからどうしようもなく、恥ずかしくてしょうがない。

「ごめんね、迷惑かけて」

すると、喜多村くんは突然しがみこみ、

「じゃあ、はい、どうぞっ」

と言つて、おんぶをする格好を見せた。

どうやら、喜多村くん… 心配して自分の背中に乗れつてこたらしい。

今、だだでさえ恥ずかしいのに、更にそんな恥ずかし過ぎる事、とてもじゃないけど、できるわけない。

「ひとりで… 歩けるから」

無愛想にそう言つて、喜多村くんの好意を無視するかのようになり、スタスタとひとりで歩きはじめた。

「あつ、まつて、木下さん。もしかして、何か怒ってる？」

「怒ってなんか、ないよ？」

ただ、恥ずかしいだけ…

「でも、なんだか、不機嫌そうだし」

「ちよつと、疲れただけ…」

「そう、ならいいんだけど…」

ベンチに座り、ベンチの下に隠していたリュックサック取りだすと、なんだか濡れている。中身を確認すると、水筒に入れてきたスポーツドリンクが漏れていた。

あっちゃー。家出るとき、ちよつと慌ててたもんだから、きちん

と水筒の栓、してなかったみたいだ。タオルも濡れているみたいだし。どうしよう？

「どうしたの？ 木下さん」

スポーツドリンクを飲み、タオルで顔の汗を拭き、一息ついている喜多村くんを横目に、

「えっと、わたしのリュックサック、このありさまで……」

濡れたリュックサックを喜多村くんに見せると、

「ああーあ、それじゃあ、どうしようもないね。じゃあ、これ飲む？ それと、このタオル、使いなよ」

喜多村くんはそう言っていると、水筒と、新しいタオルを渡してくれた。タオルは新しいからいいとして、水筒に口をつけるのには抵抗があった。

だってさあ、これって、間接キスになるわけじゃん。暫く、どうしようかと迷っていると、

「んっ？ 飲まないの？」

「えっ？ なんだか、悪いし」

「じゃあ、僕、自販機で飲み物買ってくるから、そこで待っていてくれる？」

「うん」

喜多村くんに、変な気を使わせてしまったようだ。もしかして、間接キスを嫌がっていたの、バレちゃった？

暫くして喜多村くんが帰ってくると、

「じゃあ、ハイ、これ飲んで」

「あっ、お財布、忘れてきちゃった」

「いいよ、僕のおごりで」

「ありがとう」

そう言って喜多村くんからスポーツドリンクを受け取ると、よほど喉が渴いてたのか、がぶ飲みしてしまい、思わずむせてしまった。

喜多村くんに思わぬ醜態を晒してしまい、恥ずかし過ぎて、顔から火が出そうな勢いだ。

「大丈夫？ 木下さん。慌てて飲むからだよ。なんか、また顔が赤いよ？ 本当に体調、悪くない？」

「どうやら、また変な誤解をされてしまったようだ。」

「たぶん、暫く休んでたら、落ち着くと思うから」

「今日の練習、もうやめよっか？ 木下さんの体力に合わせたペース配分、ちゃんと考えてなかった僕も悪いし」

「えっ？ でもまだ、サッカーボールも蹴ってないよ？」

「でも… 木下さんの体のことが心配だし… 無理させて、ケガでもさせたら、僕… 困るよ」

「やっぱ、優しいね、喜多村くんは。」

でも、せっかくヤル気になってるのに、ここで止めちゃうと、サッカークラブ復帰への道がまた一歩、遠のいちゃいそうで、どうしても練習を続けてみたかった。だから、

「どうしても、練習続けたいの。ケガしたら、わたしの責任だし、喜多村くんに責任はないよ。だから、お願い！」

「うーん…」

喜多村くん、腕組みして悩んでる。ヨシっ！ ここで、もうひと押し。

「やっぱあー、ダメかなあー？」

出来る限り、甘えたような声で、上目使いで言ってみたつもり。

でも、自分で言ってて、正直キモイ。

「分かったよ。じゃあ、木下さんはベンチで30分休憩してから練習再開。その間、僕は自主練習してくるから。それでいい？」

「うん。ありがとう、喜多村くん」

「じゃあ、練習してくるね」

喜多村くんはそう言つと、かなり使い込まれた様子のサッカーボールを蹴り出し、ドリブルやフラインクの練習を始めていた。

ちよつと走っただけでスタミナ切れだもんなあ。もっと、基礎体力つけないきゃ、話にもなんないよ。今まで体動かしてなかったツケって、やっぱ、結構大きい。学校で放課後、グラウンドで毎日少しずつ、走り込みでもしようかな？

そうだ！ 喜多村くんに頼んで、サッカー部の練習に参加させてもらえないかな？ 女子はダメって言われるかもしれないけど、ダメ元で頼んじゃおっか？ 確か、サッカー部の監督って、担任の吉澤先生だったよね？ 話も通り易いかも。

喜多村くんから、ベンチで30分休憩の命令を受けたものの、特にやることもなく、暫く彼の練習している様子を、両手で頼杖をつきながら、ボーっと見つめていた。

普段の喜多村くんの表情とは違い、すっごく真剣な表情で練習してる。そんな彼をずっと見ていると、次第に胸がドキドキし始め、何とも言えない息苦しさ、そして、胸を締め付けられるような、切ない感情に支配されている今の自分を、改めて知ることになった。

こんなの、ウソに決まってる！ と頭で否定すればするほど、加速していく胸の鼓動。これまで男と女、どちらとも言えない心情に散々振り回されたあげく、勇気ある一歩がなかなか踏み出せず、ずっと中途半端なまま、曖昧なままにしてきたこの感情…

体からは、あなたは“恋”しているんだよ！ っていうサインが出ているのにも関わらず、頭ん中ではそれを全力で否定しようとしている別の自分がいる。

そう、これ以上、先に進んではダメっ！ ていう何かが、心に急ブレーキを掛けているんだ。その正体がいったいなんなのか？ それは、今の自分にもわからない。でも、ただひただけ言えることがある。

それは、喜多村くんに好意を持っていること。

それだけは、確かなこと。そして、その感情は… 単なる男友達としてではなくて… それ以上のもの… つまり、その… ああ、もうおー、今、こんなこと考えてる自分が超恥ずかしい！

そういえば、確か… 喜多村くんの方も好意持つてくれてるって、麻弥は言ってたっけ。

どうしよう？ もし、今日、喜多村くんから告られたりなんかしたら、何て答えたらいいんだろう？

そんな喜多村くんのこと、色々考えてたら、段々と、顔がかあーっと熱くなってきたような気がした。

結局、今ここで、グダグダ考えてみたところで、何の答えも出でない。

「はあーっ」

今は、深い溜息ぐらいしか出てこない。

とっ、とくにかく、今は練習に集中しなきゃ。喜多村くんのこと、ヘンに意識しちゃうと、練習どころじゃなくなちゃいそうで、怖いし。

そんなこと考えながら、視線を再び喜多村くんに戻すと、いつの間にか喜多村くんは遠くの方に居て、彼の周りには、小学生低学年ぐらいの子供達が数人群がって、一緒になってサッカーボールを追いかけていた。

さっきまでの真剣な表情とは違い、今度は無邪気な笑顔が絶えない喜多村くん。そのキラキラした彼の笑顔を見ると、なんだかすっごく眩しくて、一瞬にして心を奪われてしまった。

ようやく収まりかけようとした心拍数が、またグツと上がると同時に、切ない感情が、更にヒートアップしたような気がした。

どうやら、しばらく収まったと思ったた“恋患い”ってヤツが再発し、何の抵抗する時間も与えてもらえず、無防備なまでに、そ

の猛威に晒されてしまったようだ。この病、あつという間に俺の全身を駆け巡り、そして、心を、体を支配しようとする。

まさか、こんなことになるなんて… 思ってもみなかった。こんな浮ついたキモチのままじゃあ、とてもじゃないけど、この後、練習どころじゃない。

とにかく、今はヒートアップしているこのキモチを、なんとか鎮めなくっちゃ。

## #36:STEP BY STEP(後書き)

再び、喜多村くんを強く意識するようになってしまった真結花。  
平常心を保てなくなってしまったようですが、大丈夫なんですよ  
か？

次回につづく。

#37：ついに… 来たっ！

「ふうっ」

顔をかすめる風が、少しひんやりとして心地良かった。少し、気分が落ち着いたような気がした。

どうやら、さっき、トイレでバシャバシャと顔を洗ってきたのは正解だったらしい。

「木下さん、こっちにおいでよー」

喜多村くんが、遠くで呼んでる。

もう大丈夫かな？ でも、まだ少しドキドキしてる。

よし、もうこうなったら開き直り。もし、喜多村くんから告げられたら告られたで、そんなときは、出たとこ勝負ってことで。

小走りで、喜多村くんと小学生4人の集まっていたところに行く  
と、

「あつ、もしかして、あの時の、犬の散歩に来てたおねえちゃん？」

「君は確か… サッカーボール返した時の男の子？」

「うん、そうだよ。ぼく聡太」

「はじめまして、聡太くん。わたしは、真結花。よろしくね」

「なあーんだ？ この子と知り合いだったの？ 木下さん」

「うううん、知り合いっていても、以前にこの公園で偶然会っただけだから」

「他の子、紹介するよ。じゃあ、君から名前、言ってくれるかな？」

「ぼくは、直弥」

「ぼく、圭悟」

「私、瑠菜」

「えっ？ 女の子？」

ショートカットだし、ボーイッシュな格好で帽子も被ってたから、可愛らしい感じの男の子だと思ってた。

「そうだよ、木下さん。僕も、初めは騙されちゃった」

「瑠菜、いつもこんな格好だし、たまに男の子に間違われちゃうんだよねあ」

聡太くんがそう言うのと、瑠菜ちゃんは、

「別にいいじゃん、私はこの方が動き易いんだからさあ」

「なんだか、この子、俺にどことなく似てるような気が…」

「瑠菜ちゃん、もしかして… 長かった髪、切ったの？」

確か、あの時、長い髪の女の子が居たような気が…

「うん、そうだよ。長いと、サッカーするとき、いちいち髪を結ぶの面倒なんだもん。真結花おねちゃんは、髪、伸ばしてるんだ？」

「うん」  
この子見ると、なぜだか、懐かしいような気がするんだよね。どうしてだろ…

「ねえ、泰介おにいちゃんと、真結花おねちゃんって恋人同士なの？」

瑠菜ちゃんが、俺と喜多村くんを交互に見ながら、真顔で聞いてきた。

「まったく、最近の子は…」

「えっ？ それは、その…、何て言えばいいのかなあ」

もうおー、せっかく気分が落ち着いてきたのに… またこのハートに火をつける気？ この子は。

「そうだよ。ねっ？ 木下さん」

涼しい顔して、さらりと答える喜多村くん。なにそれ？ それって、遠回しな告白ってこと？

「そんなことより、サッカーしようよ。わたし、サッカーの練習するためココに来たんだから」

喜多村くんの言葉を無視してそう言うと、喜多村くんは少ししょんぼりした感じで、

「そうだね。じゃあ、これだけ人数いるからさあ、何かゲームしようか？」

喜多村くんの提案で、リフティングで、地面にボールを落とさないようにパスを回すゲームは楽しかった。小学生相手といっても、みんな、ボールさばきは上手くて脱帽って感じだった。

この子達、同じ少年サッカークラブの仲良し4組で、よくこの公園に来てサッカーして遊んでいるとか。どうりで上手いはずだよ。まあ、そこまではよかったんだ。その後の、1対1でボールを奪い合うゲームが悪かった。すばしっこくて、体の小さい小学生相手に、以外にも悪戦苦闘、ちょっとホンキになり過ぎて、変な体勢のまま左足首を捻ってしまい、軽い捻挫を負ってしまった。

情けないことに、今、喜多村くんの背中でおんぶされている。さすがに恥ずかしくて、最初は嫌がってたんだけどさ。

捻った左足首、それほど大した痛みじゃんだけど、喜多村くんが、ケガを悪化させると不味いつて言うし、そのまま歩いて帰るのはどうしてもダメって、強く言うもんだから…

サッカーでは足の軽いケガが、大きなケガに繋がるのがよくあるんだってさ。

喜多村くんいわく、足首の痛みを庇おうとして、脚の他の所に変な負担が掛って、別のケガをするっていうことがよくあるんだとか。軽いケガなら、テーピングすれば、多少カバーできるらしいけど。喜多村くん、こんなことになるなら、そのテープ、持ってくれば良かったって後悔してた。

最後には、サッカークラブに復帰するなら、どんな小さな足のケガも甘くみちやいけないってダメ押し言われたもんだから、仕方なく、こうしておぶんされながら帰宅しているわけだけど。

こんな姿、恥ずかし過ぎて、絶対に家族や友達には見られたくない

いよなあ。だってさあ、いいお笑いネタにされそうだもん。

でも、こうやって喜多村くんの背中に乗っていると、恥ずかしいんだけど、どこか懐かしいような、嬉しいようなヘンな気分。

「ごめんね、喜多村くん。迷惑掛けちゃって、重いんでしょ？」

俺を背中におんぶしている上、リュックを二つも胸に掛けてるわけだし。

「ううん、軽いよ、木下さんは。僕の方こそ、ごめんって謝らなくっちゃ。木下さんに無理させちゃったわけだし」

「どうして？ 喜多村くんは悪くないよ、悪いのは私の方。小学生相手に、ちよっと、熱くなっちゃったのが悪いんだよね。私って、単純だから」

「そうそう、最近の小学生ってサッカー上手いよなあ、僕もボヤボヤしてらんないやって思ったよ。将来、あの子達が大きくなったらね、いいライバルになってたりするかもね」

「喜多村くんは、将来、プロを目指しているの？」

「なればいいよね、プロに。僕、木下さんみたいに上手くないから、もっと努力しないとさ。今はプロなんて、ほど遠い夢だけだね」

「今の私、サッカー、上手くなんかないよ？」

「木下さんは覚えていないかもしれないけどさ、U-17の候補選手だったんだよ？」

「その話、昨日、偶然だったんだけど、初めて聞いたんだよね。でも、実感なんてもの、全然ないんだよねえー。だってさあ、今、このありさまだし、わたしこそ、U-17に選ばれるなんて、夢のような話だよ？」

「確かに、今の状態じゃあダメかもしれないけど、リハビリ練習続けてさあ、サッカークラブに復帰して、サッカーの感覚を取り戻せば、きつと、U-17に選ばれると思うよ」

「ホントに、そう思う？」

「うん。だってさあ、この前の放課後、木下さんがゴール向かってボールを蹴ったこと、あったでしょ？ あのとときのループシュートを見たとき、ビビって来たんだよね。夕焼け空に、ボールがキレイな弧を描いて、まるでゴールに吸い込まれるように入った光景、今でも目に焼き付いてるよ。おかげで、僕の心にも、君が焼き付いちやっただよね。この責任、取ってくれないかなあ」

「へっ？ 責任って… その… なに？」

これって、もしかして… ついにキタあー！ ってヤツ？ まさかと思うけど… こんなヘンなシュチュエーションで？

「あつ、あのさあ、木下さん」

うわっ、喜多村の声、緊張してる。こりゃマジかも。どうしよう？ こんな急に… 心の準備、何もできてないのに… ああ、めっちゃドキドキしてきたっ！

「なっ、なに？ 喜多村くん」

「こんなこと、面と向かって言うの、恥ずかしくってさあ、こんな体勢で悪いんだけど…」

やっぱ、そうなわけ？ うーん、マイツタ。どう答えよう？ どう答えればいいのか…

「どうしたの？」

早く、答え、考えなきゃ。コ・タ・エ！

「うん。僕と、付き合ってくれないかなあ」

つつ、ついに、でっ、でたあー。喜多村くんに、告られちゃった。……」

ああー、頭ん中、パニックって、結局、何もいい答えが浮かんでこない。

「どうしたの？ 木下さん？ 押し黙っちゃってさあ。急で、ビツクリした？」

「ごっ、ごめんなさい…」

「えっ？ それって、ダメってこと？ 他に… 好きな男子がいるの？」

「あつ、イヤ、その… わたしが直ぐに答えなくて、ごめんなさい  
ってこと」

しまった。いつもの、ごめんなさい癖がでちゃった。ヘンな誤解  
させちゃったよ。

「はぁーっ、ビックリしたなあ、もう。心臓に悪いよ。じゃあ、今  
度はちゃんと、答えてくれる？」

ここまでできて、今更、逃げられないよね？ でも… やっぱ、

「あのさあ、喜多村くん」

「なに？」

「今直ぐに、答えなきゃ、ダメ？」

あつ、結局、逃げてるじゃん、俺って。

「それって、悩んでくれているってこと？」

そうなんですよ。分かってくれてるじゃん。さすが、喜多村くん。

「うん、まあ、その… そういうわけで…」

答えなんて… 心の叫びに耳を傾ければ、もうとっくに出てるは  
ずなんだけど…

「じゃあ、期待しても、いいんだよね？」

でもさあ、今は気持ちを固めるためにも、

「えっ？ とつ、とにかく、今は、考える時間が欲しいの」

だってさあ、一度踏み出したら、もう後戻りできないんだよ？

「じゃあ、答え、いつまで待てばいいのかなあ、僕は」

そうだよねえー、やっぱ。

「えつとぉー、じゃあ、今週の金曜日の放課後。それまで、待つて  
くれる？」

将来、結婚する相手なのかも知れないわけだしさあ。じっくりと  
考えさせて欲しいわけですよ。って、そこまで考えるのは、少し大  
げさ？

「はぁーっ、それまで、僕は一週間、飼い殺し状態ってわけかあ。

君も、罪だよねえー」

いや、何も、そこまで言わなくても… でも、それだけ、真剣っ

てこと？

「ごめんね、喜多村くん。今は… こんな答えしかできなくて」

答え、っていうか、本当に決心できるのかなあ？ 金曜日までさあ。

「じゃあ、答え、金曜日まで待つてるから」

ほんと、ごめん。直ぐに答えてあげられなくて。

「うん」

もう、約束したんだから、ハッキリと、気持ちに答えなきゃ。今度は、絶対に逃げないから…

ついさっきまで、二人を包み込んでいた緊張感が、俺の答えで一気に切れたのか？ 今度は、しらけて気まずい雰囲気にもまれてしまったようで、自宅に着くまでの間、それっきり、喜多村くんと会話途絶えてしまった。

ごめん、喜多村くん。期待させるだけさせといて、おあずけって目の前にご馳走ちらかせて、食べれないのと同じことだよ。自分が、もし喜多村くんの立場だったら、気になって落ち着かない日々が続くんだろうなあ。

そう思うと、喜多村くんに、少し可哀そうな事をしてしまったのかも。

自分でも、わかってんだけど、“恋愛”というものが目の前の現実になるうとすると、一歩前に踏み出す勇気が出なくて、もう、ここから逃げてしまいたい！ という思いに支配されてしまう。

かといって、それを失うのも絶対イヤ！っていう、心の底から湧いてくる強い思いもあって、なんとも矛盾したフクザツな感情に包まれちゃうわけで、自分でももどかしくって… どうしたらいいのかわかんないわけで…

結局、答えを先延ばしにしたものの、喜多村くんの気持ちに、ちゃんと真正面から答えなきゃいけないのは変わらないわけなんだけ

どさあ。

とにかく、今は、一時的な感情に流されたり、自分をごまかさないで、リセットされた素直な気持ちになりたい。

冷静な頭ん中で、本当の自分の気持ちをもう一度、見つめ直したい。

#37：ついに… 来たっ！（後書き）

目前で逃げ出した真結花、おあずけされちゃった喜多村くん。  
さて、この二人、いったいどうなることやら。

次回につづく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0602r/>

---

記憶のダイアリー

2011年11月20日10時11分発行